

筑波大学博士(言語学)学位請求論文

日本語名詞述語文の意味論的・機能論的分析

今田 水穂

2009年度

# 目次

第 1 章	序論	1
1.1	はじめに	1
1.2	研究史	3
1.2.1	1960 年代以前	3
1.2.2	1970 年代～1980 年代前半	3
1.2.3	1980 年代後半以降	7
1.2.4	先行研究のまとめ	13
1.3	理論的枠組み	14
1.3.1	理論の構成	14
1.3.2	名詞句の意味の理論	15
1.3.3	文の意味論的構造の理論	19
1.3.4	文の機能論的構造の理論	21
1.3.5	言語構造と談話構造の相互関係	22
1.4	本論文の構成	23
第 2 章	名詞句の意味論	25
2.1	はじめに	25
2.1.1	先行研究	25
2.1.2	問題点	26
2.1.3	理論的枠組み	29
2.2	指示の概念主義理論	31
2.2.1	対象と認識	31
2.2.2	概念主義意味論	32
2.3	個体	35
2.3.1	心的概念としての個体	35
2.3.2	四次元連続体	36
2.4	種	37
2.4.1	範疇としての種	37
2.4.2	対象としての種	38
2.4.3	対象と属性	42
2.5	役割	45
2.5.1	役割と値	45
2.5.2	役割と種	48

2.5.3	役割関数	52
2.5.4	役割と時間断片	56
2.6	まとめ	58
第3章	名詞句の解釈の理論	60
3.1	はじめに	60
3.2	名詞句の解釈の理論	61
3.2.1	語用論的関数	62
3.2.2	スペース構成	67
3.2.3	メタ言語	70
3.2.4	指示の認知的制約	71
3.3	名詞句の解釈と名詞述語文	78
3.3.1	名詞句の解釈に基づく曖昧性	78
3.3.2	定義文とメタ言語	79
3.4	まとめ	83
第4章	名詞述語文の意味論的構造	85
4.1	はじめに	85
4.1.1	先行研究	85
4.1.2	問題点	87
4.1.3	理論的枠組み	89
4.2	関係の基本的類型	90
4.2.1	帰属関係	90
4.2.2	同一関係	91
4.2.3	役割-値関係	92
4.2.4	隣接関係	94
4.3	関係解釈の原理と諸事例	96
4.3.1	構造と解釈	96
4.3.2	構造主義的な見方	97
4.3.3	解釈主義的な見方	100
4.3.4	隣接関係の諸事例	103
4.4	まとめ	110
第5章	名詞述語文の機能論的構造	112
5.1	はじめに	112
5.1.1	先行研究	112
5.1.2	問題点	115
5.1.3	理論的枠組み	116
5.2	構文と機能論的構造	120
5.2.1	「AはBだ」構文	120
5.2.2	「AがBだ」構文	122
5.3	機能論的構造と否定	135
5.3.1	前提・焦点と否定	135

5.3.2	否定の作用域と解釈の曖昧性 . . . . .	137
5.3.3	同定文、提示文と述語否定 . . . . .	140
5.3.4	肯定的状況の予測 . . . . .	141
5.4	まとめ . . . . .	142
<b>第 6 章</b>	<b>言語構造と談話構造の相関関係</b>	<b>144</b>
6.1	はじめに . . . . .	144
6.2	言語の並列的機構 . . . . .	145
6.2.1	並列的機構 . . . . .	145
6.2.2	意味論的構造 . . . . .	145
6.2.3	機能論的構造 . . . . .	148
6.3	言語構造と談話構造 . . . . .	150
6.3.1	談話状態の更新 . . . . .	150
6.3.2	談話状態の参照 . . . . .	152
6.3.3	言語構造と談話構造 . . . . .	155
6.4	まとめ . . . . .	156
<b>第 7 章</b>	<b>結論</b>	<b>158</b>
7.1	問題の切り分け方 . . . . .	158
7.2	名詞句の意味の理論 . . . . .	159
7.3	意味論的構造の理論 . . . . .	161
7.4	機能論的構造の理論 . . . . .	162
7.5	課題と展望 . . . . .	164
7.6	結び . . . . .	168
用例出典		169
文献		170
既発表論文および口頭発表との関係		179

# 第 1 章

## 序論

### 1.1 はじめに

本研究は、日本語の名詞述語文の意味論的、機能論的な特徴の記述を行う。日本語の文には、大きく分けて動詞述語文、形容詞述語文、名詞述語文の三種類があると言われる。名詞述語文とは、典型的には述語が名詞句と助動詞の「だ」「です」「である」などで構成されている文のことを言う。

- (1) a. 動詞述語文 イヌは 吠える。  
動詞  
 b. 形容詞述語文 イヌは 賢い。  
形容詞  
 c. 名詞述語文 イヌは 哺乳動物だ。  
名詞

名詞述語文にはいくつかの働きがある。ある事物がどのような範疇に属するのかを述べたり、ある事物と別の事物が同一であることを述べたり、記述を満たす値がどれなのかを述べたり、関係する二つの要素を対応付けたり、語の意味を定義したり、事物を特徴付けたり、談話に新しい要素を導入したりする。

- (2) a. ラッセルは哲学者だ。 (帰属する範疇)  
 b. 明けの明星は宵の明星だ。 (同一物)  
 c. この部屋の温度は 19 度だ。 (記述を満たす値)  
 d. 春はあけぼの。 (対応付け)  
 e. ウサギタバコとはラベンダーのことだ。 (定義)  
 f. 電球を発明したのがエジソンだ。 (特徴付け)  
 g. 特におすすめなのがこれです。 (新しい事物の導入)  
 etc.

名詞述語文にどのような種類のものがあり、それらをどのように整理すればいいのかについて、いろいろな考え方が取られてきた。そうした研究には、三上 (1953) による後の多くの研究に影響を与えた先駆的な研究や、山口 (1975) による意味論と機能論による交差分類、高橋 (1984) による二つの名詞句の意味論的関係の記述、西山 (1985, et al.) による指示の理論、坂原 (1990c) によるメンタル・スペース理論に基づく研究、新屋 (1994)、天野 (1995a, et al.)、砂川 (1996b, et al.)、菊地 (1997) などの機能論的な研究、井島 (1998b) による多層的分析などが含まれ、他にも多くの研究がある。

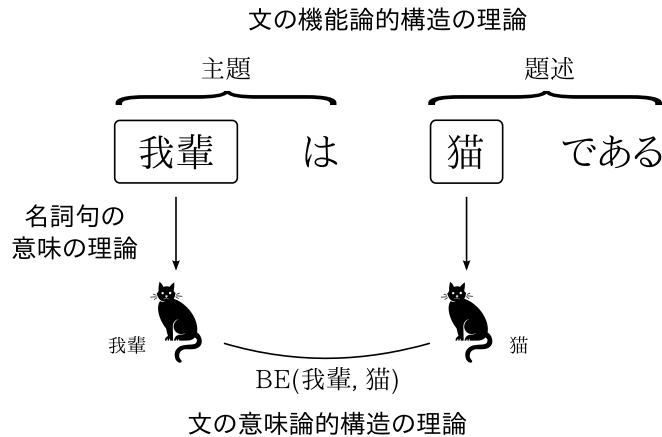


図 1.1 記述のためのフレームワーク

本研究では、名詞述語文の特徴をいくつかの部門に分けて記述する。必要となる部門には次のようなものがある。

- (3) a. 名詞句の意味の理論
- b. 文の意味論的構造の理論
- c. 文の機能論的構造の理論

名詞句の意味の理論は、名詞述語文に含まれる二つの名詞句がどのような事物や概念を表すかという問題を扱う。扱われる問題には、指示(西山, 1985, et al.)、個体、種、および時間断片(Carlson, 1977)、役割(Fauconnier, 1985; 坂原, 1990c)、定記述句の指示的用法と属性的用法(Donnellan, 1966; Fauconnier, 1985)、メトニミーといった事柄に関わる問題が含まれる。

文の意味論的構造の理論は、二つの名詞句が表す事物や概念が互いにどのような関係にあるのかという問題を扱う。非常に一般的な言い方をすると、名詞述語文は二つの事物や概念を結び付ける働きをする。しかしどのような関係も自由に表すことができるというわけではない。この理論では、日本語の名詞述語文はどのような関係を表すことができるのか、関係はどのようにして解釈されるのかといった問題を扱う。

文の機能論的構造の理論は、二つの事物や概念がどのようなやり方で結び付けられるのかという問題を扱う。この理論では、文が主題と題述という二つの部分を持つか否か、文中のどの要素が情報の焦点になっているか、焦点はどのような性質を持つかといった問題を扱う。扱われる問題には、「ジキル博士はハイド氏だ」という文はジキル博士がある人物と同一人物なのだということを述べるために用いられたい、ジキル博士と同一人物なのは誰かを述べるために用いられたいするのだとか、「ジキル博士はハイド氏だ」と「ハイド氏がジキル博士だ」はどのように違うのかといった問題が含まれる。

本研究で主張する事柄は、基本的には二つである。一つは、名詞述語文を特徴付け、いくつかに分類するための根拠になるような諸現象を、どのような理論上の部門(語のレベルか文のレベルか、意味論か機能論か)で扱うべきかをはっきりさせることである。もう一つは、過去の研究で述べられてきたような現象の分析の仕方や、分析のために用いられてきた概念の定義を検討し、必要であればより適切な考え方に改訂するか、あるいは明確化することである。

序論として、過去の研究でどのようなことが述べられてきたのかということと、本研究ではどのような考え方をするのかということを一概観しておきたいと思う。1.2節では、三上(1953)から現在に至るまでの、日本語の名詞述語文に関する様々な研究を一概観する。それらの研究には、記述的な観点から行われたもの、主として意味論的な観点から行われたもの、主として機能論的な観点から行われたもの、意味論的な観点からの研究と機能論的な観点からの研究の統合を志向したものなどが含まれる。1.3節では、本研究が日本語の名詞述語文の特徴を記述するために用いる理論的フレームワークの全体について一概観する。本研究では、名詞句の意味の理論、文の意味論的構造の理論、文の機能論的構造の理論という三つの理論的部門を設定するが、そのそれぞれについて、どのような問題を扱い、どのような考え方をするのかについて概要を述べる。1.4節では、本論文の全体の構成を示す。

## 1.2 研究史

### 1.2.1 1960年代以前

日本語の名詞述語文を対象とした研究は非常に多いが、現在の研究の多くが主要な先行研究の一つとして挙げる研究として、三上(1953)を挙げるができる。三上(1953)は日本語の名詞述語文<sup>\*1</sup>を措定、指定、端折りの三種に分類した。

- (4) 措定 私は幹事です。
- (5) 指定 幹事は私です。
- (6) 端折り 僕は紅茶だ。(注文の場合)

三上(1953, pp. 44–45)

このうち指定文は語順を入れ替えて指定以前の文に戻すことができるとされる。

- (7) a. 幹事は私です。
- b. 私が幹事です。

三上(1953, pp. 44–46)

「AがBだ」という構文が基本構文で「BはAだ」という構文が倒置構文だという考え方から、上林(1984)、西山(1985)などでは(7a)が倒置指定文、(7b)が指定文と呼ばれている。三上(1953)の分類は後続する多くの意味論的、機能論的研究に影響を及ぼしており、現在でも日本語の名詞述語文についての基礎的な研究の一つと見なされている。

### 1.2.2 1970年代～1980年代前半

■措定と指定 西山(1985)によると、三上(1953)の措定、指定の概念はその後1980年代に至るまでほとんど研究の対象とされてこなかったとされる。実際には、その間にも措定や指定の問題が全く扱われてこなかったわけではない。山口(1975)は三上(1953)の措

<sup>\*1</sup> 三上(1953)は日本語の文を動詞文と名詞文に分け、名詞文の下位分類として形容詞文と準詞文を立てる。このうち準詞文と呼ばれるものが名詞述語文に相当する。三上(1953)は「だ」「です」などの要素を準詞と呼ぶ。

	正規構文	転位構文	既知語/未知語	外延語/内包語
解説文	A氏は社長だ	社長がA氏だ	A氏/社長	A氏/社長
指定文	社長はA氏だ	A氏が社長だ	社長/A氏	

表 1.1 山口 (1975) の名詞述語文分類

定文、指定文に相当する構文を解説文、指定文と呼び、名詞句の意味論的特性 (外延語か内包語か) と機能論的特性 (既知語か未知語か) によって交差的に分析している (表 1.1)。なお、指定文「A は B だ」は一般に「B が A だ」とは言い替えられないと考えられているが、山口 (1975) は「社長が A 氏だ」のような構文も可能であると見なしている。

同じように内包、外延という概念を用いて指定、指定に相当する名詞述語文の類型的区別を分析したものに野田 (1985) がある。野田 (1985) は三上 (1953) の指定文、指定文をそれぞれ内包文、外延文と呼ぶ。

## (8) 内包文

- a. 東京は日本の首都である。
- b. 山田さんは社長です。

## (9) 外延文

- a. 山田は私です。
- b. 教室はここです。
- c. 日本の首都は東京である。
- d. 社長は山田さんです。

## (10) 外延文の別形 (転位文)

- a. 私が山田です。
- b. ここが教室です。
- c. 東京が日本の首都である。
- d. 山田さんが社長です。

内包文「A は B だ」は A によって外延を示された概念の内包の一部を B として示すものであり、外延文「B は A だ」は B という内包を持つ概念の外延が A と一致することを示すものであるとされる。また外延文「B は A だ」は「A が B だ」と言い替えることができる。「は」と「が」の違いについては、「は」は旧情報を表し、「が」は新情報を表すという機能論的観点からの説明が与えられている。

三上 (1953) の指定、指定という概念は、その後上林 (1984)、西山 (1985) から西山 (2003b) に至る一連の研究によって、名詞句の指示性という観点から詳細に分析されていくことになる。山口 (1975) や野田 (1985) の研究と西山 (1985) らの研究の間には直接的な理論の継承関係はないが、しかし山口 (1975) や野田 (1985) における内包、外延という概念を用いた名詞述語文の分析は、名詞句の意味論的特性に注目して名詞述語文の分析を試みた先駆的研究として位置付けることができる。

■端折り文 (ウナギ文) 三上 (1953) が端折り文と呼んだ種類の名詞述語文は、現在では「ウナギ文」という名称で広く知られている。この名称は、「僕はウナギだ」(奥津, 1978)



というよく知られた例文に因む。この時期、ウナギ文の取り扱いに関する議論が活発に行われている。代表的な考え方としては、次のようなものを挙げる\*2。

(11) 統語論的変形による分析

a. 述語代用説 (奥津, 1978)

僕は ウナギが 食べたい  
→ 僕は ウナギ だ

b. 分裂文説 (北原, 1981)

僕が食べたいのは ウナギだ  
→ 僕は ウナギだ

c. 「象は鼻が長い」文説 (川本, 1976)

僕は 注文が ウナギだ  
→ 僕は ウナギだ

(12) 意味論的解釈による分析

a. 名詞句解釈説 (仁田, 1980)

僕 は ウナギ だ  
|| ||  
僕の注文 ↔ ウナギ

b. 関係解釈説 (池上, 1981)

僕 は ウナギ だ  
|| ||  
僕 語用論的解釈 ↔ ウナギ

統語論的なアプローチでは、ウナギ文を通常の述語文や措定、指定の名詞述語文から派生させる考え方が多く提案された。特に奥津 (1978) と北原 (1981) の議論は、この時期のウナギ文研究の代表的なものとしてよく知られている。これらの研究の背景には、当時、生成文法の統語理論が日本語学の研究にも大きな影響を及ぼしていた状況がある。

一方、意味論的なアプローチではウナギ文の解釈のために統語的な変形といった操作を基本的に仮定しない。一つの考え方は、「僕」という名詞句の意味を僕が注文したものであるというように意味で解釈することによって、ウナギ文の意味を他のより基本的な名詞述語文 (措定や指定の文) の意味に還元して捉えようという考え方である。このような名詞句の解釈のされ方は一般にメトニミー (換喩; metonymy) と呼ばれ、特に認知言語学的な意味論ではよく言及される。

別の考え方は、名詞句にメトニミーのような解釈を適用せず、単純に「僕」や「ウナギ」を表すものとして解釈する。名詞述語文は二つの対象が何らかの関係にあるということを示しているのみであり、具体的にどのような関係であるかは文脈や百科事典的知識に照らして語用論的に解釈される。これに類する考え方としては、他に Fauconnier (1985) の考え方を挙げる\*2。Fauconnier (1985) は英語の be 動詞について、be 動詞の機能の一つは語用論的に関係付けられる二つの対象を結び付けることであり、客とその注文

\*2 ここでは便宜的に統語論的分析、意味論的分析という分け方をしたが、第4章では別の観点からこれらの研究を整理する。ウナギ文の意味をより基本的なパターンの構造に還元するか、そのような還元を行わないかというものである。

A.	動作づけ		わしは 絶交だ。
B.	状態づけ		震災の時彼女は 一年生だった。 おまえらは ねる時間だ。 おれは いいきもちだ。
		類概念の形式化	ようす、つもり、ところ
C.	性格づけ	性質づけ	彼女は 陽性だ。 彼女は 陽気な性質だ。
			量・ていどづけ
		存在づけ	家は あの下だ。 出入口は 一か所だ。
		関係づけ	A は B と正反対だ。 かれらはいいともだちだ。
	種類づけ	類づけ	さそりは 虫よ。
		種づけ	太郎は よい人間だ。 太郎は 善人だ。
		別種類づけ	わたしは 畜生だった。 かれは 文壇の電信局だ。
	D.	同一づけ	現象形態がちがう
一つの現象形態にあるもの			こちらは 高崎さん。 あなたのもつってこれ？ これは ライラックだ。
ひっくりかえし文			パンをくったのは おれだ。 おれがくったのは パンだ。
内容とわくぐみ			～というのが そのはなしだ。 そのはなしは ～ということだ。
できごとや動作と その概念化			電灯をけすのが 私の仕事だ。 コツは ～することだ。
意味するものと 意味されるもの			シメキとは 情婦の意味だ。

表 1.2 高橋 (1984) の名詞述語文分類

する食べ物というような換喩的連関も be 動詞によって表される関係の一種であるとしている。

■意味関係の分類 三上 (1953) に端を発する措定、指定、端折りの区別がかなり抽象的なレベルでの名詞述語文の類型化であるのに対して、高橋 (1984) は実際の言語資料の観察に基づく非常に具体的かつ詳細な名詞述語文の分類的記述を試みている。高橋 (1984) は名詞述語文の主語と述語の意味的關係と機能的關係を区別し、(必ずしも適確に区別しきれていないと断ったうえで) 意味的關係の分類と記述を試みている。高橋 (1984) の分類の概要を表 1.2 に示す。

高橋 (1984) は名詞述語文を含む日本語の文の主語と述語の意味的關係を、「動作づけ」「状態づけ」「性格づけ」「同一づけ」の四種に大別する。「動作づけ」は動詞述語文で、「状態づけ」は動詞、形容詞、名詞述語文で、「性格づけ」は形容詞、名詞述語文で、「同一づけ」は名詞述語文で表されるのが典型であるが、必ずしもその限りではなく、「動作づけ」を表すような名詞述語文もあり得るとされる。

高橋 (1984) は、名詞述語文の意味論的特徴と機能論的特徴の区別に明示的に言及した上で、特に意味論的特徴を研究の対象としている。また記述的には、名詞述語文によって表される事物や概念の間が、非常に多様なものであるということを示している。

### 1.2.3 1980年代後半以降

■指示理論 1980年代中頃あるいは1990年代以降、より多様な観点から名詞述語文の類型化や分析を目的とした研究が展開されている。特に継続的に名詞述語文の研究に貢献してきた研究の流れの一つは上林 (1984, 1988)、西山 (1985, 1990b, 2003b, et.al.)、熊本 (1989a, 1995, 2000, et.al.)、小屋 (1995, 2003) らによる一連の研究である。

上林 (1984)、西山 (1985) は三上 (1953) の措定文、指定文を名詞句の指示性という概念を用いて再分析した。それによると、措定文「A は B だ」は A が指示的 (referential)、B が叙述的 (predicative) な文であり、指定文「A は B だ」は A が叙述的、B が指示的な文であるとされる。さらに西山 (1985) は二つの名詞句がいずれも指示的な名詞述語文を想定して同定文と名付けた。指定文、同定文は「A は B だ」と「B が A だ」の言い替えが可能であるとされ、「A は B だ」構文が倒置指定文、倒置同定文と呼ばれる<sup>\*3</sup>。

(13) 措定文            田中角栄 は 社長 だ。  
                          referential        predicative

(14) 倒置指定文      社長 は 田中角栄 だ。  
                          predicative        referential

(15) 倒置同定文      あの赤シャツの男 は 例の山田太郎 です。  
                          referential                                referential

西山 (1985)

西山 (1990b) では理論にいくつかの改訂が加えられ、現在の理論 (西山, 2003b) の原型がほぼ確立されている。第一に、非指示的な名詞句の下位分類として、叙述名詞句<sup>\*4</sup>と変項名詞句という区別が立てられるようになった。叙述名詞句とは措定文「A は B だ」の B の位置に生起する名詞句であり、対象の属性を表す。変項名詞句とは倒置指定文「A は B だ」の A の位置に生起する名詞句であり、値が与えられるべき変項<sup>\*5</sup>として機能する。指示的な名詞句、叙述名詞句、変項名詞句という区別は、その後の西山 (2003b) に至る一連の名詞句の意味論的研究において、主要な理論的概念としての役割を果たしている。

(16) 措定文            田中角栄 は 社長 だ。  
                          指示的な名詞句        叙述名詞句

(17) 倒置指定文      社長 は 田中角栄 だ。  
                          変項名詞句                指示的な名詞句

<sup>\*3</sup> ただし倒置同定文という用語が用いられるのは西山 (1990b) 以降であり、西山 (1985) では未出である。

<sup>\*4</sup> 西山 (1990b) では属性名詞句と呼ばれているが、現在では叙述名詞句という名称が用いられている (西山, 2003b)。

<sup>\*5</sup> 西山 (1990b) の言い方では「変項を含む表現」。

	「A は B だ」	「A は B だ」
1.	措定文 「あいつは馬鹿だ」	
2.	倒置指定文 「幹事は田中だ」	指定文 「田中が幹事だ」
3.	倒置同定文 「こいつは山田村長の次男だ」	同定文 「山田村長の次男がこいつだ」
4.	倒置同一性文 「ジキル博士はハイド氏だ」	同一性文 「ハイド氏がジキル博士だ」
5.	定義文 「眼科医 (と) は目のお医者さんのことだ」	
6.		提示文 「特におすすめなのがこのワインです」

表 1.3 西山 (2003) の名詞述語文分類

第二に、西山 (1990b) では同一性文という新しい類型が追加されている。西山 (1985) では二つの名詞句がいずれも指示的である名詞述語文を同定文と呼んでいたが、熊本 (1989a) 以降、同定文という用語はやや特徴的な性質を持った名詞述語文に言及するために用いられるようになった。そのため、西山 (1990b) は二つの名詞句がいずれも指示的である名詞述語文として、同定文とは別に同一性文という類型を立てた。同一性文とは「ジキル博士はハイド氏だ」のような種類の文であり、二つの名詞句がいずれも指示的な名詞述語文としては、むしろこちらの方が典型的な事例であると言える。

その後も変項名詞句という概念の精緻化と他の理論的概念 (特にメンタル・スペース理論における役割という概念) との比較、同定文における指示的名詞句の特徴付け、ウナギ文の取り扱いなど、様々な論点について研究が展開されている。現在では提示文、定義文という類型が加えられ、西山 (2003b) では日本語の名詞述語文を 6 種に類型化している (表 1.3)。

■メンタル・スペース理論 1990 年代以降の日本語の名詞述語文研究の、特に名詞句の意味論の側面に影響を与えた別の理論は Fauconnier (1985) のメンタル・スペース理論である。とりわけ役割 (role) という概念が、西山 (1990b) の変項名詞句と同じような機能を果たすものとして注目されている。

最初に、メンタル・スペース理論の考え方について簡単にまとめておきたい。メンタル・スペース理論では、我々は言語を使用する際に心の中に様々な領域 (スペース) を設定する。現実スペース、仮定スペース、過去スペース、ある国についてのスペース、ある分野についてのスペースといったものである。言語は新しいスペースを導入したり、スペースに要素や関係を設定してスペースを構造化したり、スペース中の要素を同定したりするために用いられる。スペース構築のための基本的な原理の一つは同定原則 (ID principle) と呼ばれるものである。

- (18) **Identification(ID) Principle** If two objects (in the most general sense), *a* and *b*, are linked by a pragmatic function  $F(b = F(a))$ , a description of *a*,  $d_a$ , may be used to identify its counterpart *b*.

Fauconnier (1985, p.3)

これは簡単にいうと、*a* と *b* の間に何らかの関係があるならば、*a* を表す言語表現によって *b* を表すことができるというものである。その例の一つはメトニミー (換喩) と呼ばれるものであり、例えば「プラトン」という人の名前によってその人の著書を同定することができる。

- (19) **Plato is on the top shelf.**

別の場合には、*a* を表す言語表現は *a* と対応する異なるスペースの要素 *b* を同定するために用いられる。次の例では、現実世界の人物である青い目の少女を表す記述が、その少女と対応する絵の中の (青い目をしていない) 少女を同定するために用いられている。

- (20) **In Len's painting, the girl with blue eyes has green eyes.**

別の場合には、言語表現は役割 (role) を表したり、その値 (value) を表したりする。次の例では、'the president' という名詞句は大統領という役割を表す場合と大統領である特定の人物を表す場合がある。'changes every seven years' という述語は「7年毎に改選する」とか「7年毎に (容姿や性格などが) 変貌する」という意味で解釈することができるが、前者の解釈が可能なのは 'the president' が大統領という役割を表している場合のみである。

- (21) **The president changes every seven years.**

こうした名詞句の多様な解釈を可能にする要素間の語用論的關係は、コピュラ文の意味を解釈する上でも重要な役割を果たす。Fauconnier (1985) は、コピュラ (be 動詞) は関係する語用論的關係が分かっているときには、対応する二つの要素を結び付けるために用いることができると言う。コピュラ文は、換喩的連関 (=22)、二つのスペースの対応する要素 (=23)、役割と値 (=24) を結び付けるために用いられる。

- (22) I'm the ham sandwich; the giuche is my friend.

客                      その注文する食べ物

- (23) In that picture, Lisa is the girl with blue eyes.

モデル                                      表現

- (24) The winner is John Doe.

役割                                      値

このうち、特に役割という概念が日本語の名詞述語文、特に指定文の意味を記述する上で有用であるとして注目された。坂原 (1990a) は日本語の名詞述語文を記述文と同定文の二種に大別する。これらは三上 (1953) の措定文、指定文とおおよそ対応する。ただし西山 (2003b) の分類では措定文、指定文とは別に同定文という類型があるため、坂原 (1990a) の同定文については M-同定文と呼んで区別している。ここでも混乱を避けるためにこの名称を用いることにする。M-同定文は役割に対して値を割り当てる文であるとされる。

- (25) 記述文      紫式部 は 平安時代の作家 だ。

- (26) M-同定文      源氏物語の作者 は 紫式部 だ。

役割                                      値

構文		主題構造	情報構造
A は B だ	1. 太郎は医者だ。(指定)	顕題文	後項焦点文
	2. 犯人は太郎だ。(倒置指定)		
A が B だ	3. 太郎が犯人だ。(指定)	陰題文	前項焦点文
	4. 家がドーム型だ。	無題文	全体焦点文
	5. 特におすすめなのがこれです。	諸説あり	

表 1.4 名詞述語文の機能論的類型

研究者ごとに役割という概念についての理解が少しずつ異なるという事情もあり、倒置指定文 (M-同定文) の意味を取り扱う上で役割という概念が有効であるかどうか、役割という概念と西山 (1990b) の変項名詞句という概念がどう違うかといった問題について、1990 年代を通じて活発な議論が交わされた。現在でも議論は継続されている\*6。

■機能論的研究 名詞句の指示性や役割といった概念に関する意味論的な議論の一方で、1990 年代以降、機能論的な観点から名詞述語文の類型化や分析を試みた研究も多く行われている。それらの研究の多くは、「は」と「が」の機能、情報の新旧、主題と題述、前提と焦点といった機能論的な諸概念によって基礎づけられている。非常に大まかにまとめると、日本語の名詞述語文には機能論的な観点から見て表 1.4 のような類型があると考えられている。

文の機能論的な類型を記述するために、しばしば主題構造、情報構造といった概念が用いられる。主題構造とは文が主題を持つか否かに関わる概念であり、主題が「は」で表示される文を顕題文、「は」を伴わないが実質的な主題を持つ文を陰題文、主題を持たない文を無題文と言う (三上, 1953; 佐治, 1973)。情報構造とは文のどの部分が情報の焦点 (最も情報価値の高い部分) になっているかに関わる概念であり、日本語の名詞述語文に関して言うと前項焦点文、後項焦点文、全体焦点文といった類型が立てられる (天野, 1995b; 砂川, 2002)。

名詞述語文の研究は、初期には専ら有題文のみが研究の対象とされていた。これは動詞述語文などと比べて、名詞述語文は無題文として用いられることが稀であると見なされていたという事情による。三上 (1953) の指定、指定という区別も、基本的には有題の名詞述語文を想定した類型であった。すなわち、指定文や倒置指定文は顕題文 (後項焦点文) であり、指定文は陰題文 (前項焦点文) である\*7。表 1.4 の分類で言うと、この時期の研究は表の 1~3 の事例のみを主要な研究対象としていた。

これに対して、1990 年代以降、4 や 5 のような種類の名詞述語文が研究の対象となってきた。新屋 (1994) は三上 (1953) の指定、指定の区別を名詞述語文を含む日本語の文一般に拡大し、また中立叙述文という類型を加えて日本語の文を指定文、指定文、中立叙述文の三種に分類している。中立叙述文というのは、おおよそ無題文ないし全体焦点文に相当する概念である。表 1.4 の分類で言うと、指定文と指定文が 1~3 の事例に相当するのに対して、中立叙述文は 4 や 5 の事例に相当する。新屋 (1994) は名詞述語文が中立叙

\*6 坂原 (1990a) に対する批判 (西山, 1992, 1993) とそれに対する反論 (井元, 1995)、『認知科学』誌における一連の議論 (西山, 1994a, 1994b; 伝, 1994; 三藤, 1994; 三田, 1995, 1997) など。最近の議論としては東郷 (2005)、井元 (2006)、西山 (2006) など。

\*7 ただし西山 (2003b) は倒置指定文の主語は主題ではなく、倒置指定文は有題文ではないと主張している。

措定文		太郎は大学生です。
指定文	第一指定文	社長は彼だ。
	第二指定文	彼が社長だ。
中立叙述文	1. 聞き手に未知の事物の存在を知らせる これが長男の太郎です。	
	2. 話の場や文脈の中に新しく事物を導入する お正月に欠かせないのがかずのこです。	
	3. 内容的に従属句的な性質を帯びる 上司があいつですよ。やる気ができませんよ、まったく。	
	4. 驚き、感慨 あっ、家がドーム型だ！	

表 1.5 新屋 (1994) の名詞述語文分類

述文になる場合として、四つの事例を報告している (表 1.5)。

一方、天野 (1995a) は「A が B だ」文の中には前項焦点文でも全体焦点文でもなく後項焦点文にあたるものも存在すると主張した。天野 (1995a) は次の (27b) のような文について、実質的には (27a) のような倒置指定文と同じく後項焦点文であるとして、「[が] による倒置指定文」(天野, 1995a)、「後項焦点の「A が B だ」文」(天野, 1995b) など呼んだ。

- (27) a. 特におすすめなのは これ です。(倒置指定文)  
           b. 特におすすめなのが これ です。(後項焦点の「A が B だ」文)  
   <sub>焦点</sub>  
   <sub>焦点</sub>

天野 (1995a) の指摘した文は表 1.4 の 5 の事例に相当するもので、現在では提示文 (熊本, 2000; 西山, 2003b) とも呼ばれる。天野 (1995a) はこの文を後項焦点文として報告したが、この文の機能論的構造をどのように捉えるかについては研究者によって意見が分かれており、近年の名詞述語文の機能論的研究における中心論点の一つとなっている。おおよそ、中立叙述説、後項焦点説、全体焦点説の三つの立場を区別することができる。

- (28) 提示文の機能論的構造
- a. 中立叙述説 — 新屋 (1994), 野田 (1996), 熊本 (2000), 西山 (2003b)
  - b. 後項焦点説 — 天野 (1995a, 1995b, 1996, 1998)
  - c. 状況陰題説 — 砂川 (2000b, 2005)

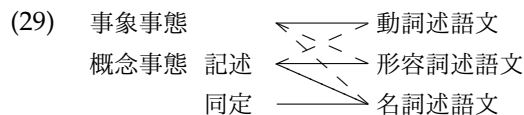
新屋 (1994) はこの種の文を中立叙述文の一種と見なしていた (表 1.5 の中立叙述の二番目の事例)。他に野田 (1996), 熊本 (2000), 西山 (2003b) もこの文を中立叙述文の一種と見なしている。これに対して、天野 (1995a) はこの文は「A が B だ」文には通常見られない後項焦点文であると主張し、研究の俎上に乗せた。別の考え方は砂川 (2000b) によるもので、この文を後項焦点文と考えるには疑問が残るとして全体焦点文であるとするが、ただし無題文ではなく陰題文の一種 (状況陰題文) であるとしている (表 1.6)。他にこの種の文に言及している研究としては菊地 (1997) がある。菊地 (1997) は主題や焦点といった概念に言及していないので (28) の諸説との関係を判断するのは難しいが、おおよそ表 1.4 の 3, 4, 5 に相当する区別を提示している。

記述文	一般の記述文	私は学生だ。
	現象描写文	信号が赤だ。
	修辭的描写文	これがとんだベテシ師だつた。
同定文	題文 (後項焦点文)	今日の当番は私だ。
	転位陰題文 (前項焦点文)	私が今日の当番だ。
	状況陰題文 (全体焦点文)	特におすすめなのがこれだ。

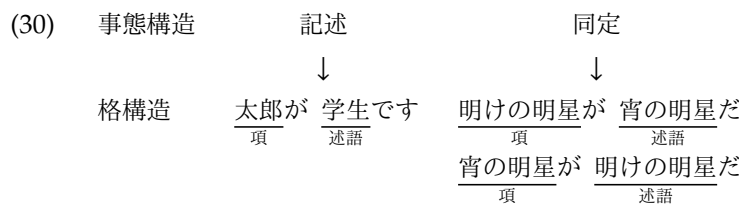
表 1.6 砂川 (2005) の名詞述語文分類

■理論の統合 名詞述語文を意味論的、機能論的な側面から精細に分析しようとする研究が展開される一方で、意味論的分析と機能論的分析を統合した包括的な理論的枠組みを構築しようとする研究も行われている。1.2.2 節で見た山口 (1975) の交差的分類などは、その先驅的な研究の一つと見ることができる。

より最近の研究の一つは井島 (1998b) によるものである。井島 (1998b) は名詞述語文の意味的構造を事態構造、格構造、談話構造という複数の構造によって多層的に記述している。事態構造のレベルでは、文によって表される事柄には事象事態と概念事態があり、概念事態には対象の範疇、属性、性質、他の事物との関係などを表す記述と、二つの事物の一致、不一致を表す同定があるとされる。典型的には、動詞述語文は事象事態を、形容詞述語文は記述を、名詞述語文は記述と同定を表す。



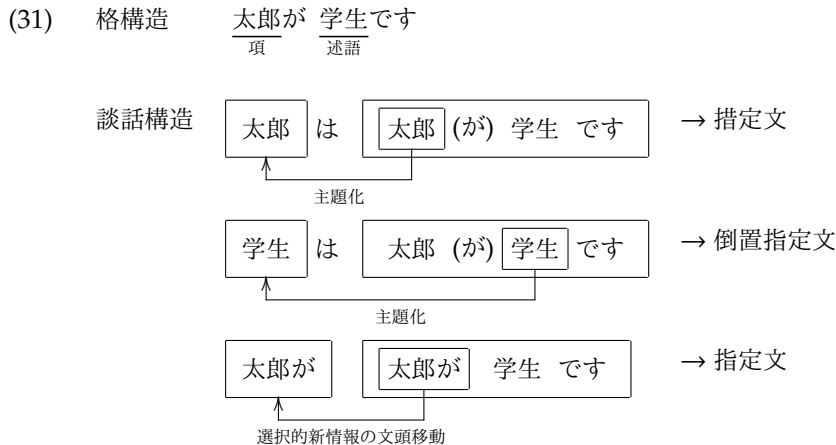
格構造のレベルでは表される事態が項や述語に分節化され、格関係によって構造化される。記述の場合は、対象が項に、範疇、属性、性質、関係などが述語に割り振られる。同定の場合は、二つの対象のどちらかが項になり、もう一方が述語になる。



談話構造のレベルでは主題化などの情報構造的な加工が行われる。「太郎が学生だ」という同じ格構造の文から、項が主題化されるか述語が主題化されるかによって「太郎は学生だ」という措定文と「学生は太郎だ」という倒置指定文という異なる談話構造の文が派生されると言う\*8。このレベルで行われる別の操作は「選択的新情報の文頭移動」というものであり、新情報を主題よりさらに外側の位置に移動する。これにより、「太郎が学生だ」という指定文が派生される。

\*8 記述、同定という概念的区別を立てる研究者は、倒置指定文や指定文を同定に含める場合が多いが (坂原, 1990a; 砂川, 1996b)、井島 (1998b) は倒置指定文や指定文を同定ではなく記述を表すものと見なしているようである





選択的新情報は新情報の一種である。井島(1998b)は新情報を実質的新情報(談話の中で最初に聞き手に与えられる情報)と選択的新情報(それ自体としてはすでに旧情報として登録されているが、複数の可能性のうち特定のものに限定するという点で新しい情報価値を持つもの)の二種類に分ける。指定文や倒置指定文における新情報は選択的新情報であるとされる。選択的新情報を表すにはいくつかの方法があるが、その一つは(32a)のように選択的新情報を述語とする分裂文を作るというもので、倒置指定文はこれと平行的に考えられると言う。別の方法は(32b)のように選択的新情報を表す部分を主題より前に移動するというもので、指定文はこれと平行的に考えられると言う。

- (32) a. 太郎が愛しているのは、花子だ。  
 b. 花子を、太郎は愛している。

井島(1998b)の議論はいくつかの重要な論点を含んでいる。特に重要な点は、事象構造、格構造、談話構造というようにいくつかの構造的レベルを区別することによって、従来の様々な観点から論じられてきた研究を統合的に扱うことができるような理論的枠組みの構築を志向しているという点である。井島(1998b)の研究は、名詞述語文についての理論が、意味論的、機能論的な諸観点に基づく研究を統合し、名詞述語文の諸特徴を包括的に記述できるような豊かな理論的構成を持つ必要があるということを示している。

#### 1.2.4 先行研究のまとめ

現在まで、非常に多くの立場から名詞述語文を特徴付け、分類し、体系化するための試みがなされてきた。それらの研究の中には意味論的な観点から名詞述語文を特徴付けようとしたもの、機能論的な観点から特徴付けようとしたもの、意味論的特徴と機能論的特徴を区別しようとしたもの、それらを統合した理論的枠組みの構築を志向したものなどがある。また、意味論的特徴についても機能論的特徴についても、それらの特徴をどのように記述すべきか、個々の事例をどのように分析すべきかについて、多くの考え方が提案されている。これらの研究は、名詞述語文の研究が取り扱うべき基本的な目標を浮き彫りにしている。その一つは、名詞述語文の意味論的、機能論的特徴をどのように記述すべきかというものである。もう一つは、そうした意味論的、機能論的な諸特徴をどのように統合し、名詞述語文の構造や類型を記述するための包括的な枠組みを構築すべきかというものである。

## 1.3 理論的枠組み

### 1.3.1 理論の構成

名詞述語文の諸特徴を説明するために、いくつかの理論上の部門が必要となる。最初に区別する必要があるのは、名詞述語文の意味論的特徴を記述する部門と機能論的特徴を記述する部門である。名詞述語文の特徴のうちのある部分は意味論的なものであり、ある部分は機能論的なものである。名詞述語文の特徴の全てを意味論的に説明することはできないし、全てを機能論的に説明することもできない。名詞述語文の諸特徴のうちどれが意味論的なものであり、どれが機能論的なものであるのかを、注意深く区別する必要がある。

名詞述語文の意味の理論は、さらにいくつかの下位部門に分けて考えることができる。中心的な役割を果たすのは、名詞句の意味の理論と、文全体の意味論的構造の理論である。多くの研究者が、名詞述語文の主語名詞句や述語名詞句が持つ意味論的性質が、名詞述語文全体の意味を特徴付ける上で中心的な役割を果たすと考えている。しかし名詞句の意味を考えるだけでは、名詞述語文の全体の意味を特徴付けることはできない。二つの名詞句によって表される事物や概念が、互いにどのような関係にあるのかということを考える必要がある。名詞述語文の意味論的構造の理論は、二つの要素の間の関係をどのように取り扱うのかという問題を扱う。

名詞句がどのような事物や概念を表すかとか、名詞述語文がどのような意味論的関係を表すかということ記述するだけでは、名詞述語文の特徴の全てを記述することはできない。必要となるもう一つの情報は、二つの要素がどのようなやり方で結び付けられるかというものである。例えば「ジキル博士」と「医者」という二つの事物や概念を結び付ける場合にも、「ジキル博士は医者だ」というようにジキル博士がどのような人物かを述べるやり方と、「ジキル博士が医者だ」というように医者であるのが誰かを述べるようなやり方がある。名詞述語文の機能論的特徴を説明するための理論は、このような特徴を記述するために必要になる。

これらの特徴を記述するために、本研究では名詞句の意味の理論、名詞述語文の意味論的構造、名詞述語文の機能論的構造という三つの理論上の部門を設定したいと思う。

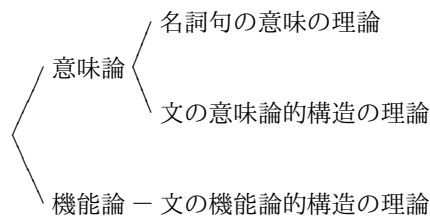


図 1.2 理論の構成

本研究の中心的な課題は、これらの各部門がそれぞれどのような構成になっており、名詞述語文の諸特徴をどのように取り扱うかを詳細に説明することである。もう一つの主要な課題は、これらの構造が互いにどのような関係になっているのか、名詞述語文の統語論的構造とどのように対応しているのか、談話論的構造とどのように相互作用しているのかといったことを特徴付けることである。

### 1.3.2 名詞句の意味の理論

■**名詞句の意味の理論** 名詞句の意味の理論は、名詞述語文に含まれる名詞句がどのような事物や概念を表しているのかを扱う。名詞句が何を表しているのかという問題は、名詞述語文の意味を記述する上で主要な論点の一つと見なされてきた。西山 (2003b) は、名詞述語文をいくつかの類型に整理する上で、名詞句の指示性という概念が中心的な役割を果たすと考えている。坂原 (1990c) は Fauconnier (1985) のメンタル・スペース理論の考え方をを用いて日本語の名詞述語文の意味を分析している。この研究では、役割 (role) という概念が重要な役割を果たしている。

ここでは、名詞句の意味の理論を二つの下位部門に分けて考えたいと思う。存在論と解釈の理論である。

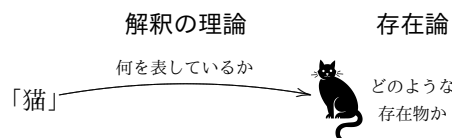


図 1.3 名詞句の意味の理論

存在論は、名詞句が表す事物や概念がどのような存在物であるかという問題を扱う。解釈の理論は、名詞句と事物や概念の間の関係を扱う。

■**存在論** 存在論は、名詞句によって表される事物や概念がどのような存在物であるのかという問題を扱う。基本的な考え方として、**概念主義**という考え方を取りたいと思う。概念主義とは、言語と世界を直接結び付けるのではなく、言語を心の中の概念と結び付ける考え方である。この考え方では、「ラッセル」という固有名は世界の中の特定の事物を指し示しているのではなく、それに対応するような心の中の概念と結び付けられる。このような考え方を、Jackendoff (2002) の言い方に倣って概念主義と呼ぶことにする。

名詞句によって表される事物や概念には、**個体**、**種**、**役割**といった種類の存在物が含まれる。

- (33) **個体** パートランド・ラッセル、シャーロック・ホームズ、ジキル博士、明けの明星、我輩、etc.  
**種** イギリス人、探偵、医者、惑星、ネコ、ウサギ、草食動物、etc.  
**役割** フランス国王、この部屋の温度、太陽系の中心、etc.

「ラッセル」のような固有名が特定の個体を表すのに対して、「ウサギ」のような普通名詞や「フランス国王」のような定記述句<sup>9)</sup>は個別的な事物を表しているわけではない。これらの名詞句は述語として用いられる場合には、個々の事物が属するような範疇 (事物の種や類) を表したり、個々の事物に与えられるような役割を表したりする。

- (34) a. ピーターはウサギだ。  
 b. ジョンはフランス国王だ。

<sup>9)</sup> 固有名ではないが、特定の事物に言及するために用いられるような名詞句のこと。

一方で、これらの名詞句は主語として用いられ、他の範疇に属したり、他の属性を持つような対象を表すこともできる。

- (35) a. ウサギは草食動物だ。  
b. フランス国王は禿だ。

これらの名詞句が主語として用いられているとき、量化 (quantification) という考え方が重要な役割を果たす。(35) のような文は、ウサギであるような何かが草食動物であるということを述べていたり、フランス国王であるような何かが禿であるということを述べていたりするのである。量化は、ウサギであるような何かやフランス国王であるような何かを導入する働きがある。(35) のような文の意味を記述するために用いることのできる限量詞の一つは、全称限量詞  $\forall$  と呼ばれるものである。この限量詞は「全ての  $x$  について」という意味を持つ。

- (36) a.  $\forall x[x \text{ is a rabbit} \rightarrow x \text{ is a herbivore}]$   
(全ての  $x$  について、 $x$  がウサギならば、 $x$  は草食動物である。)  
b.  $\forall x[x \text{ is the king of France} \rightarrow x \text{ is bald}]$   
(全ての  $x$  について、 $x$  がフランス国王ならば、 $x$  は禿である。)

しかしもっといい考え方がある。抽象的個体という考え方である。個体という種類の存在物があるのと同じように、種とか役割というような種類の抽象的な存在物があり、それが草食動物であるとか禿であるというような属性を持つと考えるのである。

- (37) a.  $r \text{ is a herbivore}$  ( $r$  はウサギ)  
b.  $k \text{ is bald}$  ( $k$  はフランス国王)

この考え方は、種や役割がしばしば、個々の  $x$  に割り当てられないような種類の属性を持つことがあるという現象を説明するために役立つ。次の例は、オオカミであるような全ての  $x$  がそれぞれ北に行くほど大きくなるのだとか、大統領であるような全ての  $x$  が7年ごとに变化する (容姿や性格が変わる) ということを言っているわけではない。北に住むオオカミほど体が大きいとか、大統領は7年毎に改選されるということを言っているのである。

- (38) a. オオカミは北に行くほど大きくなる。  
=  $w \text{ gets bigger as you go north from here}$   
 $\neq \forall x[x \text{ is a wolf} \rightarrow x \text{ gets bigger as you go north from here}]$   
b. 大統領は7年ごとに替わる。  
=  $p \text{ changes every seven years}$   
 $\neq \forall x[x \text{ is the president} \rightarrow x \text{ changes every seven years}]$

種や役割という概念のこのような扱い方は、基本的には Carlson (1977) や Fauconnier (1985) の意味論に基づくものである。本研究では、種や役割という概念を質量的存在物の一種として解釈したいと思う。質量的存在物とは 'water' や 'gold' のような不可算名詞によって表されるような存在物のことで、どの部分を取っても水であるとか金であるというような属性を持つという特徴を持つ。同じように、「ウサギ」という種や「フランス国

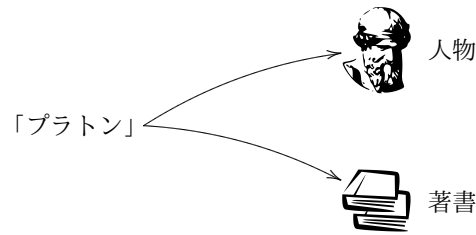


図 1.4 メトニミー

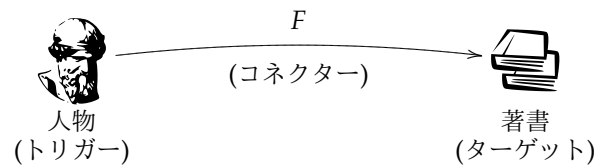


図 1.5 コネクター

王」という役割を、どの部分を取ってもウサギであったり、フランス国王であるような質量的存在物として扱うのである。

(37) では便宜的に「ウサギ」や「フランス国王」という名詞句を  $r$  や  $k$  という定項として翻訳しているが、基本的には量化に相当することが行われている。「ウサギ」や「フランス国王」という名詞句は、述語として用いられる場合にはウサギであるとかフランス国王であるというような属性を表すが、主語として用いられる場合にはそのような属性を持った何かを表す。 $r$  や  $k$  はウサギであるとかフランス国王であるという属性を持った何かであり、(37) はそのような何か草食動物であるとか禿であるという属性を持っていることが述べられている。ただし  $r$  や  $k$  はウサギとかフランス国王であるような個々の個体ではなく、ウサギやフランス国王の全体であるような抽象的、質量的な存在物である。

■**解釈の理論** 解釈の理論は、名詞句がどのような事物や概念を表すかという問題を扱う。わざわざこのような部門を設けるのは、言語表現とそれが表す事物や概念との間の関係が、それほど単純なものではないからである。この理論では、二つの事柄を扱う。一つは言語表現と事物や概念との間の関係の多様性であり、もう一つは言語表現と事物や概念との間の関係に課せられる認知的な制約である。

言語表現と事物や概念との間の関係の多様性を示す代表的な現象の一つは、メトニミー(換喩)である。「プラトン」という名前が人物ではなく、その人物が書いた著書に言及するために用いられたり、「マッシュルーム・オムレツ」という名前が料理ではなく、その料理を注文した客に言及するために用いられたりする(図 1.4)。

- (39) a. プラトンは一番上の柵だ。  
b. マッシュルーム・オムレツがお勘定だって。

このような指示の転送を可能にしているのは、要素間の語用論的な結び付きである。「プラトン」という語を人物ではなく著書に言及するために用いることができるのは、人物と著書の間に語用論的な関係が存在するからである。このような要素間の結合を、Fauconnier (1985) はコネクターと呼ばれる弧を用いて記述する(図 1.5)。

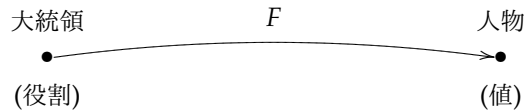


図 1.6 役割と値

言語と事物や概念の間の関係の複雑さを示す別の事例は、定記述句の役割としての読みと値としての読みの区別である。「大統領」のような役割は、国や時期のような文脈パラメータに応じて異なる値を取り得る。役割と値はコネクターによって結び付けられており、定記述句は第一次的には役割を表すが、二次的にはその値を表すことができる(図 1.6)。「changes every seven years」という述語は「7年ごとに改選される」という意味でも「7年ごとに変貌する(容姿や性格が)」という意味でも用いることができるが、前者の意味で用いることができるのは主語が役割を表している場合に限る。

(40) The president changes every seven years.

- a.  $r$  は 7 年ごとに改選される。 (  $r$  は役割 )
- b.  $a$  は 7 年ごとに変貌する。 (  $a$  は値 )

Fauconnier (1985) の理論は、言語と事物や概念との間の関係の多様性を説明するために役立つ。加えて、本研究では Fauconnier (1985) では扱われていないような別の問題についても、名詞句の解釈の理論の一部として扱う。その問題とは、言語と事物や概念との間の関係に課される認知的な制約である。これは田窪 (1989b) の談話管理理論などで扱われている問題であり、ある言語表現をどのような事物に言及するために用いることができるのかとか、どのような事物に言及する場合にどのような言語形式を用いなければならないのかといった問題に関わる。

田窪 (1989b) は、対象についての話し手や聞き手の知識が、その対象に言及するための言語形式の選択に影響を及ぼすことについて論じている。第一に、固有名は話し手と聞き手が共通して知っている事物に言及するような場合に用いられる (=41)。第二に、話し手が聞き手がよく知らない人物に言及する場合には「という人」という形式が用いられる (=42)。第三に、言語表現が何に言及するために用いられているのか分からない場合には「とは」「というのは」「って」のような形式が用いられる (=43)。

(41) 昨日、山田さんに会ったよ。

- (42) a. 私の知り合いに山田という人がいます。
- b. 君の知り合いに山田という人がいただろう。

(43) 山田さんって誰？

言語表現と事物や概念との間の関係という観点から見ると、これらの現象は、対象についての話し手や聞き手の知識が、言語表現と事物や概念との間の関係に一定の制約を与えているのだということを示している(図 1.7)。

固有名で直接言及できないような事物に言及するために、メタ言語という種類の言語表現が重要な役割を果たす。メタ言語とは、言語表現それ自体に言及するような言語表現のことである(図 1.8)。

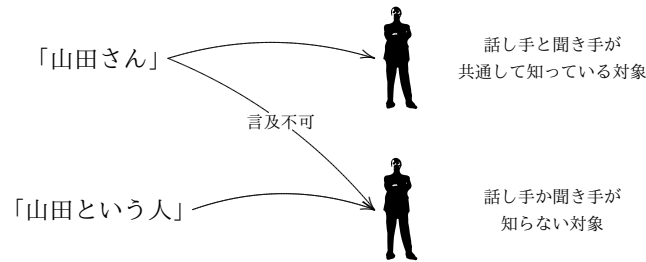


図 1.7 知識と表示形式

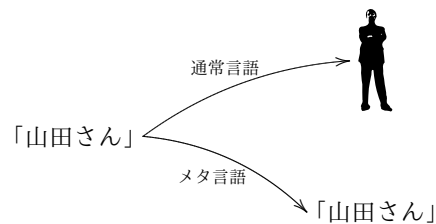


図 1.8 メタ言語

「山田という人」という表現は、「山田」「という」「人」という構成要素によって構成されている。「山田」は名前それ自体を表すメタ言語であり、「人」は一般的な概念としてのヒトを表す。「という」は「XをYという」のような構文で用いられる述語であり、事物と名前を結び付ける。「山田という人」という表現はこれらの概念や述語が組み合わさったものであり、おおよそ「山田という名前のとある人物」というような一般概念を表す。固有名で直接言及できないような事物に間接的に言及するために、このような一般概念としての「山田という人」を表すような表現が構築され、用いられるのである。

### 1.3.3 文の意味論的構造の理論

文の意味論的構造の理論では、二つの名詞句によって表される事物や概念が互いにどのような関係にあるのかという問題を扱う。非常に一般的な言い方をすると、名詞述語文は二つの事物の間に何らかの関係が存在していることを表す。

(44)  $X_i$  は  $Y_j$  だ。 =  $be(x_i, y_j)$

本研究で名詞述語文の意味論的構造の理論の一部として扱いたい問題には、 $x$  と  $y$  が具体的にどのような関係にあるのかという問題が含まれる。名詞述語文によって表される関係の代表的なものには次のようなものがある。

- (45) a. ウサギは草食動物だ。 (帰属関係)  
 b. 明けの明星は宵の明星だ。 (同一関係)  
 c. この部屋の温度は 19 度だ。 (役割-値関係)

これらは名詞述語文によって表される関係のうち、ごく代表的な事例に過ぎない。非常に多様な関係にある二つの要素が名詞述語文によって結び付けられる。

- (46) a. 僕はウナギだ。 (客-料理)  
 b. プラトンは一番上の棚だ。 (本-場所)  
 c. 会議は二時からだ。 (出来事-時間)  
 d. 東京タワーは333メートルだ。 (建築物-高さ)  
 e. カピバラはおとなしい性格だ。 (動物-性格)  
 f. 手紙を食べたのは黒ヤギだ。 (出来事-行為者)  
 etc.

こうした多様な関係がどのように理解されているのかについて、二つの考え方を取ることができる。一つは、これらの多様な関係は、比較的少数の基本的な関係に変換して理解されているのだというものである。例えば、「僕はウナギだ」という文では「僕」が実際には「僕の注文」を表しており、この文は役割-値関係を表す文の一種なのだと考える(図 1.9)。この考え方では、名詞句の解釈の理論(特に換喩)が重要な役割を果たす。

もう一つは、名詞述語文は条件さえ揃えばかなり多様な関係を表すことができるのであり、我々は二つの事物がどのような関係にあるかを直接的に理解しているのだというものである。「僕はウナギだ」という文では、「僕」と「ウナギ」はそれぞれ僕とウナギを表しており、この文は二つの要素が客と料理の関係にあることを述べているのだという考え方である(図 1.10)。この考え方では、我々が解釈によって補っているのは名詞句の意味ではなく、要素間の関係なのだということになる。

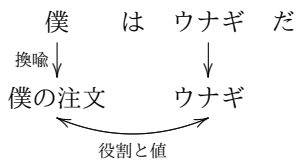


図 1.9 換喩による解釈

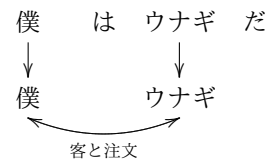


図 1.10 換喩を用いない解釈

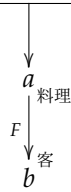
「僕はウナギだ」のような文に限って言えば、一つ目の考え方には問題があることが分かっている。この文の主語の位置には「僕」や「彼」のような人称代名詞は生起することができるが、「それ」のような指示詞は生起することができない(西山, 2003b, §7.2.3)。主語はヒトを表しているのであって注文や料理を表しているわけではないのである。

- (47) a. 山田さんには何を注文しておこうか。  
 b. {彼/?\*それ}はウナギだ。

そこで本研究では二つ目の考え方を取りたいと思う。名詞述語文は必ずしも少数の限られた種類の関係しか表すことができないのではなく、条件さえ揃えばかなり多様な関係を表すことが出来る。名詞述語文がどのような関係を表しているのかを解釈し、理解するために、語の意味の解釈に用いられるのと同じような語用論的な原則が作用している。(48)は 1.3.2 節で見たメトニミーの事例であるが、客と料理を結び付ける語用論的な関係  $F$  が語の換喩的解釈を可能にしている。



(48) マッシュルーム・オムレツ が お勘定だつて。



一方、(49)では同じような客と料理の結び付きが、名詞述語文によって表される二つの事物の関係を理解するために用いられている。

(49) 僕はウナギだ

### 1.3.4 文の機能論的構造の理論

文の機能論的構造の理論は、二つの名詞句によって表される要素がどのように結び付けられるかという問題を扱う。この理論は、次のような事例の違いを説明するために役立つ。(50a)はウサギがどのような動物であるかを述べており、(50b)は草食動物であるのはどれかを述べている。

- (50) a. ウサギは草食動物だ。  
b. ウサギが草食動物だ。

いくつかの機能論的な仕組みが、名詞述語文の機能論的構造を組織するために用いられている。中心的な働きをするのは、主題-題述構造と焦点である。(50a)は主語が主題になっており、(50b)は主語が焦点になっている。主題-題述構造と焦点は独立した機能論的機構であり、両者が組み合わさることによってより複雑な機能論的構造が生み出される。次のよく知られた事例(西山, 1990a)では、題述部の一部だけが焦点になっている。

(51) カキ料理は <sup>焦点</sup> 広島 が本場だ。

天野(1998)や砂川(2005)では、名詞述語文の焦点の位置について、主語が焦点になっているか、述語が焦点になっているか、文全体が焦点になっているかによって、前項焦点、後項焦点、全体焦点という三つの類型を設定している。これらは名詞述語文の焦点の位置についての基本的な類型であるが、本研究では二つの点を付け加えたいと思う。第一に、主語名詞句や述語名詞句ではなく、文中のもっと局所的な部分が焦点になる場合があり得る。次の事例では、文脈によって述語名詞句の主名詞の部分焦点となったり、修飾語句の部分焦点となったりしている。

- (52) a. ベンジャミンはピーターとどういう関係か。  
b. ベンジャミンはピーターのいとこだ。
- (53) a. ベンジャミンは誰のいとこか。  
b. ベンジャミンはピーターのとこだ。

第二に、焦点の位置が同じでも、焦点の性質が異なるという場合がある。次の事例はいずれも述語名詞句が焦点になっているが、(54a) がジキル博士がある職業に就いていることを述べる文であるのに対して、(54b) は日本一高い山がどれであるかを述べる文になっている。

- (54) a. ジキル博士は医者だ。  
b. 日本一高い山は富士山だ。

本研究では、(54a) のような焦点を通常の焦点と呼び、(54b) のような焦点を選択的焦点と呼ぶ。主題が題述と対立する概念であるのに対して、焦点は前提と対立する概念であると言われる。焦点の性質は、文がどのような情報を前提としているかということと密接に関わる。(54a) の文は、ジキル博士が何らかの職業に就いていることを前提として、それが医者であると述べるような文ではない。これに対して、(54b) の文は日本一高い山であるような何かが存在することを前提としてそれが富士山であることを述べる文である。前提となっている事柄の違いが、文の焦点の性質の違いを生み出す。

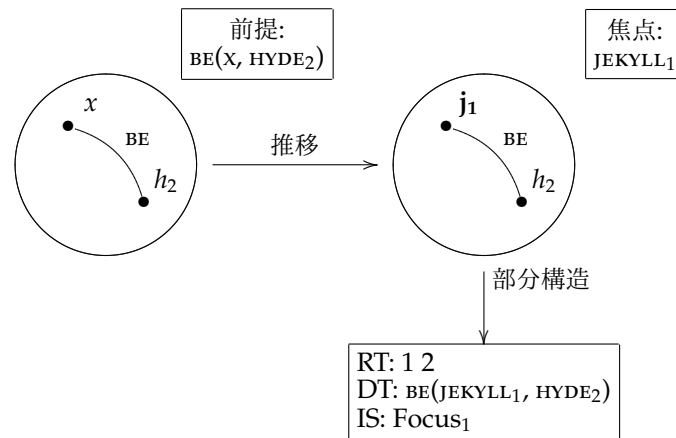
### 1.3.5 言語構造と談話構造の相互関係

名詞述語文の意味論的、機能論的特徴を統合的に記述するために、Jackendoff (2002) の並列モデルを利用することができる。Jackendoff (2002) は文の音韻構造、統語構造、意味/概念構造を並列的に捉え、さらに意味/概念構造の内部に指示層 (referential tier; RT)、記述層 (descriptive tier; DT)、情報構造層 (information structure; IS) という三つの独立した構造を設定している。本研究における名詞句の意味の理論、文の意味論的構造の理論、文の機能論的構造の理論で扱う諸特徴は、おおよそ Jackendoff (2002) の指示層、記述層、情報構造層で扱われる問題とそれぞれ対応する。この枠組みを用いると、名詞述語文の意味論的、機能論的構造は次のように記述することができる。

- (55) S/P: [s [NP 明けの明星]<sub>1</sub> は [VP [NP 宵の明星]<sub>2</sub> だ]]<sub>3</sub>  
DT: [BE(PHOSPHORUS<sub>1</sub>, HESPERUS<sub>2</sub>)]<sub>3</sub>  
RT:                    1                    2 3  
IS: Topic<sub>1</sub> Focus<sub>2</sub>

これらの構造の背後には、話し手や聞き手が談話の間保持し、談話の進行に従って変化させていくような、言語構造とは独立の認知的構造が存在する。文の意味論的構造は、そのような認知的構造の一部を構造化したものである。加えて、文は認知的構造の変化のプロセスをコード化している。文の機能論的構造は、どのような情報が既に認知的構造に含まれているかとか、どのような情報が新たに認知的構造に書き加えられるのかといった事柄を示す働きがある。心的状態の複数の段階に跨るような情報が、主題や焦点という形で文という静的な構造体の中に組み込まれている。

(56) ジキル博士がハイド氏だ。



名詞述語文の特徴の記述と類型化は、意味論と機能論のどちらか一方の観点のみに基づいて行えるものではない。このような統合的な枠組みは、名詞述語文について意味論的、機能論的な観点から行われてきた諸研究の成果を結び付け、理論の中に然るべき位置付けを与える。

## 1.4 本論文の構成

本論文の全体的な構成を示す。本論文は7つの章によって構成される。序論と結論を除いて、各章は概ね本研究の理論的枠組みを構成する各部門に対応する。

- 第1章 序論
- 第2章 名詞句の意味論
- 第3章 名詞句の解釈の理論
- 第4章 名詞述語文の意味論的構造
- 第5章 名詞述語文の機能論的構造
- 第6章 言語構造と談話構造の相関関係
- 第7章 結論

表 1.7 本論文の構成

第2章では、名詞句の意味の理論のうち、存在論に関わる問題を論じる。ここでは名詞句が表している事物や概念とは世界の中に存在するものではなく心の中に存在するものであるということ、それらの存在物には個体、種、役割といった存在論的範疇に属するものがあること、それらがどのような性質を持った存在物であるのか、属性という概念とはどのように関わるのかといったことが中心的な題目となる。名詞句が表す事物や概念は、名詞述語文の意味を構成する基本的な構成要素である。これらの事物や概念をどのようなものとして扱うのかという問題は、本研究の意味論の基礎的な道具立てを定義するものである。

第3章では、名詞句の意味の理論のうち、解釈の理論に関わる問題を論じる。これは一言で言うと、言語とそれが表す事物や概念(すなわち第2章で論じるもの)との間の関係についての理論である。中心的な話題となるのは、言語と概念の間の関係の多様性と認知

的制約である。取り扱う事柄には、名詞句の換喩的解釈や、定記述句の役割としての読みと値としての読みの区別といった語の解釈の多様性を生み出すメカニズム、事物や概念についての話し手や聞き手の知識と固有名や照応形式の運用、直接言及できない事物に言及するための方策とメタ言語の運用に関する問題などが含まれる。ここで扱う事柄の多くは名詞述語文の意味や機能を説明する上で中心的な役割を果たすものではないが、名詞句の意味の問題を考える上で基本的な考え方の一部を構成する。

第4章では、名詞述語文の意味論的構造に関わる問題を論じる。一般的に言うと、名詞述語文は二つの事物や概念の間に何らかの関係があることを表す。ここで扱う問題には、名詞述語文はどのような種類の関係を表すことができるのか、いくつかの限られた種類の関係しか表すことができないのか、文脈によっては非常に多様な関係を表すことができるのか、そのような多様な関係はどのように理解されているのか、またそれらの関係をどのように理解し、記述すればいいのかといったものが含まれる。特に、ウナギ文のような名詞述語文のあまり中心的ではないように見える事例をどのように取り扱うかという問題が、名詞述語文の意味をどのように取り扱うかを決定する上で中心的话题となる。

第5章では、名詞述語文の機能論的構造に関わる問題を論じる。ここでは、名詞述語文の機能論的構造が主題と題述、焦点といったいくつかの機能論的な概念によって構成されること、それらの組み合わせによって多様な機能論的構造が生み出されていること、焦点にはいくつかの種類のものがあること、焦点の性質を理解する上で前提や否定といった概念が重要な役割を果たすことなどを論じる。名詞述語文の機能論的構造は、名詞述語文の特徴を記述したり、いくつかの類型に分類したりする上で、意味論的構造と並んで中心的な役割を果たす。

第6章では、第2章から第5章までで論じてきた名詞述語文の意味論と機能論を構成する各部門が、互いにどのような関係にあるのかを論じる。基本的なモデルとなるのは、Jackendoff (2002) の意味/概念構造のような意味論的構造と機能論的構造を並列的に並べる構造である。これらの構造を構成する各要素は、統語論的な構造を構成する要素と結び付けられる。一方では、名詞述語文の意味論的、機能論的構造は、Fauconnier (1985) のメンタル・スペースで記述されるような談話論的な構造と結び付けられる。文は談話論的構造の構成の一部と、構造の変化のプロセスをコード化し、文が発話されることによって構造は新しい状態へと更新される。意味論と機能論を統合し、また音韻、統語、意味を含む文の言語的構造と談話的知識を結び付けるような統一された理論的枠組みの構築は、この研究が目指す最終的な目標地点である。

## 第 2 章

# 名詞句の意味論

### 2.1 はじめに

#### 2.1.1 先行研究

名詞述語文を類型化するためにしばしば用いられるアプローチの一つは、名詞述語文に含まれる二つの名詞句の意味論的特性に注目するというものである。代表的な研究は上林 (1984), 西山 (1985) らに始まる一連の研究であり、この研究では名詞句が指示的か否かという概念が中心的な役割を果たしている。井島 (1998b) に倣って、この理論を指示-叙述理論と呼ぶことにする。初期の理論は非常にシンプルな構成であり、二つの名詞句が指示的か非指示的かによって、名詞述語文に三つの類型が立てられている<sup>\*1</sup>。

- |           |  |           |
|-----------|--|-----------|
| (1) 措定文   | <u>田中角栄</u> は <u>社長</u> だ。<br><small>referential</small> <small>predicative</small>          |           |
| (2) 倒置指定文 | <u>社長</u> は <u>田中角栄</u> だ。<br><small>predicative</small> <small>referential</small>          |           |
| (3) 倒置同定文 | <u>あの赤シャツの男</u> は <u>例の山田太郎</u> です。<br><small>referential</small> <small>referential</small> | 西山 (1985) |

その後の研究では、理論はより複雑な構成のものへと改訂されている。西山 (1990b) では二つの大きな改訂が加えられ、その後の理論の基本的な枠組みが確立した。改訂の一つは、措定文の述語名詞句と倒置指定文の主語名詞句は、いずれも非指示的名詞句とはいえ性格が異なるとして、前者を叙述名詞句<sup>\*2</sup>、後者を変項名詞句と呼んで、非指示的名詞句に下位分類を設けたという点である。もう一つは、措定文、指定文、同定文に加えて同一性文という類型が立てられている。これは熊本 (1989a) 以降、二つの名詞句が指示的である名詞述語文の中でもやや独特の性質を持った文が同定文と呼ばれるようになったため、それとは別に二つの名詞句が指示的である名詞述語文の類型を立てる必要が生じたためである。二つの名詞句が指示的である名詞述語文としては、同一性文の方が標準的な類型であると言える。

- |           |  |  |
|-----------|--|--|
| (4) 措定文   | <u>山本</u> は <u>社長</u> だ。<br><small>指示的名詞句</small> <small>叙述名詞句</small> |  |
| (5) 倒置指定文 | <u>社長</u> は <u>山本</u> だ。<br><small>変項名詞句</small> <small>指示的名詞句</small> |  |

<sup>\*1</sup> 倒置同定文という用語は西山 (1990b) による。1.2.3 節参照。なお上林 (1988) は指定文と別に同定文という類型を立てる必要を認めていない。

<sup>\*2</sup> 正確には、西山 (1990b) はこの概念を属性名詞句と呼んでいる。しかし後に名称を改め、現在では叙述名詞句と呼ばれている (西山, 2003b)。

- (6) 倒置同一性文 こいつ は 昨日公園でぶつかったあの男 だ。  
指示的名詞句                      指示的名詞句
- (7) 倒置同定文 山田さん は 何でも反対する人 だ。  
指示的名詞句                      指示的名詞句

西山 (1990b)

その後も同定文の定義の修正、定義文、提示文という種類の追加など様々な改訂が行われ、西山 (2003b) では日本語の名詞述語文を六種の類型に整理している (第1章参照)。

### 2.1.2 問題点

■指示の理論的基盤 名詞句の意味解釈の理論が名詞述語文の意味を記述する上で役に立つものだという考えに反対する理由はないが、理論の詳細を考えてみようとすると、途端によく分からない曖昧な問題が数多く浮かび上がってくる。疑問点には、指示的名詞句とは何か、変項名詞句とは何か、それらは純粋に指示理論 (あるいは名詞句の意味の理論) 上の概念なのかといったことが含まれる。

最初に、指示性という概念について考えてみることにしよう。西山 (2003b) は、指示的名詞句とは「世界のなかのなんらかの対象を指示する (refer to) という機能」(西山, 2003b, p. 59) を持った名詞句であるとしている。一方で、指示的名詞句によって指示される対象とは現実世界における具体的対象ばかりではなく、観念上の対象や心的な出来事、虚構世界や仮定の世界における対象、数や命題のような抽象的な対象である場合もあり得るとする。すなわち、西山 (2003b) は指示的名詞句とは実在する事物を指示する名詞句のことだとは考えていない。それでは、どのような事物や概念を表していれば名詞句は指示的であるということになるのだろうか。名詞句によって指示される対象とはどのような存在物のことなのだろうか。西山 (2003b) の理論では、指示とか対象といった概念を理解するための理論的基盤があまり明確に定義されていない。結果として、西山 (2003b) が指示的名詞句であると思なしている名詞句の中には、しばしば何を指示しているのか十分に明らかでないものが見られる。そのような事例には、次のようなものが含まれる。

- (8) a. 鯨は哺乳動物だ。 (措定文)  
 b. 山田さんは何でも反対するひとだ。 (倒置同定文)

(8a) は措定文であり、主語名詞句は指示的、述語名詞句は非指示的 (叙述名詞句) であるとされる。しかし「鯨」という名詞句が何を指示しているのかについては「総称文については不明な点も多いが、とにかく、なんらかの意味で対象を認め、その対象について叙述している措定文であることは否定できないであろう」(西山, 2003b, p.124) と述べるに留めており、具体的な考え方を明らかにしていない。(8b) は倒置同定文であり、二つの名詞句はいずれも指示的であるとされる。ただし「何でも反対するひと」という名詞句は世界の中の一次的な個体を直接指示するのではなく、「山田さん」を同定するための特徴記述を満たすものを指示しているのだとされる。この「特徴記述を満たすもの」という概念を、意味理論上どのような概念として理解すればいいだろうか。これらの文において、「鯨」や「何でも反対する人」は何かを指示しているはずだと考えられているが、それがどのようなものであるのかについては明確な説明が与えられていないか、理論上の位置づけが不明瞭である。これらの名詞句が何かを指示しているのだとすれば、その対象とはどのような存在物であるのか、意味理論上の位置づけをより明確にする必要がある。

■定記述句の解釈 指示の理論に関する別の込み入った問題は、定記述句と呼ばれる種類の名詞句の意味論上の取り扱いに関わる。定記述句とは、固有名ではないが特定の事物に言及するために用いられるような名詞句のことで、英語で言うと ‘the present king of France’(現在のフランス国王) とか ‘Smith’s murderer’(スミスを殺した犯人) といった名詞句が含まれる。定記述句には、属性的用法と指示的用法と呼ばれる二つの解釈があることが知られている (Donnellan, 1966)。次の文は、‘Smith’s murderer’ が属性的に解釈されるか指示的に解釈されるかによって二通りの読みを持つ。

(9) Smith’s murderer is insane.

この文の可能な読みの一つは、誰がスミスを殺したのかは分からないが、こんなひどい殺し方をする者は正気ではないというものである。この読みでは、‘Smith’s murderer’ という記述が記述の内容 (属性) を満たすような何かに言及するために用いられているので属性的用法 (attributive use) と呼ばれる。この文が用いられる別の状況は、スミスを殺した犯人として裁かれているジョーンズが法廷で奇妙な言動をしているのを見て、ジョーンズは正気ではないという場合である。この読みでは、記述は単にジョーンズという個体に言及するために用いられているので指示的用法 (referential use) と呼ばれる<sup>\*3</sup>。

日本語の名詞述語文においては、定記述句は西山 (2003b) の言う措定文の主語名詞句の位置に生起する場合も、倒置指定文の主語名詞句の位置に生起する場合もある。措定文の主語名詞句の位置に生起する定記述句は、属性的に解釈される場合と指示的に解釈される場合がある。

- (10) スミスを殺した犯人は正気じゃない。 (措定文)  
 a. 誰であれスミスを殺した犯人は正気じゃない。 (属性的用法)  
 b. ジョーンズは正気じゃない。 (指示的用法)
- (11) スミスを殺した犯人はジョーンズだ。 (倒置指定文)

西山 (2003b) は、措定文の主語名詞句は属性的用法で用いられる場合にも指示的用法で用いられる場合にも指示的名詞句であるとしている。一方、倒置指定文の主語名詞句は変項名詞句であり、非指示的であるとしている。従って西山 (2003b) の理論では、「スミスを殺した犯人」という名詞句は属性的用法の指示的名詞句、指示的用法の指示的名詞句、変項名詞句 (非指示的名詞句) という少なくとも三通りの解釈が区別される。

これに対して、メンタル・スペース理論 (Fauconnier, 1985; 坂原, 1990c) という理論では定記述句には役割を表す解釈と値を表す解釈があるという考え方をする。「スミスを殺した犯人」という名詞句は、役割  $r$ (=スミスを殺した犯人) に言及するために用いられる場合と、その値  $j$ (=ジョーンズ) に言及するために用いられる場合がある。定記述句の属性的用法と指示的用法の区別は、定記述句が役割を表しているか値を表しているかの違いとして説明される。

<sup>\*3</sup> 二つの読みは命題の真偽判断にも違いを生む。スミスが実際には誰かに殺されたのではないという状況では、前者の読みは ‘is insane’ という属性が与えられる対象が存在しないので偽になり、後者の読みではジョーンズが実際に犯人であるかどうかということとは関係なく、彼が ‘is insane’ という属性を持つということ自体は真である

(12) スミスを殺した犯人は正気じゃない。

a.  $r$  is insane

役割の読み (属性的用法)

b.  $j$  is insane

値の読み (指示的用法)

この理論では、(11)のような文の主語も役割を表しているのだという考え方をする。  
(11)のような文は、役割  $r$  と値  $j$  を結び付ける。

(13) スミスを殺した犯人はジョーンズだ。(=11)

=  $be(r, j)$

従って、西山 (2003b) は定記述句について属性的用法の指示的名詞句、指示的用法の指示的名詞句、変項名詞句という少なくとも三通りの解釈を区別するが、メンタル・スペース理論では属性的用法の指示的名詞句と変項名詞句はいずれも役割という概念を表しているのだということになる。

(14) 変項名詞句 └─ 役割  
指示的名詞句 (属性的用法) └─ 役割  
指示的名詞句 (指示的用法) ── 値

西山 (2003b) の変項名詞句と属性的用法の名詞句の区別は、メンタル・スペース理論では役割を表す名詞句の文中での用いられ方の違いに過ぎないということになる。(12a) では役割  $r$  は「正気じゃない」という属性の主語となっており、(13) では役割  $r$  は値  $a$  と結び付けられている。

このことは名詞述語文の意味論的特徴のどの部分を理論のどの部分で説明するのかについて、いくつかの異なる考え方があるのだということを示している。西山 (2003b) は、措定文と倒置指定文の意味の違いのある部分を、主語名詞句の意味の違い (指示的か非指示的か) と結び付けている。メンタル・スペース理論では、西山 (2003b) の言う措定文と倒置指定文に関して、主語名詞句が表す意味論的対象のタイプについて相補的な関係があるとは考えていない (役割を表す名詞句はどちらの文の主語の位置にも生起し得る)。後者の立場から見ると、変項名詞句と属性的用法の指示的名詞句を区別するという西山 (2003b) の考えは、名詞句の意味の問題として扱う必要のない問題を名詞句の意味の問題として処理しようとしているように見える。

■第二タイプの指定文 変項名詞句という概念には、別の困難な問題がある。西山 (2000) は、指定文の周辺的事例として第二タイプの指定文という類型に言及している。これは二つの名詞句がいずれも指示的であるが、倒置指定文と同じように一方に対して他方を指定するような叙述になっている文のことを言う。例えば「洋子を殺したひとはこの禿頭の男だ」という文は、通常の倒置指定文としての読み (「洋子を殺したひと」が変項名詞句である読み) の他に、「洋子を殺したひと」が特定の個人に言及していて、それと同一の人物を一覧の中から選択するというような状況で述べられる場合がある。後者の読みでは、「洋子を殺したひと」は指示的名詞句であるが、「 $x$  が洋子を殺すという性質を満たした (例の) ひとである」という変項を含む変項名詞句として機能していると言う。

(15) 洋子を殺したひとは この禿頭の男だ。 (倒置指定文)  
変項名詞句 指示的名詞句

(16) 洋子を殺したひと は この禿頭の男だ。 (第二タイプの指定文)  
指示的名詞句/変項名詞句 指示的名詞句



この考え方では、結局のところ、西山(2000)がこの名詞句を指示的名詞句と考えているのか、変項名詞句(非指示的名詞句)と考えているのかははっきりしない。理論的には、指示的名詞句であり、かつ変項名詞句であるということは矛盾であり、原理的にあり得ない。

筆者の考えでは、西山(2003b)は名詞句の意味の理論で扱う必要のない問題を、名詞句の意味の理論で扱おうとしているように見える。第二タイプの指定文において、二つの名詞句はいずれも特定の事物に言及するために用いられており、文は二つの事物が同一物であることを述べている。これは西山(2003b)の分類で言うと、倒置指定文というよりは倒置同一性文と類似している。

(17) ジキル博士は ハイド氏だ。 (倒置同一性文)  
指示的名詞句      指示的名詞句

一方で、第二タイプの指定文は通常の倒置同一性文とは異なり、主語名詞句が表す事物と対応するものを探し、述語名詞句で指定するという特徴を持つ。このような特徴は、倒置指定文と共通のものである。しかしこの特徴は機能論的な特徴であって、意味論的な特徴ではない。第二タイプの指定文は意味論的には倒置同一性文と類似しているが、機能論的には倒置指定文と類似している。西山(2003b)の分析は、第二タイプの指定文と倒置指定文の類似性を変項名詞句という指示理論上の概念によって説明しようとしているが、両者の類似性が意味論上の概念によって説明すべきものであるかどうかは疑わしい。名詞述語文の持つ諸特徴について、意味論的に説明すべきものと機能論的に説明すべきものを注意深く区別するならば、第二タイプの指定文のような事例を特徴付けるために指示的であるが変項名詞句として機能する名詞句というような概念を導入する必要は無い。

■まとめ 名詞述語文の意味論的特徴を名詞句の意味の観点から記述しようとする代表的な研究として西山(2003b)を挙げ、いくつかの問題点や不明瞭な部分について概観してきた。問題は概ね、二つの点に集約することができる。

1. 指示という概念の理論的基盤に不明瞭な部分がある。
2. 指示の理論以外で取り扱うべき問題まで指示の理論で取り扱おうとしている。

これらの問題は、名詞述語文についての意味論的研究が設定すべき基本的な論点を示している。第一に、名詞述語文の意味論の一部としての名詞句の意味論は、名詞句が何を表しているのかを記述するための明確な理論的基盤を備えている必要がある。第二に、名詞述語文の意味論と機能論は、名詞述語文の諸特徴のうちどの部分を名詞句の意味論で扱い、どの部分を意味論上、機能論上の他の部門で扱うべきかを適切に判断するための、豊かな構成を備えている必要がある。

### 2.1.3 理論的枠組み

様々な問題を整理するために、名詞述語文や名詞句の意味の問題を記述するための理論的基盤を整理する必要がある。とりわけ、名詞述語文の意味の全てが名詞句の意味の理論だけで説明できるわけではないという点に注意しなければならない。西山(2003)の理論はこの点を無視しているわけではないが、全体として指示の理論に多くの仕事を与え過ぎているように見える。

本研究では名詞句の意味の理論が説明すべき問題として、次の二つの点を設定する。一つは、名詞句が表す事物や概念とはどのようなものであるのかという問題である。もう一

つは、名詞句とそれが表す事物や概念との間の関係(すなわち、名詞句の意味解釈)に関する問題である。これらを扱う理論を、それぞれ存在論、解釈の理論と呼ぶことにする。

(18) 名詞句の意味の理論

- a. 存在論: 名詞句が表す事物や概念とはどのような存在物か。
- b. 解釈の理論: 名詞句はどのような事物や概念を表すか。

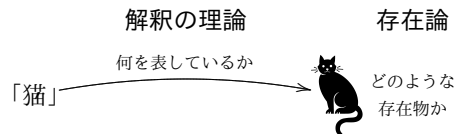


図 2.1 名詞句の意味の理論

この章では、名詞句の意味の理論に関する問題のうち、特に存在論に関する問題を中心に扱う。本研究では名詞句の存在論について、以下のような基本的な仮定を立てる。

- (19) a. 名詞句によって表される事物や概念とは、世界の中に存在する事物ではなく、心の中の概念である。
- b. 名詞句によって表される事物や概念には、個体、種、役割といったタイプのものである。

(19a) は言語は何を表しているのか、という意味論の基本的な問題に関わる。ごく常識的な見方では、「筑波山」という固有名は実在する特定の山に言及しているように見える。しかしよく考えてみると、この固有名によって指示されている対象が、具体的に世界のどの部分のことであるのかはそれほど厳密に決まっているわけではない。地面のどこまでが山でどこからが麓なのかとか、地表から何メートルの深さまでの地面が山に含まれるのかといった問題は、かなりの程度恣意的に判断される。そもそも、我々は我々の認識を通してしか世界にアクセスすることはできない。従って我々が言語によって言及している対象とは、直接的には、我々の認識によって世界から切り出され、対象化された心的な概念であるはずである。このような心理主義的な見方は、あまり厳密ではない言い方では今田(2005a) などでも言及していたが、本研究では理論的な基礎づけをより明確にするために Jackendoff (2002) の議論を取り入れることにした。Jackendoff (2002) では、このような考え方は指示の概念主義理論と呼ばれる。

(19b) は名詞句によって表される事物や概念とは、具体的にはどのような存在物であるのかという問題に関わる。名詞句によって表される事物や概念を心的な存在物と見なす限り、これらの対象を世界の中に実在する存在物に限って考える必要はなくなる。我々はシャーロック・ホームズやベガサスのような現実には存在しない事物についても、心的に対象化して言語によって言及することができる。また我々はシャーロック・ホームズのような個別的な事物ばかりではなく、個別的ではない概念を対象化して言語によって言及することもできる。ここでは、Carlson (1977) の種 (kind) や、Fauconnier (1985) の役割 (role) といったタイプの存在物を名詞句によって表される対象として取り入れたいと思う。種や役割は、個体と同じように様々な叙述の主語になることができる。加えて、種や役割に特有の叙述もいくつかある。

これらの考え方や概念は、名詞句が表しているものは何かという問題を理解するために役立つ。また、名詞句の意味の理論で扱うべき問題を明確化することによって、名詞述語文の意味のどの部分を名詞句の意味の問題として扱うべきかを明確にすることができる。以下では、本研究における存在論の理論的枠組みの詳細について論じる。2.2節では、名詞句が表しているものは心の中の概念なのだという、概念主義的な意味論の立場について述べる。残りの2.3節から2.5節では、名詞述語文の意味を研究する上で重要な役割を果たす個体、種、役割という概念についてそれぞれ論じる。

## 2.2 指示の概念主義理論

### 2.2.1 対象と認識

名詞句は様々な事物や概念を表す。常識的な見方では、名詞句のうちのある種の世界に存在する特定の事物を指し示す。例えば「ラッセル」という固有名は実在する特定の個人を指し示す。一方で、世界に存在する特定の事物を指し示すのではない様々な名詞句が存在する。「シャーロック・ホームズ」という固有名は架空の人物を指し示しているのであって、実在の人物を指し示しているのではない。「イヌ」という名詞句はイヌという種を表しているのであって特定の個体を表しているのではない。「この部屋の温度」や「この切手の価値」は抽象的な概念を表しているのであって実在する何かを指しているわけではない。

世界に存在する特定の事物を指し示しているように見える名詞句も、実際には世界の中の事物と直接結び付いているかどうかは疑わしい。原理的には、我々は我々の知覚や認識を通してしか外界の事物にアクセスすることはできない。従って、我々が言語によって表現する対象も、一次的には我々の心の中の心的な構成物であるはずである。

世界は認識とは独立に存在する。しかし世界の一部を切り取って、その部分に意味を与え、対象化するのはいわゆる我々の認識の作用によるものである。世界のどの部分を切り取ってひとつの対象として認識するかは、それを認識するものの判断に依存する。「筑波山」という固有名はある特定の山に言及するために用いられるが、どこからが山でどこからが麓かがはっきりと決まっているわけではない。同じようなことは事物だけではなく行為や出来事のような存在物についても言える。「昼食を食べる」という行為が、具体的にどの時点からどの時点までなのかは、はっきりと決まっているわけではない。

認識が対象を生み出すことを示すより顕著な事例は、絵画とか写真の中に対象のイメージが見出されるような場合である。図2.2はよく知られた多義絵であるが、この絵の中に老婆や娘が存在するのは誰かがそのように認識するからであり、そうでなければこの絵はただのインクの染みでしかない。

認識は、対象を世界から切り出すためだけに役に立つわけではない。対象を時間的に連続した同一性を持った存在物としてまとめ上げるのも認識の作用である。例えば、いま私の机の上にある置き時計は、昨日同じ場所に置かれていた置き時計と同一のものである。我々は、昨日の置き時計と今日の置き時計を別々の対象としてではなく、同一の対象として認識する。対象の時間的な連続性は必ずしも物質的な連続性に保証されたものではない。置き時計の電池を交換したり、液晶パネルを交換したり、ネジを交換したりしても、その置き時計は依然として昨日机の上にあった置き時計と同一の個体である(少なくとも



図 2.2 My Wife and My Mother-in-law (W. E. Hill, 1915)

私は同じ時計だと認識している)。置き時計の部品を少しずつ交換して行って、最終的に全ての部品が入れ替わったとしても、何割の部品が入れ替わった時点で別の時計に変わったのだというようなことは言えないし、物質的な同一性に関わらずその時計は元の時計と連続した同一の個体として認識される。

### 2.2.2 概念主義意味論

指示と真理の理論について、実在主義的な見方と心理主義的な見方がある。実在主義的な見方では、言語やそれが意味するものを外界に存在する客観的な存在物であると見なす。心理主義的な見方では、言語やそれが意味するものを人間の心の中にあるものとする。実在主義者は、指示と真理の問題は意味論が説明すべき主要な課題であり、それは言語と世界がどのような関係にあるのかという問題であると考えている。心理主義者は、意味論のそうした課題を否定するわけではないが、言語と世界の間を説明するためには心理的な領域の介在が不可欠であると考えている。

Jackendoff (2002) は、言語およびそれが表すものの全部または一部を心の外に置く様々な考え方について、多くの問題があることを指摘している。第一の考え方は、言語とは外の世界に存在する抽象的な事物であるという考え方である。この考え方では、言語学の主題は単に諸言語を記述することだけに限られてしまい、言語と心の間についての研究をほとんど放棄してしまうことになる。

第二の考え方は Frege (1892) の考え方で、言語は外の世界に存在し、世界の中の事物を指示するが、人間は言語をつかむ (grasp) ことによって言語を使うのだというものである (図 2.3)。この考え方では、実在的な意味論を保ったまま、心理主義的な方法論を言語学の中に取り込むことが出来る。この考え方の難点の一つは、世界の中にあるという言語の性質は人間の言語的な直感や行動によってしか知ることができず、従って人間言語のどの部分が抽象的な言語の特質によるもので、どの部分が心理主義的な具現かを切り分ける経験的な方法が無いという点である。より基本的な問題としては、抽象的な事物を「つかむ」とはどのような意味か、という問題がある。具体的な事物であれば、感覚器官や神経細胞を通して脳で捉えることができる。しかし外界に抽象的な言語というものが存在するとして、それにどのようにアクセスすればいいのか。

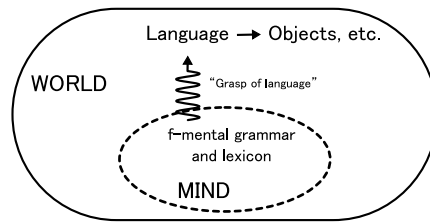


図 2.3 The mind grasping “language in the world” (Jackendoff, 2002, p.298)

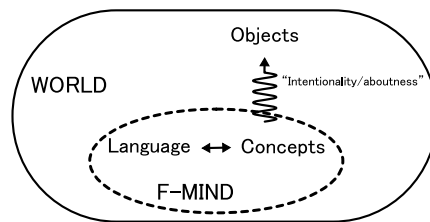


図 2.4 Concepts in the f-mind that are “about” objects in the world (Jackendoff, 2002, p.300)

第三の考え方は言語を心の中に完全に押し込めるという考え方である(図 2.4)。この考え方では、言語は心の中にあるものであり、心の中にある概念を表している。この方法では、心が言語をどのようにつかんでいるかという問題は解消される。しかし概念が外の世界とどのような関係にあるのかについて説明しなければならない。概念が外の世界の事物についての心的表示であると考えれば、結局のところ「つかむ」という考え方と同じように概念と世界との間に神秘的な繋がりを仮定しなくてはならなくなる。

Jackendoff (2002) は、そもそも世界の中の事物というものの自体が疑わしいと考える。Bertrand Russell とか冷蔵庫とかネジ回しというような具体的な事物の場合ならともかく、我々が言語によって言及できる対象には非常にいろいろな種類のものがある。

(20) Fictional and mythical characters

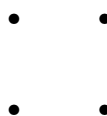
- a. Sherlock Holmes
- b. the unicorn in my dream last night

(21) Geographical objects

- a. Wyoming
- b. the Mississippi River
- c. the distance between New York and Boston

(22) Virtual objects

- a. the square formed by the four dots below



- b. the horizontal rectangle that goes behind the vertical one below



- (23) Social entities
- a. the value of my watch
  - b. the first dollar I ever earned
  - c. Morris Halle's Ph.D. degree
  - d. your reputation
  - e. General Motors
  - f. the score of tomorrow's Red Sox game
- (24) Auditorily perceived objects
- a. Mahler's Second Symphony
  - b. the words *banana* and *despite*
- (25) Other
- a. the set of all possible worlds
  - b. the best of all possible worlds

Jackendoff (2002, pp.301–303)

我々はシャーロック・ホームズや一角獣のような架空の存在物に言及することができる (=20)。ワイオミング州の境界に明確な地理的区切りがあるわけではない (=21a)。ミシシッピ川とは、そこにある水のことなのか、それとも川底のことなのか、メキシコ湾のどこで終わるのか (=21b)。ニューヨークとボストンの間の距離とは、どこからどこまでのことなのか (=21c)。(22)の正方形や長方形は物理的にはそこに存在しない。(23)は触れることのできない存在物だが、にもかかわらず世界の一部として指示的に扱われる。マーラーの第2交響曲とは楽譜や演奏のことではなく(また楽譜や演奏のタイプというわけでもなく)、それらの実現形すべての背後にある存在である (=24a)。可能世界とは世界の外にあるものであって世界の中にあるものではない (=25)。

Jackendoff (2002) は世界の中の事物という概念を破棄し、世界を心の中に押し込んで言語と並べることがを提案する。この考え方では、常識的実在主義的な指示理論 (=26) は、Jackendoff (2002) が概念主義的 (conceptualist) と呼ぶ指示理論 (=27) に取って代わられる。

- (26) Common sense realist theory of reference:  
Phrase P of language L, uttered in context C, refers to entity E in the world (or possible worlds).
- (27) Conceptualist theory of reference:  
A speaker S of language L judges phrase P, uttered in context C, to refer to entity E in [the world as conceptualized by S].

Jackendoff (2002, p.304)

すなわち、言語は世界の中の事物を表しているのではなく、言語使用者によって概念化された世界の中の事物を表している。指示対象が概念化された世界に存在することは話し手が指示するための必要条件だが、現実には存在することは必要条件でも十分条件でもない。シャーロック・ホームズや一角獣のような現実には存在しない事物を概念化して指示することもできるし、現実には存在するものでも何らかの形で概念化しなければ指示することはできない。

言語の意味を心の中の概念として捉える考え方は、しばしば、言語を心的表示に翻訳しただけに過ぎず、言語の意味を説明したことにはならないという批判を受ける。しかし概念とは、(図 2.4 に示されているように) 世界の中の何かの記号だとか表示だとかいうものではない。Jackendoff (2002) は、むしろ概念こそが意味なのだと強調する。概念は、推論や判断の補助など、まさに意味がするはずのことを行う。心の中の概念と外部世界との間には表示というような神秘的な関係が存在するのではなく、代わりに複雑な認知メカニズムが存在する。視覚システムにおいては、外の世界の事物は網膜と低次視覚野を経て脳に取り込まれる。網膜や低次視覚野にあるのは網膜上で特定の位置、色、強さを持った光の点やさまざまな方向の直線や縁のみであり、脳のそれより内側で行われる何らかの計算によって、最終的には知覚表象 (percept) とでも呼ぶべき認知構造が構築される。言語によって表される現実とは、外部世界に客観的に存在する現実ではなく、我々の知覚システムによって構築されたわれわれにとっての現実なのである。

## 2.3 個体

### 2.3.1 心的概念としての個体

心的概念のうち、基本的なものの一つは個体である。個体に言及するために用いられる表現の代表的なものは「ラッセル」のような固有名、「彼」のような代名詞、「この人」とか「これ」というような直示的表現である。これらの表現は話し手が直接見知っているような事物に言及するために用いられる場合もあるし、間接的に知っているだけの事物や実際には存在しない事物に言及するためにも用いられる。例えば「ラッセル」とか「シャーロック・ホームズ」のような固有名はある特定の人物の名前であるが、筆者はバートランド・ラッセルを直接見たことはないし、シャーロック・ホームズが架空の人物であるということを知っている。「この人」とか「これ」のような直示的な表現は目の前の事物に言及するために用いられるが、この場合も我々が直接言及しているのは、我々の知覚を通じて認識されたその事物に対応する心的概念である。我々はしばしば実際には何も無いところに何かがあるように錯覚し、錯覚によって概念化された実際には存在しない事物に「これ」とか「それ」というような直示的表現で言及する場合もある。

伝統的な意味論では、実在しない事物を意味論の要素に含めないために細心の注意が払われてきた。Russell (1905) は「現在のフランス国王」('the present king of France') のような実在しない事物に言及する記述句を含む文に意味を与えるために指示理論と呼ばれる考え方を提案した。これによると、「現在のフランス国王は禿である」という文は「現在のフランス国王であり、かつ禿であるような  $x$  がただ一つ存在する」というように解釈される<sup>\*4</sup>。実際には、そのような条件を満たす  $x$  は存在しないので、この文は偽であると

<sup>\*4</sup> 現在の標準的な論理的記法で記述すると、おおよそ次のようになる。ただし  $\exists!$  は「ただ一つ存在する」

いうことになる。要するに、 $x$ という変項や、「現在のフランス国王である」「存在する」といった述語を用いて、「現在のフランス国王」が指示する特定の個体  $a$  といった要素を用いないようにするのである。固有名についても、直接見知っているわけではない事物に言及する固有名や、実在しない事物に言及する固有名は、実際には記述句と同じであると考えられる (Russell, 1956; Quine, 1960)。

心理主義的な意味論の立場に立つ場合には、実在しない事物の存在を仮定してはならないというような禁則事項はない。「ラッセル」という固有名も「シャーロック・ホームズ」という固有名も、ある特定の個人に相当する心的概念と結び付けられる。勿論、「ラッセル」という固有名によって言及される対象は実在の人物であったという属性を持たなければならないし、「シャーロック・ホームズ」という固有名によって言及される対象は実在の人物ではないという属性を持たなければならない。しかしそれを別にすれば、二つの概念を特に区別する必要はない。ここで取り扱うのは言語と言語使用者の心の状態との関係であって、言語表現によって表された心の中の事物や概念が現実世界の反映であるかどうか (現実世界と照らして真であるか否か) はここでの関心事ではない。

### 2.3.2 四次元連続体

固有名やその他の言語表現が表す個体という概念がどのようなものかについて、もう少し詳しく考えておくことにしよう。野矢 (2002) は固有名の意味について興味深い議論を提示している。次の文において、固有名「N」は三年前の N を表しているのか、現在の N を表しているのか。

(28) N は三年前大学に入学し、いま哲学科にいる。 野矢 (2002, p. 25)

時点  $t_1$  における  $a$  とか、時点  $t_2$  における  $a$  といったものを、 $a$  の時間断片 (time slice あるいは time stage) という。野矢 (2002) は個体の同一性に関して、ピンポン玉モデルという考え方とソーセージ・モデルという考え方を区別する。ピンポン玉モデルとは、現在の N や三年前の N といった時間断片を個別の対象として捉えて、それらの間に同一性の関係を認めるという考え方である。これに対して野矢 (2002) はソーセージ・モデルという考え方を取る。N とは三年前の N や現在の N を貫く四次元連続体であって、別々の対象の間に同一性という関係は認めないという考え方である。野矢 (2002) は、(28) において固有名 N は現在の N とか三年前の N といった N の時間断片を表しているのではなく、四次元連続体としての N 氏を指しているのであり、この文は四次元連続体としての N が「三年前大学に入学した」とか「いま哲学科にいる」という属性を有していることを述べているのだと主張する。

この事例は、固有名で言及される個体という概念が、しばしば時間的に抽象化された存在物であるということを示している。しかしより興味深いのは、個体を没時間的な存在物として捉える考え方が、個体という概念と種という概念の関係 (特に類似性) を考える上で鍵となる考え方であるということである。「N」のような固有名が特定の個体を表すのと同じように、「カイウサギ」のような普通名詞は動物などの事物の特定の種を表す。種

という意味の限量詞とする。

$\exists!x[x \text{ はフランス国王である} \ \& \ x \text{ は禿である}]$



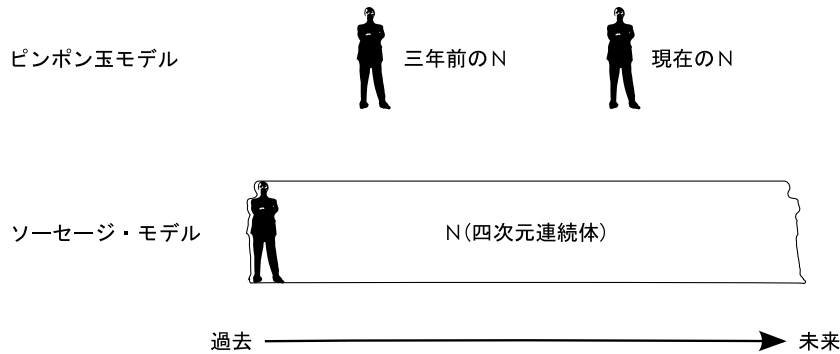


図 2.5 ピンポン玉モデルとソーセージ・モデル

を表す名詞句は、固有名と同じような用いられ方をする。

(29) カイウサギは 16 世紀に日本に輸入され、いまは日本中にいる。

この文は「カイウサギ」という名詞句で表される種が「16 世紀に日本に輸入された」とか「いまは日本中にいる」というような属性を持っていることを述べている。このような文の意味を取り扱う上で非常に有効な手段は、種を抽象的な個体概念として捉えるというものである。このような考え方のうち、文法学者や意味論者にとって特に有名なものは Carlson (1977) による議論である。この理論では、'Jake' のような固有名が特定の個体を表すのと同じように、'dogs' のような冠詞のない複数名詞 (bare plural) は特定の種 (kind) を表すのだとされる。種とは抽象的な個体概念であり、通常の個体が空間的には束縛されるが時間的には束縛されていない存在物であるのに対して、種は時間的にも空間的にも束縛されていない存在物であるとされる。

種を抽象的な個体として扱う考え方には多くの利点がある。しかしこの節は個体という概念について述べるための節であるので、これ以上は述べてない。Carlson (1977) の考え方については、2.4.2 節で詳しく述べる。

## 2.4 種

### 2.4.1 範疇としての種

「ラッセル」のような固有名が特定の個体を表すのに対して、「哲学者」のような普通名詞は特定の個体を表すのではなく、事物の種 (kind) を表す。種という概念をどのように捉えるかについてはいろいろな考え方があるが、その一つは種をある一定の事物が属する範疇として捉えるというものである。「哲学者」という名詞句は、哲学者であるような全ての個体の集合を表すと考えるのである。

このような考え方は、特に種を表す名詞句が述語として用いられているような文の意味を記述する際には都合がいい。次の文は、「ラッセル」という固有名が表す個体が「哲学者」という名詞が表す範疇に属することを表しているのだと考えることができる。

(30) ラッセルは哲学者である。

種を表す名詞句を個体の集合として扱う考え方は、論理的な意味論ではごく標準的に用いられている考え方である。「哲学者」のような名詞句は *philosopher'* のような述語と

して翻訳される（' は自然言語の単語と論理形式上の単語を区別するための記号である）。ラッセルという個体を  $a$  と記述することになると、(30) の文の意味は次のように記述される。これは  $a$  が哲学者であるものの集合に属するというを意味する。同じことだが、 $a$  が哲学者であるという属性を持つということなのだと理解することもできる。

(31) *philosopher'(a)*

このような範疇的概念が我々の心の中にどのように収められているのかという問題について考えてみることにしよう。心理主義的な立場から見ると、我々の認知能力には限界があるので、全ての哲学者のリストを頭の中に入れておくことはできない。従って我々の頭の中にあるのは、せいぜいどのような対象が哲学者という種に属するのかを判断するために役立つような条件とか、あるいはいくつかの具体的な事例といったものに過ぎないと考えられる。この条件についても、いろいろな考え方があろう。ごく単純な考え方としては、その範疇に属する要素が満たすべき条件の束といったものが考えられる。この考え方では、例えば英語の 'bachelor'(独身男) という語で表される範疇は、独身であるとか、男であるといった条件によって定義される。

しかし非常に多くの場合において、ある範疇にどのような個体が属するかはあまりはっきりと決まっていない。よく知られた古典的事例として Wittgenstein (1953) の「ゲーム」の例がある。ゲームという範疇に属する活動には様々なものがあるが、それらの全てが共有するような条件は存在しない。認知言語学的な意味論の研究分野では、このような事例に関して非常に豊かな研究の蓄積がある。

ある事物がある範疇に属するか否かの判断がどのように行われているにせよ、種を範疇的概念と捉える考え方は役に立つ考え方である。ひとまずは、「ラッセルは哲学者だ」という文はラッセルが哲学者という範疇に属するのだということを述べているのだという、ごく標準的な考え方に従っておくことにしよう。

## 2.4.2 対象としての種

種を表す名詞句は、述語として用いられる場合には主語が表す事物の属する範疇を表すが、一方で種を表す名詞句は様々な叙述の主語としても用いられる。種を表す名詞句が主語として用いられる場合、種の全体を表す場合と、種に属するいくつかの個体を表す場合がある。

- (32) a. ウサギは哺乳動物である。  
b. ウサギがレタスを食べている。

論理的な意味論で標準的に用いられる方法では、これらは「全ての」とか「いくつかの」という意味の限量詞を用いて記述される。 $\forall$  は全称限量詞 (universal quantifier) といい、 $\forall x[\dots x \dots]$  は全ての  $x$  について  $[\dots x \dots]$  を意味する。 $\exists$  は存在限量詞 (existential quantifier) といい、 $\exists x[\dots x \dots]$  は少なくとも一つの  $x$  について  $[\dots x \dots]$  を意味する。

- (33) a.  $\forall x[\text{rabbit}'(x) \rightarrow \text{mammal}'(x)]$   
全ての  $x$  について、 $x$  がウサギならば、 $x$  は哺乳動物である。  
b.  $\exists x[\text{rabbit}'(x) \ \& \ \text{eat}'(x, \text{lettuce})]$   
少なくとも一つの  $x$  について、 $x$  はウサギであり、かつレタスを食べる (食べ

ている)。

これに対して、Carlson (1977) は種を抽象的な個体概念として扱うという興味深い議論を展開している。Carlson (1977) の研究は、‘dogs’ のような冠詞を伴わない複数形名詞 (裸複数名詞; bare plural) の意味論上の取り扱いについて論じたものである。裸複数名詞には、少なくとも総称的用法 (generic use) と存在的用法 (existential use) がある。総称的用法は多くの場合、(34a) のように全称限量的であるが、(34b) のように「ほとんど」の意味になることも、(34c) のように「全て」とか「ほとんど」のような限量化が適切でない場合もある (ウマであるような全ての  $x$  が、それぞれ広く分布していたり絶滅したりするわけではない)。

- (34) a. Horses are  $\left\{ \begin{array}{l} \text{mammals} \\ \text{creatures} \\ \text{material objects} \end{array} \right\}$ .
- b. Horses are  $\left\{ \begin{array}{l} \text{smart} \\ \text{larger than mules} \\ \text{good pets} \end{array} \right\}$ .
- c. Horses are  $\left\{ \begin{array}{l} \text{widespread} \\ \text{extinct} \\ \text{indigenous to eastern Chile} \end{array} \right\}$ .

Carlson (1977)

存在的用法は ‘a horse’ のような不定冠詞 ‘a’ を伴う名詞句の複数形相当のように見えるので不定複数名詞 (indefinite plural) と呼ばれる。これは「いくつかの」という意味の存在限量詞で記述するのが適切であるように見える。

- (35) a. **Doctors** tried to save the dying boy.  
 b. Knute threw **rotten peaches** at the library.  
 c. **Mice** will come out of that wall if you pound on it.

Carlson (1977)

しかし裸複数名詞が「すべての～」を表したり「いくつかの～」を表したりするのだとか、それらを全称限量詞や存在限量詞で記述する考え方には、いくつもの問題がある。第一に、裸複数名詞の存在的用法は、‘a horse’ のような不定名詞句の複数形相当ではない。不定名詞句と裸複数名詞の存在的用法は、様々な文脈において非常に異なった振る舞いをする。例えば、不定名詞句が特定の解釈と不特定の解釈を持ち得るような文脈において、裸複数名詞は不特定の解釈しか持たない。次の文において、不定名詞句 ‘a young psychiatrist’ はある特定の精神科医という読みと、不特定の精神科医という読みを持つ。一方、‘young psychiatrists’ のような裸複数名詞は不特定の解釈しか持たない<sup>\*5</sup>。

- (36) Minnie wishes to talk with **a young psychiatrist**.
- a. ミニーは特定の一人の精神科医と話したいと思っている。  
 b. ミニーは誰でもいいから一人の精神科医と話したいと思っている。

<sup>\*5</sup> 特定の読みは具体的な固有名と置き換えても意味が変わらないことから透明な読み (transparent reading) と呼ばれ、不特定の読みは不透明な読み (opaque reading) と呼ばれる。

(37) Minnie wishes to talk with **young psychiatrists**.

- a. \* ミニーは特定の何人かの精神科医と話したいと思っている。
- b. ミニーは誰でもいいから何人かの精神科医と話したいと思っている。

第二に、裸複数名詞はいつでも自由に総称的解釈と存在的解釈を受けるわけではない。裸複数名詞が総称的に解釈されるか存在的に解釈されるかは、共起する述語の意味に依存する。(38)において、裸複数名詞は総称的な解釈しか受けませんが、(39)においては存在的な解釈しか受けない。

(38) a. **Smokers** are rude.

b. **Dogs** bark.

c. **Elephants** are easily trained.

d. Mark really loves **puppies**.

e. Kris hated **small ugly creatures**.

f. The man over there believes **Texan** to be friendly.

(39) a. Sir Snooter slew **dragons** for the Baron. (as an 'Event')

b. **Plumbers** stormed into the convention demanding longer lunch breaks.

c. Alice personally knows **actresses**.

Carlson (1977)

第三に、存在的用法の裸複数名詞を先行詞とする照応形式が総称的に用いられたり (=40a)、総称的用法の裸複数名詞を先行詞とする照応形式が存在的に用いられたり (=40b) する。このような照応形式の用いられ方は、多義性を持つ語に一般的に観察されるものではない。'crow' という語はカラスという鳥を表す用法と雄鶏の鳴き声を表す用法があるが、二つの用法の間に先行詞と照応形式の関係は成立しない (=41)。

(40) a. Mick traps **lemmings** even though he knows full well that **they** are protected by law.

b. **Lemmings** are protected by law, but Mick goes ahead and traps **them** anyway.

(41) \* My rooster lets go with **a crow** when he sees **it** near the house.

Carlson (1977)

様々な問題を解決するために、Carlson (1977) は裸複数名詞の総称的用法、存在的用法の区別は、実際には共起する述語の意味の問題であって、裸複数名詞自体は曖昧性を持たないのだという考え方を提案する。この考え方では、'Jake' のような固有名が特定の個体 *j* を表すのと同じように、'dogs' のような裸複数名詞は特定の種 *d* を表す。

裸複数名詞の総称的用法と存在的用法の区別は、実際には共起する述語の意味の違いによって生み出される。裸複数名詞は、対象の恒常的属性 (property) を表すような述語とともに用いられる場合には総称的な意味になり、一時的状態 (state) を表すような述語とともに用いられる場合には存在的な意味になる。

- (42) 恒常的属性
- a. Soldiers are brave.
  - b. Dentists were tall.
  - c. Frogs are clever.
- (43) 一時的状態
- a. Soldiers were available.
  - b. Dentists were drunk.
  - c. Frogs are awake.

Carlson (1977)

Carlson (1977) は、恒常的属性を表す述語と一時的状態を表す述語は、異なる種類の事物の属性を表しているのだと考える。この考え方では、恒常的属性とは個体  $j$  や種  $d$  の属性であるが、一時的状態とはそれらの時間断片 (stage) の属性であると見なされる。個体 (individual) とは空間的に束縛されるが時間的には束縛されていない存在物であり、種 (kind) とは空間的にも時間的にも束縛されていない存在物であるとされる。‘be intelligent’ のような述語は、時間的 (あるいは時間的、空間的) に束縛されていない個体  $j$  や種  $d$  の属性を叙述する。

- (44) a.  $\llbracket \text{Jake is intelligent} \rrbracket = \text{intelligent}'(j)$   
 b.  $\llbracket \text{Dogs are intelligent} \rrbracket = \text{intelligent}'(d)$

一方、時間断片とは、個体  $j$  や種  $d$  の空間的、時間的に束縛された断片 (portion)、あるいは現れ (appearance) のことであるとされる。‘be sick’ のような述語は、時間的、空間的に束縛された個体  $j$  や種  $d$  の時間断片の属性を叙述する。  $y$  が  $x$  の時間断片であることを  $R(y, x)$  と書くことにすると、‘be sick’ という述語を含む文の意味は次のように記述される。

- (45) a.  $\llbracket \text{Jake is sick} \rrbracket = \exists y[R(y, j) \ \& \ \text{sick}'(y)]$   
 $j$  の時間断片であり、かつ病気であるような  $y$  が存在する。  
 b.  $\llbracket \text{Dogs are sick} \rrbracket = \exists y[R(y, d) \ \& \ \text{sick}'(y)]$   
 $d$  の時間断片であり、かつ病気であるような  $y$  が存在する。

‘be intelligent’ のように個体や種の属性を述べる述語を個体レベル述語 (individual level predicate) といい、‘be sick’ のように個体や種の時間断片の属性を述べる述語を場面レベル述語 (stage level predicate) という。‘be sick’ が時間断片の属性を表しているというのは、この述語の主語である ‘Jake’ や ‘dogs’ が  $j$  や  $d$  の時間断片を表しているのだという意味ではないということに注意しなければならない。このような述語と共起する場合にも、‘Jake’ や ‘dogs’ は個体  $j$  や種  $d$  を表しており、‘be sick’ という述語が ‘ $x$  の時間断片が病気だ’ という属性を表しているのである<sup>\*6</sup>。従って裸複数名詞の総称的用法と存

<sup>\*6</sup> Carlson (1977) はモンタギュー意味論の記法を用いて、‘Jake’、‘dogs’、‘be intelligent’、‘be sick’ という述語の意味を次のように定義している。

$$\begin{array}{ll} \llbracket \text{Jake} \rrbracket \stackrel{\text{def}}{=} \lambda P P(j) & \llbracket \text{be intelligent} \rrbracket \stackrel{\text{def}}{=} I' \\ \llbracket \text{dogs} \rrbracket \stackrel{\text{def}}{=} \lambda P P(d) & \llbracket \text{be sick} \rrbracket \stackrel{\text{def}}{=} \lambda x \exists y [R(y, x) \ \& \ \text{sick}'(y)] \end{array}$$

在的用法の区別は、実際には裸複数名詞が「全ての」とか「いくつかの」というような曖昧性を持っているわけではなく、述語の意味の問題なのだとされる。

Carlson (1977) の考え方には多くの利点がある<sup>\*7</sup>。第一に、‘a young psychiatrist’ のような不定名詞句が特定の読みと不特定の読みを持つものに対して、‘young psychiatrists’ のような裸複数名詞が不特定の読みしか持たない理由を説明することができる。不定名詞句の特定の読み、不特定の読みの違いは、存在限量詞の作用域の違いとして記述される。特定の読みでは、存在限量詞は述語 ‘wish’ の作用域よりも外側にあり、不特定の読みでは存在限量詞は ‘wish’ の作用域の内側にある。

(46) a.  $\exists x[\text{young psych.}(x) \ \& \ M. \ \text{wishes } M. \ \text{talk with } x]$

若い精神科医であり、かつミニーが話したいと思っているような  $x$  が存在する。

b.  $M. \ \text{wishes } \exists x[\text{young psych.}(x) \ \& \ M. \ \text{talk with } x]$

ミニーは、若い精神科医であり、かつミニーの話し相手となるような  $x$  が存在することを望んでいる。

裸複数名詞は不特定の読みしか持たないので、常に ‘wish’ よりも狭い作用域を持つのだということになる。Carlson (1977) は他にもいくつかの現象を提示しているが、一般に裸複数名詞の在的用法に伴う存在限量詞は、他の限量詞や否定辞などよりも狭い作用域を持つという特徴がある。Carlson (1977) の理論を用いると、これは存在限量詞が述語の意味に含まれるからだと説明することができる。

第二に、裸複数名詞が総称的に解釈されるか在的に解釈されるかが、共起する述語の意味に依存する理由を説明することができる。総称的用法と在的用法の区別は、裸複数名詞の解釈の問題なのではなく、実際には述語の意味によって生み出されている。

第三に、総称的用法の裸複数名詞を先行詞とする照応形式が在的に解釈されたり、在的用法の裸複数名詞を先行詞とする照応形式が総称的に解釈されたりすることが可能な理由を説明することができる。それらの名詞句はいずれも、実際には時間的、空間的に束縛されていない種という存在物を表しているのであり、別々の何かを表しているわけではない。

### 2.4.3 対象と属性

種を表す名詞句は、述語として用いられる場合には事物の属する範疇を表し、主語として用いられる場合には抽象的な個体概念を表すのだと述べた。二つの考え方をどのように統合すればよいのかについて考えることにしよう。

種を表す名詞句は、質量的概念を表す名詞句と同じような振る舞いをする。質量 (mass) とは「水」とか「鉄」のような事物のことで、質量を表す名詞のことを質量名詞と言う。英語では ‘water’ とか ‘iron’ のような不可算名詞 (uncountable noun) で表される。非常に多くの種類の文において、種を表す名詞と質量を表す名詞は同じような用いられ方をする。種を表す名詞句と質量を表す名詞句はいずれも「どこにでもいる/ある」というような空間的遍在を表す述語や、「絶滅した/枯渇した」のような種や質量の全体を表す述語など、

<sup>\*7</sup> Carlson (1977) の理論の利点と問題点については、Krifka, Pelletier, Carlson, ter Meulen, Link, and Chierchia (1995, §1.4.6) も参照されたい。

通常の個体に対しては与えられないような述語の主語になる。「北に行くほど大きくなる/冷たくなる」のような述語は個体に対して用いられる場合もあるが、以下の事例では南のオオカミよりも北のオオカミの方が大きいとか、南の水よりも北の水の方が冷たいということを表す。一方では、これらの名詞句はいずれも「寝ている」や「流れている」のような、ある個別のオオカミや水の状態を述べるような述語を取ることもできる。

## (47) 種

- a. オオカミはどこにでもいる。
- b. オオカミは絶滅した。
- c. オオカミは北に行くほど大きくなる。
- d. オオカミが寝ている。

## (48) 質量

- a. 水はどこにでもある。
- b. 水は枯渇した。
- c. 水は北に行くほど冷たくなる。
- d. 水が流れている。

種を表す名詞と質量を表す名詞の類似性は、Carlson (1977) においても断片的に言及されている。到達動詞 (achievement verb) と呼ばれる種類の動詞 (例えば 'discover') は、通常は 'for two hours' (2 時間に渡って) のような副詞句とともに用いることができないが、主語または直接目的語が裸複数名詞か質量名詞である場合にはそれが可能となる。Carlson (1977) は質量名詞の具体的な事例を示していないので、裸複数名詞の例だけ以下に引用する。(49a) の不定名詞句を用いた文は 2 時間に渡ってある同一のウサギを何度も発見したという不自然な状況を描写しているが、(49b) の裸複数名詞を用いた文は 2 時間に渡って次々とウサギを発見した (同一のウサギである必要はない) という意味であり自然であると言う ((49a) に不自然さを示す判定記号が付いていないのは原文のままである)。

- (49) a. Max discovered **a rabbit** in his yard for two hours.
- b. Max discovered **rabbits** in his yard for two hours.

Carlson (1977) が言及している別の事例は代名詞の解釈に関するものである。'a unicorn' のような不定名詞句を先行詞とする代名詞 'it' は、先行詞と同一の個体に言及するために用いられる。次の例はケリーとミリーがある同一の一角獣を探しているということを述べており、それぞれ別の一角獣を探しているという意味にはならない ('it' ではなく 'one' であれば別々の読みが可能である)。

- (50) Kelly is seeking **a unicorn**, and Millie is seeking **it**, too.

一方、'unicorns' のような裸複数名詞や 'furniture' のような質量名詞の場合は、二人がそれぞれ別々の一角獣や家具を探しているという意味になる。

- (51) Queenie is seeking **unicorns**, and Phil is seeking **them**, too.

- (52) Cedrick is seeking **furniture**, and Hiram is seeking **it**, too.

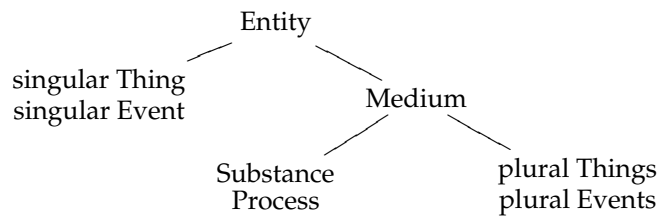


図 2.6 Jackendoff(1992, p.41)

裸複数名詞によって表されるような可算的事物と、質量名詞によって表されるような不可算的事物との類似性に言及する他の研究についても見てみることにしよう。Jackendoff (1992) は、‘an apple’ のような不定名詞句で表される事物 (singular Thing) に対して、‘apples’ のような複数名詞で表される事物 (plural Things) と ‘water’ のような質量名詞で表される事物 (Substance) を Medium という同一のカテゴリの下位分類とするオントロジーを提案している (図 2.6)。

この分類は本来、事物 (Thing や Substance) と出来事 (Event や Process) との平行性を示すために設けられたものである。singular Event を表す文には ‘for hours’ のような副詞句を用いることができないが、process や plural Event(反復的出来事) を表す文には ‘for hours’ のような副詞句を用いることができる。これは名詞というよりは動詞の意味の研究 (アスペクト論) に関わる問題であるので、ここではこれ以上は触れない。ここで重要なのは、plural Things と Substance が Medium という同一のカテゴリにまとめられているということである。

種とは、質的事物の一種なのだと考えることにしよう。Jackendoff (1992) は、可算的事物と質的事物を区別するための重要な基準の一つは、‘an apple’ のような名詞で表される事物の一部を取って ‘an apple’ ということはできないが、‘water’ のような名詞で表される事物はその一部についても同じように ‘water’ ということができるという点であるとしている。質量名詞が持つこのような特徴 (水のどの部分の累積も水であるという特徴) を、Quine (1960) は累積的指示 (referring cumulatively) と呼ぶ。

種を表す名詞句は述語として用いられて事物が属する範疇を表す場合もあれば、主語として用いられて他の範疇に属したり他の属性を持つような対象を表す場合もある。範疇としての種と対象としての種をどのように関係付ければいだろうか。筆者が妥当だと思う考え方は、範疇としての種と対象としての種を量化によって結び付けるというものである。質的事物を導入する限量詞  $G$  を仮定することにしよう。「イヌ」という名詞は、述語として用いられる場合には範疇を表す。形式的には、イヌという範疇に属する (あるいはイヌであるという属性を持つ) という意味の述語  $dog'$  に翻訳される。一方、「イヌ」という名詞が主語として用いられる場合には、どの部分の累積もイヌであるという属性 ( $dog'$ ) を持つような質的事物  $x$  が限量詞  $G$  によって導入され、この  $x$  が主語として機能する。

- (53) a. [[ジェイクはイヌだ]] =  $dog'(j)$   
 b. [[イヌは賢い]] =  $Gx[dog'(x) \ \& \ intelligent'(d)]$

この限量詞を用いると、Carlson (1977) の個体レベル述語、場面レベル述語の例は次のように書き直すことができる。



- (54) a.  $[[\text{Dogs are intelligent}]] = Gx[\text{dog}'(x) \ \& \ \text{intelligent}'(d)]$   
 b.  $[[\text{Dogs are sick}]] = Gx\exists y[\text{dog}'(x) \ \& \ R(y, x) \ \& \ \text{sick}'(y)]$

このように量化によって属性と対象を結び付けるやり方は、基本的には伝統的な論理学的意味論で用いられてきた方法に則っている。ただし全称限量詞  $\forall$  や存在限量詞  $\exists$  が範疇に属する全ての個体やいくつかの個体といった個々の要素を導入するのに対して、 $G$  が導入するのは Carlson (1977) が種 (kind) と呼んだ抽象的存在物に相当するものである。これは種に属する個々の個体ではなく、種の全体であるような質量的存在物として理解することができる。

## 2.5 役割

### 2.5.1 役割と値

■役割関数 種と似ているが、異なる性質を持つ概念に役割 (role) というものがある。役割を表す代表的な表現は定記述句 (definite description) と呼ばれるものである。定記述句とは「現在のフランス国王」とか「あなたのアパート」のような表現であり、英語では ‘the present king of France’ のように定冠詞 ‘the’ を伴ったり、‘your apartment’ のように所有代名詞を伴うような名詞句である。Fauconnier (1985) は、定記述句は直接的に個体を指示しているというよりも、役割を表していると考えた方がよい場合があることを指摘している。

- (55) a. **The president** changes every seven years.  
 b. **Your car** is always different.  
 c. **Your apartment** keeps getting bigger and bigger.  
 d. She likes to tie **her hat** with a string.  
 e. **The leaves of that tree** are greener every year.  
 f. **The food here** is worse and worse.

これらの例で、定記述句はいずれも特定の事物に言及する読みを持つ。大統領である個体が7年毎に変わる (傲慢になるとか禿になるなど) とか、同じ車がいつもどこか違っている (色が変わるとかタイヤが変わるなど) とか、同じアパートが大きくなったり小さくなったりするというような読みである。しかしより自然な読みは、定記述句が変項として用いられている読みである。この場合 (55) の例は、大統領が7年毎に改選されるとか、あなたがいつも別の車で現れるとか、より大きなアパートに引っ越し続けるというような意味で解釈される。

Fauconnier (1985) は、これらの読みの違いは定記述句が役割を表しているか、役割の値である要素を表しているかの違いであると見なす。‘the president’ が役割を表している場合には (55a) の “\_\_\_\_ changes every seven years” は7年毎に改選されるという意味になり、値である特定の個体を表している場合には述語は7年毎に変貌するという意味になる。役割とは、時間、場所、状況、文脈などの文脈パラメータに応じて値を取る関数であるとされる。“\_\_\_\_ changes every seven years” とか “\_\_\_\_ keeps getting bigger” のような述語で表される属性を  $P$ 、役割関数を  $r$ 、時間や場所などの文脈パラメータを  $m$  とすると、二つの読みの違いは次のように記述される。

- (56) a.  $P(r)$  (役割の属性)  
 b.  $P(r(m))$  (役割の値の属性)

(56a) は役割  $r$  が属性  $P$  を持つということを表し、(56b) は役割  $r$  の文脈  $m$  における値が属性  $P$  を持つということを表す。

■**同定原則** 定記述句が役割を表したりその値を表したりするという曖昧性は、語の多様な解釈の可能性を説明するより一般的な原則の一部として説明される。この原則は同定原則 (Identification Principle) と呼ばれ、簡単に言うと  $a$  と  $b$  の間に何らかの語用論的關係  $F$  があるならば、 $a$  の記述  $d_a$  を用いて  $b$  を同定することができるというものである。

- (57) **Identification(ID) Principle** If two objects (in the most general sense),  $a$  and  $b$ , are linked by a pragmatic function  $F(b = F(a))$ , a description of  $a$ ,  $d_a$ , may be used to identify its counterpart  $b$ .

Fauconnier (1985, p.3)

このとき、 $a$  をトリガー、 $b$  をターゲット、 $F$  をコネクターと言う (図 2.7)。

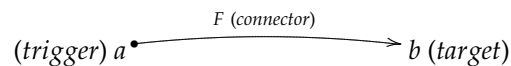


図 2.7 Fauconnier(1985, p.5)

代表的な事例は換喩 (metonymy) と呼ばれるもので、人物の名前を用いてその著書を同定したり、料理の名前を用いてそれを注文した人を同定したりすることができる。

- (58) a. **Plato is on the top shelf.**  
 b. **The mushroom omelet left without paying the bill.**

定記述句も同じ原則に従って、第一次的には役割を表すが、二次的にはその値を表すのだとされる。従って役割  $r$  の文脈  $m$  における値  $r(m)$  は、語用論的関数  $F$  を用いて  $F(r, m)$  と記述される。

■**メンタル・スペース** メンタル・スペースは、Fauconnier (1985) の理論を構成する主要な理論的装置のひとつである。メンタル・スペースとは、現実、絵の中、誰かの心の中というような、言語によって表される対象が属する領域として機能する心的構成物である。メンタル・スペースは言語構造とは独立の構成物であり、言語表現が提供する指針に従って任意の談話で設定される。メンタル・スペースは要素 ( $a, b, c, \dots$ ) と要素間の関係 ( $R_1ab, R_2a, R_3cbf, \dots$ ) を持つ集合であり、談話が進行するにつれて新しい要素が付け加えられ、新しい関係が設定される。

スペースは役割関数の領域 (文脈パラメータ) として機能する。役割は、スペースに応じて異なる値を取り得る。次の例では4つのスペース (現実、信念、願望、映画の中) が設定され、'the president' はそれぞれ異なった値を取っている。

- (59) **The president is Reagan. Irving believes the president is Kissinger. He would like Brown to be the president. In the movie, Goofy is the president.**

Fauconnier (1985, p.42)

役割それ自体も、取る値が異なるばかりではなく定義的属性も異なることがあるようなスペース要素と見なされる。例えば、現実にはフランスの国家元首は大統領であるがジョージはフランスの国家元首は国王であると思っているとか、現実には大統領の任期は7年<sup>\*8</sup>であるがジョージは5年であると信じているというようなことがあり得る。この場合、現実スペース  $R$  の要素である役割  $r$  は「7年ごとに代わる」という属性を持つが、ジョージの信念スペース  $M$  の要素である役割  $r'$  は「5年ごとに代わる」という属性を持つことになる。

■コピュラ文 Fauconnier (1985) は、be 動詞 (繫辞; copula) は関係する語用論的関数の種類が分かっている場合には、トリガーとターゲットを結び付けるのに使うことができるとしている。

- (60) a. Plato is the red book; Homer is the black book.  
 b. The gastric ulcer is Peter Smith.  
 c. We are the first house on the right.  
 d. I'm the ham sandwich; the quiche is my friend.  
 e. Getty is oil, Carnegie is steel, Vanderbilt is railroads.  
 f. In that picture, Lisa is the girl with blue eyes.  
 g. In that movie, Cleopatra is Liz Taylor.

Fauconnier (1985, §5.1.1)

(60a-e) は、同じスペースに属する二つの要素の換喩的連関を述べており、(60f) と (60g) は異なるスペースに属する対応する二つの要素を結び付けている。役割と値の関係も be 動詞で結合される語用論的関係の一つであり、あるスペースに属する役割と値を結び付ける。

- (61) a. Max is my brother.  
 b. Mary is the queen of England.  
 c. The winner is John Doe.

(ibid.)

語用論的関数  $F$  は 'The mushroom omelet' が実際にはそれを注文した客に言及するために用いられるというような語の換喩的解釈を成立させるためにも作用するが、(60) や (61) のような文では二つの名詞句によって表される要素を互いに結び付ける働きをする。

■日本語の名詞述語文研究への応用 役割という概念は、日本語の名詞述語文の分析にも利用されている。坂原 (1990c) は、日本語の名詞述語文を記述文と同定文の二種類に分類した。記述文「A は B だ」は対象 A が属性 B を持つことを述べる文であり、同定文「A は B だ」は役割 A に値 B を割り当てる文であるとされる。

- (62) 記述文 紫式部は平安時代の作家だ。  
 紫式部は源氏物語の作者だ。  
 (63) 同定文 源氏物語の作者は紫式部だ。

<sup>\*8</sup> Fauconnier (1985) 当時は、フランス大統領の任期は7年だった。

坂原 (1990c) の記述文と同定文は、西山 (1985) の措定文と倒置指定文におおよそ相当する。これに対して、西山 (1992) は (63) のような文を分析するためには役割という概念は有効ではなく、変項名詞句という概念を用いるべきであると主張している。以後、この種類の文の意味 (特に主語名詞句の意味) をどのように取り扱うかについて、指示-叙述理論とメンタル・スペース理論の論者間で活発な議論が展開されている。この議論には少なくとも次のものが含まれる。

- 西山 (1992) は Fauconnier (1985) および坂原 (1990c) の議論に対して批判的議論を展開している。
- 西山 (1993) は Fauconnier (1985) における be 動詞の分析 (換喩的連関、間スペース対応、役割-値関係を述べる文を含む) について批判的議論を展開している。
- 井元 (1995) は西山 (1992) に対して、役割・値概念を用いた名詞句の意味の分析を擁護している。
- 『認知科学』誌における一連の紙上討論。この討論は、西山 (1994a) と、それに対する伝 (1994), 三藤 (1994) のコメント、それに対する西山 (1994b) の応答を含む。また、これら一連の議論に対して三田 (1995, 1997) のコメントがある。
- 西山 (2003b) は坂原 (1990c) の再議論、および井元 (1995) の議論に対する反論を展開している。
- 井元 (2004) は西山 (2003b) の議論に対して反論している。
- 東郷 (2005) は坂原 (1990c) と西山 (2003b) の双方について批判的議論を展開している。東郷 (2005) の立場はメンタル・スペース理論に近い談話モデル理論という独自の立場に則っている。
- 西山 (2005) は、東郷 (2005) および井元 (2004, 2006) に対して批判的議論を展開している。

議論は極めて緻密かつ多岐に渡るものなので、ここでそれらの議論のひとつひとつを追跡するということはないが、論点の一つは役割という概念をどのように理解すべきかというものである。この概念を意味論上どのように取り扱うかについては研究者によって考え方の違いがあり、論争の原因の一つになっている。

## 2.5.2 役割と種

■**役割と種の類似性** 役割は、ある部分では種と似ているが、ある部分では異なる特徴を持つ。役割が種と似ている点は、その役割の値となるような個々の対象の属性としては理解できないような叙述の主語になり得るという点である。Fauconnier (1985) は (55) の定記述句が役割として解釈される場合について、(55d) 以外<sup>9</sup>は全称限量化を受けた解釈を持たないとしている。

- (55) a. **The president** changes every seven years.  
 b. **Your car** is always different.  
 c. **Your apartment** keeps getting bigger and bigger.  
 d. She likes to tie **her hat** with a string.

<sup>9</sup> (55d) は語用論的な理由で、たまたま全般的な読みと同じになる。

- e. **The leaves of that tree** are greener every year.  
 f. **The food here** is worse and worse.
- (64) a. **The president** changes every seven years.  
        $\neq \forall x(x = \text{president})(x \text{ changes every seven years})$   
 b. **Your car** is always different.  
        $\neq \forall x(x = \text{car, yours})(x \text{ is always different})$   
 c. **Your apartment** keeps getting bigger and bigger.  
        $\neq \forall x(x = \text{apartment, yours})(x \text{ gets bigger})$

Fauconnier (1985)

(64a) は大統領が7年ごとに交替するという意味であって、誰であれ大統領であるものは7年ごとに変貌するという意味ではない(そのような読みも可能であるが)。同様に(64b)はいつも違う車で現れるという意味であって、どの車もいつも違っているという意味ではない。(64c)はより大きなアパートに引っ越し続けるという意味であって、どのアパートもどんどん大きくなるという意味ではない。別の例は次のようなものである。

- (65) Every year, the president gives civil servants \$2 billion.  
        $\neq \forall y \forall x(\text{president}(x, y) \rightarrow x \text{ gives civil servants } \$ \text{ billion in } y)$

この文の自然な解釈は、例えば年度の途中でニクソンが辞任してフォードが後を引き継いだ場合、もしニクソンが既に10億ドル払っているならば、フォードはもう10億ドル払えばよいというものである。ニクソンとフォードがそれぞれ20億ドル払うという意味ではない。

Fauconnier (1985) が役割という概念について指摘した非全称的な特徴は、Carlson (1977) が種という概念について指摘した特徴と似ているように見える。Carlson (1977) が裸複数名詞の総称的用法の一部として、(66)のような事例を提示している。これらの事例は、ウマであるような全ての  $x$  がそれぞれあちこちにいるとか、絶滅したとか、チリ原産だということを言っているわけではない。ウマという種の全体がそのような属性を持つのだということを述べている。

- (66) **Horses** are  $\left\{ \begin{array}{l} \text{widespread} \\ \text{extinct} \\ \text{indigenous to eastern Chile} \end{array} \right\}$ . Carlson (1977, p.414)

また次の(67b)の例は、Fauconnier (1985) の(64c)の例と非常によく似ている。

- (67) a. A wolf gets bigger as you go north from here.  
 b. Wolves get bigger as you go north from here.

Carlson (1977, p.423)

Carlson (1977) は、(67a)は車の後部座席に乗せているオオカミが北に行くほど大きくなるというような奇妙な読みしかできないが、(67b)は北にいるオオカミの方が南にいるオオカミよりも大きいというごく自然な読みが可能である(また、奇妙な読みも可能である)としている。

これらの事例は、ある種の述語の意味を理解するためには、Carlson (1977) が種を抽象的個体概念として捉えたのと同じように、役割という概念も抽象的個体概念の一種と捉え

るのが適当であるということを示唆している。「7年ごとに交替する」とか「いつも違う(別の車である)」とか「どんどん大きくなる」というような述語は、大統領や車やアパートの値であるような個体の属性を述べているのではなく、大統領や車やアパートという役割の属性を述べているのである。

■役割と種の異質性 一方で、役割には種とは違うところもある。第一に、役割を表すような定記述句は役割を表したりその値を表したりというような曖昧性を持つが、種を表すような普通名詞には基本的にそのような曖昧性はない。Carlson (1977) は、裸複数名詞の総称的用法と存在的用法は実際には述語の意味の違いであり、裸複数名詞自体はどちらの場合にも種を表しているのだと論じた。次の例で‘dogs’はどちらの場合にも種  $d$  を表しているが、‘be intelligent’は  $d$  が賢いという属性を持つことを述べており(個体レベル述語)、『be sick’は  $d$  のある時点における時間断片が病気だという属性を持つことを述べている(場面レベル述語)。「dogs’ という名詞句自体が「全ての犬」を表したり「何匹かの犬」を表すというような曖昧性を持っているわけではないので、「何匹の犬が賢い」とか「全ての犬は病気だ」のような読みをすることはできない。

(68) Dogs are intelligent.  
= *intelligent'(d)*

(69) Dogs are sick.  
=  $\exists x[R(x, d) \ \& \ sick'(x)]$

一方、定記述句の役割の読みと値の読みは名詞句それ自体の解釈の曖昧性によって生み出される。次の文は、「フランス大統領」が役割  $r$  として解釈されるか値  $a$  として解釈されるかによって二通りの解釈を持つ。前者の解釈では誰であれフランス大統領であるものは賢いという意味になり、後者の解釈ではフランス大統領の値である特定の人物が(フランス大統領であるということとは関係なく)賢いという意味になる。

(70) フランス大統領は賢い。  
a. = *intelligent'(r)*  
b. = *intelligent'(a)*

同じように、「病気だ」のような述語の場合も役割の属性を表す場合と値の属性を表す場合がある。ただし「フランス国王が病気だ」のような文を考えると、役割の時間断片が病気だと言っているのか、その値である個人が病気だと言っているのか、直観的にはっきりしない。そこで次のように時制を発話時現在からずらした文を考えてみることにしよう。

(71) 来年、フランス大統領が日本を訪問する。

「日本を訪問する」は時間的に限定された出来事を述べる述語であり、場面レベル述語である。この文は少なくとも二通りの解釈を持つ。一つは、外交上の約束によって、誰であれ来年の時点でフランス大統領であるものが日本を訪問するのだというものであり、もう一つは現在フランス大統領である特定の人物が個人的に来年日本を訪問するのだ(来年の時点では既に大統領ではないかも知れない)というものである。前者の解釈では「フランス大統領」は役割を表しており、後者の解釈では現在における値を表している。

Fauconnier (1985) は次のような (71) と似た例について述べている。

(72) In 1929, the president was a baby. Fauconnier (1985)

この文は誰であれ 1929 年に大統領だったものは赤ん坊だった (大統領は赤ん坊の中から選ばれていた) という読みと、現在の大統領である *a* は 1929 年には赤ん坊だったという読みを持つ。前者は ‘the president’ が役割として解釈された場合であり、後者は ‘the president’ が現在における値として解釈された場合である。さらに Fauconnier (1985) は、この文には 1929 年にはある赤ん坊が大統領だったという読みもあると言う。これは、‘the president’ が 1929 年当時における値として解釈された場合に相当する。

第二に、役割を表す名詞句とは共起することができるが、種を表す名詞句とは共起できないような述語が存在する。その一つは、本研究が研究の対象としている名詞述語文の一部であるが、役割に対して値を割り当てるような述語である。「フランス大統領」のような役割を表す名詞句に対して、その値である個体を割り当てるような文を作ることができるが、「フランス人」のような種を表す名詞句に対して、その外延にあたる個体を割り当てるような文を作ること通常できない。

(73) フランス大統領はジョンだ。

(74) \*フランス人はジョンだ。

また、値が入れ替わるという意味での「代わる」という述語も、役割を表す名詞句と共に用いることはできるが、種を表す名詞句と共に用いることはできない。

(75) フランス大統領が代わった。

(76) \*フランス人が代わった。

まとめると、役割を表すような名詞句はその役割の値である個体に言及したり、役割の値が何であるかを述べる述語を取ったり、値が入れ替わることを述べる述語を取ったりすることができるが、種を表すような名詞句はその種に属する特定の個体に言及したり、種に属する個体を述べる述語を取ったり、種に属する個体が入れ替わることを述べる述語を取ったりすることはできない。

役割と種の間にはこのような違いを生み出す要因として、役割は通常特定少数の要素を値として持つが、種は不特定多数の要素を外延として持つという点が考えられる。役割と値の関係は、おおよそ内包と外延と呼ばれるものに相当する。同じように、種とそれに属する個体との関係も内包と外延の関係にある。役割の場合は外延が特定少数の要素であることが分かっているので、それがどれであるのかとか、ある要素から別の要素に入れ替わったとか言うことができる。これに対して種の外延は不特定多数であるので、それが具体的にどれであるのかとか、何かから何かに代わったのだということを言うことはできない。(75b) や (76b) が言えないのは、その帰結として説明することができる。

しかし外延が特定少数か不特定多数かというだけが、役割と種の違いの全てであるというわけではない。種が特定少数の要素しか外延として持たないような文脈を設定しても、「私の家では、犬はポチだ」のように言うことはできない。従って役割と種の間には、単に外延が特定少数か不特定多数かというだけではなく、何かもっと本質的な違いがあるかも知れない。この問題は未解決のままにしておくが、当面は種と役割を似た性質もあるが異なる性質もある概念として分けて考えておくことにする。

### 2.5.3 役割関数

■関数記述の冗長性 Fauconnier (1985) は、役割とは文脈パラメータから値への関数であるとしている。役割  $r$  の文脈  $m$  における値は  $r(m)$  と表される。本研究では役割という概念は採用するが、役割関数という概念は採用しない。というのも、役割は適切な文脈パラメータが与えられると直ちに値になるというわけではない。ある一定の文脈パラメータが与えられた状況でも、役割と値は互いに区別される別々の対象物である。例えば「7年ごとに改選される」という属性は現実空間  $R$  の要素である役割  $r$  (=フランス大統領) の属性であって、たまたまフランス大統領であるような個体  $a$  の属性ではない。もしジョージがフランス大統領は5年ごとに改選されるのだと思っていたら、ジョージの信念空間  $M$  の要素  $r'$  ( $r$  の対応物) は、 $r$  とは別に「5年ごとに改選される」という属性を持つのだということになる。勿論、信念空間  $M$  における  $r'$  の値  $b$  はそのような属性は持ち得ない。

$r$  や  $r'$  がそれ自体空間  $R$  や  $M$  の要素であるならば、 $r$  や  $r'$  がその空間内で取る値を  $r(R)$  とか  $r(M)$  と書くのはほとんど意味が無いように思われる。このような書き方は  $r$  が  $R$  や  $M$  でそれぞれ別々の値を取るような場合に意味を持つものであって、 $r$  自体が  $R$  の要素であり、従って  $R$  でしか値を取らないような場合にはほとんど意味を持たない。そこで本研究では  $r$  の空間  $R$  における値を  $r(R)$  などと書くのはやめて、役割とその値を結び付ける語用論的関数  $F$  を想定し、 $a = F(r)$  のように書きたいと思う。同じように、 $r'$  の空間  $M$  における値は  $b = F(r')$  と表す。これは Fauconnier (1985) が  $r(m)$  を語用論的関数  $F$  を用いて  $F(r, m)$  と書くこともできると述べたのとほぼ同じものである。ただし、文脈パラメータを表す引数  $m$  は必要ない。ここで用いる  $F$  は、空間  $m$  の内部で二つの要素  $r$  と  $a$  を結び付ける関数だからである。

■関数記述の外延性 役割を関数として記述する方法のもっとよくないと思う点は、関数という概念は数学的に定義された外延的な装置であるように見えるという点である。一般的に言って、ある関数  $F$  と  $G$  が定義域中の全ての  $x$  について  $F(x) = G(x)$  ならば、 $F$  と  $G$  は同じものである。また  $F$  が定義域中の全ての  $x$  について同じ値を取る場合には、 $F$  は実質的に定数と同じであるように思える。

しかし役割とはそのような性質を持った概念ではない。第一に、ある空間  $M$  の要素である二つの役割  $r_1$  と  $r_2$  は、たとえその空間内で常に同じ値を取ったとしても別々の要素として区別される。Fauconnier (1985) は、ダンスコンテストの優勝者は必然的にダンスが一番上手い人だと話し手が信じているという事例について言及している。この事例では、優勝者  $r$  とダンスが一番上手い人  $g$  は (話し手にとっての) 現実空間  $R$  の要素であるが、この空間内で常に同じ値を取るということになる。このような事例について、Fauconnier (1985) は  $r$  と  $g$  は等値であるという言い方をしているが、しかし二つの役割はあくまで別々の要素として区別されている。

筆者の考えでは、 $r$  と  $g$  が異なる要素として扱われるということは、 $r$  と  $g$  のそれぞれに対して別の属性を割り当てることができるということの意味する。次のよく知られた Donnellan (1966) の例を用いて考えてみることにしよう。



(77) スミス氏を殺した犯人は正気じゃない。

Smith's murderer is insane.

この文は、誰であれスミス氏を殺した犯人は正気じゃないという読みと、スミス氏を殺した犯人とされるジョーンズ氏は正気じゃないという読みを持つ。Donnellan (1966) の言い方では、前者の読みでは「スミス氏を殺した犯人」という定記述句は属性的用法 (attributive use) で用いられており、後者の読みでは指示的用法で用いられている (referential use)。Fauconnier (1985) の言い方では、前者は役割 (スミス氏を殺した犯人) の属性を述べており、後者は役割の値 (ジョーンズ氏) の属性を述べている。

話し手はスミス氏を殺した犯人は必然的にスミス氏の部屋の鍵を持っていた人物だと信じているとしよう。この場合、(話し手にとっての) 現実空間  $R$  にはスミス氏を殺した犯人  $r$  とスミス氏の部屋の鍵を持っていた人物  $g$  という二つの役割が含まれている。二つの役割はいずれもジョーンズ氏  $j$  を値としており、等値である。しかし (77) の属性的な読みは  $r$  の属性を述べているのであって  $g$  の属性を述べているのではない。話し手はその人物がスミス氏を殺した (あるいはひどいやり方でそうした) ということに対して正気じゃないと言っているのであり、スミス氏の部屋の鍵を持っていたということに対して言っているのではない。この違いは、(77) の属性的な読みでは定記述句は役割  $r$  に言及するために用いられており、述語は  $r$  の属性を述べているのだと考えることによって容易に説明することができる。

第二に、ある空間  $M$  の要素である役割  $r$  は、たとえその空間内で常に一定の値しか取らなかったとしても、その値  $a$  とは別の存在物として区別される。役割関数という定式化が直接の原因かどうかは分からないが、どのような状況においても値が変わらないような役割を表す定記述句は役割として解釈することはできず、常に値である要素を表すのだという考え方がしばしば見られる。

西山 (1993) は、坂原 (1990a) がそのような考え方をしているのだと見ている。西山 (1993) の考えでは、坂原 (1990a) はフランス語の 'mon mari'(私の夫) のような名詞句は役割を表すが、'mon fils'(私の息子) のような名詞句は役割を表さず値しか表さないのだと述べている。坂原 (1990a) の議論は、'mon mari' のような名詞句は 'un étudiant' のような値を表す名詞を述語に取ることができるが 'mon fils' のような名詞句はそのような不定冠詞 'un' が付いた名詞を述語として取ることができず、'mon mari' のような名詞は 'change souvent'(ちよくちよく変わる) のような述語を取って値の入れ替わりの意味で解釈することができるが、'mon fils' はそのような読みはできない (性格や外見が変わるとい読みならできる) というものである。

- (78) a. Mon mari est un étudiant.  
b. Mon fils est (\*un) étudiant.

- (79) a. Son mari change souvent.  
b. # Son fils change souvent.

実際のところ、西山 (1993) が言うように坂原 (1990a) が 'mon fils' のような名詞句は役割を表さないのだと考えているのかどうかはあまりはっきりしない。役割を表す用法のうち、特に値の入れ替わりに関わるような事例 (坂原 (1990a) の言い方では「値変化の役割解釈」) のことだけを言っているようにも見える。坂原 (1990a) がどのように考えてい

るにせよ、一般的に言えば‘mon fils’のような名詞句が役割を表さないと考える理由はない。Fauconnier (1985) は次のような例について、‘his mother’がオイディプスの信念スペース  $M$  の要素である役割  $r'$  に言及するために用いられたり、現実スペース  $R$  で彼の母親  $r$  の値である  $x_1$  の  $M$  における対応物  $x_2$  に言及するために用いられるというような解釈の曖昧性を持つことを述べている。

(80) Oedipus believes he will marry his mother.

‘his mother’のような役割も、‘mon fils’と同じようにあるスペース内では常に一定の値を取る。しかし少なくとも Fauconnier (1985) はこの種の名詞句は役割に言及するためにも用いられるのだと考えている。「スミス氏を殺した犯人」のような役割も、時間の推移によって値が入れ替わることのない役割の一つである。時間が経つにつれて、犯人がある人物から別の人物に変わるなどということは通常あり得ない(容疑者が変わるということはある得るだろうが)。にも関わらず「スミス氏を殺した犯人」という役割とその値は別々の対象物として区別する必要がある。

「かわる」(値が入れ替わる)のような述語は役割に対してしか用いられないが、役割ならば常にこの述語を取ることができるというわけではない。「私の息子」「彼の母親」「スミス氏を殺した犯人」のような役割は、現実とか誰かの信念というようなスペースに応じて異なる値を取るかも知れないが、あるスペースの中では常に一定の値を取り、時間の推移に応じて値が入れ替わったりはしない。このような役割に対しては「かわる」のような述語を用いることはできない。「かわる」とは、基本的には時間の推移に従って何か変化することを述べる場合に用いられる述語である。フランス語で“*Mon fils est un étudiant*”のような不定名詞句を用いた言い方ができない理由についてはあまりよく分からない。しかし坂原 (1990a) は“*Mon mari est un étudiant*”のような例もこのままでは不自然で、‘maintenant’(今は)のような副詞を付け加えたり時制を過去にして別の時間との対比を強調した方が許容度は上がるとしている。

(81) a. *Maintenant, mon mari est un étudiant.*

b. *A ce moment-là, mon mari était un étudiant.*

要するに‘mon mari’のように明らかに役割を表し得る名詞句であっても、時間的対比が強調されない場合には不定名詞句で値を割り当てる文の許容度は下がる。だとすれば、‘mon fils’のようにそもそも時間の推移によって値が入れ替わることのない役割の場合にそのような文が言えないというのは当然の帰結である。ここでは‘mon mari’が役割を表し‘mon fils’が役割を表さないのでなく、役割を表す名詞句であっても時間的対比が強調されるような文脈でなければ不定名詞句で値を割り当てることはできないのだと仮定しておきたいと思う。なぜフランス語にそのような制約があるのかとか、フランス語に限らず他の言語にも見られる現象なのかどうかといった問題についてはここでは触れない。

■役割の内包性 ここまで、役割を文脈パラメータから値への関数として記述する方法が好ましいものではなく、常に同じ値を取るような二つの役割も別々の要素として区別する必要があり、また常に一定の要素を値として取る役割も役割として認める必要があるのだということを述べてきた。結局のところ、これは役割という概念が内包的な存在物であり、一方で役割関数という概念は外延主義的な記述装置なので、内包的概念である役割を記述するために相応しくないのだということを意味する。

役割を文脈パラメータからその文脈における値への関数として扱う考え方は、モンタギュー意味論 (Montague, 1973) で内包を可能世界からその可能世界における外延への関数と見なす考え方と似ている。技術的な詳細には立ち入らずに非常におおまかな言い方で説明すると、この理論では次のような推論が成立しないのは ‘the temperature’ が表しているものは内包的概念であり、‘ninety’ はその外延であるからだを見なす。

- (82) a. the temperature is ninety.  
 b. the temperature rises.  
 c. ninety rises.

内包とは、 $\langle s, a \rangle$  というタイプの対象であるとされる。 $\langle s, a \rangle$  のタイプの対象とは、指標 (可能世界と時間) の集合から  $a$  のタイプの対象の集合への関数である。この関数はある特定の指標が与えられると、その指標における外延 ( $a$  のタイプの対象) を返す。

この考え方は、内包というよく分からない概念を外延的な諸要素に還元して解消するために役立つ。‘the temperature’ の内包とは、その外延である ‘ninety’ とは区別される何か別のものであると言う代わりに、可能世界や時点から外延への関数であると言うことができる。一方で、この考え方は全ての可能世界、全ての時点で同じ外延を持つような二つの内包的概念を互いに区別することができない。例えば、‘groundhogs’ と ‘woodchucks’ が単に同じ動物の別名であって常に同一の外延を持つとすれば、次のような二つの文を互いに区別できないということになる。

- (83) a. John is aware that all groundhogs are groundhogs.  
 b. John is aware that all groundhogs are woodchucks.

Thomason (1980, p.55)

この問題を解決するために、Thomason (1980) は Montague (1973) とは別の種類の内包論理を提案している。Montague (1973) の内包論理が *intensional logic* という綴りであるのに対して Thomason (1980) の内包論理は *intentional logic* という綴りであり、区別するために S-内包論理、T-内包論理と呼ばれる。S-内包論理では、内包とは指標 (可能世界および時点) から外延への関数であるとされた。文によって表される命題は  $\langle s, t \rangle$  というタイプの要素であり、指標から真理値への関数に相当するとされる。これに対して、T-内包論理では命題を  $p$  というタイプのプリミティブな要素と見なす。命題  $a$  の外延 (真理値) は  $\cup$  という演算子を用いて  $\cup a$  のように表される。 $\cup$  は  $\langle p, t \rangle$  というタイプの要素であり、命題から真理値への関数に相当する。この考え方では、「 $x$  は groundhogs である」という命題  $a$  と「 $x$  は woodchucks である」という命題  $b$  はいずれもプリミティブなタイプの要素であり、外延 (真理値) が同じであるか否かに関わらず互いに区別される<sup>\*10</sup>。

役割の話に戻ろう。役割はそれ自体がスペースの要素である。文脈パラメータとかスペースが与えられたからといって、直ちに外延に相当する値になってしまうわけではない。これは役割という概念が、外延に還元できないような内包性を持った概念であることを意味している。役割と値は同一スペース中に存在する別々の存在物である。役割と値を結び付ける語用論的関数  $F$  は、おおよそ Thomason (1980) の演算子  $\cup$  と同じ役目を果た

<sup>\*10</sup> Montague (1973) および Thomason (1980) の内包論理については白井 (1991) を参照されたい。

す。関係する全ての文脈パラメータにおいて一定の値を取るとしても、役割と値である要素が同一になるわけではない。また関係する全ての文脈パラメータにおいて同一の値を取る二つの役割も、内包的に区別される別々の対象物として認識される。

#### 2.5.4 役割と時間断片

2.5.3 節では定記述句が役割を表すか値を表すかの曖昧性は名詞句の意味の問題だが、対象の個体レベルの属性を表すか場面レベルの属性を表すかは述語の意味の問題であると述べた。「フランス国王は賢い」のような個体レベル述語の場合は、誰であれフランス国王であるものは賢いという意味か、たまたまフランス国王である特定の個体が賢いという意味かで、名詞句が役割を表している場合と値を表している場合を直観的に区別することができる。これに対して「フランス国王が病気だ」のような場面レベル述語の場合は誰であれフランス国王であるものとはというような総称的な意味合いが失われるので、名詞句が役割を表しているのか値を表しているのか直観的に区別しにくい。そこで2.5.3 節では「来年、フランス大統領が日本を訪問する」のような例を用いて役割と値のそれぞれが場面レベル述語を取ることができるということを示したのだった。役割と値が対応付けられる時点(発話時)と出来事が起こる時点をずらすことによって、二つの解釈の違いを浮き彫りにしたのである。

別の例を考えてみることにしよう。「かわる」のような述語は、時制をずらすというようなテクニックを使わなくても、容易に役割が個体レベル述語と場面レベル述語の両方を取るのだということを示すことができる。

- (84) a. フランス大統領は、7年ごとに変わる。  
b. フランス大統領が変わった。

「かわる」という述語には、少なくとも値が入れ替わるという読みと、性格や外見が変貌するという読みがある。変貌するという意味の「かわる」は役割の述語にも値の述語にもなるが、値が入れ替わるという意味の「かわる」は役割の述語にしかない。(84)はどちらも値の入れ替わりの意味で読むこともできるが、(84a)が個体レベル述語であるのに対して(84b)は場面レベル述語であり、役割がどちらの述語も取ることができるのだという事実を示している。

なお(84)のどちらの文も、「かわる」を変貌するという意味で読むこともできる。(84a)の場合は、「フランス大統領」が役割を表しているか値を表しているかによって、誰であれフランス大統領であるものは7年ごとに変貌するという読みとフランス大統領であるようなある人物が7年ごとに変貌するという読みができる。(84b)も同じように役割について場面レベルの叙述をする場合と値について場面レベルの叙述をする場合があるはずであるが、これは既に述べた「フランス大統領が病気だ」の例と同じように違いがあまりはつきりしない。

役割に値を割り当てる名詞述語文も、個体レベルの叙述の場合と場面レベルの叙述の場合がある。

- (85) a. マリナーズの一番打者はイチローだ。  
b. 見ろよ、マリナーズの一番打者がジョージマだ。

(85a) は「マリナーズの一番打者」という役割  $r$  に「イチロー」という個体  $a$  を値として割り当てる文であるが、 $r$  についての個体レベルの叙述になっている。(85b) も  $r$  に値を割り当てる文であるが、いつもはイチローが一番打者であるはずなのに、その時に限ってジョージマが一番打者にオーダーされているという状況を述べるものであり、場面レベルの叙述である。Carlson (1977) の個体  $x$  と時間断片  $y$  を関係付ける関数  $R(y, x)$  と、Fauconnier (1985) の役割  $r$  と値  $a$  を関係付ける関数  $a = F(r)$  を組み合わせて書くとすると、次のように書けるだろう。 $r$  は一番打者という役割、 $a$  はイチロー、 $b$  はジョージマを表すものとする。

- (86) a. (85a) =  $F(r) = a$   
 b. (85b) =  $\exists x \exists y [R(x, r) \& R(y, b) \& F(x) = b]$

(86a) は単に  $r$  と  $a$  が役割と値の関係にあるのだということを意味する。(86b) は  $r$  の時間断片であるような  $x$  と  $b$  の時間断片であるような  $y$  が役割と値の関係にあるのだということを意味する。(85b=86b) の文が用いられることによって構築されるスペース構成は、眼前の状況に対応するスペース  $M$  について、 $r$  の  $M$  における対応物  $x$  と、 $b$  の  $M$  における対応物  $y$  が、役割と値の関係 (関係  $F$ ) にあるというものだろう。そこで  $r$  を  $x$  に、 $b$  を  $y$  に関係付ける関数  $G$  を仮定して Carlson (1977) の関数  $R$  の代わりに用い、次のように記述することもできる。

- (87) (85b) =  $F(G(r)) = G(b)$

日本語の名詞述語文の研究は個体レベル述語に相当する事例が中心的な考察の対象となる場合が多く、(85b) のような場面レベル述語の事例を考察の対象に含めている研究はあまり多くない。そのような事例に具体的に言及している研究としては、新屋 (1994), 砂川 (2005) を挙げることができる。

- (88) a. あっ、家がドーム型だ！  
 b. あっ、やっぱり主犯が太郎だ！  
 c. あの太郎がもう高校生ねえ、月日の経つのは早いものだ。

新屋 (1994, p.9)

- (89) a. 信号が赤だよ。気をつけて。  
 b. あれ？ 食堂が休みだ。  
 c. 大変だ。お前の家が火事だぞ。

砂川 (2005, p.94)

新屋 (1994) は、三上 (1953) の指注文、指定文 (西山 (1985) の指注文、指定文と同じもの) とは別に中立叙述文<sup>\*11</sup> という類型を立てている。(88) はその事例のうちの一部である。従って新屋 (1994) は指注文や指定文に個体レベルの叙述のものと場面レベルの叙述のもの (中立叙述のもの) があるのだという考え方をしているわけではないが、(88b) の例

<sup>\*11</sup> 中立叙述という概念は久野 (1973) に基づく。おおよそ、主題を表す「は」を持たず、また「が」で表示されている要素が情報の焦点にもなっていないような文が中立叙述文に相当する。特に眼前の状況を描写するような文は中立叙述文で表される場合が多い。久野 (1973) はそのような場合の「が」を中立叙述の「が」と言う。白井 (1985, §13.3) は、「が」が中立叙述の意味で解釈されるのは、述語が個体レベル述語の場合に限るという中立叙述制約という規則を提案している。

は明らかにここで問題としている役割に値を割り当てる文と同じものである。砂川 (2005) は坂原 (1990c) と同じように名詞述語文を記述文と同定文に分け、特に記述文の中に (89) のような事例があることを述べている。砂川 (2005) は同定文については場面レベルの事例がある可能性について言及していないが、ここで述べた事例は同定文 (従って、役割に値を割り当てるような文) にも場面レベルの事例があるのだということを示している。

## 2.6 まとめ

この章では、名詞句の意味の理論のうち、特に存在論に関わる問題について論じた。本研究は名詞句の指示の理論に関して概念主義的な立場を取る。言語表現は世界の中の事物を直接指し示しているわけではない。我々は世界を心的な概念として捉えているのであり、言語は直接的には心の中の概念を表している。名詞句によって表される心の中の概念には、個体、種 (kind)、役割 (role) といった種類のものがある。種や役割は述語として用いられて対象の帰属する範疇や対象に与えられた役割を叙述する場合もあるが、主語として用いられて他の属性を持つような対象を表す場合もある。いくつかの現象が、主語として用いられる種や役割を個体の集合と見なすよりも、抽象的個体概念と見なした方がよいということを示している。抽象的個体は、「水」や「金」のような名詞によって表されるような質量的存在物 (mass object) と似た性質を持つ。このような考え方は、Carlson (1977) や Fauconnier (1985) の意味論を基礎としているが、違う部分もある。Fauconnier (1985) は役割  $r$  を文脈パラメータ  $m$  に応じて値  $a$  を返す関数 (すなわち  $a = r(m)$ ) として記述しているが、本研究では役割関数という考え方は取らない。役割  $r$  はそれ自体、スペース  $m$  の要素となるような概念であり (すなわち、スペース  $m$  に  $r$  と  $a$  が別々の要素として共存する)、 $r$  に文脈パラメータ  $m$  を与えたからといって、直ちに値  $a$  になるわけではない。これは役割という概念が外延に還元できないような強い内包性を持った概念であるということを示している。

名詞句の意味の理論の理論的基盤を明確にすることは、名詞述語文の意味論的、機能論的な諸特徴のうちどの部分を名詞句の意味の理論で説明すべきかを判断するために役立つ。2.1.2 節では、名詞句の意味の理論だけで全てを説明しようとする、意味論的基盤の明確でない概念的区別を仮定しなければならなくなるようないくつかの事例に言及した。

- (90) a. スミスを殺した犯人は正気じゃない。  
b. スミスを殺した犯人はジョーンズだ。

(90a) の文は西山 (2003b) の言う指定文に相当するが、「スミスを殺した犯人」は属性的用法で用いられる場合と指示的用法で用いられる場合がある。(90b) の文は、西山 (2003b) の言う倒置指定文、倒置同一性文、第二タイプの指定文の読みを持つ。これらの多様な解釈の違いを名詞句の意味の理論だけで説明しようすると、属性的用法の名詞句と変項名詞句を区別したり、指示的だが変項名詞句として働く名詞句というような概念を仮定したりしなければならなくなる。

理論をいくつかの部門に分ける考え方では、これらの事例の多様な解釈に対して、簡潔で体系的な記述を与えることができる。「スミスを殺した犯人」という名詞句は役割  $r$  に言及するために用いられる場合と値  $a$  に言及するために用いられる場合がある。(90a) では、役割の読みは属性的用法に、値の読みは指示的用法に相当する。(90b) では、役割の

類型	主語名詞句	述語名詞句	意味論的構造	機能論的構造
措定文 (属性的)	<i>r</i>	<i>insane'</i>	対象と属性	通常の焦点
措定文 (指示的)	<i>a</i>			
倒置指定文	<i>r</i>	<i>j</i>	役割と値	選択的焦点
倒置同一性文	<i>a</i>		同一物	通常の焦点
第二タイプの指定文				選択的焦点

表 2.1 「スミスを殺した犯人は正気じゃない／ジョーンズだ」

読みは倒置指定文の読みに、値の読みは倒置同一性文および第二タイプの指定文の読みに相当する。(90a) と (90b) の違いのある部分は文の意味論的構造の理論で説明される。(90a) では主語と述語は対象と属性の関係にあるが、(90b) では役割と値 (主語が役割の場合)、もしくは同一物 (主語が値の場合) の関係にある。(90b) の倒置同一性文の読みと第二タイプの指定文の読みの違いは文の機能論的構造の理論で説明される。第5章で導入する概念を先取りして用いることにすると、措定文や倒置同一性文の述語は通常の焦点であるが、倒置指定文や第二タイプの指定文の述語は選択的焦点になっている (表 2.1)。

名詞句の意味に関する過去の豊かな研究の蓄積を取り入れたいと考えるならば、名詞述語文の意味や機能に関する問題を過剰に名詞句の意味の理論で解決しようとする考え方は放棄しなければならない。名詞句の意味は名詞述語文の意味を構成する主要な構成要素の一つだが、名詞述語文の意味論的、機能論的特徴の全てを名詞句の意味の理論で説明しなければならないわけではない。名詞述語文の意味論的、機能論的特徴のある部分は、二つの名詞句が表す事物の間に関係に関わるものであり、それぞれの名詞句が何を表しているかに関わるものではない。名詞述語文の類型的諸特徴を記述するためには、名詞句単独ではなく文全体の意味論的、機能論的構造を記述するための理論の構築が不可欠である。文の意味論的構造の理論については第4章で、文の機能論的構造の理論については第5章で論じる。

## 第3章

# 名詞句の解釈の理論

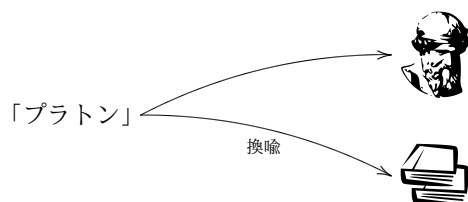
### 3.1 はじめに

名詞句とそれが表す事物や概念との間には、非常に複雑な関係が存在する。名詞句の解釈の曖昧性は、名詞述語文の解釈の曖昧性を生み出す。ごく簡単な事例は次のようなもので、「スミスを殺した犯人」が役割を表すか値を表すかによって、この文は役割に値を割り当てる文になったり、二つの事物の同一関係を表す文になったりする。

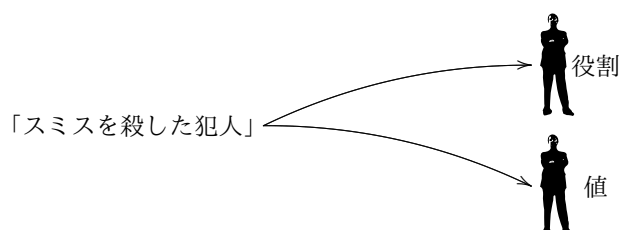
- (1) スミスを殺した犯人はジョーンズだ。
  - a. 役割  $r$ (=犯人) の値は、 $j$ (=ジョーンズ) である。
  - b. 役割  $r$  の値である  $a$  は、 $j$  と同一人物である。

本研究では、名詞句の意味の理論のうち、特に名詞句と事物や概念との間の関係に関する問題を扱う理論を独立した下位部門として扱うことにした。この部門を解釈の理論と呼ぶことにする。解釈の理論を名詞句の意味の理論の下位部門として特に独立させたのは、この理論がかなり多様な問題を扱わなければならないからである。この理論が扱うべき中心的な問題は名詞句の解釈の多様性に関するものであり、メトニミー (換喩) や定記述句の役割を表す用法と値を表す用法の区別といった問題を含む。

- (2) プラトンは一番上の棚だ。(メトニミー)



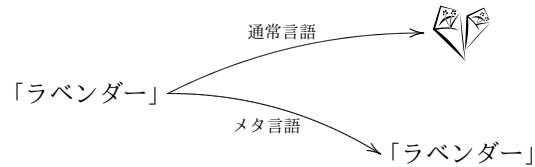
- (3) スミスを殺した犯人はジョーンズだ。(役割と値)





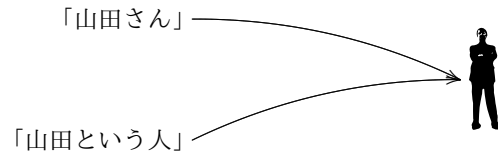
名詞句はまた言語表現それ自体に言及するために用いられる場合もある。このような言語表現をメタ言語と言う。名詞述語文に関して言うと、語に定義を与えるような文(定義文)においてメタ言語が中心的な役割を果たす。

(4) ウサギタバコとはラベンダーのことだ。(メタ言語)



メタ言語の使用と関連して、本章ではかなり異なった問題についても言及したいと思う。対象についての話し手や聞き手の知識が、その対象に言及するための言語形式の選択に影響を及ぼすというものである。例えば我々は直接知っているような事物には固有名を用いて言及することができるが、自分があまりよく知らないものや、相手が知らないかも知れないものに言及するときには「～という人」のような表現を用いなければならない。

(5)



この議論の主要な源泉は田窪・金水(1996)の談話管理理論であり、Fauconnier(1985)のメンタル・スペース理論とも関係が深い。この問題は名詞述語文の意味論的類型の問題にそれほど直接的に関与するものではないが、名詞句の解釈の理論の複雑さを示すものであり、本章で併せて論じたいと思う。以下では、3.2節で名詞句の解釈の理論を構成するいくつかの基本的な概念(語用論的関数、スペース構成、メタ言語、認知的制約)を導入し、3.3節では名詞句の解釈の理論が特に名詞述語文の意味の理論とどのように関わることかという問題について述べる。

## 3.2 名詞句の解釈の理論

この節では、名詞述語文の問題とは独立に、本研究が名詞句の解釈の理論で扱うべきだと考えている問題にどのようなものがあるのかについて述べる。言語表現と事物や概念との間の関係の複雑さには、様々な種類の問題や概念が関与している。関与的な概念には、少なくとも次のようなものがある。

- 語用論的関数
- スペース構成
- メタ言語
- 認知的制約

語用論的関数とスペースの複雑な構成は、名詞句の解釈の多様性を生み出す。生み出される解釈には、メトニミーや、定記述句の役割の読みと値の読みの区別が含まれる。名詞句の解釈の別の可能性はメタ言語としての用法であり、名詞句は言語表現自体を表すため

に用いることができる。認知的制約は、解釈の多様性を生み出すというよりも、むしろ情報の伝達を円滑にするために、名詞句と事物や概念との間の関係に一定の制約を与える。これらの概念は必ずしも互いに密接に関係しあっているというわけではないが、名詞句の解釈の問題に関与するという点において共通している。以下では、名詞句の解釈の理論を構成するこれらの概念の詳細について論じる。

### 3.2.1 語用論的関数

■語用論的関数 Fauconnier (1985) は、語用論的関数という考え方をを用いて語の意味解釈に関わる多くの問題を一般的に説明している。この考え方は Nunberg (1979) に基づくものであるが、Fauconnier (1985) はその一般的原則を次のように記述している。

- (6) Identification(ID) Principle If two objects (in the most general sense),  $a$  and  $b$ , are linked by a pragmatic function  $F(b = F(a))$ , a description of  $a$ ,  $d_a$ , may be used to identify its counterpart  $b$ .

Fauconnier (1985, p.3)

要するに、 $a$  と  $b$  の間に何らかの語用論的関係  $F$  があるならば、本来  $a$  を表す記述  $d_a$  を用いて  $b$  に言及することができる。代表的な事例はメトニミー (metonymy; 換喩) と呼ばれるもので、‘Plato’ という名前を用いてその著書に言及したり、‘the mushroom omelet’ という料理の名前を用いてそれを注文した客に言及することができる。

- (7) a. **Plato** is on the top shelf.  
b. **The mushroom omelet** left without paying the bill.

別の事例では、ある事物と別の領域に属する対応物が結び付けられる。例えば、絵のモデルと絵の中のイメージが結び付けられたり、現実の存在物と心の中の存在物が結び付けられたりする。次の例で、緑色の目をしているのは実在する青い目の少女ではなく、その少女と対応する絵の中や心の中の少女である。

- (8) a. In Len’s painting, **the girl with blue eyes** has green eyes.  
b. In Len’s mind, **the girl with blue eyes** has green eyes.

‘the president’ のような定記述句の曖昧性も、一般的な語用論的原則の帰結として説明される。次の文は、大統領が7年毎に改選されるという読みと、大統領である人が7年毎に変貌する (傲慢になる、禿になる、頭がおかしくなるなど) という読みを持つ。

- (9) **The president** changes every seven years.

Fauconnier (1985) は、定名詞句は第一次的には役割 (role) を表し、二次的にはその役割の値であるような要素を表すのだと考える。「7年毎に改選される」という属性は大統領という役割を持つような属性であり、‘the president’ は役割に言及するために用いられている。「7年毎に変貌する」という属性は役割の値であるような個体が持つ属性であり、‘the president’ は役割の値に言及するために用いられている。もう少し細かく言うと、(9) の文には役割が「7年毎に変貌する」という属性を持つのだという読みもあり、その場合には「誰であれ大統領であるものは7年毎に変貌する」というような意味になる。

要素間の語用論的な関係は、Fauconnier (1985) の理論ではコネクターと呼ばれる弧によって記述される。またコネクターによって結び付けられる二つの要素  $a$  と  $b$  はそれぞれトリガーとターゲットと呼ばれる。‘Plato’ の例で言うと、プラトンという個体がトリガーになり、プラトンの著書がターゲットになる (図 3.1)。

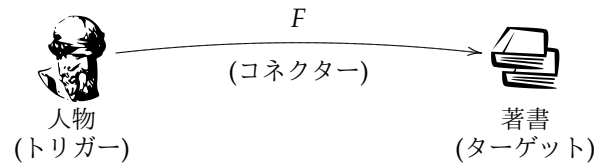


図 3.1 コネクター

■メトニミー メトニミーとは、一般的には事物や概念の隣接関係に基づく語義の拡張のことを意味する。次のような事例が、メトニミーの一種であると考えられている。

- (10) a. We don't hire **longhairs**. (THE PART FOR THE WHOLE)  
 b. I'll have a **Löwenbräu**. (PRODUCER FOR PRODUCT)  
 c. The **sax** has the flu today. (OBJECT USED FOR USER)  
 d. **Nixon** bombed Hanoi. (CONTROLLER FOR CONTROLLED)  
 e. The **Army** wants to reinstitute the draft. (INSTITUTION FOR PEOPLE RESPONSIBLE)  
 f. The **White House** isn't saying anything. (THE PLACE FOR THE INSTITUTION)  
 g. **Watergate** changed our politics. (THE PLACE FOR THE EVENT)  
 Lakoff and Johnson (1980, p.38)

メトニミーは、事物や概念の間の意味的なネットワークによって成立する。「プラトン」という名前をプラトンの著書に言及するために用いることができるのは、プラトンと著書の間にある語用論的な関係が存在し、その関係を話し手が知っているからである。同じように、「マッシュルーム・オムレツ」という料理の名前でそれを注文した客に言及することができるのも、料理と客の間にある語用論的な関係が存在することにに基づく。

これに対して、西山 (2003b) はメトニミーに対する次のような通説は適切ではないと主張する。

- (11) 名詞句は、しかるべき文脈において、それが指示する個体と関連のある個体を指示するのに用いられる。西山 (2003b, p.327)

西山 (2003b) がこのような主張をしたのは、指示的名詞句だけでなく非指示的名詞句においてもメトニミーが作用する場合がありますということを説明するためである。西山 (2003b) の考えでは、次のような文は倒置指定文の一種で、主語は変項名詞句 (非指示的名詞句) であり、「プラトン」は「プラトンの著作」の意味で用いられているが特定の個体を指示しているわけではない。

- (12) プラトンはあの赤い本です。

ここから、西山(2003b)はメトニミーの本質はある表現から別の表現への語用論的写像関係が成立する点に求めるべきであると主張する。しかしメトニミーは言語によって表される事物や概念の間の関係の問題ではなく、言語表現間の関係に過ぎないという考え方は行き過ぎであるように思える。確かに、メトニミー的な連関は個体概念の間にのみ成立するものではない。しかし単に個体を指示するのではない名詞句に対してもメトニミーを適用したいというだけであれば、メトニミーの適用範囲を個体以外の概念に広げるだけで十分である。西山(2003b, §2.2.1)は変項名詞句は命題関数を表示するとしているので、(12)の例では「プラトン」は個体ではなく、その個体と関連する命題関数を表しているのだと考えればよい。

メトニミーを言語によって表される事物や概念の間の関係ではなく、言語表現の間の関係として捉える考え方はいくつもの問題がある。第一に、メトニミーが二つの言語表現間の写像関係だとしたら、その写像関係をどのように理解すればいいだろうか。マッシュルーム・オムレツという料理と、それを注文した客(例えばジョーンズ)との間には、料理と客という語用論的な関係が存在している。しかし「マッシュルーム・オムレツ」と「ジョーンズ」という二つの言語表現の間に、どのような語用論的な関係が存在するのかよく分からない。当然のことながら、「ジョーンズ」という名前の代わりに「マッシュルーム・オムレツ」という表現を使ってもいいというような慣習的な取り決めが存在しているわけではない。このようなメトニミーは言語使用の場面で生産的に行われるものであり、またこのような言い換えを可能にしているのは  $a$  と  $b$  の間にある語用論的な関係(料理と客の関係)である。 $a$  と  $b$  の間の関係を用いずに、 $d_a$  と  $d_b$  という表現だけを直接関係付けることはできそうにない。

第二に、 $b$  がそれを指示するような記述  $d_b$  を欠く場合には、 $d_a$  は何の代わりに  $b$  を指示しているということになるのだろうか。例えば、マッシュルーム・オムレツを注文した客は何らかの理由で固有の名前を持っていないかも知れない。この場合「マッシュルーム・オムレツ」という言語表現は、どのような表現との間に語用論的写像関係を持っているということになるのだろうか。メトニミーが  $a$  と  $b$  の関係によって成立するという考え方では、このような問題は発生しない。 $d_a$  は本来  $a$  を表すが、二次的には  $a$  と関係のある  $b$  を表すこともできる。 $b$  が固有の記述  $d_b$  を持っている必要は全く無い。

第三に、メトニミーが言語ではなく、指さしのような身体的表現で行われる場合を考えてみることにしよう。例えば、ある特定の客を指示するのに、その客を直接指さすのではなく、その客が注文した料理(あるいはその見本)を指さすことによって表現するということが可能だろう。これも、原理的にはメトニミーと同じものである。このとき、「ジョーンズ」という名前や「マッシュルーム・オムレツを注文した客」という記述の代わりに、指がその客を指示しているのだと言うことができるだろうか。明らかに、指が指し示しているのは料理(あるいはその見本)であって客ではない。指が料理を指示し、料理と客の間に語用論的な関係が存在することによって、話し手がその客に言及しようとしているのだということを理解することができるのである。

■役割と値 役割という概念をどのようなものとして理解するかについては、第2章で詳しく述べた。ここでは役割を表すような言語表現の解釈の曖昧性を中心に述べる。Fauconnier(1985)は‘the president’のような定記述句は第一次的には役割を表すが、二次的にはその値であるような要素を表すのだと述べた。この考え方は、定記述句の属性的

用法と指示的用法の区別とか、指示の不透明性といった意味論上の伝統的な問題を解決するために役立つ。ここでは属性的用法と指示的用法の区別について述べる。

定記述句の指示的用法と属性的用法とは、Donnellan (1966) によって与えられた区別である。Donnellan (1966) は次のような文について、スミスを殺した犯人は誰であれ正気ではないという読みと、スミスを殺した犯人であるジョーンズは正気ではないという二つの読みがあるのだと述べている。

(13) **Smith's murderer is insane.**

- a. スミスを殺した犯人は誰であれ正気ではない。 (属性的用法)
- b. ジョーンズは正気ではない。 (指示的用法)

前者の読みでは、‘Smith's murderer’ という記述の内容 (スミスを殺したということ) が本質的な役割を果たしている。スミスを殺したという行為 (あるいは殺し方) について、正気ではないと言っているのである。定記述句のこの用法を Donnellan (1966) は属性的用法 (attributive use) と呼ぶ。一方、後者の読みでは、‘Smith's murderer’ という記述は単にその記述に該当する特定の個体 (ジョーンズ) に言及するためだけに用いられている。ジョーンズがスミスを殺したということと、彼が正気ではないということとは基本的に関係が無い。定記述句のこの用法を Donnellan (1966) は指示的用法 (referential use) と呼ぶ。

Fauconnier (1985) の理論 (メンタル・スペース理論) では、属性的用法と指示的用法の区別は定記述句が役割を表しているのか値を表しているのかの区別として扱われる。属性的用法とは、スミスを殺した犯人という役割  $r$  に正気ではないという属性が与えられる場合であり、指示的用法とは、役割  $r$  の値  $j$  に正気ではないという属性が与えられる場合である。

(14) **Smith's murderer is insane.**

- a.  $r$  is insane. (属性的用法=役割の読み)
- b.  $j$  is insane. (指示的用法=値の読み)

定記述句の属性的用法と指示的用法は、文の真理値に違いを生じる場合があると言われる。スミス氏が、実際には誰かに殺されたのではなく自殺だったのだという状況を考えてみることにしよう。このような状況で「スミスを殺した犯人は正気じゃない」という文が発話された場合、「スミスを殺した犯人」が属性的に用いられているか指示的に用いられているかによって文の真理値に違いが生じる。属性的用法においては、そもそもスミスを殺した犯人  $r$  は存在しないのであるから、文の真理値は偽であるということになる<sup>\*1</sup>。指示的用法においては、定記述句は単にジョーンズに言及するために用いられているだけであり、この文がジョーンズ  $j$  が正気ではないということを述べているのだと考える限りにおいて、この文の真理値は真であるということになる。

■名詞句の曖昧性と非曖昧性 Carlson (1977) は、‘dogs’ のような裸複数名詞は「全てのイヌ」を表したり「何匹かのイヌ」を表したりする場合があるように見えるが、実際には

<sup>\*1</sup> 主語が表す事物がそもそも存在しない場合、命題は偽になるという考え方と無意味になるという考え方がある。Russell (1905) および Strawson (1950) 参照。

解釈の違いは述語の意味によって生じるものであり、‘dogs’ という名詞句自体が曖昧なのではないと述べた。

- (15) a. **Dogs are intelligent.**  
 b. **Dogs are sick.**

(15) で、‘dogs’ はどちらの場合にも種 (kind) という抽象的対象物を表しているが、述語が対象の個体レベルの属性を表す述語 (個体レベル述語) か、対象の時間断片の属性を表す述語 (場面レベル述語) かによって、総称的用法と存在的用法の解釈の違いが生まれる。‘be intelligent’ は対象が賢いという属性を持つことを表し、‘be sick’ は対象のある場面における断片 (従って何匹かのイヌ) が病気であるという属性を持つことを表す。

‘dogs’ のような裸複数名詞がそれ自体では曖昧ではないのに対して、定記述句の役割と値の読みの区別は名詞句それ自体の曖昧性によって生み出される。「スミスを殺した犯人は正気ではない」という文で、「スミスを殺した犯人」という名詞句は属性的な読みと指示的な読み (従って役割としての解釈と値としての解釈) を持つが、「正気ではない」という述語はどちらの場合にも個体レベルの属性を表しているものと考えられる。

- (16) スミスを殺した犯人は正気ではない。  
 a. *r is insane.* (‘be insane’ は個体レベル述語)  
 b. *j is insane.* (‘be insane’ は個体レベル述語)

「スミスを殺した犯人が捕まった」のような文では、「捕まった」は場面レベル述語である。この文は誰であれスミスを殺した犯人が捕まったという読みと、ジョーンズが捕まったという読みを持つ。前者はスミスを殺した容疑である人物が捕まったということを意味する。後者は単にジョーンズに言及するために「スミスを殺した犯人」という記述を用いているだけであり、ジョーンズは窃盗で捕まったのかも知れないし、交通違反で捕まったのかも知れない。役割 *r* と値 *j* の区別と、Carlson (1977) の個体 *x* と時間断片 *y* を関係付ける関数  $R(y, x)$  を組み合わせると、二つの解釈の違いは次のように記述することができる。

- (17) スミスを殺した犯人が捕まった。  
 a.  $\exists x[R(x, r) \ \& \ x \text{ was arrested}]$   
 b.  $\exists x[R(x, j) \ \& \ x \text{ was arrested}]$

役割に対する場面レベルの叙述と値に対する場面レベルの叙述の区別は、役割と値が結び付けられる時点と場面レベル述語による叙述が行われる時点が分かれているような場合には、よりはっきりと観察することができる。そのような事例については 2.5.2 節で既に述べたが、次のようなものを挙げることができる。

- (18) 来年、フランス大統領が日本を訪問する。

この文は、誰であれ来年の時点でフランス大統領であるものが日本を訪問することになっているという読みと、現在のフランス大統領であるサルコジ氏が来年の時点でまだフランス大統領であるかどうかに関わらず日本を訪問することになっているという読みを持つ。

まとめると、‘dogs’のような裸複数名詞の総称的用法と存在的用法の区別は、述語が個体レベル述語か場面レベル述語かによって生み出されるものであって、名詞句それ自体の曖昧性によって生み出されるものではないが、定記述句の場合には名詞句それ自体が役割を表すか値を表すかという曖昧性を持つので、役割と値のそれぞれが個体レベルの属性を持ったり場面レベルの属性を持ったりすることができる。

### 3.2.2 スペース構成

■スペースと曖昧性 現実とか絵の中とか心の中というような、言語表現によって言及される要素が設定される心的領域のことを、Fauconnier (1985) の理論ではメンタル・スペースという。スペースは Fauconnier (1985) の理論を構成する中心的な概念である。役割と値というような解釈の曖昧性と、複数のスペースにまたがるような解釈の曖昧性が組み合わさると、非常に豊かな解釈の可能性が生じる。次の例は ‘the president’ という名詞句が何に言及するために用いられているのかによって、少なくとも三通りの解釈の曖昧性を持つ。

(19) In 1929, the president was a baby.

- a. 1929 年には、大統領はすべて赤ん坊の中から選ばれた。(=  $p'$  is a baby)
- b. 現在の大統領は、1929 年には赤ん坊だった。(=  $a'$  is a baby)
- c. 1929 年には、ある赤ん坊が大統領だった。(=  $b'$  is a baby)

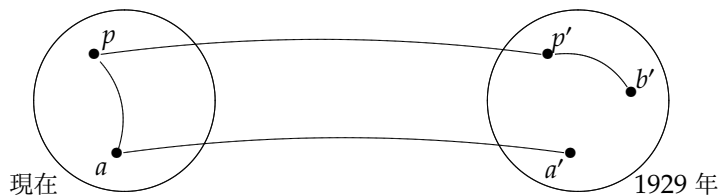


図 3.2 In 1929, the president was a baby.

(19a) は 1929 年における大統領 (= 役割  $p'$ ) が赤ん坊だったという読みであり、誰であれ大統領は赤ん坊だった (赤ん坊の中から選ばれた) という意味になる。(19b) は大統領の現在における値  $a$  の 1929 年における対応物  $a'$  が赤ん坊だったという読みであり、現在の大統領である  $a$  は 1929 年当時は赤ん坊だったという意味になる。(19c) は大統領の 1929 年における値  $b'$  が赤ん坊だったという読みであり、 $b'$  は (当時大統領だったということとは無関係に) 赤ん坊だったという意味になる。

■指示の不透明性 定記述句の役割としての解釈と値としての解釈の区別は、指示の不透明性の問題を解決するためにも役立つ。次の文は、少なくとも二通りの解釈を持つ。

(20) Oedipus believes he will marry his mother.

- a. オイディプスは自分がジョカスタと結婚している。 (透明な読み)
- b. オイディプスは自分が自分の母親と結婚している。 (不透明な読み)

オイディプスはジョカスタと結婚したいと思っているが、ジョカスタが自分の実の母親であるということを知らない。(20)の第一の読みでは、実際にオイディプスの母親であるもの(ジョカスタ)とオイディプスが結婚したいと思っている相手(ジョカスタ)は一致しており、‘his mother’は指示に関して透明(transparent)であると言われる。(20)の第二の読みでは、実際にオイディプスの母親であるものとオイディプスが結婚したいと思っている相手は必ずしも一致しない。オイディプスは不道徳にも自分の母親と結婚したいと思っているが、彼が考えている自分の母親とはジョカスタのことではない。

Fauconnier (1985)の理論では、これらの読みの違いは次のように説明される。(20)の解釈には、話し手の現実空間  $R$  とオイディプスの信念空間  $M$  という二つの空間が関与する。現実空間  $R$  には役割  $r$ (オイディプスの母親)、個体  $x_1$ (ジョカスタ)、個体  $y_1$ (クサンティッペ<sup>2</sup>)が含まれている。また、 $R$ における  $r$ の値(オイディプスの実の母親)は  $x_1$ である。一方、オイディプスの信念空間  $M$  には現実空間の要素  $r, x_1, y_1$ のそれぞれの対応物  $r', x_2, y_2$ が含まれている。ただし現実空間  $R$ とは違って、 $M$ における役割  $r'$ の値(オイディプスが自分の母親だと信じている人)は  $x_2$ ではなく  $y_2$ である。

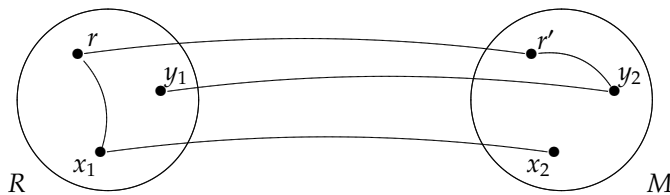


図 3.3 Oedipus believes he will marry his mother

(20)の透明な読みと不透明な読みはそれぞれ、オイディプスが  $x_2$  と結婚すると思っているという読みと  $r'$  と結婚すると思っているという読みに相当する。理論的には、オイディプスが  $y_2$  と結婚すると思っているという読みも存在する。オイディプスはクサンティッペが自分の母親だと思っているが、彼はあくまでクサンティッペと結婚したいと思っているのであり、自分の母親と結婚したいと思っているわけではないというような読みがこれに相当する。従って、(20)の文は少なくとも次の三つの読みを持つのだということになる。

- (21) a.  $P(r')$  属性的かつ不透明な読み: オイディプスは誰が自分の母親とわかるにせよ彼女が自分の妻になると信じている。
- b.  $P(x_2)$  指示的かつ透明な読み: オイディプスは単にジョカスタと結婚すると信じている。話し手が  $M$  内では不適切な記述 “his mother” を与えている。
- c.  $P(y_2)$  指示的かつ不透明な読み: オイディプスはクサンティッペ(彼は彼女を自分の母親だと思っている)と結婚すると信じている。

属性的か指示的かというのは、役割か値かという区別に対応する。透明な読みとは現実空間  $R$  で  $r$  から  $x_1$  へと指示の転送が行われ、それから信念空間  $M$  における対

<sup>2</sup> クサンティッペはソクラテスの妻であり、オイディプスとは関係が無いが、Fauconnier (1985) が用いている例をそのまま用いる。



応物  $x_2$  へと解釈が移っていく場合である。不透明な読みとは現実スペース  $R$  では指示の転送が行われず、信念スペース  $M$  で  $r'$  を表すのか  $y_2$  を表すのかというような指示の問題が解決される場合である。

■命題の真偽判断 3.2.1 節では、定記述句が属性的用法で用いられているか指示的用法で用いられているかによって、文の真理値に違いが生じる場合もあるのだと述べた。ミスが誰にも殺されていない場合 (すなわち  $r$  が存在しない場合)、(22a) は偽になるが、(22b) は真になり得る。

(22) **Smith's murderer is insane.**

a.  $r$  is insane. (属性的用法=役割の読み)

b.  $j$  is insane. (指示的用法=値の読み)

スペースという概念を用いて、文の真偽判断がどのように行われているのかをより正確に理解することができる。話し手が 'Smith's murderer' を属性的用法で用いている場合、話し手の信念スペース  $M$  には役割  $r$  (=ミスに殺した犯人) が存在し、 $r$  は正気ではないという属性を持っている。聞き手は  $r$  の現実スペース  $R$  における対応物  $r'$  が正気ではないという属性を持つか否かによって、話し手の発話した文の真理値を判断することができる。ミスが実際には殺されたのではない場合には、現実スペース  $R$  にはそもそも役割  $r'$  が存在しないので、この文は偽であるということになる (図 3.4)。

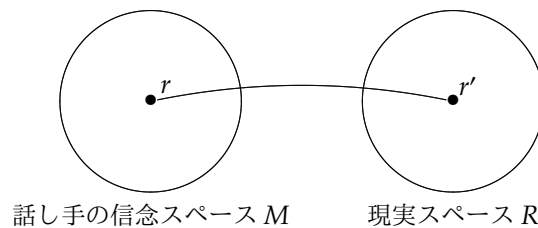


図 3.4 Smith's murderer is insane (役割の読み)

話し手が 'Smith's murderer' を指示的用法で用いている場合、話し手の信念スペース  $M$  には役割  $r$  とその値  $j$  (=ジョーンズ) が存在し、 $j$  は正気ではないという属性を持っている。聞き手は  $j$  の現実スペース  $R$  における対応物  $j'$  が正気ではないという属性を持つか否かによって、話し手の発話した文の真理値を判断することができる。この場合には、 $R$  に役割  $r'$  があるか否か、 $r'$  の値が  $j'$  であるか否かに関わらず、 $j'$  が正気ではないという属性を持っていればこの文は真であるということになる (図 3.5)。

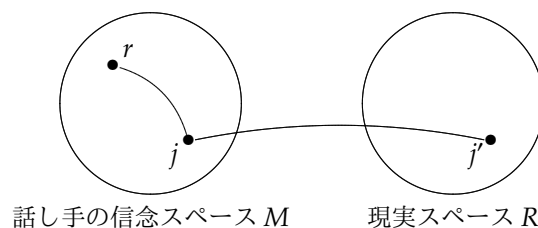


図 3.5 Smith's murderer is insane (値の読み)

### 3.2.3 メタ言語

名詞句の解釈の別の可能性は、メタ言語としての読みである。言語表現を表す言語表現のことをメタ言語 (metalanguage) と言う。次のような文では、名詞句は表現それ自体に言及するために用いられている。

- (23) a. ウサギタバコは植物の名前だ。  
 b. ウサギタバコは日本語の名詞だ。  
 c. ウサギタバコはカタカナで六文字だ。

メタ言語は名詞句の解釈の可能性の一つであるが、メトニミーや定記述句の値としての読みと同じように語用論的関数が関与しているわけではない。言語表現が言語表現自体を表すという関係は、その言語表現だけで完結している関係であり、他の事物や概念の間の関係を参照する必要は無い。

- (24) a. 「マッシュルーム・オムレツ」→料理  $\xrightarrow{F}$  客 (メトニミー)  
 b. 「スミスを殺した犯人」→役割  $\xrightarrow{F}$  値 (値の読み)  
 c. 「ウサギタバコ」→「ウサギタバコ」 (メタ言語)

メタ言語は、固有名で直接言及できないような事物に言及するためにしばしば用いられる。どのような場合に固有名で事物に言及できなくなるのかについては3.2.4節で詳しく述べるが、原則として、固有名は話し手と聞き手が共通して知っているような事物に言及する場合にしか用いることができない。話し手が聞き手が知らないような事物に言及する場合には「という人」のような表現を用いる必要がある (=26)。固有名が何に言及するために用いられているのか分からない場合には、「とは」「というのは」「って」のような表現を用いなければならない (=27)。

- (25) 昨日、ベンジャミンに会ったよ。  
 (26) 昨日、ベンジャミンという人に会ったよ。  
 (27) a. ベンジャミンとは (というのは) 誰のことですか?  
 b. ベンジャミンって誰?

(25) では、「ベンジャミン」は通常の言語として用いられており、ある特定の対象に言及している。一方、(26) と (27) では「ベンジャミン」はメタ言語として用いられており、「ベンジャミン」という名前自体を表している。(26) では、「ベンジャミンという人」という名詞句を構成するために、「ベンジャミン」というメタ言語の他に「という」という述語と「人」という普通名詞が用いられており、名詞句は全体で「ベンジャミン」という名前の不特定の人物を表している。

- (28) [人<sub>[名前]</sub> ベンジャミン] という人]

(27) では、「とは」「って」のような表現は複合辞であり、(28) のように名詞句全体の意味を構成的に分析することはできない。(27) のような文は言語表現とその意味を結び付ける文であり、「とは」「って」のような表現はそのため用いられる特別な標識なのだと考えておくことにする。

(29) ベンジャミン とは 誰のこと ですか？



このような文は定義文と呼ばれ、メタ言語が名詞述語文で用いられる事例である。定義文については、3.3節で詳しく述べる。

### 3.2.4 指示の認知的制約

■談話管理理論 ここまで、名詞句がいかに多様な解釈の可能性を持つのかについて論じてきた。ここでは、名詞句と事物や概念との間の関係は多様なだけでなく、一方では両者の間の関係に課せられる制約も存在するのだということを述べておきたいと思う。ここで述べる制約とは、対象についての話し手や聞き手の知識の状態が、その対象に言及するための言語表現の選択に影響を及ぼすというものである。

まずはいくつかの事例を見てみることにしよう。固有名は、話し手と聞き手が共通して知っている人に言及する際には用いることができるが、そうでない場合には用いることができない。

- (30) a. 昨日、マクレガーさんの畑でベンジャミンに会ったよ。  
b. 昨日、マクレガーさんの畑でベンジャミンという人に会ったよ。

(30a) は、話し手と聞き手が共通してベンジャミンというウサギを知っている場合に、その共通の知人に言及するために発話される。話し手がベンジャミンというウサギに昨日はじめて会ったという場合には、(30b) のような言い方をするのが普通である。話し手が以前からベンジャミンと知り合いであっても、聞き手がベンジャミンのことを知らない場合も (30b) の言い方が選択される。

話し手と聞き手がそれぞれベンジャミンのことを知っていても、聞き手が話し手とベンジャミンが知り合いなのだということを知っていそうに無い場合には、話し手は (30b) の言い方を選ぶ。そのような場合に話し手が (30a) の言い方を使ってしまうと、聞き手は話し手が「ベンジャミン」という固有名で誰に言及しようとしているのか、うまく同定できない可能性がある (聞き手は話し手がベンジャミンを知っているとは思っていないのであるから)。

- (31) a. 昨日、マクレガーさんの畑でベンジャミンに会ったよ。  
b. ベンジャミンって、どこのベンジャミン？

このような場合には、いくつかの方法を選択することができる。一つは修飾語句を用いてどこのベンジャミンのことなのかはっきりさせるというものである (=32)。別の方法としては、まず「ベンジャミンという人」という言い方で対象を導入しておいてから、その対象が聞き手の知っているベンジャミンのことなのだ後から付け加えることができる (=33)。

- (32) 昨日、マクレガーさんの畑で君のいとこのベンジャミンに会ったよ。  
(33) 昨日、マクレガーさんの畑でベンジャミンという人に会ったよ。君のいとこなんだってね。

「彼」のような代名詞は、固有名と同じような用いられ方をする。話し手と聞き手が共通して知っている対象に言及する場合には「彼」を用いるのが普通である(=34)。一方、話し手と聞き手の共通の知人ではない対象に言及する場合には、代名詞を使う場合と「その人」のような表現を使う場合がある(=35)。筆者の考えでは、話し手がその対象を知っているのであれば(聞き手がその対象を知っているか否かによらず)代名詞と「その人」のどちらかを選ぶことができる。話し手がその対象をあまりよく知らない場合には「その人」が選択される。

- (34) a. 昨日、マクレガーさんの畑でベンジャミンに会ったよ。  
b. 彼/\*その人はカトンテールと結婚したそうだよ。
- (35) a. 昨日、マクレガーさんの畑でカトンテールという人に会ったよ。  
b. #彼女/その人の旦那さんはくろうさぎだそうだよ。

話し手が対象をよく知っている場合には固有名が用いられ、あまりよく知らない場合には「という人」という表現が用いられると述べたが、そもそもその言語表現が何に言及しているのかよく分からないという場合には、「とは」「というのは」「って」のような表現が用いられる。そのような事例は既に(31b)でも示したが、次のようなものである。

- (36) a. ベンジャミンとは 誰のことですか?  
b. ベンジャミンというのは 誰のことですか?  
c. ベンジャミンって 誰のこと?

田窪(1989b)、田窪・金水(1996)は固有名、「という人」、「というの」のような表現の使い分けについて、談話管理理論という独自の理論的枠組みを用いて詳細に分析している。この理論は Fauconnier (1985) のメンタル・スペース理論を源泉の一つとしており、スペースを用いて話し手や聞き手の知識の状態や情報の帰属の問題を記述する。田窪(1989b)では、固有名(裸の名詞句)、「という人」(「N<sub>1</sub> という N<sub>2</sub>」)、「というの」(「って/というの」)の使い分けを、おおよそ次のように整理している。

- (37) 裸の名詞句 話し手の現実、および話し手の想定した聞き手の現実においてその記述が成立している要素を示す。  
「N<sub>1</sub> という N<sub>2</sub>」 話し手、聞き手のどちらかあるいは両方が、前もっては知らなかった、あるいは、裸の名詞句を使うには知識が不足しているような要素を示す。  
「って/というの」 値自体が存在しない記述を示す。

田窪(1989b)

田窪(1989b)の理論では、話し手の想定する聞き手の知識が、話し手がどの言語形式を選択するかにおいて重要な役割を果たすと見なされていた。話し手は単に自分が知っているというだけではなく、聞き手も知っているような事物に言及する際に固有名を用いるのであり、自分が知っていても聞き手が知らなさそうな事物を談話に導入する際には「という人」のような表現を用いる。

これに対して田窪・金水(1996)では、言語形式の使用法の記述から聞き手の知識についての想定という要素を排除し、話し手の知識の状態にのみ基づいて言語形式の選択の基本

的原則を再構築している。田窪・金水(1996)の枠組みでは、D-領域、I-領域という概念が中心的な役割を果たす。D-領域は話し手の長期記憶とリンクされた心的領域であり、I-領域は一時的作業領域とリンクされた心的領域であるとされる。

(38) D-領域 (長期記憶とリンクされる)

- 長期記憶内の、すでに検証され、同化された直接経験情報、過去のエピソード情報と対話の現場の情報とリンクされた要素が格納される。
- 直示的指示が可能。

I-領域 (一時的作業領域とリンクされる)

- まだ検証されていない情報(推論、伝聞などで間接的に得られた情報、仮定などで仮想的に設定される情報)とリンクされる。
- 記述などにより間接的に指示される。

田窪・金水(1996)

話し手は、D-領域に登録されている要素(すなわち、自分が知っている要素)については「山田君」のような固有名や「彼」のような代名詞で言及することができる。一方、談話の中ではじめて与えられたような対象(例えば、話し相手によって談話に導入した、自分が直接知らないような対象)は、まずI-領域に登録される。導入のセッションが終わるとI-領域の情報はD-領域に転送され、固有名や代名詞で言及できるようになる。

田窪・金水(1996)が聞き手の知識についての想定という要素を理論から排除したのは、主として二つの理由に基づくように見える。第一に、話し手が聞き手の知識の状態を想定し、ある情報が両者の共有知識になっていることを理解するためには、ある程度深いレベルの推論を行う必要がある。ある知識 *P* が話し手と聞き手に共有されているとは、単に話し手と聞き手がそれぞれ *P* を知っているというだけでは十分ではない。話し手は自分が *P* を知っているだけでなく、聞き手も *P* を知っているのだということを知らなくてはならないし、また聞き手も話し手が *P* を知っているのだということを知らなければ、話し手は知識 *P* が話し手と聞き手の間で共有されているのだと判断することはできない。田窪・金水(1996)によると、話し手と聞き手が知識 *P* を共有していることが保証されるには少なくとも三段階の埋め込みが必要であると言う。田窪・金水(1996)は、このような埋め込みの計算は話し手にとってかなりの認知的な負担であり、無意識的、瞬間的に行われているはずである言語形式の選択のされ方の記述の中には含まれるべきではないと主張する。

第二に、聞き手の知識とは無関係に、話し手の知識のみに基づいて言語形式が選択されているように見える事例が存在する。

(39) A: いい医者を知っているよ。

A: 僕の友人に山田という医者がいる。

B1: その人はまだ独身かい。

B2: 山田という人はまだ独身かい。

B3: その山田という人はまだ独身かい。

B4: ?? 山田さんはまだ独身かい。

B5: ?? 彼はまだ独身かい。

A: 山田君は、君の家の近くで開業しているから、一度たずねてみたら。彼は気さくな人だから親切に教えてくれると思うよ。

田窪・金水(1996)

この例で、A は対象を最初に談話に導入する際には「山田という医者」という記述を用いているが、対象が談話に導入された後は「山田君」のような固有名や「彼」のような代名詞を用いて対象に言及している。これに対して、B は A によって対象が談話に導入された後も、その対象に固有名や代名詞で言及することはできず、「その人」、「山田という人」、「その山田という人」のような表現を用いて対象に言及している。田窪・金水(1996) は、A は対象を直接的に知っているから固有名や代名詞で言及できるが、B は間接的にしか知らないから固有名や代名詞では言及できないのだとしている。従って、固有名や代名詞の使用制限は、共有知識の有無というより、話し手と聞き手がそれぞれ、その対象を直接的に知っているかどうかによって依存しているのだと主張する。

■問題点 田窪・金水(1996)の理論には、いくつかの問題点があるように思える。第一に、田窪・金水(1996)は共有知識を確立するために必要となるような埋め込み推論は、話し手にかなりの認知的な負担を要求すると考えているが、そのような推論が実際にどの程度の負担になるのかが明らかではない。そのような推論が、言語形式の選択についての基本的原則に関与しているとは考えられないほど認知的な負担の重いものだと主張するためには、適切な科学的根拠を示す必要があるように思われる。

第二に、固有名や「という人」のような言語形式の選択には、確かに話し手がその対象を知っているかどうかによって依存している部分があるように見えるが、それだけでは説明できない部分もある。(38)の例では、確かに対象が談話に導入された後は、A は聞き手の知識とは無関係に固有名や代名詞を使用している。しかし対象を最初に談話に導入する際には、A は対象を知っているにも関わらず「山田という人」という表現を用いている。おそらく、話し手と聞き手が共通して知っている人物を談話に導入するような場合には、「山田という人」のような表現を用いず、「山田さん」という固有名を用いて言及するはずである。このような選択を聞き手の知識への配慮を用いずにどのように説明すればいいのかについて、田窪・金水(1996)では明確に説明されていない。

第三に、(38)のBの発話に対して与えられた田窪・金水(1996)の文法性判断の一部が、筆者の内省とは異なる。筆者の内省ではB2の発話は不自然であり、一方でB6のような発話が可能である。

- (39) A: 僕の友人に山田という医者がいる。  
 B1: その人はまだ独身かい。  
 B2: \*山田という人はまだ独身かい。  
 B3: その山田という人はまだ独身かい。  
 B4: \*山田さんはまだ独身かい。  
 B5: \*彼はまだ独身かい。  
 B6: その山田さんはまだ独身かい。

田窪・金水(1996)はAが談話に導入した対象について、Bは固有名や代名詞で言及することはできないと述べているが、(38)を見る限り、Bは固有名を用いることも可能であ

り、それよりも A が導入した対象に対してはソ系の指示形容詞「その」を付けなくてはならないという原則の方が強く働いているように見える。

■形式の選択のための三つの原理 固有名や「という人」のような表現の選択条件について、再整理してみることにしよう。選択のメカニズムは非常に複雑であり、一つの原理で全てを説明できるわけではない。少なくとも、次に示す三つの異なる原理を組み合わせて用いる必要がある。

- (39) a. 話し手の知識の原理  
b. 情報の帰属の原理  
c. 聞き手に対する配慮の原理

第一の原理は、話し手の知識に関する原理である。原則として、話し手は自分が直接知っている事物に言及する場合でなければ固有名や代名詞を用いることはできない。これは田窪・金水(1996)がD-領域に属する知識と呼んだものにおおよそ相当する。

話し手がある事物に固有名で言及しているならば、聞き手は話し手がその対象を(固有名で言及できる程度に)十分知っているのだと判断することが出来る。

- (40) 昨日、マクレガーさんの畑でベンジャミンに会ったよ。

このような発話が与えられたとき、聞き手は話し手がベンジャミンと知り合いなのだと思う。もし聞き手が話し手とベンジャミンは知り合いではないはずだと思っていたら、「ベンジャミンと知り合いだったのか」とか「なぜベンジャミンのことを知っているんだ」というような反応を返すかも知れない。このような反応は、固有名が話し手の知っている事物に言及する場合に用いられるものであることを示している。

これに対して、話し手は自分がよく知らない対象に言及する場合には固有名ではなく「という人」のような表現を用いなければならない。話し手がその対象を知っていると言えるかどうかの境界は曖昧である。話し手と聞き手が、昨日、畑で会ったベンジャミンというウサギについて言及するという状況を考えることにしよう。共有知識の問題を考慮外にするために、話し手と聞き手が一緒にベンジャミンに会ったという状況を仮定することにする。二人とも、ベンジャミンと会うのは初めてである。この状況では、話し手はベンジャミンに言及するために、固有名と「という人」のどちらを用いることもできる。

- (41) a. 昨日、畑であったベンジャミンさんはピーターのいとこだそうだよ。  
b. 昨日、畑であったベンジャミンという人はピーターのいとこだそうだよ。

話し手は、談話の中で初めて知った事物(会話の相手によって談話に導入された事物)に言及する際にも、固有名と「という人」のどちらかを選択することができる。ただしどちらの場合にも、その対象に言及するために「その」という指示形容詞を用いる必要がある。

- (42) (昨日、畑でベンジャミンという人に会ったよ。)  
a. \*ベンジャミンさんはそこで何をしていたの?  
b. そのベンジャミンさんはそこで何をしていたの?  
c. \*ベンジャミンという人はそこで何をしていたの?  
d. そのベンジャミンという人はそこで何をしていたの?

たとえその対象についてほとんど何の情報も持っていなかったとしても、ベンジャミンという名前の人物が相手の知り合いにいるのだということだけ分かっていたら、その対象に固有名で言及するためには十分である。勿論、話し手はその対象のことをあまりよく知らないのであるから「という人」を用いた方がより自然であるかも知れない。いずれにせよ、後で述べるようにその対象は聞き手の領域に属する要素なので、「その」という指示詞を付ける必要がある。

第二の原理は情報の帰属についての原理である。情報が話し手の側に帰属しているか、聞き手の側に帰属しているか、そのどちらでもないのかといったことが、言語表現の選択に影響を及ぼす場合があることが知られている。そのような事例の一つは「よ」「ね」のような終助詞である。「よ」は話し手が知っている情報を聞き手に伝達するような場合に用いられる。一方、「ね」は聞き手が知っている情報を確認したり、同意を求めるような場合に用いられる。

- (43) a. ここが入り口だよ。  
b. ここが入り口だね。

情報の帰属に関わる別の言語表現は指示詞である。指示詞が空間的な指示のために用いられる場合、話し手(あるいは話し手と聞き手)の近くにあるものに言及する場合には「これ」を、話し手(あるいは話し手と聞き手)の遠くにあるものに言及する場合には「あれ」を用いる。一方、話し手と聞き手の位置を対立的に捉えて、聞き手の側にあるものに言及する場合には「それ」を用いる。

- (44) a. これはウサギタバコです。  
b. あれはウサギタバコです。  
c. それはウサギタバコです。

(42)で述べた「そのベンジャミンさん」「そのベンジャミンという人」のような事例は代名詞が非空間的、抽象的な用いられ方をした場合に相当する。相手によって談話に導入された、話し手があまりよく知らない事物は、相手の側に帰属する情報である。そのような事物に言及する場合には、ソ系の指示詞を用いなければならない。

- (45) (昨日、畑でベンジャミンという人に会ったよ。)
- a.  $\left\{ \begin{array}{l} *ベンジャミンさん \\ \text{そのベンジャミンさん} \end{array} \right\}$  はそこで何をしていたの?
- b.  $\left\{ \begin{array}{l} *ベンジャミンという人 \\ \text{そのベンジャミンという人} \end{array} \right\}$  はそこで何をしていたの?
- c.  $\left\{ \begin{array}{l} *彼 \\ \text{その人} \end{array} \right\}$  はそこで何をしていたの?

第三の原理は聞き手への配慮の原理である。原則として、話し手は聞き手に不必要な認知的負担を強いるような言語の使い方をしてはならない。この原理は、話し手は知っているが、聞き手が知らないような事物を談話に導入する際に固有名ではなく「という人」のような表現を用いなければならない理由を説明するために役立つ。

- (46) 昨日、マクレガーさんの畑でベンジャミンという人に会ったよ。



同じような場面で、話し手が固有名で対象を導入するためには、どのような条件が満たされる必要があるのかについて考えてみることにしよう。

(47) 昨日、マクレガーさんの畑でベンジャミンに会ったよ。

(47) のような発話が成立するためには、いくつもの条件が満たされなければならない。第一に、話し手自身がその対象のことを十分に知っている必要がある。これは既に述べた話し手の知識の原理に基づく。第二に、話し手が「ベンジャミン」という固有名で何に言及しようとしているのか、聞き手が容易に同定できると期待できなければならない。これが、ここで述べる聞き手への配慮の原理に相当する。

話し手が「ベンジャミン」という固有名で何に言及しているのか、聞き手が同定できるためには、少なくとも次のような条件が満たされる必要がある。

- (48) a. 聞き手はベンジャミンを知っている。  
 b. 聞き手は話し手がベンジャミンを知っていることを知っている。  
 c. 聞き手は話し手がベンジャミンを「ベンジャミン」と呼ぶことを知っている。

これらの条件が満たされない状況で固有名を使用すると、伝達上のエラーが発生する。聞き手がベンジャミンのことを知らない場合、聞き手は話し手が誰に言及しているのか同定することができない。聞き手がベンジャミンを知っている場合でも、話し手も同じベンジャミンを知っていて、かつその対象を「ベンジャミン」と呼ぶのだということを知らなければ、話し手が言及しているのが自分の知っているベンジャミンのことなのかどうか、うまく判断できないかも知れない。このような場合に聞き手が取ることのできる行動はいくつかあるが、標準的には次のような反応を返す。

- (49) a. ベンジャミンって誰？  
 b. ベンジャミンって、どこのベンジャミン？

同じ状況で、聞き手は「話し手はおそらく自分が知っているベンジャミンに言及しているのだろう」と推定するかも知れない。そのような場合には、聞き手は自分が思っていたのと違って話し手とベンジャミンが知り合いであるらしいことについて、次のような反応を返すかも知れない。

- (50) a. 君がベンジャミンと知り合いだとは知らなかった。  
 b. なぜ君がベンジャミンのことを知っているんだ。

もっと複雑なエラーが発生する場合もある。話し手が固有名を使用しているということは、話し手は聞き手がその対象を容易に同定できるはずだということを期待している。すなわち、話し手は聞き手の知識の状態が (48) のようになっていると想定している。しかし聞き手は、話し手が聞き手の知識に関して (48) のような想定をしているはずがないと思っているかも知れない。例えば、聞き手は「自分とベンジャミンが知り合いであることを話し手は知らないはずだ」と思っているかも知れない。そのような場合には、聞き手は次のような反応を返す。

(51) なぜ君は僕とベンジャミンが知り合いだって知っているんだ。

あるいは、話し手は聞き手が (50b) や (51) のような反応を返すことを期待してわざと固有名を使用するかも知れない。聞き手がそのような反応を返すならば、話し手は聞き手

がベンジャミンのことを知っているのだと確認することができる。「かまをかける」という行為は、原則を意図的に破ることによって伝達上のエラーを発生させ、それに対する相手の反応を見ることによって相手の知識の状態を探るテクニックである。

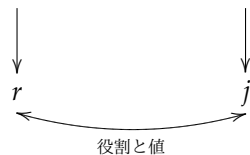
他にどのような種類のエラーがあり得るのかとか、どのくらい深いレベルの推論が行われ得るのかといった問題については、ここではこれ以上立ち入らないことにする。いずれにせよ、話し手は何らかの伝達上のエラーが発生する可能性が予測できる場合には原則として固有名を用いてはならない。そのような場合には、固有名を用いずに「ベンジャミンという人」というような記述を用いて対象を導入する。このような記述を用いることによって、話し手は聞き手がその対象を同定できると期待しているわけではないのだということを示すことができる。聞き手は、話し手の知り合い(あるいは、話し手があまりよく知らない誰か)にそのような名前の人がいるのだということを知覚するだけで、その人は話し手のよく知っている誰かだとか、そのことを自分は知っているはずだというような、それ以上の深読みをする必要がなくなる。

### 3.3 名詞句の解釈と名詞述語文

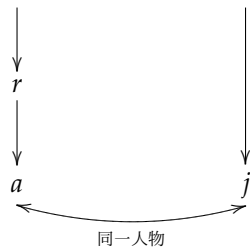
#### 3.3.1 名詞句の解釈に基づく曖昧性

3.2.1 では、客と料理とか、役割と値といった事物や概念の間の語用論的な関係が、メトニミーや役割と値の区別というような名詞句の解釈の多様性を生み出しているのだということを述べた。名詞句の解釈の曖昧性は、名詞述語文の解釈の曖昧性を生み出す。次の事例では、「スミスを殺した犯人」が役割  $r$  を表すか値  $a$  を表すかによって、文全体の解釈にも違いが生じる。

(52) スミスを殺した犯人 は ジョーンズ だ。



(53) スミスを殺した犯人 は ジョーンズ だ。

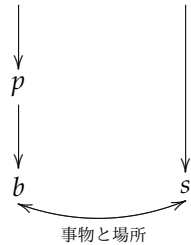


(52) では「スミスを殺した犯人」が役割  $r$  を表しており、主語が表す役割  $r$  と述語が表す値  $j$  が結び付けられている。(53) では「スミスを殺した犯人」が値  $a$  を表しており、スミスの殺害者であるとされる人物  $a$  と別の人物  $j$  が同一人物であるということが述べられている。

定記述句の役割の読みと値の読みの区別と比べると、メトニミーが名詞述語文の類型論的研究において中心的な関心の対象となったことはあまりないように思う。勿論、名詞述語文に含まれる名詞句が換喩的に解釈されるという事例はあり得る。次の事例では、「ブ

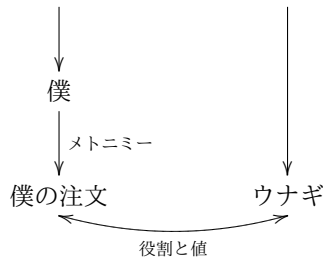
ラトン」はプラトン (=  $p$ ) ではなくプラトンの書いた本 (=  $b$ ) に言及するために用いられており、 $b$  と 棚 (=  $s$ ) が結び付けられている。

(54) プラトンは一番上の棚だ。



メトニミーはむしろ、ある種の名詞述語文の意味解釈についての間違っただ説明のために用いられてきた。その説明とは、ウナギ文のような事例の意味解釈について、「僕」が実際には「僕の注文」の意味で用いられているのだというような説である。

(55) 僕はウナギだ。



本研究では、このような考え方は適当ではないと考える。語用論的関数  $F$  は語の換喩的解釈や定記述句の値としての読みを成立させるためにも作用するが、名詞述語文の主語と述語がどのような関係にあるかという解釈を成立させるためにも作用する。次のような事例では、名詞述語文は客と注文、役割と値を結び付けるために用いられている。

(56) 僕はウナギだ。



(57) スミスを殺した犯人はジョーンズだ。



この考え方は基本的に Fauconnier (1985) の  $be$  動詞についての考え方に則っている。ウナギ文のような事例をどのように取り扱うかについては、第4章で詳しく論じる。

### 3.3.2 定義文とメタ言語

■定義文 3.2.3 では、メタ言語という種類の言語表現について述べた。メタ言語とは、言語表現それ自体に言及する言語表現のことである。名詞述語文の中には、メタ言語が主語の位置に生起し、言語表現とその意味を結び付けるものがある。このような文は定義文と呼ばれる。

(58) ウサギタバコ とは ラベンダーのこと だ。



定義文では、主語名詞句は「とは」あるいは「というのは」という形式で表示される<sup>\*3</sup>。ここでは、「とは」は「というのは」の短縮形であると考えことにする。また、述語名詞句は「のこと」という形式を伴うことが多い。これらの形態的特徴は、定義文と(59b)のような分裂文との間に何らかの関係があることを示唆している。

- (59) a. ラベンダーのことをウサギタバコという。 (平叙文)  
 b. ウサギタバコというのはラベンダーのことだ。 (分裂文)

実際には、定義文は分裂文の一種というわけではない。分裂文は発話に際してその都度生産的に作られるものだが、定義文は文法化された一つの構文であり、発話のたびに分裂文化のようなプロセスを経て生産的に作られるものではない。定義文を構成する「とは」「というのは」のような表現も、文法化された単一の辞と見なすのが妥当である。

しかしながら定義文が本来的には分裂文に由来する構文なのだと考えると、述語名詞句がしばしば「のこと」という形式を取ることにしても、もともとの分裂文、ひいては「という」という述語が持っていた性質の名残なのだと説明することができる<sup>\*4</sup>。形態的にだけでなく、意味的にも何か名残があるという可能性も考えられるが、ここでは特に触れない。

■記号と意味 定義文は、言語記号と、それが意味するものを結び付ける。言語記号が意味するものとは、Frege (1892) の言うところの意義である場合も、意味 (指示対象) である場合もある。

(60) 意義を問題とする定義文

- a. ウサギタバコとは何のことですか？  
 b. ウサギタバコとはラベンダーのことです。

(61) 意味を問題とする定義文

- a. ウサギタバコとはどれのことですか？  
 b. ウサギタバコとはその壁に吊るされている草のことです。

定義文は、言語表現と意味を結び付けるために用いられる構文である。言語表現が表したり指示したりするものとその意味を結び付ける文ではない。次のような文を考えてみることにしよう。

<sup>\*3</sup> 「って」という形式が用いられる場合もある。「ウサギタバコって何?」「ウサギタバコってラベンダーのことだったのか」など。

<sup>\*4</sup> 今田 (2006b) では、定義文を役割-値文の一種として扱う方法を提案した。「ウサギタバコというのはラベンダーのことだ」という文について、「ウサギタバコ」はメタ言語であり、「ウサギタバコというの」という句は「ウサギタバコという言語表現の意味」というような意味の役割概念を表し、文全体はこの役割の値がラベンダーであることを述べる役割-値文であるという考え方である。しかしこの考え方には、なぜ述語名詞句が「のこと」という形式を伴うのかとか、「ウサギタバコとはラベンダーという意味だ/を意味する」という文の意味を説明するためにメタメタ言語というような概念を想定しなければならないなどいろいろな問題がある。ここでは今田 (2006b) の考え方を破棄し、もっと簡単な考え方を取りたいと思う。「意味だ/意味する」についてはこの節の後半で述べる。

- (62) a. あの交通標識は何ですか？  
 b. あの交通標識は一方通行です。
- (63) a. あの交通標識とはどれですか？  
 b. あの交通標識とは塀の上のやつのことです。

(62)では、「あの交通標識」という表現は眼前の交通標識を指示する通常言語であり、その交通標識が何を意味しているのかが問題とされている。「あの交通標識」という表現が何を指示するために用いられているのかが分からないわけではないので、「あの交通標識」という表現自体に言及するメタ言語を用いたり、「とは」のような形式を用いる必要は無い。

(64) 「あの交通標識」 $\rightarrow$  標識<sup>何?</sup> $\rightarrow$  一方通行

これに対して、(64)は「あの交通標識」という表現が何を指示するために用いられているのかが分からないような場合に発話される文である。この文においては、「あの交通標識」という表現は「あの交通標識」という表現それ自体を表すメタ言語として用いられている。(64)は、この表現が何(どれ)を指示しているのかを問題とする定義文である。

(65) 「あの交通標識」<sup>どれ?</sup> $\rightarrow$  標識(塀の上のやつ)

これと同じことが、次のような役割-値文と定義文の対についても言うことができる。

- (66) 役割-値文  
 a. スミスを殺した犯人は誰ですか？  
 b. スミスを殺した犯人はジョーンズです。
- (67) 定義文  
 a. スミスを殺した犯人とは誰ですか？  
 b. スミスを殺した犯人とはジョーンズです。

(66)では、「スミスを殺した犯人」という記述はスミスを殺した犯人という役割  $r$  に言及するための通常言語である。「スミスを殺した犯人」という記述が役割  $r$  に言及するために用いられているということは分かっているので、この文は定義文にはならない。この文は役割  $r$  の値が何であるかを問題とする役割-値文である。

(68) 「スミスを殺した犯人」 $\rightarrow$  役割<sup>誰?</sup> $\rightarrow$  値(ジョーンズ)

これに対して、(67)は「スミスを殺した犯人」という記述が何に言及するために用いられているのかが分からないような場合に発話される文である。ただし、ここで「スミスが殺した犯人」という記述で言及されているのは、役割  $r$  ではなく値の方である。記述が役割ではなく値に言及するために用いられているが、その値が具体的に何であるのかが分からないという場合に(67)のような文が用いられる。

(69) 「スミスを殺した犯人」<sup>誰?</sup> $\rightarrow$  値(ジョーンズ)

これらの一連の事例は、言語表現の意義と意味の区別、定記述句の役割としての読みと値としての読みの区別、言語表現によって表される対象(例えば交通標識)自体がさらに別の何かを意味する場合もあるという事実といった様々な要因が、定義文の意味構造の理解や定義文ではない文との区別を複雑なものにしていることを示している。



- (74) a. ?\* 扉が開くというのは、ふたつの空間が連結するという意味だ。  
 b. \* 月夜というものは、提灯の要らない夜という意味だ。  
 c. \* 十九日まで仕事に出るということは、出発の日の朝まで働きつづけるという意味だ。

### 3.4 まとめ

この章では、名詞句の意味の理論のうち、解釈の理論に属する問題、すなわち名詞句とそれが表すものとの関係に関わる問題について論じた。名詞句とそれが表す概念との間には、非常に豊かな解釈の可能性が存在する。多様な解釈の可能性には、名詞句のメトニミー的な解釈や、定記述句の役割としての解釈と値としての解釈の区別といったものが含まれる。このような解釈の多様性を可能にしているものの一つは、概念間の意味的、語用論的なネットワーク（語用論的関数）とスペースの複雑な構成である。解釈の別の可能性はメタ言語と呼ばれるものであり、名詞句は言語表現自体を表すために用いることもできる。一方では、名詞句の使用にはある一定の認知的な制約が課せられる。裸の固有名は話し手と聞き手が共通して知っているような事物に言及する場合のみ使用が可能であり、そうでないときには「という人」のような表現を用いなければならない。固有名で直接言及できないような事物に言及するために、メタ言語が中心的な役割を果たす。

名詞句の解釈の問題はしばしば名詞述語文の意味論的構造の解釈にも影響を及ぼす。「スミスを殺した犯人はジョーンズだ」という文は、「スミスを殺した犯人」が役割として解釈される場合には役割と値を関係付ける文だが、「スミスを殺した犯人」が値として解釈される場合にはその値である人物と別の人物（ジョーンズ）が同一人物であることを述べる文になる。一方では、一見すると名詞句の解釈が文の解釈に関与しているように見えるが、実際には名詞句の解釈の理論で扱う必要のない事例も存在する。本研究では、料理を注文する際に用いられる「僕はウナギだ」のような文について、「僕」が実際には「僕の注文」を表しているのだというようなメトニミーの関与を仮定しない。このような文の意味をどのように扱うのかについては、第4章の名詞句の意味論的構造の理論で扱う。

言語表現とそれが表すものとの関係を表示するための、特別な名詞述語文がある。定義文は、言語表現とその意味を結び付ける。定義文の主語はメタ言語であり、述語はその表現の意義や意味である。定義文と類似する表現として、「という意味だ」「を意味する」のような述語を持つ文がある。これらの文はいずれも言語表現の意味を述べるために用いることができるが、違うところもある。定義文は専ら言語表現の意味を記述するためだけに用いられるが、「という意味だ」は言語表現以外の記号や身振りの意味を記述することも可能であり、「を意味する」は何かを意味するためにデザインされたのではない事物や事象に対して意味を与えることもできる。

名詞句の解釈の理論は名詞述語文の意味解釈の問題のある一定の部分を担当が、どのような問題を名詞句の解釈の理論で扱うべきかについては十分に検討しなければならない。そのような区別が特に問題となるのは上で述べたウナギ文のような事例であり、名詞述語文の意味解釈の問題のある部分は、名詞句の意味解釈ではなく、名詞述語文が表す要素間の関係の解釈の問題として扱う必要がある。名詞句の意味の理論と名詞述語文の意味の理論を区別することは、名詞述語文の意味に関する多様な問題の所在をより明確なものにする

---

るために重要である。



## 第4章

# 名詞述語文の意味論的構造

### 4.1 はじめに

#### 4.1.1 先行研究

名詞句がどのような事物、概念を表すのかという問題と、それらが文中でどのような意味役割を与えられるのかとか、名詞句によって表される事物や概念が互いにどのような関係にあるのかといった問題は、基本的に分けて考えるべき問題である(図4.1)。本研究では、前者は名詞句の意味解釈の理論で扱うべき問題であり、後者は文の意味論的構造の理論で扱うべき問題であると考え。この章では、名詞述語文の意味論的な特徴のうち、文の意味論的構造に関わる問題について論じる。

名詞述語文の意味論的側面の研究は、しばしば名詞句の意味の問題と文の意味論的構造の問題を明確に切り離さないような形で行われてきた。従ってどの研究が名詞述語文の意味論的構造についての研究であるかを厳密に区別することはできないが、関与的な研究には少なくとも次のようなものがある。

- 三上(1953)は日本語の名詞述語文を措定、指定、端折りの三種に分類した。特に名詞述語文の意味論的構造に注目した研究というわけではないが、後続する多くの意味論的、機能論的研究に影響を与えた。
- 山口(1975)は三上(1953)の措定、指定に相当する構文を、意味論的、機能論的観点から交差的に分類した。意味論的観点からは、二つの名詞句のどちらが内包語でどちらが外延語かという観点から、「内包語{は/が}外延語だ」「外延語{は/が}内包語だ」という二つの類型が区別される。内包語、外延語という言い方は語の意味論を想起させるが、これらは相対的な外延量の広狭によって一方が内包語に、他方が外延語になるのだとされており、要素間の関係についての概念であると理解すること

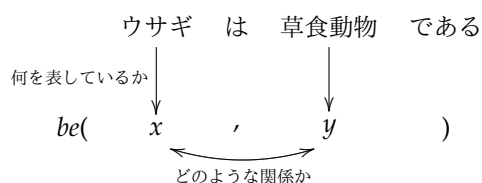


図4.1 語の意味の問題と要素間の関係の問題

ができる。

- 仁田 (1980) は、名詞述語文によって表される意味関係は、基本的には帰属型 ( $A \leq B$ ) か等価型 ( $A = B$ ) のいずれかであるとしている。これはおおよそ三上 (1953) の措定、指定に相当する。三上 (1953) の端折りに相当する「僕はウナギだ」のような文については、実際には「僕が注文するものはウナギだ」という意味で解釈されており、「僕が注文するもの」と「ウナギ」が  $A \leq B$  という関係にあるのだとしている。
- 池上 (1981) は場所理論の観点から、名詞述語文は一般に  $X$  BE WITH  $Y$  という空間的スキーマを基本的な構造にしていると考えている。場所理論 (localist theory) とは、空間的な事物の構造や関係が、様々な非空間的な概念の構造や関係を理解したり、表現したりするために用いられるという考え方であり、Jackendoff (1990) の概念意味論などでも採用されている。
- 高橋 (1984) は、日本語の名詞述語文がどのような意味関係を表すかについて詳細に記述している。名詞述語文によって表される関係には動作づけ、状態づけ、性格づけ、同一づけがあるとされ、さらに細かく分類される。高橋 (1984) の研究は、管見の限り現在まで名詞述語文によって表される事物や概念の関係を最も包括的かつ詳細に記述したものであり、名詞述語文が表す関係の多様性を示している。
- 野田 (1985) は三上 (1953) の措定、指定に相当する文を内包文、外延文という言い方で区別している。山口 (1975) の考え方と似ているが、野田 (1985) の方が明確に名詞句よりも文全体の意味論的構造を問題としているように見える。
- Fauconnier (1985) は、日本語ではなく英語のコピュラ文についてであるが、be 動詞は関与するコネクターの種類が分かっている場合には、トリガーとターゲットを結び付ける働きがあるとしている。be 動詞は換喩的關係にある二つの事物、異なるスペースに属する対応物、役割と値といった要素を結び付ける。
- 益岡・田窪 (1989) は三上 (1953) の措定、指定、端折りに相当する文を、「B が指し示す集合に A が属する場合」「A と B が同一のものを指し示す場合」「A と B の間に直接的な論理関係が存在しない場合」として特徴付けている。この分類は、名詞述語文の表す関係を論理的関係によって記述した標準的なものである。
- 丹羽 (2004) は三上 (1953) の措定、指定に相当する構文を包摂関係を表すものと同じ関係を表すものとして区別している。またこれとは別に、名詞述語文は集合と構成要素という観点から同等関係、指定関係、帰属関係の三つに分類することもできるとしている。同一関係は同等関係、指定関係、帰属関係の三つと対応し、包摂関係は帰属関係と対応する。

いくつかの研究は、内包と外延 (山口, 1975; 野田, 1985)、集合と要素 (仁田, 1980; 益岡・田窪, 1989; 丹羽, 2004) といった論理学的概念を用いて名詞述語文の二つの名詞句の関係を記述している。別の研究は論理学的一般化はせず、記述的観点から名詞述語文の主語と述語の意味論的關係の多様性を記述している (高橋, 1984)。別の研究は、理論的観点から名詞述語文によって表される多様な関係の背後にある一般的なスキーマに言及している (池上, 1981; Fauconnier, 1985)。

### 4.1.2 問題点

名詞述語文の意味論的構造の理論を考える上で、いくつかの問題を考える必要がある。論点とすべき問題には、少なくとも次のようなものがある。

- 名詞述語文の意味のどの部分を文の意味論的構造の部門で取り扱うか。
- 名詞述語文によって表される関係にはどのようなものがあるか。
- 名詞述語文によって表される関係には一定のパターンが存在するのか

第一の問題は、名詞述語文の類型的特点のどの部分を意味論や機能論のどの部門で扱うべきかという、本研究全体の中心的なテーマに関わる。ごく簡単な事例について考えてみることにしよう。

- (1) a. ジョーンズ は正気じゃない。  
 b. スミスを殺した犯人は正気じゃない。  
 c. スミスを殺した犯人はジョーンズだ。

西山(2003b)の分類では、(1a, b)は措定文に、(1c)は倒置指定文に相当する。(1b)は主語名詞句の解釈について曖昧性を持つが、ここでは属性的用法<sup>\*1</sup>(attributive use)と呼ばれる解釈のみを問題とする。西山(2003b)は措定文と倒置指定文は主語名詞句の指示性に関して違いがあると考えている。措定文(1a, b)の主語は(属性的用法であっても)指示的であり、倒置指定文(1c)の主語は非指示的であると言う。

- (2) a. ジョーンズ は正気じゃない。  
指示的名詞句  
 b. スミスを殺した犯人は正気じゃない。  
(属性的用法の)指示的名詞句  
 c. スミスを殺した犯人はジョーンズだ。  
変項名詞句

これに対して、Fauconnier(1985)の意味論では(1b)のような文の主語名詞句(すなわち属性的用法の名詞句)と(1c)のような文の主語名詞句は意味論的に区別せず、どちらの名詞句も役割というタイプの概念を表しているのだと考える。この考え方では、(1a, b)は個体  $j$  や役割  $r$  が正気じゃないという属性を持っていることを述べており、(1c)は役割  $r$  の値が個体  $j$  であることを述べているのだと説明される。

- (3) a. ジョーンズ は正気じゃない。  
個体  
 b. スミスを殺した犯人は正気じゃない。  
役割  
 c. スミスを殺した犯人はジョーンズだ。  
役割

これは措定文や倒置指定文といった名詞述語文の記述的類型をどのように特徴付けるかについて、対立するいくつかの考え方があるのだということを示している。西山

<sup>\*1</sup> (1b)の文には二つの解釈がある。一つはスミスを殺した犯人が誰かは分からないが、それが誰であれ正気ではないという読みである。もう一つはスミスを殺した犯人であるとされるジョーンズは正気ではないという読みである。Donnellan(1966)は前者を属性的用法(attributive use)、後者を指示的用法(referential use)と名付けた。

(2003b) の考え方では (1a, b) の類型性は主語名詞句の意味論的特性に基づいて説明され、Fauconnier (1985) に基づく考え方では (1a, b) と (1c) は主語と述語の関係に基づいて説明される。実際には (1a, b) と (1c) の間には機能論的な違いもあり、それらの特徴のどの部分を理論のどの部門で取り扱うべきかについて、注意深く判断する必要がある。

第二の問題は、名詞述語文の意味論的構造をどのように組織化するかという問題に関わる。非常に一般的な意味において、名詞述語文は二つの事物や概念の間に何らかの関係があるのだということを表す。これは一般的には、 $be(x, y)$  のような形式で記述することができる。しかしこのような抽象的なレベルでの一般化は、名詞述語文が事物や概念の間のような関係を表しているのかということを理解する上ではあまり役に立たない。関係を記述するために伝統的に用いられてきた方法の一つは集合論的な帰属関係や同一関係といった概念を用いるというものである (仁田, 1980; 益岡・田窪, 1989; 丹羽, 2004, et al.)。この考え方は多様な関係をおおまかに整理する上では役に立つが、説明できる事柄には限界がある。集合論的關係で記述できない関係の代表的な事例はウナギ文と呼ばれるものである。「僕はウナギだ」という文は、料理を注文する場面で用いる場合には「僕」と「ウナギ」が客と注文の関係にあることを表すことができる。このとき「僕」と「ウナギ」の間には、どのような集合論的關係も存在しない。

- (4) 僕はウナギだ。  
 $\neq$  僕  $\in$  ウナギ  
 $\neq$  僕 = ウナギ

いくつかの研究は、論理学的一般化とは別の観点から、名詞述語文によって表される関係には非常に多様な種類のものがあるのだということを記述している (高橋, 1984; 新屋, 1989; 角田, 1996; 澤田, 2003)。名詞述語文は対象と場所、対象と数量、対象と構成部分というような多様な関係を表すことができる。しかし名詞述語文が表す関係に何種類ぐらいの類型が存在し、それらをどのように分類、記述すべきかについて、明確な方法論は確立されていない。

第三の問題は、名詞述語文が表す関係の多様性をどのように整理すればいいのかという問題に関わる。特にウナギ文のような事例に関して、対立する二つの考え方がある。一つは、名詞述語文が表すことのできる関係にはある一定のパターン (帰属関係や同一関係など) があり、ウナギ文のような事例はそれらの基本的なパターンに還元された上で解釈されるのだというものである。もう一つは、名詞述語文は状況に応じてかなり多様な関係を表すこと可能であり、わざわざ他の基本的なパターンに還元する必要は無いというものである。

- (5) 
  
 僕はウナギだ。  $\swarrow$  僕の注文 = ウナギ (基本的関係 = に還元する)  
 $\searrow$  僕  $\leftrightarrow$  ウナギ (多様な関係  $\leftrightarrow$  を認める)

これは名詞述語文が表す関係には一定のパターンがあるのか否かというごく基本的な問題についてさえ、対立する二つの考え方があるのだということを示している。この問題はまた、ウナギ文のような事例の意味解釈の問題を理論のどの部門で扱うのかという第一の問題とも関わる。前者の考え方は統語論か名詞句の意味の理論にある一定の仕事を与えることになり、後者の考え方は文の意味論的構造の理論に一定の仕事を与えることになる。

### 4.1.3 理論的枠組み

本研究では、名詞句の意味の理論、文の意味論的構造の理論、文の機能論的構造の理論を区別して扱う。意味論的構造に関して言うと、名詞述語文「XはYだ」は一般には  $be(x, y)$  という意味論的構造に対応する。この構造は、二つの要素  $x$  と  $y$  が何らかの関係にあるのだということを意味する。

#### (6) 名詞述語文の意味論的構造

$$\llbracket X_i \text{ は } Y_j \text{ だ} \rrbracket = be(x_i, y_j)$$

名詞述語文によって表される関係には非常に多様な種類のものがあるが、本研究では便宜的に次の四つの類型を立てておきたいと思う。

- (7) a. 帰属関係      ウサギは草食動物だ。
- b. 同一関係      明けの明星は宵の明星だ。
- c. 役割-値関係    この部屋の温度は19度だ。
- d. 隣接関係      僕はウナギだ。(料理を注文する場面で)

この分類は部分的には伝統的な論理学的類型に基づいている。論理学的には、名詞述語文には帰属関係 ( $x \in y$  または  $x \subseteq y$ ) を表すものと同一関係 ( $x = y$ ) を表すものがあると見なされてきた。役割-値関係は  $x = y$  という関係の一種と見なされることもあるが、内包的概念とその外延を結び付ける文であり、多くの研究者が名詞述語文の主要な類型の一部と見なしている。隣接関係は、いわば「その他」の関係を表す文である。名詞述語文には、集合論的な帰属関係や同一関係では説明できないような、多様な事物や概念の間の関係を表す文がある。ウナギ文と呼ばれる事例はその代表的な事例である。

このような類型の設定(特に隣接関係のような類型を設定すること)は、名詞述語文が表す関係について、かなりの程度、多様性を認めるということの意味する。本研究では、名詞述語文は基本的にはいくつかの限られた種類の関係(帰属関係や同一関係など)しか表すことができず、それ以外の関係を表しているように見える事例も実際にはより基本的な関係に置き換えて理解されているのだというような考え方は取らない。例えば「僕はウナギだ」という文について、この文は実際には「僕の注文はウナギだ」という意味で解釈されており、役割-値関係を表す文の一種なのだというような考え方は取らない。「僕」は特定の人物、「ウナギ」は料理を表しており、文は二つの要素が客と注文の関係にあることを表しているのだという考え方を取る。

$$(8) \text{ 僕}_1 \text{ はウナギ}_2 \text{ だ。} \rightarrow be(x_1, y_2)$$

本章の構成は以下の通りである。4.2節では、帰属関係、同一関係、役割-値関係、隣接関係という四つの基本的類型について述べる。4.3節では、特に隣接関係を表す事例について、他の基本的関係に還元するのではなく、名詞述語文は多様な関係を表すことができるのだという考え方を示し、また名詞述語文によって表される多様な関係にどのようなものがあるのかについて、いくつかの具体的な事例を示す。



## 4.2 関係の基本的類型

### 4.2.1 帰属関係

帰属関係は、名詞述語文によって表される関係のうち、最も基本的なものの一つである。事物が属する種や、種が属する類を記述するために用いられる。

- (9) a. ピーターはウサギだ。  
b. ウサギは草食動物だ。

これらの文は、二つの事物や概念が下位概念と上位概念の関係にあるのだということを表している。 $be(x\ y)$  というスキーマを用いて記述すると、(9a, b) の文はそれぞれ次のような意味論的構造を持っているのだと考えることができる。*Peter*、*Rabbit*、*Herbivore* はそれぞれ「ピーター」「ウサギ」「草食動物」に相当する概念とする。

- (10) a.  $be( Peter \cdot Rabbit )$   
  
 b.  $be( Rabbit \cdot Herbivore )$   


二つの概念の関係をもう少し具体的に記述したいと思うとき、標準的に用いられる考え方は、上位概念を事物が有する属性として解釈するというものである。この考え方では、述語として用いられる「ウサギ」や「草食動物」は *rabbit'* や *herbivore'* という述語として翻訳される。*rabbit'* という述語は、事物がウサギという範疇に属するのだとか、ウサギ性という性質を持っているのだという意味の属性を意味する。主語として用いられる「ピーター」や「ウサギ」を  $p$ 、 $r$  と記述することにすると、(9a,b) は次のように記述することができる。

- (11) a.  $rabbit'(p)$   
b.  $herbivore'(r)$

(11) で、 $p$  は個体、 $r$  は種 (kind) というタイプの存在物である (第2章参照)。名詞句によって表される存在物には、他に役割 (role) と呼ばれるものがある。Fauconnier (1985) は、定記述句 (definite descriptions) は第一次的には役割を表すが、二次的には役割の値を表すとしている (第3章参照)。次の例は、主語が役割を表すか値を表すかによって二通りの解釈を持つ。

- (12) スミスを殺した犯人は医者だ。  
a.  $doctor'(r)$   
b.  $doctor'(j)$

(12a) はスミスが特殊なやり方で殺されており、誰であれこのような殺し方をした犯人は医者に違いないというもので、Donnellan (1966) の言う属性的な読みに対応する。この読みでは、主語はスミスを殺した犯人という役割  $r$  を表しており、その  $r$  が医者であるという属性を持っている。(12b) は単にスミスを殺した犯人であるジョーンズが医者であるというもので、Donnellan (1966) の言う指示的な読みに対応する。この読みでは、主

語は役割ではなくその値  $j$  を表す。どちらの場合も、「医者」は役割  $m$  や値  $j$  が持つ属性 *doctor'* を表しており、文は主語と述語の帰属関係を表している。

「ウサギ」や「草食動物」のような種を表す名詞句と同じように、「スミスを殺した犯人」のような役割を表す名詞句も述語として用いて事物が属する範疇を叙述することができる。次の例は、ジョーンズがスミスを殺した犯人という範疇に属することを表す。

- (13) ジョーンズはスミスを殺した犯人だ。  
 = *murderer'(p)*

理論上は、(13) で「スミスを殺した犯人」が役割ではなく値を表す読みも存在する。その場合には、(13) はジョーンズ  $j$  とスミスを殺した人物であるとされる特定の人物  $a$  が同一人物であるという読み (= *be(j, a)*) になり、次節で述べる同一関係を表す文になる。

#### 4.2.2 同一関係

名詞述語文によって表される関係の別の種類のもは、同一関係である。名詞述語文は様々な事物や概念を同一物として結び付けるために用いられる。次の事例では、それまで二つの別々の事物や概念だと思っていたものが、実際には同じものなのだという事を知るために名詞述語文が用いられている。

- (14) a. 明けの明星は宵の明星だ。  
 b. ジキル博士はハイド氏だ。  
 c. ハリネズミはヤマアラシだ<sup>\*2</sup>。  
 d. 二等辺三角形は二等角三角形だ。

次の事例では、話者の目の前にある事物と、知識の中にある別の事物が結び付けられている。

- (15) a. あそこにいる男はジキル博士だ。  
 b. あの星は金星だ。

別の場合には、名詞述語文は異なる領域 (Fauconnier (1985) がスペースと呼ぶもの) に属する二つの要素を結び付ける。Fauconnier (1985) が挙げているのは (16) のような例で、これは (17) のように日本語でも成立する。

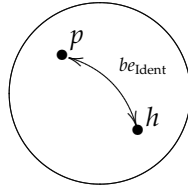
- (16) a. In that picture, **Lisa is the girl with blue eyes.**  
 b. In that movie, **Cleopatra is Liz Taylor.**  
 c. **If Jerry was Napoleon, he wouldn't make so many mistakes.**  
 d. **Dean thought that Jerry was Napoleon.**
- (17) a. その絵では、リサは青い目の女の子だ。  
 b. その映画では、クレオパトラはエリザベス・テラーだ。  
 c. もしジェリーがナポレオンなら、彼はそれほど多くの誤りは犯さない。  
 d. デイーンはジェリーがナポレオンだと思っている。

<sup>\*2</sup> 実際にはハリネズミとヤマアラシは別の動物だが、ここでは問題としない。

同一であるということがどのようなことであるのかという哲学的な問題については、ここではあまり深く立ち入らないことにしたい。ここでは簡単に、同一関係とは二つの異なる事物や概念の間の関係なのだと考えておくことにする<sup>\*3</sup>。「明けの明星は宵の明星だ」という文では、二つの別々の事物  $p$  と  $h$  が同一であるという関係によって結び付けられる。ここでは同一関係を  $be_{Ident}$  という述語で記述することにする<sup>\*4</sup>。

(18) 明けの明星は宵の明星だ。

$$= be_{Ident}(p, h)$$

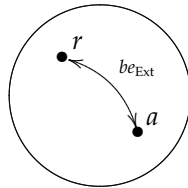


### 4.2.3 役割-値関係

名詞述語文の別の種類のものは、役割と値を結び付ける。非常に多くの種類の概念が、状況に応じて値が変わり得るような(あるいは値を持たなかったり、常に一定の要素を値とするような)役割として機能する。Fauconnier (1985) は役割を文脈パラメータに応じて値が変わるような関数として記述した。役割を  $r$ 、値を  $a$ 、役割と値の関係を  $be_{Ext}$  と書くことにすると<sup>\*5</sup>、役割と値を結び付ける文の意味は一般に  $be_{Ext}(r, a)$  と書くことができる。

(19) 優勝者はジョンだ。

$$= be_{Ext}(r, a)$$



Fauconnier (1985) は役割を文脈パラメータ  $m$  に応じて異なる値を取る関数として記述していた。この考え方では、役割  $r$  と値  $a$  の関係は  $a = r(m)$  のように記述される。本

<sup>\*3</sup> 哲学者の中には、二つの異なる事物が同一であるということはある得ず、同一性とは二つの異なる事物の間の関係ではあり得ないのだと考える人もいるかも知れない (cf. "That identity is not a relation between objects is obvious" (Wittgenstein, 1922, 5.5301)。野矢 (2002, 114ff.) も参照)。Fauconnier (1985) も単一のスペース中の二つの要素の間に同一性の関係が成立することはあり得ず、"Hesperus is Phosphorus" のような文は異なるスペースに属する二つの要素を結び付けているのだと考えている (Fauconnier, 1985, §5.2)。ここではそのような哲学的問題には立ち入らずに、単に同一スペース中の二つの要素  $p$  と  $q$  を同一物という関係で結び付けても構わないのだと考えておくことにする。なお Fauconnier (1985) は役割という概念については、同一スペース中の二つの役割の間に等値 (常に同じ値を取る) という関係が成り立つと考えている (Fauconnier, 1985, §2.2)。

<sup>\*4</sup> = という記号を用いないのは、この記号が数学や論理学で一般的に使われる記号であり、 $p = h$  のような書き方をすると  $p$  と  $h$  が名前の違うだけの同一物であるという印象を与えるかも知れないと思うからである。ここでは  $p$  と  $h$  は別々の心的構成物であり、同一関係とは二つの概念の間の関係であるという考え方を取るので、特に  $be_{Ident}$  という別の記号を用いて記述することにする。

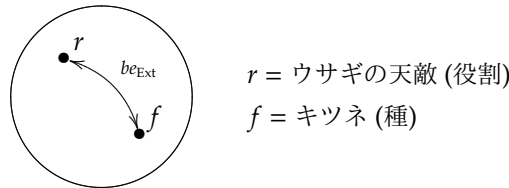
<sup>\*5</sup> Ext は Extension(外延)の略。すぐ後で述べるように、役割と値は内包と外延の関係にある。



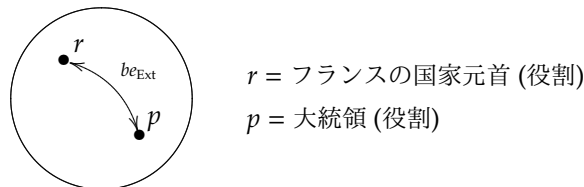
研究では役割を関数として記述する方法は取らない(第2章参照)。単に二つの要素  $r$  と  $a$  の間に役割と値の関係  $be_{Ext}$  があるのだという書き方をする。

役割と値は内包と外延の関係にある。ただし役割の値は特定の人物のような個別的な事物である必要はない。役割の値が種や役割のような内包的概念であるという場合もあり得る。

(20) ウサギの天敵はキツネだ。



(21) フランスの国家元首は大統領だ。



(21) は、フランスの国家元首 (=  $r$ ) という役割の値が大統領 (=  $p$ ) であることを述べているが、 $p$  もまた別の要素  $s$  (例えばサルコジ) を値として持つような役割である<sup>46</sup>。

役割-値関係を表す文には機能論的に非常に重要な特徴がある。役割-値関係を表す文は、通常、役割が値を持つことを前提としてその値が何であるかを述べるために用いられる。(22a) の文は「ピーターのいところ」が表す役割  $r$  が値  $x$  を持つことを前提として、その  $x$  がベンジャミン (=  $b$ ) であることを述べている。この文を (22b) のように否定文にしても、 $x$  が  $b$  であるということが否定されるだけで、 $r$  が値  $x$  を持つ (ピーターにいところがある) ということは否定されない。

(22) a. ピーターのいところはベンジャミンだ。

b. ピーターのいところはベンジャミンではない。

このような特徴は、役割-値関係を表す文が持つ機能論的な特徴である。文の意味論的特徴と機能論的特徴が独立したものであるということを強調しておきたい。役割-値関係を表す文が  $r$  の値である  $x$  の存在を前提としてそれが  $a$  であることを述べる文であるのに対して、帰属関係や同一関係を表す文は基本的には主語名詞句が表す事物に対応するような  $x$  が存在するということは前提とされていない。次の (23a) は、特別な文脈や音韻的強勢を伴わない限り、単にピーターがベンジャミンと同一人物であるということを述べているだけであり、ピーターと同一人物であるような  $x$  が存在することを前提としてその  $x$  がベンジャミンであると述べているわけではない。この文を (23b) のように否定文にし

<sup>46</sup> 西山 (2003b) は役割ではなく変項名詞句という概念を用いているが、より興味深い例を示している。「この種の実験で一番大切なことは、その実験室の温度だ」(西山, 2003b, p.139)。(21) の例では  $r$  と  $s$ (= $p$  の値) を直接結び付けて「フランスの国家元首はサルコジだ」のような文を作ることでもできるが、西山 (2003b) の例では「一番大切なこと」と温度の外延を直接結び付けて「この種の実験で一番大切なことは、17度だ」(ibid.) のような文を作ることにはできない。



- c. 同社の設立登記は十四日だった。 (出来事-時間)  
 d. 新婚旅行はマチュピチュ遺跡だった。 (旅行-目的地)  
 e. 新春は毎年、根岸の家でしたが、... (時候-滞在地)  
 f. 七一年がニクソンショック、八三年は日米円ドル委の発足だ。 (時間-出来事)  
 g. 贈賄側の関係者は三年以下の懲役か百万円以下の罰金だ。 (犯人-刑罰)

(26c-g) の出典は毎日新聞 (1995 年)、一部改変

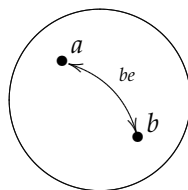
(26a) はウナギ文という名称で知られる事例である (奥津, 1978)。この文は字義通り「僕」が「ウナギ」という範疇に属するという意味で用いることもできるが、料理を注文するような場面で用いられる場合には、客と注文を関係付ける。(26b) は事物とそれが存在する場所を結び付けている。(26c-g) は新聞テキストから集めた事例であるが、いずれも集合論的には帰属関係にも同一関係にもないような二つの事物や概念が互いに結び付けられている。

このような事例の意味をどのように取り扱うかについて、過去に様々な考え方が提案されてきた。考え方の一つは、統語論的変形や意味論的変換 (換喩など) を用いて、これらの文をより基本的な意味論的構造を持つ文に還元しようというものである。名詞述語文は基本的に、帰属関係、同一関係、役割-値関係といったいくつかの限られた数の関係しか表すことができないのであり、(26) のような文も何らかの変換によって、そのような基本的な関係に置き換えられて解釈されているのだという考え方である。

本研究では、そのような考え方は取らない。名詞述語文は、条件さえ揃えば非常に多様な種類の関係を表すことができる。「僕はウナギだ」という文は、統語的には「僕」と「ウナギ」という二つの名詞句を含む名詞述語文であり、意味的には「僕」が人物  $a$  を、「ウナギ」が料理  $b$  を表し、文は二つの事物が何らかの関係  $be$  にあることを表している。

(27) 僕はウナギだ。

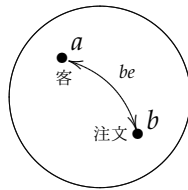
$$= be(a, b)$$



関係が具体的にどのようなものであるかは、語用論的な解釈に依存する。帰属関係、同一関係、役割-値関係といった関係は、名詞述語文によって表される関係の中でも中心的なものである。主語が事物、述語が種を表すような文は、標準的には事物と種の帰属関係を表しているのだと解釈される。ウナギ文の場合も、特に文脈が与えられない場合には、話者は自分のことをウナギだと思っているのだという意味で解釈される可能性がある。

しかし関係は、これらの基本的な関係のうちのいずれかである必要は無い。我々は帰属関係、同一関係、内包と外延の関係といった基本的な関係以外の非常に多様な関係を認識し、理解することができる。ウナギ文が料理を注文するという場面で用いられた場合には、「僕」と「ウナギ」は客と注文という関係で結び付けられる。

(28)



帰属関係の場合とは違って、このような関係の理解のためには、発話する状況(注文の場面)や、その状況と結び付けられたフレーム的な知識(客、ウェイター、料理といった状況を構成する要素や、それらの役割、標準的な行動など)というような様々な背景の知識や認知能力を働かせる必要がある。しかし条件さえ満たされるならば、我々は「僕」と「ウナギ」が客と注文の関係にあるのだということを理解することが可能である。我々が認識し、理解できる関係が、帰属関係や同一関係のようないくつかの基本的な関係に限られるのだと考える理由はまったくない。

論理的には  $A \in B$  と  $A = B$  とも記述することができないような事物や概念の間の関係を、ここでは一般に隣接関係と呼ぶことにする。ここで述べた考え方が従来の他の考え方とどのように異なるのか、このような関係はどのようにして理解されるのか、このような関係を表す名詞述語文には具体的にどのような事例があるのかなどについて、もう少し詳しく述べる必要があるだろう。この章の残りの部分は、特に事物や概念の間の隣接関係を表すような名詞述語文の事例を中心として、本研究における名詞述語文の意味論的構造の取り扱いの詳細について論じ、具体的な事例の分析を行う。

## 4.3 関係解釈の原理と諸事例

### 4.3.1 構造と解釈

関係のどの部分を文の意味論的構造の一部と見なし、どの部分を文の構造とは独立の解釈の問題と見なすべきだろうか。特にウナギ文を中心として、あまり典型的ではない種類の名詞述語文の構造や意味をどのように解釈するのかについて、いろいろな考え方が提案されてきた。主要な考え方としては、少なくとも次の二つの考え方があるように思われる。

#### (29) 関係理解の構造主義的な見方

名詞述語文はせいぜい決まったパターンの関係しか表せないようになっている。ウナギ文のような種類の文も、基本的にはパターンに当てはまるような形で理解される。

#### (30) 関係理解の解釈主義的な見方

名詞述語文はせいぜい二つの要素が何らかの関係にあるのだということを表しているだけに過ぎない。具体的にどのような関係であるのかは、言語構造とは独立の解釈のレベルの問題である。

前者の考え方は、関係の解釈を最大限、言語構造のレベルで解決しよう(一般化しよう)とする考え方である。名詞述語文はある一定の決まったパターンの関係しか表せないような言語構造になっているのだと考える。後者の考え方は、言語構造のレベルで行う仕事は最小にして、構造とは独立のより一般的な解釈のレベルで関係の解釈の問題を処理しよう

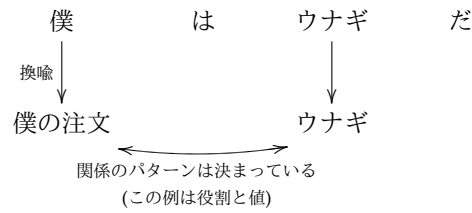


図 4.2 関係解釈の構造主義的見方

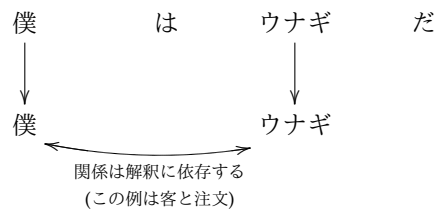


図 4.3 関係解釈の解釈主義的見方

とする考え方である。二つの考え方は、それぞれ図 4.2、図 4.3 のように図示することができる。図 4.2 は、関係理解の構造主義的な見方のうち、後で意味論的還元説と呼ぶものの一種(名詞句の換喩を用いたもの)に相当する。

構造主義的な見方は、さらに統語論的な考え方と意味論的な考え方に区別することができる。統語論的な考え方では、ウナギ文はより基本的なパターンの文から統語的変形によって派生されると考えられる。意味論的な考え方では、ウナギ文の意味を理解するために統語論的な変形は仮定しないが、意味解釈のレベルでより基本的なパターンの関係に還元して解釈しようとする。この意味論的な還元はしばしば名詞句を換喩的に解釈することによって行われる。これらをそれぞれ統語論的変形説、意味論的還元説と呼ぶことにすると、ウナギ文のような種類の文の意味を理解するために少なくとも次のような考え方があるということになる。

- (31) a. 構造主義的見方  $\left\{ \begin{array}{l} \text{統語論的変形説} \\ \text{意味論的還元説} \end{array} \right.$   
 b. 解釈主義的見方

#### 4.3.2 構造主義的な見方

■統語論的変形説 関係解釈の構造主義的な見方には、統語論的な考え方と意味論的な考え方がある。統語論的なアプローチでは、ウナギ文のような事例はより一般的な文からの派生であると考えられる。この考え方には、少なくとも次のような種類のものがある。

##### (32) 統語論的変形による分析

###### a. 述語代用説 (奥津, 1978)

- 僕は ウナギを 食べる  
 → 僕は ウナギを だ ...「ダ」による述語の代用  
 → 僕は ウナギ だ ...格助詞の消去

## b. 分裂文説 (北原, 1981)

僕が ウナギが 食べたい  
 → 僕が食べたいのは ウナギだ  
 → 僕のは ウナギだ  
 → 僕のは ウナギだ  
 → 僕は ウナギだ

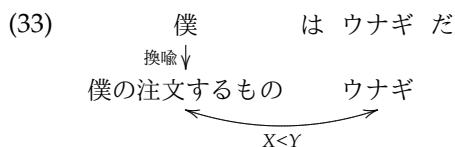
## c. 「象は鼻が長い」文説 (川本, 1976)

僕の (あれが) ウナギだ  
 → 僕は (あれが) ウナギだ  
 → 僕は ウナギだ

奥津 (1978) の述語代用説は、「食べる」のような述語が省略されて代わりに「だ」が置かれるという考え方である。北原 (1981) の分裂文説は、まず「僕が食べたいのはウナギだ」のような分裂文構造が作られて、その分裂文の主語(「僕が食べたいの」)の内部で省略が起こるという考え方である。川本 (1976) の「象は鼻が長い」文説は「象の鼻は長い」から「象は鼻が長い」という文が派生されるという説を利用したもので、「僕の(あれが)ウナギだ」のようなもともと名詞述語文であるものから、主語の一部が主題化されて、残りの部分が省略されるという考え方である。「あれ」が何であるのかははっきりと分からないが、言語外文脈に委ねられるものであり、最後まで言語表現化されないものであるとされる。

■意味論的還元説 意味論的なアプローチでは基本的に統語論的な変形は仮定されない。「僕はウナギだ」という文は、単に「僕」と「ウナギ」という二つの名詞句を含む名詞述語文であると見なされる。代わりに、名詞句や文の解釈を複雑にすることによって、より基本的な種類の名詞述語文と同じ意味論的構造の文に還元しようとする。

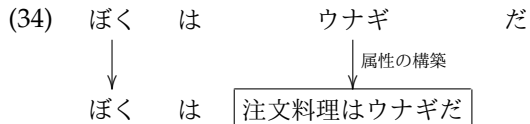
筆者がこの考え方の一種だと思ふ考え方には、仁田 (1980)、西山 (2003b)、山本 (2006) が含まれる。仁田 (1980) は、名詞述語文は基本的に  $X \leq Y$  という帰属関係を表すか  $X = Y$  という等価関係を表すのだとしている。「僕はウナギだ」のような文は、字義通り「僕」と「ウナギ」が帰属関係にあるのだと解釈しようとする意味が通らないので、「X」を何らかの形で限定化、特殊化して、「僕の注文するものはウナギだ」のように  $X \leq Y$  の形で解釈されるのだと説明する。仁田 (1980) はメトニミーという言い方はしていないが、この考え方は名詞述語文の主語を換喩的に解釈することによって、より基本的な意味論的關係を表す文に還元する考え方の一種と考えることができる。仁田 (1980) の考え方は、おおよそ次のように図示することができる。



これに対して、西山 (2003b) はウナギ文の主語名詞句を換喩的に解釈する考え方について否定的な証拠を提示している<sup>\*7</sup>。西山 (2003b) は代案として、「ぼくはウナギだ」とい

\*7 西山 (2003b) の提示する否定的な証拠には次のようなものが含まれる。第一に、「ぼく」が「ぼくの注文料理」を表すというような換喩は、ウナギ文以外の文でも一般的に成立するものではない。第二に、ウナギ文の主語名詞句は人称代名詞で照応することはできるが、「それ」のような指示詞で照応することはで

う文は実際には「ぼくは、注文料理はウナギだ」というような意味で解釈されているのだという考え方を提案する。この考え方では、「ウナギ」が実際には「注文料理はウナギだ」という意味で解釈されるという一種の換喩が用いられているように見える。ただし西山(2003b)は換喩という言い方はしておらず、「ウナギ」はそれ自体は属性を表しているのではないが、「注文料理はウナギだ」という属性を構築するための手掛かりを与えるのだという言い方をしている。



このとき、「ぼく」と「注文料理はウナギだ」は指示的名詞句と属性表現の関係(西山(2003b)の言う指指定文)にあり、「注文料理」と「ウナギ」は変項名詞句と値の関係(西山(2003b)の言う倒置指定文)にあるのだと言う。西山(2003b)は主語名詞句の換喩的解釈というアプローチを否定しつつ、別の方法でウナギ文の意味を他の基本的な類型(指指定文や倒置指定文)の意味論的構造に還元している。

山本(2006)は、メトニミーという考え方をを用いてウナギ文の意味解釈の問題を論じている。ただしメトニミーには語のレベルで作用するものと節のレベルで作用するものがあり、ウナギ文において作用しているのは節のレベルのメトニミーであるという\*8。山本(2006)の考え方は、おおよそ次のように図示することができる。

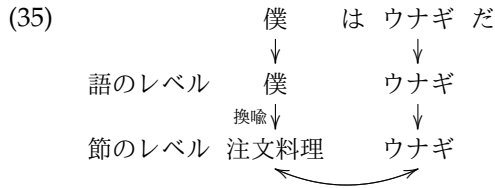
きない。第三に、ウナギ文の主語について量化詞や数量詞を用いるときは、「全員」や「3人」のような量化詞や数量詞は用いることができるが、「全部」や「3つ」のような量化詞や数量詞は不自然になる。第二の点については、次節でも触れる。

1.  $\left\{ \begin{array}{l} \text{ぼくの注文料理} \\ *ぼく \end{array} \right\}$  はおいしい。 (一般性の欠如)
2. 花子さんは天井かな。 / ああ、 $\left\{ \begin{array}{l} \text{彼女} \\ ?それ \end{array} \right\}$  はウナギだよ。 (代名詞の照応)
3. 学生は  $\left\{ \begin{array}{l} \text{全員 / 3人} \\ ?全部 / 3つ \end{array} \right\}$  ウナギだ。 (量化詞・数量詞の振る舞い)

\*8 山本(2006)は特徴づけメトニミーと連結メトニミーという二種類のメトニミーを区別する。特徴づけメトニミーと連結メトニミーは、代名詞の照応において異なった振る舞いをする。特徴づけメトニミーにおいてはターゲット(意図された意味)が代名詞の先行詞となるが、連結メトニミーではソース(字義通りの意味)が代名詞の先行詞となる。

1. 長髪がやってくる。 $\left\{ \begin{array}{l} *それ(長髪)は実に長い。 \\ \text{彼(青年)は実に背が高い。} \end{array} \right\}$  (特徴づけメトニミー)
2. 風車が回っている。 $\left\{ \begin{array}{l} \text{それ(風車)は、オランダ製だ。} \\ *それら(羽根)は、4枚ある。} \end{array} \right\}$  (連結メトニミー)

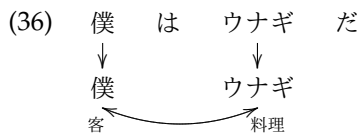
山本(2006)は、特徴づけメトニミーは語(句)のレベル(対象の指示過程)におけるメトニミーであり、連結メトニミーは節のレベルにおけるメトニミーであるとしている。山本(2006)の連結メトニミーと特徴づけメトニミーは、おおよそ Fauconnier(1985, §1.1)が開コネクター、閉コネクターと呼んだものに相当すると思われる。ただし Fauconnier(1985)はウナギ文に相当する事例について説明する際(ibid. §5.1)、これらの概念を用いてはいない。



山本 (2006) の考え方は、通常メトニミーの考え方とは少し異なる。山本 (2006) は語のレベルで、「僕」が実際には「注文料理」を表しているのだとは考えていない。節のレベルで主語と述語の関係を理解するにあたって、「僕」と換喩的な関係にある「注文料理」という概念が、「僕」と「ウナギ」を結び付ける働きをするのだという考え方である。また山本 (2006) は、注文料理とウナギの関係がどのようなものであるのか (帰属関係か同一関係か、など) については特に言及していない。しかし少なくとも、山本 (2006) の考え方は僕とウナギを直接結び付けるのではなく、直接結び付けることができるような他の二つの事物 (注文料理とウナギ) の関係に還元してウナギ文の意味を解釈しようとするアプローチの一つであると理解することができる。

### 4.3.3 解釈主義的な見方

ウナギ文の意味を、統語論的ないし意味論的なやり方で他のより基本的なパターンの文に還元して解釈するいくつかの考え方について見てきた。本研究では、別の考え方を取る。「僕はウナギだ」という文において、「僕」は人物を、「ウナギ」は料理を表しており、この文は僕とウナギが客と料理の関係にあることを表している。



この考え方では、統語的にも意味的にも、「僕」や「ウナギ」が何か別の表現の省略なのだとか、何か別の事物や概念を表しているのだというような変形や換喩は仮定しない。また、名詞述語文が帰属関係、同一関係、役割-値関係というような、いくつかの基本的な関係しか表すことができないのだという仮定もしない。この考え方は、基本的には、我々が認知し、理解することができる事物や概念の間関係は、帰属関係、同一関係、役割-値関係というようにいくつかの基本的な関係に限られるものではないという仮定に基づいている。例えば、空間的な隣接関係とか、全体と部分の関係というような関係<sup>9)</sup>も、我々が認知し、理解することのできる関係の一種である。

我々が一般的に認知することができる関係は多様であるにしても、名詞述語文で表すことのできる関係は限られるのだと考えたいかも知れない。このような考え方は、過剰な一般化の一種である。筆者の知る限り、名詞述語文がそれらの基本的な関係しか表すことができないのだということを示す説得力のある証拠は提示されていない。確かに、帰属関係、同一関係、役割-値関係といった事例は、名詞述語文によって表される関係の中心的な事例であるように見える。特に文脈が与えられなければ、我々は「僕はウナギだ」という

<sup>9)</sup> これらの関係は、名詞述語文における二つの要素の関係を理解する以外にも、メトニミーやシネクドキといった語の意味解釈の問題を解決する際にも用いられる。



文を帰属関係を表す文として解釈する傾向がある。また、日本語ではウナギ文のような名詞述語文を用いることが可能であるが、他の言語では不可能であるということも可能性としてはあり得る<sup>\*10</sup>。しかしこれらは名詞述語文によって表される関係には中心的な事例と周辺の事例があり、また個別の言語によって表すことのできる関係に違いがあるということを示しているに過ぎない。日本語においては、名詞述語文は文脈によっては、かなり多様な事物や概念の間の関係を表すことができる。そのような周辺の事例の全てについて、わざわざ帰属関係や同一関係というような基本的な関係に置き換えなければ認識したり、理解したりすることができないのだと考える理由は無い。

本研究と同じように、ウナギ文のような事例の意味を解釈主義的な方法で取り扱う研究としては、池上(1981)や Fauconnier(1985)を挙げることができる。池上(1981)は、名詞述語文は一般に二つの要素が X BE WITH Y という隣接関係<sup>\*11</sup>にあることを表しているのだという考え方をする。この考え方は、場所理論 (localist theory) という考え方に基づく<sup>\*12</sup>。場所理論とは、事物の隣接関係や移動といった空間的な事態や関係を理解するためのスキーマが、空間的ではない様々な事態や関係を理解する際にも用いられているという考え方である。池上(1981)は、(37)のような事物の存在や抽象的な状態を表す様々な文(これらは存在文や形容動詞文、名詞述語文を含む)が、意味的には同一の構造をしているのだと分析する。「静か」とか「子供」のような状態概念は抽象的な場所であり、これらの文はいずれも対象がある場所に存在することを表しているのだと考えるのである。

- (37) a. 敵は本能寺にいる。  
 b. 城は小諸にある。  
 c. 家は静かである。  
 d. 太郎は子供である。

池上(1981, p.32)

ウナギ文の場合は、「僕」が「ウナギ」という範疇に属するのだということを述べる場合もあれば、客と注文というような隣接関係にあるのだということを表す場合もある。場所理論上は、これらの関係は一般に X BE WITH Y という構造形によって捉えられる。ここで WITH によって表示されている隣接関係は、場合によって場所的なものであったり、時間的なものであったり、ある種の因果関係的なものであったりするが、それらはこの表現が用いられる文脈によって個々の場合に課せられることであって、「僕はウナギだ」という言語表現そのものの意味は「僕」と「ウナギ」の間にある種の特別な関係があるのだということだけであると言う。

池上(1981)の考え方は、統語論的変形や意味論的変換を用いず、二つの要素の間関係をかなりの程度、語用論的な解釈の問題として扱うという点において、本研究の考え方と共通している。ただし本研究は、二つの要素の間の多様な関係が、ある抽象的なレベルにおいては事物と場所という関係にあるのだというような一般化は特にしない。筆者は基

<sup>\*10</sup> かつては、ウナギ文は日本語に特有の構文であって、英語など他の言語にはあまり見られないと考えられていた。現在では、使用可能な状況に違いはあるが、英語など他の言語でもウナギ文に相当するような文が使用可能であると考えられている。奥津(1988)、久野・高見(2004, ch.9)など参照。

<sup>\*11</sup> 池上(1981)の用語では近接関係。

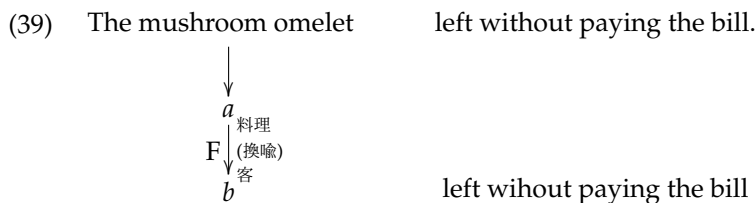
<sup>\*12</sup> 場所理論の考え方は、Jackendoff(1983, 1990)に代表される概念意味論にも取り入れられている。この理論の標準的な考え方では、名詞述語文の少なくともある種のは [State BE([Thing X],[Place Y])] という関係を表しているのだという考え方が取られるものと思われる。

本的に場所理論の仮説(空間的スキーマが、多様な非空間的関係を把握するために用いられている)を支持しているが、あらゆる事物や概念の間の多様な関係の全てが空間的関係のメタファーであるとまでは考えていない。

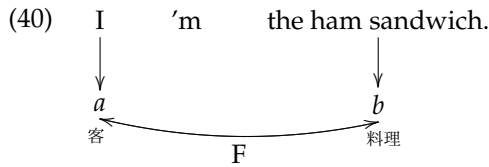
Fauconnier (1985) も、ウナギ文(に相当する事例)の意味を解釈主義的に扱う研究の一つである。本研究の考え方は、Fauconnier (1985) の考え方に最も近い。Fauconnier (1985) は、be 動詞は関係する語用論的関数(コネクター)の種類が分かっている場合には、トリガーとターゲットを結び付ける働きがあると言う。be 動詞は、あるスペースに含まれる二つの要素の換喩的連関を述べたり (38a-e)、異なるスペースに属する対応する要素の関係を述べたり (38f, g)、あるスペースにおける役割と値の関係を述べたりする (38h-j) ために用いられる。

- (38) a. Plato is the red book; Homer is the black book.  
 b. The gastric ulcer is Peter Smith.  
 c. We are the first house on the right.  
 d. I'm the ham sandwich; the quiche is my friend.  
 e. Getty is oil, Carnegie is steel, Vanderbilt is railroads.  
 f. In that picture, Lisa is the girl with blue eyes.  
 g. In that movie, Cleopatra is Liz Taylor.  
 h. Max is my brother.  
 i. Mary is the queen of England.  
 j. The winner is John Doe.

Fauconnier (1985) の考え方は、ウナギ文(に相当する文)の意味を換喩を用いて説明する考え方の一種と見なされることがあるが(西山, 2003b, §7.2.2)、筆者の理解する限り、Fauconnier (1985) は「僕」が実際には「僕の注文料理」を表しているというようなことを言っているわけではない。「僕」と「ウナギ」の関係が換喩的だと述べているのである。このような関係は、Fauconnier (1985) が語用論的関数と呼ぶような対象間の語用論的関係の一部である。対象間の語用論的な結び付き  $F$  は、ある場合には語の換喩的解釈を成立させるために作用する。



対象間の語用論的関係  $F$  は、別の場合には、be 動詞によって結び付けられる二つの事物の関係の理解に関与する。ウナギ文は、語用論的関係  $F$  にある二つの事物を結び付ける。Fauconnier (1985) のウナギ文(に相当する事例)についての考え方は、おおよそ次のように図示することができる。



ウナギ文についての本研究の考え方は、基本的には Fauconnier (1985) の考え方と同じである。名詞述語文は、多様な関係にある二つの事物や概念を結び付ける。関係の一つは換喩的な概念の隣接関係に基づくものであり、ウナギ文はそのような事例に相当する。

#### 4.3.4 隣接関係の諸事例

ここまでウナギ文を中心に、帰属関係、同一関係、役割-値関係といった名詞述語文の中心的事例からは外れる事例をどのように扱うかについて述べた。概念の隣接関係に基づく名詞述語文の事例には、ウナギ文以外にも多くの種類のものがある。名詞述語文によって表される関係にどれくらいの数の種類のものがあり、それらをどのように整理すればいいのかについて、今のところ明確な基準を示すことはできないが、全く無秩序であるというわけではない。以下では具体的ないくつかの事例について見ておくことにしよう。

■場所 事物や出来事と場所との関係は、頻繁に見られる事例の一つである。「警察署は消防署の隣だ」のように事物が移動しない施設の場合には、場所は所在地の意味で解釈されるのが普通である。移動可能な事物の場合は、標準的な解釈の一つは現在地であるが、別の解釈もあり得る。例えば人物の場合は、「私は沖縄です」という文によって出身地を表すこともできる。別の事例は「旅行」のように広域に及ぶ出来事であり、場所が何を表しているかは既に述べたように背景的知識に照らして適切に解釈される。

- (41) a. 警察署は消防署の隣だ。 (事物-場所)  
 b. 私は沖縄です。 (人-出身地)  
 c. 新婚旅行はマチュピチュ遺跡だった。 (旅行-目的地)

場所理論的な考え方だが、空間的な隣接関係と同じ構造の関係を、別の意味領域でも観察することができる。例えば出来事は時間的な存在物であり、時点とか時間範囲というような時間的な場所に位置付けられる。(42a) はそのような事例である。(42b) では、場所(時間)が主語に、そこに位置付けられる出来事が述語になっている。

- (42) a. 同社の設立登記は十四日だった。 (出来事-時間)  
 b. 七一年がニクソンショック、八三年は日米円ドル委の発足だ。  
 (時間-出来事)

序数的概念も、場所の拡張されたものとして理解することができる。サッカーチームと順位とか、料理の手順とそれをする順序とか、本とそれが置いてある場所の関係を述べるために用いることができる。

- (43) a. 柏レイソルは現在 15 位だ。 (チーム-順位)  
 b. 盛り付けは一番最後だ。 (手順-順序)  
 c. プラトンは右から 2 番目だ。 (事物-場所)

序数的概念のある種のもは、実質的に役割を表す名詞句と同じように機能する。次の例は「15位」という名詞句が役割として用いられている事例である。

- (44) a. 15位は柏レイソルだ。 (役割-値文)  
 b. 15位は下位リーグに降格する。 (役割の属性)  
 c. 今日の試合で15位が入れ替わった。 (値の入れ替わり)

メトニミーと役割の関係について興味深い点は、(44)の序数のように場所的概念が役割として機能する事例がある一方で、役割よりもむしろ値の方が場所として機能しているように見える事例もあるという点である。Jackendoff (1979) は、‘the temperature’のような記述句が表す概念が計量的スケール上を移動するものとして扱われる場合があることを指摘している。

- (45) a. The temperature is ninety.  
 b. The temperature is rising.  
 c. The temperature is (already) at ninety.  
 d. The temperature is above/below ninety.  
 (46) a. The airplane is at 6000 feet.  
 b. The airplane is rising.

(45a) は Montague (1973) の考え方では ‘the temperature’ と ‘ninety’ が外延的に同一であるということを述べる文であり、本研究では役割に値を割り当てる文と見なしているものである。しかしこの名詞句は、(45b) のように上昇するというような述語を取ったり、(45c, d) のように ‘at/above/below’ のような位置関係を表す前置詞句を取る場合もある。(45a) のような文を二つの事物の外延的な同一性を述べる文ではなく、(45c) のような位置関係を表す文からの派生であると考えれば、(45a, b) のような事例と (46a, b) のような事例を平行的に扱うことができる。

本研究は特に (45a) のような文を (45c) のような文からの派生と考えるわけではないが、確かに (45b-d) のような事例では ‘the temperature’ によって表される役割が計量的スケール上に位置したり、移動したりしているように見える。これは事物や概念の間の関係のあり方は一様ではなく、多様な捉え方が可能なのだということを示しているように思える。「温度」は計量的スケール上のある地点に位置することもできるが、それらのスケール上のある点を値として持つこともできるのである。

■文末名詞文 名詞述語文の一種に、文末名詞文、あるいは体言締め文と呼ばれるものがある。

- (47) 文末名詞文 (新屋, 1989)  
 a. 川田君はすなおで朗らかな性格です。  
 b. 梓川は、この前の春の時とは少し異なった感じだった。  
 c. 平岡はあまりこの返事の冷淡なのに驚いた様子であった。

A	範疇	種類, 類, たぐい, タイプ, 方, 部類, クラス, 階層, 系統, パターン
B	属性	性質, 性格, 気質, 気性, 性分, たち, 体質, 人柄, 立場, 構成, 構造, 仕組み, 形式, 様式, 顔立ち, 人相, 体格, 匂い, 形, 趣, 体裁, 運勢, 身分, 出身, 仲, 関係
C	様態	感じ, 様子, 模様, 状態, 風, 有様, 形, 風情, 格好, 空気, 気配, 気色, 態度, 素振り, 言い方, 口調, 口振り, 表情, 調子, 具合, 勢い
D-1	身体的感覚	感じ
D-2	感情・心理	感じ, 気持ち, 思い, 心持ち, 気分, 心境
D-3	意思	意向, 気, 魂胆, 料簡, 覚悟, 考え, 決心, 心組み, 方針, 予定, 主義, 計算, つもり
D-4	認識・意見	意見, 考え, 印象, 考え方, 認識, 見方, 解釈, 判断
E	解説	塩梅, 具合, 次第, 道理, 話, 理屈, わけ, 顛末, 始末
F	位置	ところ, 近辺, 近く, そば, 隣, 寸前, 最中, 途中, 頃, 直前, 直後, 後, 時分
G	伝達	こと, 話, 噂, 評判, 由

表 4.1 新屋 (1989) の文末名詞文分類

## (48) 体言締め文 (角田, 1996)

- a. 太郎は明日つくばに来る予定だ。
- b. 太郎はどうしても東京へ行く気だ。
- c. 太郎は元気な様子だ。
- d. 太郎はいつも苦しい状況だ。

これらの文において、述語は主語が表す事物の帰属する範疇を表しているわけでも、実際には同一である別の事物を表しているわけでも、役割の値を表しているわけでもない。述語は主語が表す事物の有する性格を表したり、事物が置かれた状況を表したりしているものであり、主語と述語の間にはメトニミ的な連関関係がある。新屋 (1989) と角田 (1996) は同じような構文の非常に多くの事例があることを示している (表 4.1, 表 4.2)。

文末名詞文の特徴の一つは、述語名詞句が必ず修飾語句を伴い、しかもその修飾語句の部分が情報の焦点となるという点である。

- (49) a. ピーターは面白い顔だ。
- b. ピーターはずる賢い性格だ。

顔や性格といった要素は、対象が必ず持っているような部分的構成要素である。それがどのようなものかということが (49) の文の主要な叙述内容となっている。機能論的な言い方をすると、述語名詞句の修飾要素の部分 (「面白い」「ずる賢い」など) が、情報伝達上の焦点的情報となっている。同じように述語の修飾要素が情報の焦点になっている文は帰属関係を表す文でも観察される。

- (50) a. ピーターは面白いウサギだ。
- b. ピーターはずる賢いウサギだ。

1	意志	意向, 所存, 魂胆, 企み, 狙い, 気, 気持ち, 考え, 決心, 決意, 構え, 姿勢, 覚悟, 方針, 予定, 計画, 作戦, 戦略
2	段取り・見込み	段取り, 運び, 方向, 見通し, 見込み, 流れ, 勢い
3	状況・結果	様子, 気配, 模様, 状態, 状況, 情勢, 事態, 有り様, 形, 格好, 始末
4	感情	感じ, 気, 気持ち, 気分, 思い, 心境
5	印象・雰囲気	印象, 感じ, 趣, 雰囲気, ムード, 感触
6	習慣	傾向, 風潮, 習わし, 風習, 週刊, 癖, 生活
7	人の性格	性格, 性質, 性分, 気質, たち, タイプ
8	役目	役目, 役割, 責任, 立場, 資格, 運命, 宿命, 定め, 身の上
9	体の特徴	体, 体つき, 体質, 表情, 口振り, 姿勢
10	無生物の構成	作り, 仕組み, 構造, 内容, 設計, システム, スタイル
11	疑い	疑い
	形式名詞	つもり, はず, わけ, もの, 次第, 方, ところ, 時間, 前, 後, 直前, 直後, 途中, 最中, 一方, こと, 由
	ノ	の

表 4.2 角田 (1989) の体言締め文分類

似たような属性の叙述は、文末名詞文の構造を取らずに修飾語句をそのまま述語として用いる構文でも述べることができる。

- (51) a. ピーターは面白い。  
b. ピーターはずる賢い。

(51) では、述語がピーターのどのような側面についての属性を述べているのかについて一定の曖昧性がある。「ずる賢い」のような述語の場合は、おそらくピーターの性格を述べているのだという以外の解釈は無さそうに見える。「面白い」のような述語の場合には、ピーターの顔が面白いのだとか、性格が面白いのだというように、幾つかの解釈が可能になる。文末名詞文は、述語が対象のどのような側面の属性を述べているのかを明示的に示す手段の一つである。別の手段として、次のような構文を取ることもしできる。

- (52) a. ピーターの顔は面白い。  
b. ピーターの性格はずる賢い。  
(53) a. ピーターは顔が面白い。  
b. ピーターは性格がずる賢い。

(52) は対象の顔や性格を主語としてその性質を叙述する文であり、(53) は (52) の主語の一部のみが主題となったものである。文末名詞文では述語の主名詞と修飾語句の関係にあった要素が、これらの文では主語と述語の位置に置かれている。

文末名詞文の述語名詞句は主語名詞句が表す事物と隣接的な関係にある事物や概念を表しているのだと述べたが、どのような隣接的概念でも自由に文末名詞文で叙述できるというわけではない。澤田 (2003) は人や事物の属性や性質、状態を述べる名詞述語文には部類を表すもの、側面を表すもの、部分を表すものがあり、個別の言語ごとにそれらのうちのどれを名詞述語文で表すことができるのかに違いがあると述べている。部類というのは事

物と範疇の帰属関係を表す文であるが、日本語、英語、中国語で名詞述語文によって表すことが可能である。述語名詞句が「性格」や「形」のように事物の側面を表すものである場合は、日本語では名詞述語文で表すことが可能だが、英語や中国語では他の構文が用いられる。述語名詞句が「背」「手」「セーター」のように事物の部分や付属物を表すものである場合には、日本語においても名詞述語文として成立するために一定の制約を伴う。澤田(2003)は述語が複合名詞化した場合、眼前描写のような特定の文脈で用いられる場合、ある種の副詞句を伴う場合、対比的文脈で用いられる場合などに許容度が上がることを指摘している。

## (54) 部類

- a. 彼は学生だ。
- b. He is a student.
- c. 他是学生。
- he be student

## (55) 側面

- a. 彼は優しい性格だ。
- b. \*He is a gentle nature.
- c. \*他是很 温柔的性格。
- he be very gentle nature

## (56) 部分

- a. ??彼は高い背だ。
  - b. 彼はのっぼだ。 (複合名詞化)
  - c. ??彼は大きな手だ。
  - d. この赤ちゃんはおっきな手だねえ！ (眼前描写・感嘆文)
  - e. ??彼は青色のセーターだ。
  - f. 彼は今日も青色のセーターだ。 (副詞句の挿入)
  - g. 彼は青色のセーターで、妹はエンジ色のセーターだ。 (対比的文脈)
- 澤田(2003)

どのような場合にどのような文末名詞文が可能になるのかという問題は興味深い問題だが、ここではこれ以上は立ち入らない。日本語の名詞述語文には文末名詞文と呼ばれる広範な事例があり、その多くは帰属関係、同一関係、役割-値関係というような従来の名詞述語文研究で中心的な関心の対象となってきた類型には含まれないのだということを述べるに留める。このような事例の体系的な類型化と規則性の解明のための研究は、今後さらに進められる必要がある。

■数量・性質など 数量、色、形、構造、機構、化学的性質といった抽象的な諸概念が名詞述語文の述語になる場合がある。

- (57) a. 衆議院議員は 480 人だ。 (人数)
- b. 東京タワーは 332.6 メートルだ。 (高さ)

- c. この錘は **500** グラムだ。 (重さ)
- d. 中国の郵便ポストは**深緑色**だ。 (色)
- e. ピラミッドは**四角錐**だ。 (形)
- f. この豆腐は**いちご味**だ。 (味)
- g. この電車は**三両編成**だ。 (構造)
- h. 京都の町並みは**格子状**だ。 (構造)
- i. このボールペンは**ノック式**だ。 (機構)
- j. ヴェルサイユ宮殿は**バロック様式**だ。 (建築様式)
- k. 灰は**アルカリ性**だ。 (化学的性質)

主語名詞句によって表される対象が数量、色、形などの諸属性を持っていると考えたとすると、(57)の述語名詞句が表している抽象的な諸概念は、対象の持つ諸属性に与えられた値なのだと思えることができる。従ってこれらの文は、対象と数量、性質などの概念の間に属性の所有者と所有する属性という関係があることを表している。

対象の持つ諸属性のうちのいくつかが、同じ種類の概念を値として持つ場合がある。例えば空間的実体を持つ事物の高さや幅、奥行きは、いずれも長さというスケール的な概念を値として持つ。そのため長さを述語として持つ名詞述語文は、述語が対象のどの部分の長さを表しているのかについて曖昧性を持つ。西山(2003b)はこのような構文を属性数量詞構文と呼び、ウナギ文と同種の構文であると見なしている。

- (58) 東京タワーは **300m** である。
- (59) a. 東京タワーは、高さは **300m** である。
- b. 東京タワーは、幅は **300m** である。
- c. 東京タワーは、奥行きは **300m** である。
- d. 東京タワーは、バス停からの距離は **300m** である。

西山(2003b, §7.4)

西山(2003b)は(58)の文は(59a)の意味で解釈されるのが自然であるが、文脈によっては(59b-d)の意味でも解釈され得るとしている。もう少し詳しく考えてみると、数量概念が対象のどの部分の長さを表しているかの解釈は、物体の形状や、その物体の各部分がおおよそどのくらいの大きさであるのかというような知識、さらには文脈などに基づいて総合的に解釈される。(58)のような事例の場合、長さは東京タワーの高さを表しているのだというのが標準的な解釈である。別の事物の場合、例えばトンネルの長さについて述べている場合には、述語はトンネルの入り口から出口までの長さを表しているのだと解釈されるのが標準的である。述語が「**300m**」ではなく「**3m**」のように比較的短い長さの場合、タワーの高さ以外の何か(土台の高さや、入り口の幅など)の値なのだと思えることになる。

数量が対象の何の量を表しているのかを明示的に表示することもできる。その方法の一つは属性を主語に、数量を述語にした役割-値文の形式を用いるというものである。別の方法は、文末名詞文の形式を用いるというものである。さらに数量概念に関して言えば、(60c)のような構文を用いることもできる。



- (60) a. 東京タワーの高さは、332.6メートルだ。 (役割-値文)  
 b. 東京タワーは、332.6メートルの高さだ。 (文末名詞文)  
 c. 東京タワーは、高さ332.6メートルだ。

長さのような概念と比べると、重さ、色、形、味といった概念は可能な解釈の数が少ない。物体の大きさは高さ、幅、奥行きのようにいくつかの次元に分解することができるが、重さ、色、形、味などは通常はそのように分解して把握されない。色の概念を色相、明度、彩度などに分解することもできるが、一般に色を表すために用いられる「赤」とか「緑」というような語彙は、それらを総合したものを表している。従って「500グラム」という述語は対象の重さの値であると解釈されるのが普通であるし、「深緑色」という述語は対象の色値であると解釈されるのが普通である。他の解釈というのは考えられそうにない。これらの属性も役割-値文や文末名詞文の形式で述べるのが可能であるが、「色」とか「味」というような接尾辞を伴う名詞の場合は、おそらく形態的な冗長性が理由で文末名詞文の形式を用いることはできない。

- (61) a. この錘の重さは500グラムだ。  
 b. この錘は500グラムの重さだ。  
 c. この錘は重さ500グラムだ。
- (62) a. 中国の郵便ポストの色は深緑色だ。  
 b. \*中国の郵便ポストは深緑色の色だ。
- (63) a. ピラミッドの形は四角錘だ。  
 b. ピラミッドは四角錘の形だ。
- (64) a. この豆腐の味はいちご味だ。  
 b. \*この豆腐はいちご味の味だ。(cf. この豆腐はいちごの味だ。)

これらの諸概念はどのような属性の値になるかという点ではほとんど曖昧性を持たないが、対象のどの部分の属性になるかという点では曖昧性を持ち得る。属性を持つ部分を明示するために、別の構文を用いることもできる。

- (65) a. この鉄パイプは楕円形だ。  
 i. パイプが湾曲し、楕円形に閉じた形状になっている。  
 ii. 断面が正円ではなく楕円形に潰れた形状になっている。  
 b. この鉄パイプの断面は楕円形だ。  
 c. この鉄パイプは楕円形の断面だ。
- (66) a. このスイカは赤紫色だ。  
 i. 果肉の色が赤ではなく赤紫色である。  
 ii. 外側の皮の色が緑ではなく赤紫色である。。  
 b. このスイカの果肉は赤紫色だ。  
 c. このスイカは赤紫色の果肉だ。

■述語的属性 名詞述語文の述語には、「製」「産」「作」「用」というような述語性の接尾辞を伴う名詞句も多く現れる。これらの名詞句は対象の属性を表しているが、数量、色、形というような何らかの存在論的範疇に属するような概念を表しているわけではない。これらの名詞句は、対象が誰に/どこで/何で(材料)/いつ作られたかとか、誰に/何に/どこで/いつ用いられるのかというような属性を表す。

(67) 事物の生成に関わる属性。「誰が」「どこで」「何で」「いつ」作られたか。

- a. この製品は日本製/S社製だ。 (生産地/生産者)
- b. この食品は日本産だ。 (生産地)
- c. この絵画はゴッホ作だ。 (作者)
- d. この人は東北出身/東北大卒だ。 (出身地/経歴)
- e. この動物は東アジア原産だ。 (原産地)
- f. この物体は金属製だ。 (材質)
- g. このワインは1960年産だ。 (製造年)

(68) 事物の目的に関わる属性。「誰に」「何に」「どこで」「いつ」使われるか。

- a. この製品は子供用/調理用/キッチン用/非常用だ。

このような属性は、Pustejovsky (1995) が動作主的クオリアや目的クオリアと呼んだ種類の属性の一種と考えることができる。Pustejovsky (1995) は語彙的概念が持つ属性を、形式的クオリア (formal qualia)、構成的クオリア (constitutive qualia)、動作主的クオリア (agentive qualia)、目的クオリア (telic qualia) に分類した。Jackendoff (2002, §11.9) の解釈では、形式的クオリアはイヌ、動物、生物というような分類構造に、構成的クオリアは存在物の感覚的属性(形、大きさ、色など)、材料、部分構造に関するような属性の情報を含む。他の二つの属性は、存在物が登場する行動が含まれると言う。動作主クオリアは存在物がどのようにして存在するようになったのかに関する情報をコード化し、目的クオリアは存在物が参加する活動に関する情報を与えるとされる。(67) のような属性は動作主クオリアに属するような属性であり、(68) のような属性は目的クオリアに属するような属性であると考えることができる。一般的に言うと、名詞述語文のある種のものは、対象と属性的概念を結び付ける。属性には Pustejovsky (1995) のクオリア構造で示されるような様々な種類のものがあり、数量や性質も属性的概念の一種であるが、「作られた」とか「用いられる」というような述語的概念も対象の属性として機能し、またそのような属性を表すような名詞述語も存在する。

#### 4.4 まとめ

本章では、名詞述語文の意味論的構造について論じた。名詞述語文「XはYだ」は一般に  $be(x,y)$  という意味論的構造を持つ。xとyの関係は多様であり、少なくとも帰属関係、同一関係、役割-値関係、隣接関係といった類型を区別することができる。名詞述語文が表す関係には、特に文脈がなくても理解できるような典型的な関係もあれば、文脈がなければ理解できないような非典型的な関係もあるが、いくつかの限られた種類の関係しか表せないということはない。文脈や状況に応じて、名詞述語文は非常に多様な関係を表

することができる。関係解釈の主要な源泉の一つは、事物や概念の間の語用論的な関係を理解するための一般的な認知能力である。この能力は、メトニミーのような名詞句の意味解釈の問題を解決するために用いられる一方で、名詞述語文によって表される二つの事物の関係を理解するためにも用いられる。この考え方は、基本的には Fauconnier (1985) の考え方と同じものである。

本章の主要な目的は名詞述語文によって表される関係にはかなりの程度多様な種類のものがあり、それは意味論の別の部門(特に名詞句の解釈の理論)に追いやることができるものではないのだということを示すことである。具体的にどのような種類の関係があるのかということについては、十分な議論が尽くされたわけではない。4.3.4節では具体的ないくつかの事例を示したが、ここで示したものが日本語の名詞述語文によって表すことのできる関係の全てであるとは考えていない。帰属関係、同一関係、役割-値関係というような名詞述語文によって表される関係の中心的な事例と、本研究では隣接関係という類型に含めたその他の事例との間に、どのような違いがあるのかということも考える必要のある問題である。隣接関係を表す事例の特徴の一つは、しばしば文脈の助けを得なければ関係を決定することができない(例えばウナギ文は料理を注文するような場面で発話されなければ適切に解釈することができない)というものだが、これは隣接関係に含めた全ての事例を決定的に特徴付けるような特徴ではない。「警察署は消防署の隣だ」とか「ピーターはおとなしい性格だ」のような文は、特に文脈の助けがなくても適切に解釈することができる。本研究は名詞述語文の意味論的構造の理論という部門を設けることによって、名詞述語文はどのような関係を表すか、関係はどのように解釈されるかといった問題を扱うための意味論上の領域を設定したが、この部門をどのように組織化し、与えられた課題をどのように解決するかは今後の研究に委ねられている。

## 第5章

# 名詞述語文の機能論的構造

### 5.1 はじめに

#### 5.1.1 先行研究

名詞述語文は意味論的構造と平行して機能論的構造を持つ。文の機能論的構造はこれまで様々な方法で記述されてきた。記述のために用いられる概念には、主題と題述、旧情報と新情報、前提と焦点といったものが含まれる。

山口 (1975) のような先駆的な研究<sup>\*1</sup>を別にする、日本語の名詞述語文の機能論的特性についての類型論的研究は 1990 年代に入ってから活発に議論されてきているように見える。そのすぐ前の時期の研究は、どちらかという文の機能論的特徴よりも意味論的特徴を中心的な研究対象としていた。その時期の代表的な研究としては、名詞句の指示性に注目した西山 (1985, 1990b) の研究や、役割という概念を用いた坂原 (1990c) の研究を挙げることができる。これらの研究は、主に文の意味論的特徴に基づいて、名詞述語文をいくつかの類型に分類していた。

1990 年代以降、機能論的特徴に基づいて名詞述語文をいくつかの類型に分類する研究が現れてきている。これらの研究には、新屋 (1994)、天野 (1995a, 1995b, 1996, 1998)、砂川 (1996b, 2002, 2005)、菊地 (1997) などが含まれる。一連の研究の中で、特に重要だと思う論点をまとめると、次のようなポイントを挙げることができる。

- 従来の名詞述語研究では、判断文ないし有題文 (主題文) と呼ばれるタイプの名詞述語文が考察の中心の対象であり、現象文ないし無題文と呼ばれるようなタイプの名詞述語文は中心の対象とされて来なかった。「太郎は医者だ」「医者は太郎だ」のような文は「太郎は」「医者は」を主題とし、「医者だ」「太郎だ」を題述とするような有題文であり、「太郎が医者だ」のような文は明示的な主題を持たないが実質的には「医者」が主題となっている文 (陰題文) であると見なされてきた。情報の焦点という観点から言うと、「太郎は医者だ」「医者は太郎だ」は後項の「医者 (だ)」「太郎 (だ)」が焦点の文であり、「太郎が医者だ」は前項の「太郎 (が)」が焦点の文である。
- 新屋 (1994) は日本語の名詞述語文を措定文、指定文、中立叙述文の三つの類型に分類した (表 5.1)。措定文、指定文という類型は三上 (1953) や西山 (1985) にも見

<sup>\*1</sup> 山口 (1975) は、三上 (1953) の措定文、指定文という類型を、内包語と外延語、旧情報と新情報という二つの対立概念を用いて交差的に分類している。

措定文		太郎は大学生です。
指定文	第一指定文	社長は彼だ。
	第二指定文	彼が社長だ。
中立叙述文		1. 聞き手に未知の事物の存在を知らせる これが長男の太郎です。
		2. 話の場や文脈の中に新しく事物を導入する お正月に欠かせないのがかずのこです。
		3. 内容的に従属句的な性質を帯びる 上司があいつですよ。やる気ができませんよ、まったく。
		4. 驚き、感慨 あっ、家がドーム型だ！

表 5.1 新屋 (1994) の名詞述語文分類

られる類型であるが、新屋 (1994) はこれらとは別に中立叙述文という類型を付け加えている。非常に大まかに言って、措定文、指定文は有題文に、中立叙述文は無題文に相当する\*2。従来の名詞述語文研究がもっぱら有題文を中心的な研究対象としていたのに対して、新屋 (1994) は無題の名詞述語文を一つの類型として取り上げ、研究の俎上に乗せた。

- 天野 (1995a, et al.) は、「A が B だ」型の名詞述語文の中に前項の A よりもむしろ後項の B が情報の焦点になっているように見える文があることを指摘した。「太郎が医者だ」のような文が「誰が医者か」を述べる前項焦点の文であるのに対して、「特におすすめのものがこれです」のような文は「特におすすめなのは何か」を述べるような場合に用いられ、むしろ後項が焦点になっているように見える。新屋 (1994) では、このような文は中立叙述文の中に含まれていたが、天野 (1995a, et al.) はこの文の特異性を指摘し、後項焦点文であるとして問題化した。このような文は、熊本 (2000)、西山 (2003b) では提示文と呼ばれている。

新屋 (1994)、天野 (1995a, et al.) 以降、名詞述語文の機能論的特徴に関する研究の多くが「A が B だ」型の名詞述語文について、従来の研究において中心的な研究対象とされてきた前項焦点文の他に、新屋 (1994) が類型化した中立叙述文、天野 (1995a, et al.) が類型化した後項焦点文 (提示文) に相当する類型的区別を想定している。そのような類型的区別に言及している研究には少なくとも次のものが含まれる。

- 天野 (1998) は「A が B だ」型の名詞述語文を前項焦点文、後項焦点文 (提示文)、全体焦点文の三つの類型に分類している (表 5.2)。
- 菊地 (1997) は「が」の用法を中立叙述、解答提示、その他の周辺的な用法に分類している (表 5.3)。中立叙述、解答提示がそれぞれ中立叙述文、前項焦点文に相当し、周辺的な事例のうちの演出的な解答後置と呼ばれるものが提示文に相当する。
- 砂川 (2002, 2005) は、坂原 (1990c) に倣って名詞述語文を記述文と同定文の二種に分ける。記述文には「A は B だ」型の一般の記述文の他に「A が B だ」型の現象描

\*2 ただし、新屋 (1994) の中立叙述文には後の研究で状況陰題文とされるようなものも含まれている。

主題文 (は文)		二位は田中だ。
非主題文 (が文)	前項焦点文	田中が二位だ。
	後項焦点文	特におすすめなのがこれだ。 お正月に欠かせないのがかすのこです。
	全体焦点文 (眼前描写)	あっ、家がドーム型だ！
	全体焦点文 (非眼前描写)	主力選手がベンチウォーマーだ。 上司があいつですよ。

表 5.2 天野 (1998) の名詞述語文分類

中立叙述		あっ、家がドーム型だ！
解答提示		こちらが昇り口です。
周辺の用法	対応づけ	山田君が受付、田中さんが司会、佐藤君が会計だ。
	ソ系の中立叙述	山田君は連日三時間しか寝ないで勉強に励んだ。その山田君が落ちた。
	コ系の中立叙述	僕の友だちに山田君というのがある。この男が大変な酒豪だ。
	演出的な解答後置	私が入院したとき真先にきてくれたのが山田君です。

表 5.3 菊地 (1997) の「が」の用法分類

記述文	一般の記述文	～は～だ	私は学生だ。
	現象描写文タイプ	～が～だ	信号が赤だ。
	修辭的描写文タイプ	～が～だ	これがとんだペテン師だった。
同定文	後項焦点文 (顕題文)	～は～だ	今日の当番は私だ (役割・値解釈) この人はあの時の太郎君だ。(同一認定解釈)
	前項焦点文 (転位陰題文)	～が～だ	私が今日の当番だ (役割・値解釈) あの時の太郎君がこの人だ。(同一認定解釈)
	全体焦点文 (状況陰題文)	～が～だ	特におすすめなのがこれだ

表 5.4 砂川 (2005) の名詞述語文分類

写文や修辭的描写文タイプの記述文があるとされる。同定文には役割・値解釈の文や同一認定解釈の文があるが、機能論的には後項焦点文 (顕題文)、前項焦点文 (転位陰題文)、全体焦点文 (状況陰題文) の三種があるとしている (表 5.4)。描写文タイプの記述文、前項焦点文、全体焦点文がそれぞれ中立叙述文、前項焦点文、提示文に相当する。

これらの機能論的類型のうち、特に提示文の機能論的特徴をどのように分析するかについて、現在まで研究者によって意見が分かっている。主要な説としては、中立叙述説、後項焦点説、状況陰題説の三つを挙げることができる。新屋 (1994) は提示文を中立叙述文の一種に含めていたが、他に野田 (1996)、熊本 (2000)、西山 (2003b) らが同種の文を中立叙述文の一種と見なしている。天野 (1995a, et al.) は提示文を後項焦点文と見なしている。砂川 (2002, 2005) は提示文を全体焦点文と見なしているが、主題構造の観点からは無題文ではなく背景的状况が主題になっている文 (状況陰題文) であるとしている。

### 5.1.2 問題点

名詞述語文の機能論的構造を記述する上で、どのような点に注意する必要があるだろうか。必要だと思われる論点には少なくとも次の二つのものが含まれる。

- 名詞述語文の特徴のどの部分を機能論的な特徴として記述するか。
- 名詞述語文の機能論的な特徴をどのように記述するか。

第一の論点について。名詞述語文は意味論的な特徴と機能論的な特徴を併せ持っている。例えば、「ジキル博士は医者だ」という文と「ジキル博士が医者だ」という文は、どちらも意味論的にはジキル博士が医者という職業に就いていることを表している。しかし機能論的に見ると、前者はジキル博士がどのような職業に就いているのかを述べる文であり、後者は誰かが医者であるということを前提としてそれが誰であるかを述べる文になっている。

- (1) a. ジキル博士は医者だ。  
b. ジキル博士が医者だ。

二つの文には、意味論的な違いもあるのだという考え方もある。西山 (2003b) では、(1a) は措定文、(1b) は指定文と呼ばれ、前者の「医者」は叙述名詞句だが後者の「医者」は変項名詞句であるとされる。しかし (1a) と (1b) のような対立は、名詞述語文だけでなく動詞述語文や形容詞述語文でも一般に観察される。

- (2) a. ピーターはレタスを食べた。  
b. (誰がレタスを食べた?) ピーターがレタスを食べた。
- (3) a. ジキル博士は賢い。  
b. (誰が賢い?) ジキル博士が賢い。

従って「医者」という語に叙述名詞句としての用法と変項名詞句としての用法という意味論的な区別があるのかどうかはともかくとして、それとは別に (1a) と (1b) の間には (2) や (3) と共通するような何らかの機能論的な対立があるのだということを認めるべきであり、またそのような機能論的特徴を意味論的特徴と混同しないように注意する必要がある。例えば西山 (2003b) は叙述名詞句と変項名詞句の違いについて、論理的にはどちらも 1 項述語であるが、「叙述名詞句が主語の指示対象に帰すべき属性を表示しているのに対して、変項名詞句は [中略] 変項を埋める値をさがし、それを B によって指定するという緊張関係を表示しているのである」(西山, 2003b, p.76) という言い方をしている。しかし「値をさがす」「指定する」「緊張関係」といった概念が意味論的概念なのか機能論的概念なのか、変項名詞句という意味論的概念の特徴づけとして妥当かどうかについて、十分に自明ではない。

第二の論点について。論理学や認知科学を基礎とした豊かな研究の蓄積がある意味の理論と比べると<sup>\*3</sup>、文の機能論的特徴を記述するための方法論は十分に確立されていない。日本語の名詞述語文の研究では、文の機能論的構造を記述するためにしばしば主題と題

<sup>\*3</sup> もっとも Jackendoff (2002, §1.5) が指摘するように、意味の理論も音韻論や統語論と比べるとそれほど明確な形式化が与えられているわけではない。

述、前提と焦点といった概念が用いられてきた。しかしこれらの概念をそれぞれどのように特徴付け、また互いに関係付けるのかについては、研究者によっていろいろな考え方がある。見解の相違点や検討すべき論点には次のようなものが含まれる。

- 主題という概念について。一般に「犯人は太郎だ」のような文は主題と題述によって構成される文であり、「犯人」は主題、「太郎だ」は題述であると考えられている。これに対して「太郎が犯人だ」のような文については、「犯人」が実質的な主題(陰題)になっているのだという考え方(佐治, 1973; 砂川, 2005)と、形式的には無題文(非主題文)なのだという考え方(天野, 1998, 2006)がある。
- 焦点という概念について。天野(1998)や砂川(2005)は名詞述語文の焦点の位置に関して前項焦点文、後項焦点文、全体焦点文という三つの類型を仮定している。ただし個々の事例について文のどの部分が焦点になっているのかについては見解の違いがある。特に提示文と呼ばれる事例については、天野(1998)は後項焦点文、砂川(2005)は全体焦点文と見なしている。また、焦点という概念を特徴付ける上で、焦点の位置だけでなく質的な違いも考慮に入れる必要がある。井島(1998b)は焦点ではなく新情報という概念を用いているが、実質的新情報と選択的新情報という概念を区別している。
- 主題と焦点の関係について。砂川(2005)は名詞述語文の少なくともある範囲のものについて、主題構造の類型と情報構造(焦点構造)の類型を一対一に対応付けるモデルを提示している(前節表5.4)。一方、天野(1998)は主題文は必ず後項焦点文だが、非主題文は前項焦点文、後項焦点文、全体焦点文のいずれの場合もあり得るのだと考えている(前節表5.2)。

名詞述語文の機能論的構造を記述するために、どのような概念を採用し、その概念をどのように特徴付け、また概念同士をどのように関係付けるかを決定しなければならない。

### 5.1.3 理論的枠組み

■**主題-題述構造** 名詞述語文の機能論的構造を記述するために本研究が採用する理論的な枠組みの概要を示す。本研究では、機能論的構造は独立したいくつかの機能論的機構の組み合わせによって構成されるという考え方を取る。機能論的構造を構成する主要な機構は、主題-題述構造と焦点である。

主題-題述構造は、文を主題と題述という二つの部分に分割する。この構文は、何らかの要素を主題として、それに関して何かを叙述したいという場合に用いられる。題述は主題に関して何かを述べる部分であるから、主題と何らかの意味論的関係を持っている必要がある。多くの場合、この関係は主題が文の主語、目的語、その他の名詞句や副詞句などであることによって保証される。一方で文の全体が主題になり、文中のいずれかの要素が題述の位置に置かれる場合がある。このような構文は分裂文と呼ばれる。

- (4) 文の主語、述語、その他の要素が主題になる場合
  - a. ピーターは 畑でレタスを食べた。
  - b. レタスは ピーターが畑で食べた。
  - c. 畑では ピーターがレタスを食べた。





■前提-焦点構造 文の機能論的構造を組織する別の主要な概念は焦点である。文中で特に情報価値の高い要素のことを焦点という。焦点を明示的に表示する手段はいくつかある。一つは、焦点となる要素に韻律的な強勢を置くというものである。別の方法は、分裂文の形式を用いて焦点となる要素を述語の位置に置くというものである。

- (7) a. ピーターがウサギだ。 (韻律的強勢)  
 b. ウサギなのは ピーターだ。 (分裂文)

焦点という概念は、二つの基本的な成分に分解して記述することができる。位置と質的特性である。日本語の名詞述語文の焦点の位置について、前項焦点、後項焦点、全体焦点という少なくとも三つの類型があると考えられている(天野, 1998; 砂川, 2005)。次の文で、(8a) はピーターについて何かを述べる文であり、述語名詞句が焦点になっている。(8b) はウサギであるものがどれかを述べるような文で、主語名詞句が焦点になっている。(8c) はいつもはウサギではないピーターが、今はウサギになっているというような状況を述べる文である。(8b) の主語が焦点であり韻律的強勢を伴って発話されるのに対して、(8c) は主語が焦点になっているわけではなく、韻律的強勢を伴って発話されない。(8c) のような文は中立叙述であるとか、文の全体が焦点になっているのだと言われる。

- (8) a. ピーターはウサギだ。 (後項焦点文)  
 b. ピーターがウサギだ。 (前項焦点文)  
 c. ピーターがウサギだ。 (全体焦点文)

これらは名詞述語文の焦点の位置についての基本的な類型と考えることができるが、実際には、名詞述語文の焦点の位置はもう少し複雑である。文末名詞文と呼ばれる構文では、述語名詞句の全体というよりは、述語名詞句の修飾語句の部分だけが焦点になる。(9a, b) では、ピーターが何らかの性格を持っているとか、顔があることが問題となっているわけではなく、どのような性格か、どのような顔かということが問題となっている。文末名詞文以外でも、述語名詞句の修飾語句だけが焦点になる場合がある。(9c) は、ピーターがウサギであるということを前提として、どのようなウサギであるかということを守るために用いられる場合がある。また(10)の例では、フロプシーが誰の姉であるかが問題になっている場合には主語名詞句の修飾語句が焦点になり、姉なのか妹なのか問題になっている場合には主語名詞句の被修飾語句が焦点になる。これらの事例は、焦点の位置を正確に記述するためには、文全体や句全体(前項や後項の全体)という単位はしばしば大きすぎるということを示している。

- (9) a. ピーターは やさしい性格だ。  
 b. ピーターは 愛嬌のある顔だ。  
 c. ピーターは 賢いウサギだ。  
 (10) a. モプシーの姉がフロプシーだ。  
 b. モプシーの姉がフロプシーだ。

焦点という概念を特徴付けるためのもう一つの重要な要素は焦点の質的特性である。焦点の位置が同じでも、性質が異なるという場合がある。次の文はいずれも述語が焦点になっているが、(11a,b) と(11c) では焦点の性質が異なる。

- (11) a. ジキル博士は医者だ。  
 b. ジキル博士はハイド氏だ。  
 c. カルー卿を殺した犯人はハイド氏だ。

(11a,b)の文は、単にジキル博士が医者という職業に就いているのだとか、ジキル博士がハイド氏と同一人物なのだということ述べる文である。ジキル博士の職業がどれかとか、ジキル博士と同一人物は誰かということ述べる文ではない。これに対して、(11c)はカルー卿を殺した犯人が誰かを述べるような文になっている。ここでは、(11a,b)のような文の焦点を通常の焦点、(11c)のような文の焦点を選択的焦点と呼ぶことにする。これらは井島(1998b)が実質的新情報、選択的新情報と呼ぶものにおおよそ相当する。

主題が題述と対立する概念であるのに対して、焦点は前提と対立する概念であると言われる<sup>4</sup>。通常の焦点と選択的焦点の違いは、文の前提のあり方と密接に関わる。(11a)はジキル博士が何らかの職業に就いていることを前提としてその仕事は何かということ述べる文ではなく、ジキル博士が医者という職業に就いているのだということ述べる文になっている。これに対して、(11b)はカルー卿を殺した犯人がであるような誰かが存在することを前提として、それが誰であるかということだけを述べる文になっている。カルー卿を殺した犯人であるような誰かが存在するということが前提となっていることによって、それが誰であるかという選択、指定の側面のみが情報の焦点となっているのである。

文がどのような情報を前提としているのかを調べるための標準的な方法は、その文を否定文にするというものである。文を否定文にしても否定されない情報が、その文の前提であると言われる。(11a)や(11b)の文を否定文にしても、ジキル博士が医者以外の何かの職業に就いているのだとか、ジキル博士がハイド氏以外の誰かと同一人物なのだというような含意は残らない。これに対して、(11c)を否定文にした場合、カルー卿を殺した犯人がハイド氏であるということが否定されるだけで、カルー卿を殺した犯人であるような誰かが存在するのだということは基本的に否定されない。

- (12) a. ジキル博士は医者ではない。  
 b. ジキル博士はハイド氏ではない。  
 c. カルー卿を殺した犯人はハイド氏ではない。

■機能論的構造の豊かな構成 主題-題述構造と焦点が組み合わされることによって、豊かな機能論的構造が生み出される。主要な類型には、少なくとも次のものが含まれる(表5.6)。便宜的に、それらの類型の代表的な事例に因んで「指定文型」「倒置指定文型」「指定文型」「同定文型」「中立叙述文型」という名称を与えておきたいと思う。

この分類は天野(1998)の分類(表5.2)と似ているが、いくつかの点で異なる。第一に、天野(1998)では想定されていない焦点の質的差異を考慮に含めている。主題文は焦点が通常の焦点か選択的焦点かによって二つの類型に分かれる。非主題文のうち前項が焦点になる文についても、焦点が選択的焦点になるかまだ言及していない同定的焦点という種類の焦点になるかによって二つの類型に別れる。第二に、表5.6には天野(1998)で後項焦

<sup>4</sup> Jackendoff (2002) では、“We are now confronted with two overlapping notions of information structure: the focus is picked out in opposition to the presupposition (which includes topic), and the topic is picked out in opposition to the comment (which includes focus)”(p.413) と述べられている。焦点と前提を対立的に捉える考え方については、西山(1979)、新屋(1994)、天野(1996)なども参照。

主題-題述構造	焦点	例	
主題文	後項/通常の焦点	ピーターはウサギだ。	(指定文型)
	後項/選択的焦点	犯人はジョーンズだ。	(倒置指定文型)
非主題文	前項/選択的焦点	ジョーンズが犯人だ。	(指定文型)
	前項/同定的焦点	何でも反対するのが山田さんだ。	(同定文型)
	全体	あつ、家がドーム型だ!	(中立叙述文型)

表 5.6 名詞述語文の機能論的構造の主要な類型

点、砂川 (2005) で全体焦点、新屋 (1994), 野田 (1996), 熊本 (2000), 西山 (2003b) で中立叙述文とされた提示文という類型が含まれていない。提示文をどのように扱うのかについては後で詳しく述べるが、先に言っておくと本研究では提示文を同定文の隣接的事例として扱う。第三に、天野 (1998) は全体焦点文について眼前描写と非眼前描写という区別を設定しているが、ここではそのような区別は特に問題としていない。

表 5.6 の類型は、名詞述語文の機能論的構造に関する代表的な類型に過ぎない。既に述べたように、名詞句の修飾語句や非修飾語句の部分だけが焦点になるという場合もあり得る。また、名詞述語文が名詞句を二つではなく三つ含むような事例では、主題-題述構造と焦点はさらに複雑な機能論的構造を構成する。例えば、「カキ料理は広島が本場だ」(野田, 1981) というよく知られた事例では、「カキ料理」が主題、「広島が本場だ」が題述となり、題述の中の「広島が」の部分焦点となる。しかしひとまずは、表 5.6 のような類型を名詞述語文の機能論的構造の主要な類型と見なしておく。

## 5.2 構文と機能論的構造

### 5.2.1 「A は B だ」構文

■指定文型と倒置指定文型 帰属関係、同一関係、役割-値関係といった様々な意味論的關係を表す名詞述語文が、「A は B だ」という構文で叙述される。「A は B だ」構文は、主題と題述によって構成される。

- (13) a.  $\frac{\text{ピーター}}{\text{主題}} \text{ は } \frac{\text{ウサギ}}{\text{題述}} \text{ だ。}$  (帰属関係)
- b.  $\frac{\text{バウンサーさん}}{\text{主題}} \text{ は } \frac{\text{パニー氏}}{\text{題述}} \text{ だ。}$  (同一関係)
- c.  $\frac{\text{ピーターのいところ}}{\text{主題}} \text{ は } \frac{\text{ベンジャミン}}{\text{題述}} \text{ だ。}$  (役割-値関係)

焦点は述語名詞句であるが、通常の焦点である場合と選択的焦点である場合がある。帰属関係や同一関係を表す文においては、特別な文脈や韻律的強勢を伴わない限り、焦点は通常の焦点として解釈されるのが普通である。これに対して、役割-値関係を表す文においては焦点は選択的焦点として解釈される。

- (14) a.  $\text{ピーター} \text{ は } \frac{\text{ウサギ}}{\text{通常の焦点}} \text{ だ。}$  (帰属関係)
- b.  $\text{バウンサーさん} \text{ は } \frac{\text{パニー氏}}{\text{通常の焦点}} \text{ だ。}$  (同一関係)
- c.  $\text{ピーターのいところ} \text{ は } \frac{\text{ベンジャミン}}{\text{選択的焦点}} \text{ だ。}$  (役割-値関係)

西山 (2003b) では、(14a-c) のような事例はそれぞれ措定文、倒置同一性文、倒置指定文と呼ばれている。この記述的分類に与えられた名称に因んで、ここでは主題-題述構造を持つ名詞述語文のうち、述語名詞句が通常の焦点になっているものを措定文型、選択的焦点になっているものを倒置指定文型と呼ぶことにする。

- (15) 措定文型 : 

X は
-----

 : 

Y だ <small>通常の焦点</small>
-----------------------------

  
主題                      題述
- (16) 倒置指定文型: 

X は
-----

 : 

Y だ <small>選択的焦点</small>
-----------------------------

  
主題                      題述

■第二タイプの指定文 帰属関係や同一関係の述語名詞句は、文脈によっては選択的焦点になる場合もある。ピーターが何という種の動物であるのかとか、バウンサーさんが誰と同一人物であるのかが問題となっているような文脈では、述語名詞句は選択的焦点になる。

- (17) A: ピーターはウサギだっけ? ネコだっけ?  
 B: ピーターは ウサギ だ。  
選択的焦点
- (18) A: バウンサーさんは、この五人のうちの誰なのか?  
 B: バウンサーさんは バニー氏 だ。  
選択的焦点

これは名詞述語文の意味論的構造と機能論的構造が互いに独立した構造であり、同じ意味論的構造を持った文が異なる機能論的構造を持つ場合があり得るということを示している。筆者の考えでは、(18) の事例は西山 (2000) が第二タイプの指定文と呼んだ事例と同じものである。西山 (2000) は「洋子を殺したひとは、この禿頭の男だ」という文について、主語が変項名詞句 (非指示的) であるような通常の倒置指定文としての読みの他に、(19) に示すような主語が特定の人物を指示する読みがあるとしている。

- (19) (あっかった!) 洋子を殺したひとは、この禿頭の男だ。  
 (B) 洋子が森で殺された。数人の容疑者は浮かんだが、犯人の特定は難航した。ところが、たまたまその殺人現場を木の陰から見ていたという目撃者が登場した。警察は、その目撃者に、容疑者の写真の一覧表を見せる。しばらく、その写真表を見ていた目撃者が (18)[筆者注: 上記 (19) の文] を口にする。 (西山, 2000, p.35)

この文の (19) の読みでは、「洋子を殺したひと」はある特定の人物に言及するために用いられているが、文はその人物と同一人物であるものを写真の中から選択、指定するために用いられており、倒置指定文と類似している。西山 (2000) はこの文を第二タイプの指定文と呼び、「洋子を殺したひと」は指示的名詞句であるが、変項名詞句として機能しているのだと言う。西山 (2000) は、このような解釈は複数のスペースが関与する場合に発生するのだとしている。あるスペース R の要素 A の、別のスペース M における対応物を探すような場合に第二タイプの指定文が成立する。このとき、名詞句は「A の M における対応物」という意味の変項名詞句として機能しているのだとされる。

西山 (2000) の考え方を役割と値という概念を用いて再解釈するとすれば、通常の倒置指定文の主語は役割  $r$  を表しているが、第二タイプの指定文の主語は「役割  $r$  の値  $a$  のスペース M における対応物」という役割を表しているのだという考え方に相当するものと

思われる。しかし本研究では、意味論と機能論を区別するという観点から、このような考え方は取らない。「洋子を殺したひとは、この挙げ頭の男だ」という文において、主語名詞句は役割  $r$  を表す場合と、 $r$  の値  $a$  を表す場合がある。主語が役割  $r$  を表している場合、この文は役割  $r$  と対象  $b$  (秃頭の男) の間の役割-値関係を表す文 (西山 (2003b) の倒置指定文) になる。主語が値  $a$  を表している場合には、この文は二つの事物  $a$  と  $b$  の間の同一関係を表す文になるが、述語が通常焦点である場合には西山 (2003b) の倒置同一性文に相当し、選択的焦点である場合には第二タイプの指定文に相当する。

(20) 洋子を殺したひと<sub>1</sub>は、この秃頭の男<sub>2</sub>だ。

- a. 倒置指定文  $r_1 \overset{\text{役割と値}}{\longleftrightarrow} b_2$  (述語は選択的焦点)  
 b. 倒置同一性文  $a_1 \overset{\text{同一関係}}{\longleftrightarrow} b_2$  (述語は通常焦点)  
 c. 第二タイプの指定文  $a_1 \overset{\text{同一関係}}{\longleftrightarrow} b_2$  (述語は選択的焦点)

第二タイプの指定文は、意味論的には同一関係を表す文であるが、機能論的には倒置指定文型 (述語が選択的焦点) の文である。機能論的に、通常倒置指定文と似ているからといって、意味論的にも主語が役割を表しているのだとか、変項名詞句であるのだと考える必要は無い。複数のスペースの関与は、文が選択的焦点を持つための要因になる。 $a$  がスペース  $M$  に対応物を持つのだということが前提とされているような文脈では、述語名詞句は選択的焦点になる。

### 5.2.2 「A が B だ」構文

■指定文型 「A は B だ」構文が主題と題述によって構成されるのに対して、「A が B だ」構文は主題-題述構造を持たない。「A は B だ」構文では述語名詞句が焦点となったが、「A が B だ」構文ではしばしば主語名詞句が焦点となる。特に主語名詞句が選択的焦点になっているような「A が B だ」構文を、ここでは指定文型と呼ぶことにする。意味的には様々な関係を表す名詞述語文の主語を選択的焦点にして、指定文型の名詞述語文を作ることができる。

(21) 主題-題述構造の名詞述語文

- a. ピーターはウサギだ。 (帰属関係)  
 b. バウンサーさんはバニー氏だ。 (同一関係)  
 c. ピーターのいとこはベンジャミンだ。 (役割-値関係)

(22) 指定文型の名詞述語文

- a. ピーターがウサギだ。 (帰属関係)  
選択的焦点  
 b. バウンサーさんがバニー氏だ。 (同一関係)  
選択的焦点  
 c. ピーターのいとこがベンジャミンだ。 (役割-値関係)  
選択的焦点

指定文型の「A が B だ」構文は、しばしば意味的に対応する「B は A だ」構文に言い換えることができる。次の事例は、西山 (2003b) で指定文と倒置指定文、同一性文と倒置

同一性文と呼ばれる事例である。

- (23) a. 田中が幹事だ。 (指定文)  
 b. 幹事は田中だ。 (倒置指定文)
- (24) a. ハイド氏がジキル博士だ。 (同一性文)  
 b. ジキル博士はハイド氏だ。 (倒置同一性文)
- 西山 (2003b, ch.3)

二つの文の間に統語的派生関係を仮定する考え方もあるが<sup>5</sup>、本研究では、(23a) と (23b)、(24a) と (24b) の間に統語的な変形関係は仮定しない。(23a) や (24a) の文は、それぞれ帰属関係を表す「田中は幹事だ」や同一関係を表す「ハイド氏はジキル博士だ」という文の主語が主題ではなく焦点になったものであると見なす (=25)。一方、(23b) や (24b) は役割-値関係を表す「幹事は田中だ」や同一関係を表す「ジキル博士はハイド氏だ」という文であり、これらの文も主語を主題ではなく焦点にすることができる (=26)。

- (25) a.  $\left\{ \begin{array}{l} \text{田中は幹事だ。} \\ \text{田中が幹事だ。 (=24a)} \end{array} \right.$  (帰属関係)
- b.  $\left\{ \begin{array}{l} \text{ハイド氏はジキル博士だ。} \\ \text{ハイド氏がジキル博士だ。 (=24a)} \end{array} \right.$  (同一関係)
- (26) a.  $\left\{ \begin{array}{l} \text{幹事は田中だ。 (=24b)} \\ \text{幹事が田中だ。} \end{array} \right.$  (役割-値関係)
- b.  $\left\{ \begin{array}{l} \text{ジキル博士はハイド氏だ。 (=24b)} \\ \text{ジキル博士がハイド氏だ。} \end{array} \right.$  (同一関係)

指定文と倒置指定文、同一性文と倒置同一性文の間には、機能論的な違いも観察される。第一に、倒置同一性文の述語名詞句が通常の焦点になる場合と選択的焦点になる場合があるのに対して、同一性文の主語名詞句は選択的焦点になることはあっても通常の焦点にはならない。「ジキル博士はハイド氏だ」という文は、単にジキル博士がハイド氏と同一人物であるということ述べる (=27a) ためにも、ジキル博士が別の誰かと同一人物であることを前提としてそれがハイド氏であるということ述べる (=27b) ためにも用いられる。これに対して「ハイド氏がジキル博士だ」という文は、誰かがジキル博士と同一人物であるということ述べる (=28b) ような場合にしか用いられない。

- (27) a. ジキル博士は ハイド氏だ。 (＝指定文型)  
通常の焦点
- b. ジキル博士は ハイド氏だ。 (＝倒置指定文型)  
選択的焦点
- (28) a. \* ハイド氏が ジキル博士だ。  
通常の焦点
- b. ハイド氏が ジキル博士だ。 (＝指定文型)  
選択的焦点

<sup>5</sup> 西山 (1985) では、倒置指定文「社長は田中角栄だ」は指定文「田中角栄が社長だ」を埋め込み文として持つ構造 [s [NP [s 田中角栄が社長だ] のは] [Pred e だ]] という構造から派生されるという分析を提示している。

第二に、焦点が選択的焦点である場合に限りて考えてみても、主語名詞句が選択的焦点である場合と、述語名詞句が選択的焦点である場合では、焦点の性質に微妙な違いがある。倒置指定文(役割-値関係を表す文)は特に文脈や音韻的強勢を伴わなくても述語名詞句が選択的焦点になるが、いつでも対応する指定文の形式に言い換えられるわけではない。次のような事例では、倒置指定文を指定文の形式に言い換えることはできない。

- (29) a. この部屋の温度は 19度 だ。  
選択的焦点  
 b. \* 19度 がこの部屋の温度だ。  
選択的焦点
- (30) a. 私の血液型は B型 です。  
選択的焦点  
 b. ?? B型 が私の血液型です。  
選択的焦点

似たような現象は、ウナギ文においても観察される。ウナギ文は料理を注文するときや、誰がどの料理を注文したかを確認するときに用いられるが、特に料理を注文する場面では(31a)のような言い方は可能だが(31b)のような言い方はできない。

- (31) a. 僕はウナギだ。  
 b. \*ウナギが僕だ。

まとめると、次のように言うことができる。互いに言い替えが可能であるように見える「AがBだ」構文と「BがAだ」構文は、実際には語順や焦点の位置が異なるばかりではなく、焦点の性質においても違いが存在する。「BはAだ」構文の述語名詞句がしばしば通常の焦点にも選択的焦点にもなり得るのに対して、対応する「AがBだ」構文の主語名詞句は選択的焦点にしかない。また「BはAだ」構文の述語名詞句が選択的焦点である場合にも、必ずしも対応する「AがBだ」構文への言い換えが可能であるわけではない。指定文型の「AがBだ」構文が成立するためには何らかの意味論的、機能論的、語用論的な条件が満たされる必要があるものと思われるが、ここでは未解決の問題としておく。

■同定文型 同定文とは、西山(1985)で設定され、西山(1990b, 1993)、熊本(1989a, 1992, 1995)などによって分析の進められてきた類型である。西山(1985)では二つの名詞句がいずれも指示的であるような名詞述語文として設定された類型であったが、熊本(1989b)以降は二つの名詞句がいずれも指示的であると言ってもやや特徴的な性質を持った文が同定文の中心的な事例として扱われるようになった\*6。熊本(1989b)が同定文の事例として挙げているのは次のような文である。

- (32) a. 苦労してやっと手に入れたのがこれだ。  
 b. 何でも反対するのが山田さんだ。  
 c. 結婚し多少お金もたまると欲しくなるのが、家だ。  
 d. この問題を分かりやすく解説したのが、本書である。

熊本(1989b)

\*6 西山(1990b)以降では、「ジキル博士はハイド氏だ」のような二つの事物の同一関係を述べるような文のために、同定文とは別に同一性文という類型が設定されている。



同定文は、述語名詞句が表す事物がどのようなものであるかを主語名詞句 (あるいは「の」節) で特徴付けるために用いられる。主語名詞句が焦点になっているが、指定文型の「A が B だ」構文の場合と違って選択的焦点ではない。ここではこのような機能論的構造を持った「A が B だ」構文を同定文型と呼ぶことにする。また、このような主語名詞句を通常の焦点や選択的焦点と区別して同定的焦点と呼ぶことにする。

帰属関係、同一関係、役割-値関係といった多様な意味論的关系を表す名詞述語文について主語を選択的焦点にして指定文型の「A が B だ」構文にすることができたのに対して、同定文型の「A が B だ」構文にすることができる名詞述語文は意味論上ある程度限定される。第一に、同定文は述語名詞句が表す事物や概念を特徴付ける構文であるので、述語名詞句は特徴付けられるべき事物や概念を表す名詞句でなければならない。第二に、主語名詞句は述語名詞句が表す事物や概念を特徴付けるような記述的内容を持った名詞句でなければならない。同定文の主語名詞句として用いられる言語形式には、少なくとも次のようなものがある。

- (33) a. 「の」節 : 何でも反対するのが山田さんだ。  
 b. 連体修飾構造 : 何でも反対する人が山田さんだ。  
 c. 役割名詞句 : 反対派のリーダーが山田さんだ。

(33a) は主語が「の」節である場合である。この文は従属節中の名詞句を主節の述語の位置に置いた分裂文の一種と考えることができる。述語名詞句「山田さん」が表す事物がどのようなものであるかを、その事物を項として含む「の」節によって説明している。

- (34)  $[_{NP}[_{S} x_i \text{何でも反対する}]] \text{の} [_{NP} \text{山田さん}_i] \text{だ}$ 。

(33b) は主語が連体修飾節を伴う名詞句である場合である。連体修飾構造の主名詞「人」は述語名詞句「山田さん」が表す事物の上位範疇を表しており、連体修飾節がその範疇に限定を加えることによって、山田さんがどのような人であるのかを特徴付けている\*7。

- (35)  $[_{NP}[_{S} x_i \text{何でも反対する}]] \text{人}_i \text{が} [_{NP} \text{山田さん}] \text{だ}$ 。

(33c) は主語が役割を表すような名詞句である場合である。役割-値関係を表す文は主語を選択的焦点にして指定文型の「A が B だ」構文を作ることも出来るが、(33c) の文では特にいくつかの役割の中から「反対派のリーダー」という役割が選ばれているわけではない。(33c) は同定文の一種であり、役割を表す名詞句は同定的焦点としても用いられるのだと考えておくことにする。

いずれの場合にせよ、同定文は概ね述語名詞句が表す事物を主語名詞句の記述によって特徴付ける文と考えることができる。しかし主語名詞句が述語名詞句が表す事物のどのよ

\*7 砂川 (2005) は、「の」には節を名詞相当の表現に変える名詞化辞の機能を持つものと代名詞としての機能を持つものがあり、「～のは/が～だ」という構文を持つ名詞述語文には名詞化辞を用いた分裂文であるものと、代名詞を用いた通常の名詞述語文であるものと述べている。

$[[\text{みち子が } X_i \text{ 作った}]_S \text{の} ]_{NP} \text{は/が} [\text{これ}]_{NP} \text{だ}$   
名詞化辞  
 $[[\text{みち子が } X_i \text{ 作った}]_S \text{の} ]_{NP} \text{は/が} [\text{これ}]_{NP} \text{だ}$       砂川 (2005, p.208)  
代名詞

この考え方に従うと、主語が「の」節である同定文には、理論上は (34) のような分裂文であるものと (35) のような分裂文ではないものの二つの場合があり得るのだと考えられるが、直観的には二つの読みの違いは区別し難い。また、主語が連体修飾構造であるような事例について、連体修飾構造の主名詞が連体修飾節中の要素になっていない場合がある。次の事例では主語名詞句は緑茶を発酵させた結果、生産されたものを表しており、主語名詞句の主名詞「の」「もの」は連体修飾節中の要素ではない。

$[_{NP} [_{S} \text{緑茶を発酵させた}]] \text{の/もの} \text{が} [_{NP} \text{紅茶}] \text{だ}$ 。

うな特徴を記述する場合に同定文型の「AがBだ」構文が成立するのかを考えてみると、いくつかのケースがあることが分かる。新屋(1994)は熊本(1989b)の同定文に相当する事例を、指注文の特殊な事例(通常は倒置しないはずの指注文が倒置したような事例)として扱っているが、どのような場合にこのような構文が可能になるかについて、唯一叙述、本質規定、定義づけという三つのケースを報告している。

## (36) 唯一叙述

- a. i. この高校は県下唯一の高校野球優勝校だ。
- ii. 県下唯一の高校野球優勝校がこの高校だ。
- b. i. 彼は世界一の金持ちだ。
- ii. 世界一の金持ちが彼だ。

## (37) 本質規定

- a. i. 太郎は転んでもただでは起きない。
- ii. 転んでもただでは起きないのが太郎だ。
- b. i. 女はいざというとき力を発揮する。
- ii. いざというとき力を発揮するのが女だ。

## (38) 定義づけ

- a. i. 正三角形は三辺の長さが等しい三角形だ。
- ii. 三辺の長さが等しい三角形が正三角形だ。
- b. i. 釜師は茶釜を作る職業の人だ。
- ii. 茶釜を作る職業の人が釜師だ。

新屋(1994)

新屋(1994)の分類とおおよそ重なるが、ここでは対象にどのような情報を付け加えるのかという観点から、同定文を三つの種類に整理しておきたいと思う。

- (39) a. 定義付け・特徴付け (＝定義づけ)
- b. 意義・価値の叙述 (＝唯一叙述)
- c. 本質的属性の叙述 (＝本質規定)

定義付け・特徴付けとは、どのようなものかよく分からない事物や概念に定義を与えたり、特徴付けたりするような事例である。この事例には、名前しか分からないような事物や概念に定義を与えるようなものもあるが、ある程度どのようなものか分かっている事物や概念についてより厳密な定義を与えたり、別の側面から特徴付けを与えるようなものもある。次の(40a)では、光という常識的な意味では既に分かっている事物について科学的な定義を与えている。(40b)では、能の動きという知覚的には既に分かっている事物について別の分野の概念を用いた比喻によってどのような動きかを説明している。

- (40) ニュートンは物体から微粒子が飛んでくるのが光だと考えたが、ハイゲンスが出て来て波動説を称(とな)えこれが承認されるに幾多の年月がかかった。

寺田寅彦「研究的態度の養成」

- (41) かういふ彫刻の神秘的な動きがもう少し能動的に動いてくるのが能の動作であるやうな気がする。 高村光太郎「能の彫刻美」

対象の意義・価値の叙述とは、対象の存在意義、文化的価値、話し手との関係、いま話している事柄との関わりというような、ある一定の領域の情報の中で、対象がどのような意味を持つのかとか、どのような位置づけを与えられるのかといったことを特徴付けるような事例である。対象がどのようなものか既に分かっているという点では(40)や(41)のような事例と同じだが、この事例は対象それ自体の定義や知覚的特徴を記述するというよりは、対象が副次的に持つ意義や価値を記述するという点で違いがある。次の事例では、「ボルクマン」(イブセン作の戯曲)、「あの山」、「升田八段」はある特定の事物を表しており、ごく一般的な意味において既に同定済みである。これらの文は、事物を個人史や民間伝承、ある特定の分野の歴史の中に位置づけ、個人的ないし文化的な価値や存在意義を与えるために用いられている。

- (42) 然るに島崎藤村さんが信州の小諸から、これを是非読んで見ると、わざわざ小包で送ってくれたのが、この「ボルクマン」である。 蒲原有明「劇団の新機運」

- (43) 昔の弘法大師さえも、千足の草鞋を容易なすって、それを穿ききってもまだ登れなかったのが、あの山だそうでございます。 中里介山「大菩薩峠」

- (44) 勝負の鬼と云われた木村前名人でも、実際はまだ将棋であって、勝負じゃない。そして、はじめて本当の勝負というものをやりだしたのが升田八段と私は思う。 坂口安吾「坂口流の将棋観」

対象の本質的属性の叙述とは、対象が本質的に持つような属性を叙述するような事例である。「何でも反対するのが山田さんだ」や「いざというとき力を発揮するのが女だ」のような事例では、「山田さん」や「女」のような事物や概念が本質的に持つような性質の一部が叙述されている。次の事例では、食通が食材を選ぶときに取る標準的な行動や、「禅門の心づかい」に含まれる基本的な行動様式が述べられている。

- (45) 家鴨も雄の味が上等としてある。四月は鴨の季節であるから、雌雄二羽が店頭にあったら雄を求めるのが食通といえる。 佐藤垢石「季節の味」

- (46) 水を使えるだけ使う、いいかえれば、水を活かせるだけ活かすというのが禅門の心づかいである。 種田山頭火「水〔扉の言葉〕」

このように一言で同定文と言ってもその事例は多様であり、これらを理論的にどのように一般化すべきかは興味深い問題である。ここではそのような理論的一般化、形式化には立ち入らないこととし、同定文型の「AがBだ」構文は、記述的には定義付け・特徴付け、意義・価値の叙述、本質的属性の叙述といった事例があるのだと述べるに留める。

■中立叙述文型I: 場面レベル述語 指定文型や同定文型の「AがBだ」構文が主語名詞句が焦点になっていたのに対して、中立叙述文型の「AがBだ」構文は主語名詞句が焦点になっていない。中立叙述文型の「AがBだ」構文には大別して二つのタイプのものがある。一つはCarlson (1977)の言う場面レベル述語(stage level predicate)と密接に関わるものであり、もう一つはそれ以外のものである。

中立叙述文の中心的な事例は、眼前の状況を描写するような文である。「あっ、家がドーム型だ!」のような文がそのような事例にあたる。このような事例は、Carlson (1977)の

意味論で言うところの場面レベル述語 (stage level predicate) が用いられている文に相当する。「家がドーム型だ」という文は、家がいつも (あるいは一般に) ドーム型であるということ述べているわけではなく、眼前の場面においてのみドーム型であるということ述べている。家という抽象的事物 (Carlson (1977) の言うところの種 (kind)) の眼前の場面における時間断片 (stage) が「ドーム型だ」という属性を持っているのである。このことを白井 (1985) は次のような制約の形で述べている。

- (47) 中立叙述制約 主語が「ガ」でマークされる文が「中立叙述」に解釈されるためには、その述部は 'stage' に働く意味的性質を備えていなければならない。

白井 (1985, p.230)

意味論的には様々な関係を表す名詞述語文を、個別場面的な状況を描写するような言い方で叙述することができる。

- (48) a. ピーターがウサギだ。 (帰属関係)  
 b. ピーターがベンジャミンだ。 (同一関係)  
 c. ピーターのいとこがベンジャミンだ。 (役割-値関係)

これらの文の可能な読みの一つは、指定文型の名詞述語文としての読みである。すなわち、主語を選択的焦点として、ウサギであるものがどれかとか、ベンジャミンと同一であるものがどれかとか、ベンジャミンに該当する役割がどれかということ述べるために用いられる。一方で、現実的には不自然な状況の描写ではあるが、これらの文はいずれも中立叙述文としての読みを持つ。ピーターはいつもはウサギではないのに今はウサギだとか、いつもはベンジャミンとは別の個体なのに今はベンジャミンと同一の個体だとか、ピーターのいとこはいつもはベンジャミンではないのに今はベンジャミンだというような読みである。こうした状況は現実的には非常に不自然であるが、架空の世界とか、物語の中の世界においてはそのような魔術的な状況も起こり得る。このような中立叙述文が用いられる別の状況は、いくつかの間違いが仕込まれた絵本を読むような場合である。本来の物語とは異なって、ピーターが別の種類の動物にされていたり、いくつかの登場人物が一人にまとめられていたり、登場人物同士の親族関係が変更されていたりすることに気付いた場合に、(48) のような発話をする事ができる。

より容易に場面レベルの状況を描写しているものとして解釈することができるような事例も見えておくことにしよう。しばしば値が入れ替わるような役割が関与する文では、比較的場面レベルの状況を描写する文を作りやすい。

- (49) a. あっ、イチローが四番打者だ！  
 b. あっ、四番打者がイチローだ！

(49a) はイチローはいつもはマリナーズの一番打者を務めているのに、その日に限って四番打者の打順でオーダーされているという場合に用いられる。すなわち、イチローのその場面における時間断片が四番打者であるという属性を持っている。一方、(49b) はマリナーズの四番打者はいつもは別の選手のはずなのに、その日に限ってイチローが四番打者を務めているという場合に用いられる。すなわち、四番打者という役割のその場面における時間断片がイチローを値として持つ。

眼前の状況を描写するような文ではないが、機能論的にはそれと類似する種類の構文がある。このような構文には、野田 (1996) が現象叙述型、法則叙述型と呼んだもの (これらは名詞述語文ではなく日本語の文一般に与えられた類型である)、天野 (1998) が非眼前描写の中立叙述文と呼んだもの、砂川 (2005) が修辭的描写文タイプと呼んだものなどを含む。

- (50) a. なにか音が聞こえるわ。 (眼前描写型)  
 b. きう合格発表があった。 (現象叙述型)  
 c. ボタンを押すと、音が出る。 (法則叙述型)  
 野田 (1996, ch.9)
- (51) a. 田中がやっと 10 位だ。 (非眼前描写の全体焦点文)  
 b. 家がドーム型だ。 (眼前描写の全体焦点文)  
 天野 (1998)
- (52) a. 信号が赤だ。 (現象描写文タイプ)  
 b. これがとんだパテシ師だった。 (修辭的描写文タイプ)  
 砂川 (2005, ch.3)

野田 (1996) は日本語の主題を持たない文について、眼前描写型、現象叙述型、法則叙述型という三つの類型を設定している。現象叙述型とは眼前の状況を描写するのではないが、過去に起きた出来事などを叙述する文である。法則叙述型とはある条件が満たされたときに必ず起きるような事態を叙述する文である。現象叙述型や法則叙述型の文は眼前の状況を描写しているわけではないが、眼前描写型と同じようにある一定の場面において起こるような事態を述べるものであり、場面レベルの叙述の一種であると考えることができる。従ってこれらの事例はいずれも、場面レベルの叙述をするような中立叙述文の類例と考えることができる。

天野 (1998) は日本語の名詞述語文について、「A は B だ」文は後項焦点文であり、「A が B だ」文は前項焦点文、後項焦点文、全体焦点文の場合があるとしている。このうち全体焦点文の「A が B だ」文については、さらに眼前の状況を描写するものとそうでないものがあるとしている。天野 (1998) が非眼前描写の全体焦点文の事例として挙げている物には、次のようなものがある。

- (53) a. 日本チームの負けは濃厚だ。主力選手がベンチウォーマーだ。  
 b. 上司があいつですよ。やる気が出ませんよ、まったく。  
 c. このチームは弱すぎる。田中がやっと 10 位だ。  
 天野 (1998)

(53a) は、いつもはチームの主力であるはずの選手が、今日に限っては控え選手になっているという状況で用いられる文である。(53b) は、話し手が現在置かれている状況において、上司という役割の値が望ましい人物ではなく、望ましくない特定の人物であることを述べている。これらの文は主力選手や上司という対象についての場面レベルの叙述になっているのだと考えることができる。(53c) の事例については、場面レベルの叙述というよりは、後で述べる項目の列挙を行うタイプの中立叙述文に近い。いずれにせよ、これらの事例はいずれも中立叙述文の類例と考えると差し支えない。

砂川 (2005) は日本語の名詞述語文を記述文と同定文の二つに分類し、特に記述文について眼前の状況を描写するもの (現象描写文タイプ) や、それに類似する事例 (修辭的描写文タイプ) があることを述べている。砂川 (2005) が修辭的描写文タイプの記述文としている事例には、本研究でも眼前描写文に類すると考える事例 (すなわち中立叙述文タイプの事例) と考えるものと、そうではないものが含まれている。次のような事例については、中立叙述文型の一つであると考えられる。

- (54) a. 彼女を信頼して全てをまかせたのだが、これがとんだペテン師だった。  
 b. と、その時、ぼくの右手の下の布地が動く、ハッとした。ひよっとすると、席の布地だとばかり思っていたところが、彼女の。まさか。やっぱりそうだった。彼女のスカートだった。  
 c. 5年ほど前の夏だったか、沖縄から中年の男が尋ねてきたことがあった。役場に勤めながら農業をやっているという。……(中略)…… /この人が、きれいな標準語を喋る人だった。「沖縄の人は、みんなそげんよかことば使わすどすか」女房が信じられない表情で何回も念を押していた。  
 d. 友人を家に泊めた。ところがその男が大酒のみだ。飲み始めたら止まらない。

砂川 (2005)

これらの事例は、彼女は普段は誠実だが、そのときに限っては不誠実だったのだとか、右手の下の布地は普段は席の布地なのだが、そのときに限ってはスカートだったのだというように言っているわけではない。彼女がペテン師であったり、布地がスカートの一部であったり、ある人物が標準語を話したり、大酒のみであったりすることは、基本的にはその対象が持つ恒常的な属性の一部である。しかし (54) においては、それらの属性は話し手による認識、発見を介して、ある特定の時点において生じた特定の事態のように叙述されている。このような事例についても、本研究では場面レベルの叙述をするような中立叙述文に準ずるものと考えておきたいと思う。

一方で、過去の研究においては中立叙述文の一つとして言及されているが、本研究では中立叙述文とは見なさないような事例もいくつかある。次のような事例は、新屋 (1994) では中立叙述文の一つとされ、砂川 (2005) では叙述的描写文の一つとされているが、本研究では中立叙述文とは見なさない。

- (55) a. (写真を見せながら) これが長男の太郎です。  
 b. 兄も姉も医者です。医者が伝統的に我が家の職業なんです。  
 c. 母が早く亡くなったので、姉が母親代わりです。

新屋 (1994)

- (56) 小鶴は起き直って、娘の脚を小気味よくたたいた。それが起きる合図だった。

砂川 (2005)

これらは写真の中の人物、医者、姉、脚を叩く行為といった事物や物事についての場面レベルの叙述をしているようには見えない。また砂川 (2005) の叙述的描写文の事例のように、ある特定の事物や概念について、それが有る属性を持っていたのだということを話し手が発見するような文でもない。本研究では、これらの事例は中立叙述文というよりは指定文タイプの名詞述語文に類似した事例であると考えられる。

■中立叙述文型 II: 項目の列挙・内訳 個別場面的な状況を描写する文は中立叙述型の「AがBだ」構文の代表的な事例だが、個別場面的な状況を描写するのではない文が中立叙述型の「AがBだ」構文になる場合もある。よく見られる事例としては、項目を列挙したり、内訳を述べたりするような名詞述語文がある。

## (57) 項目の列挙

- a. 利益面でも「減益は避けられない」が二十四社、「増収、生産性向上などで増益が可能」が二十二社できっこう。(毎日新聞, 1995.1.4)
- b. チンパンジーが先でヒトがあとである。天野 (1995b)
- c. 上の子が二歳三カ月、下の子が六ヶ月。(ibid.)
- d. 正面のドアを入るとすぐ右手がりビングルーム、隣が寝室、次がダイニングルーム (ibid.)
- e. 山田君が受付、田中さんが司会、佐藤君が会計だ。菊地 (1997)

## (58) 内訳

- a. 二十件のうち十六件が六十五歳以上のお年寄りだった。(毎日新聞, 1995.1.3)
- b. 米国の貿易赤字は約千五百億ドルに達し、そのうち、約半分が対日貿易によるものだ。(毎日新聞, 1995.5.18)
- c. 私のクラスでは、五人が男で、六人が女です。久野 (1973, p.34)
- d. 大部分の学生が独身です。(ibid.)
- e. ほとんどの学生が金持ちの息子です。(ibid.)
- f. 老人の多くが病身です。新屋 (1994)
- g. 日本人の三人に一人が近眼だ。(ibid.)

これらの事例では、主語は「が」で表示されているが、指定文タイプの名詞述語文のように主語が焦点になっているわけではない。従って機能論的には中立叙述的であるように見えるが、眼前の状況を描写するような名詞述語文と違って、場面レベルの叙述をする文でもない。これらの文は、「減益は避けられない」と回答する企業はいつもは十社ほどしかないのに今回は二十四社あるのだとか、喉に餅を詰まらせる事故の二十件のうち十六件は例年では子供だが今年はお年寄りだったというようなことを述べているわけではない。

これらの事例の特徴は、主語によって表されている事物や概念が、より大きな全体的概念、ないし上位概念の一部になっているという点である。項目を列挙する文では、主語は範列的關係にあるいくつかの要素のうちの一つである。アンケートはいくつかの異なる選択肢によって構成され、話題になっている動物はヒトやチンパンジーのようないくつかの異なる種類の動物であり、家族は上の子や下の子のような何人かの構成員によって構成され、会の運営者は何人かの委員によって構成されている。項目を列挙する構文は、これらの構成要素のそれぞれに別の属性を割り当てるために用いられる。

- (59) アンケート { 「減益は避けられない」 → 二十四社  
「増収、生産性向上などで…」 → 二十二社

内訳を述べる構文では、主語はある一定の数量を持った集合の部分集合を表している。同じ種類の事故が全体で二十件あり、貿易赤字は全体で千五百億ドルに達し、クラスの人数は11人であり、学生や老人や日本人は不特定多数存在する。内訳を述べる構文は、それらのうちのいくつかとか、何割かについて、ある属性を持つのだということを述べるために用いられる。

- (60) 事故(二十件)  $\left\{ \begin{array}{l} \text{十六件} \rightarrow \text{六十五歳以上のお年寄り} \\ \text{四件} \rightarrow \text{六十五歳未満} \end{array} \right.$

このような場合には、個別場面的な状況を描写する文以外であっても中立叙述型の「AがBだ」構文にすることができる。アンケートや事故の全体が事実上の主題になっているのだという考え方ができるかも知れないが、ここでは特に触れない。

■提示文 提示文は「AがBだ」型の名詞述語文の中でも特に議論の多い類型である。この構文は、主語が「が」で表示されていながら、むしろ述語名詞句の方が新情報であるように見えるという特徴がある。次の事例では、主語の「特におすすめなの」の方が先行文脈との関係が深く、述語の「これ」が新しく談話に導入される要素であるように見える。

- (61) 丈夫な品種がたくさんある。特におすすめなのがこれだ。 砂川(2005, p.102)

このような構文の機能論的構造をどのように理解するかについて、研究者によって意見が分かれている。天野(1995a)は、この文は「AがBだ」という構文を持ちながら、述語が焦点になっている後項焦点文であると言う。砂川(2005)は、この種の文を後項焦点文と考えるにはいくつか問題があり、状況陰題文かつ全体焦点文であるとするのが適当であると言う。砂川(2005)が指摘する問題点には次のようなものがある。

- 後項に韻律的な強勢を置くと不自然になる。  
? 丈夫な品種がたくさんある。特におすすめなのがこれだ。
- 後項に「だけ」のような限定表現をつけると不自然になる。  
\* なかでも、リアルタイムでお届けする海外FMが「ゆうせん」だけ。
- 否定文にすることができない。  
\* 特におすすめできるのがこれではない。

新屋(1994)では、提示文に相当するような事例は中立叙述文の中に含まれていた。他にも、野田(1996)、熊本(2000)、西山(2003b)らが提示文やそれに類する事例を中立叙述文として扱っている。

本研究では、提示文を同定文の周辺的事例として扱う。提示文は多くの点で、中立叙述文よりも同定文に類似した特徴を持つ。第一に、中立叙述文は主に場面レベル述語が用いられるような文で成立するが、提示文は場面レベル述語が用いられているようには見えない。次のような事例は、主語に焦点を置いて指定文タイプの名詞述語文として用いられる場合と、主語に焦点を置かず中立叙述文タイプの名詞述語文として用いられる場合がある。中立叙述文として解釈される場合、この文はピーターはいつもはウサギではないが、今はウサギなのだというような意味になる。

- (62) ピーターがウサギだ。
- a. ウサギであるようなものがあるが、それはピーターだ。 (指定文型)
- b. ピーターはいつもはウサギではないが、今はウサギだ。 (中立叙述文型)



これに対して、次のような提示文では、特におすすめなのがいつもは別のものだが、今はこれなのだというようなことを言っているわけではない。

(63) 特におすすめなのがこれです。

第二に、砂川 (2005) が指摘しているように提示文は述語に韻律的な強勢を置くと不自然になる。筆者の内省では、述語よりもむしろ主語に強勢を置く方が自然である。しかし中立叙述文では、普通は主語に韻律的な強勢は置かない。(62) の文は、指定文として用いられる場合は主語に韻律的な強勢が置かれて述語の側のピッチ変化は小さくなり、中立叙述文として用いられる場合には主語に目立った強勢は置かれず、述語の側のピッチ変化は指定文の場合と比べて大きくなる。

第三に、これも砂川 (2005) が指摘していることだが、提示文は通常、否定文にならない。しかし中立叙述文は否定文になることができる。(62) の事例は、否定文になっても依然として指定文と中立叙述文の読みを持つ。

(64) ピーターがウサギではない。

a. ウサギでないようなものがあるが、それはピーターだ。 (指定文型)

b. ピーターはいつもはウサギだが、今はウサギでない。 (中立叙述文型)

これらの特徴は、提示文が中立叙述文よりも同定文に近い特徴を持った名詞述語文であるということを示している。同定文と提示文の間には、外見上はさらに際立った類似性がある。提示文の中心的な事例は「～のが～だ」という分裂文に似た構文を持つが、同定文も「～のが～だ」という構文を持つものが多い。何より、提示文は同定文と同じように、述語名詞句によって表される事物や概念がどのようなものかについて説明を加えたり、特徴づけを行っているように見える。(65–67) は新聞記事の中から収集した提示文の実例である。

(65) フェラーリは第二次世界大戦が終わってレースが再開された時から、クルマを製作し、チームを作ってレースに参加している。その後、現在に至るまで1年として休んだことはない。そのフェラーリがクルマを作るようになる以前、すなわち**1920年代や30年代に、ちょうどこの現代のフェラーリの役割を果たしていたのが、アルファ・ロメオ**だった。 (毎日新聞, 1995.1.13)

(66) ◇消音、江戸の昔も／トイレの装置として急速に普及しているのが「音姫」だ。男の人にはあまり知られていないようなので紹介すると、衛生陶器最大手のTOTOが発売している擬音装置で、ボタンを押したり、手をかざすとスピーカーから流水音が流れるもの。 (毎日新聞, 1995.1.13)

(67) 人々は賃金の目減りを副業、内職で補ってきたが、副収入を加えた実質所得も昨年初のルーブル暴落を境に減少に転じた。これに追い打ちをかけたのが、今年初め以来の**公共料金の大幅アップ**だ。公営住宅の家賃や鉄道運賃は二・四倍、ガス料金は五倍に跳ね上がった。 (毎日新聞, 1995.7.25)

(65) は、「アルファ・ロメオ」がモーター・スポーツの分野でどのような意味を持つ車であるのかを述べている。(66) では、「音姫」という商品が経済の分野でどのようなトピックになっているかが述べられている。(67) では、「公共料金の大幅アップ」がロシアの経済状況の中でどのような影響を及ぼした出来事であるのかが述べられている。これらの提

示文は、述語名詞句によって表されている事物や概念が談話に新たに導入される要素であるということを除けば、同定文とほとんど変わらないように見える。

以上のように、提示文は非常に多くの点において、同定文と類似した特徴を持っている。本研究では、提示文とは基本的には同定文の特殊な事例なのだと考えることとする。少なくとも、「AがBだ」文を機能論的な観点から指定文タイプ、中立叙述文タイプ、同定文タイプという三つの類型に分類した場合、提示文は指定文タイプや中立叙述文タイプの中心的な事例にはあまり似ておらず、同定文タイプの中心的な事例に最も類似している。

提示文は多くの点で同定文と類似しているが、一方では過去の研究で指摘されてきたように、多くの点において興味深い特徴を持っている。提示文がどのような点において一般的な同定文と異なり、特徴的であるのかについて整理しておくことにしよう。提示文は少なくとも、次のような特徴を持つ\*8。

- (68) a. 提示文の述語名詞句によって表される事物は、談話に新しく導入される要素か、談話に既に導入されているが、しばらく話題に上がらず背景化されていたような要素である。
- b. 提示文の主語は、先行文脈と何らかの関連性を持つような事物や概念である場合が多い。
- c. 提示文の述語名詞句によって表され、談話に新たに導入されるか前景化される事物や概念は、後続する文脈の主要な話題になる場合が多い。

(68a) について。一般的な同定文は、述語名詞句によって表される事物や概念の存在を前提として、それがどのようなものであるかを主語名詞句や節によって特徴付ける。これは提示文の場合にも基本的には同じなのだが、提示文の場合には述語名詞句によって表され、存在が前提とされ、主語によって特徴付けられる事物や概念自体が談話に新たに導入されたり、それまで背景化されていて再び前景化される要素になっている。すなわち提示文は、要素の導入や前景化と、その要素の特徴づけを一度に行っている。談話進行の効率を考えると、これは非常に効率のいいやり方だと言える。「ところで、アルファ・ロメオという車がある。この車はかつて現在のフェラーリの役割を果たしていた」などというように、要素の導入と特徴づけのためにいちいち二つの文を消費する必要が無い。

(68b) について。この節の前半で、同定文には対象の同定をするもの、対象の意義や価値を述べるもの、対象の本質的属性を述べるものなどがあるのだと述べた。

- (69) a. 定義付け・特徴付け
- b. 意義・価値の叙述
- c. 本質的属性の叙述

提示文の場合は、対象が現在進行中の談話においてどのような意味を持つものなのかを述べるような事例が多い。これは(69)の分類でいうと、(69b)の事例に相当する。対象が進行中の談話とどのような関係にあるかを説明するために、提示文の主語は先行文脈と何らかの関連性を持つような内容のものである場合が多い。(66)のように談話の冒頭で用い

\*8 これらの特徴は基本的には、先行研究で既に指摘されている特徴と同じものである。砂川(2005, §3.3)は提示文が新しい主題を導入したり、古びた主題を再活性化する機能を持つこと、先行談話で述べられてきた内容を踏まえて新しい情報を提示するものであること、後項(述語名詞句)の内容が後続談話の主題として語り継がれるものであることなどを指摘している。

られるような事例もあるが、それ以外の事例を見ると (65) や (67) の主語はいずれも直前の文脈で中心的な話題となっている事物(「フェラーリ」や「ルーブル暴落」)と関連性を持った内容になっている。

(70) そのフェラーリがクルマを作るようになる以前、すなわち 1920 年代や 30 年代に、ちょうどこの現代のフェラーリの役割を果たしていたのが、アルファ・ロメオだった。

(71) これに追い打ちをかけたのが、今年初め以来の公共料金の大幅アップだ。

提示文は、述語名詞句によって表される事物や概念を談話に新たに導入したり、前景化したりする。このとき、新たに導入したり前景化された事物や概念が、先行文脈と全く関係ないようなやり方で特徴付けられたのでは、この文が直前の文脈とどのように関係するのかとか、新たに導入された事物や概念が進行中の談話とどのように関係するのかということをも円滑に理解することができない。提示文は主語が直前の文脈と関連性を持つことによって、文全体の内容も進行中の談話や直前の文脈と結び付けられるのである。

(69c) について。提示文の述語名詞句によって談話に新たに導入されたり前景化される事物や概念は、多くの場合、後続する談話の中心的な話題となる。(65) の事例では、後続する談話ではアルファ・ロメオの最盛期の状況が語られていく。(66) の事例では、「音姫」という商品について説明する談話が後続する。(67) の事例では、後続する談話は公共料金の値上げが具体的にどれほどのものであるかが述べられている。

これは提示文は主語だけではなく、述語も何らかの形で隣接する談話と結び付けられる必要があるのだということを示している。このような特徴は、おそらく提示文に限らず同定文一般が共有する特徴の一部である。同定文とは述語名詞句が表す事物や概念を特徴付ける文であるが、特徴付けられる事物とは基本的にいま話題になっているものとか、これから話題にするものであると考えられる。進行中の談話とまったく関係ないような事物について特徴づけを行うのは、談話進行のプロセスの中においてあまり意味のある行為であるとは言えない。提示文の場合は、述語は新たに導入されたり前景化される事物であるので、基本的に直前の文脈と直接的に関連性を持たない。必然的に、述語によって表される事物や概念は、後続の談話と関係づけられることになる。逆の言い方をすると、後続の談話で中心的な話題にしたいような事物を導入し、特徴付けたい(特に先行する文脈と関係付けたい)という場合に、提示文の形式が用いられるのである。

## 5.3 機能論的構造と否定

### 5.3.1 前提・焦点と否定

主題が題述と対立する概念であるのに対して、焦点は前提と対立する概念であると言われる。焦点の性質を理解するためには、その文がどのような情報を前提としているのかという点に注意する必要がある。5.2.1 節では、「A は B だ」構文には指定文型の機能論的構造を持つものと倒置指定文型の機能論的構造を持つものがあると述べた。前者は述語名詞句が通常の焦点になっており、後者は述語名詞句が選択的焦点になっている。帰属関係や同一関係を表す文は通常は指定文型の機能論的構造を持ち、役割-値関係を表す文は通常は倒置指定文型の機能論的構造を持つ。

- (72) a. ジキル博士は 医者 だ。 (帰属関係)  
通常の焦点
- b. ジキル博士は ハイド氏だ。 (同一関係)  
通常の焦点
- c. この事件の犯人は ハイド氏だ。 (役割-値関係)  
選択的焦点

通常の焦点と選択的焦点は、前提とされている事柄に違いがある。通常の焦点とは、ある対象  $a$ (=ジキル博士) が何らかの属性 (=医者である) を持つとか、 $a$  に対応する別の事物  $b$ (=ハイド氏) が存在するというを述べるような場合に現れる。(72a) はジキル博士がある職業に就いていることを述べており、(72b) はジキル博士がある人物と同一人物であるということを述べている。選択的焦点との区別において重要なのは、これらの文がジキル博士が何らかの職業に就いているとか、他の誰かと同一人物なのだというを前提として、それが何 (どの職業、どの人物) かを問題としているわけではないという点である。これらの文で前提とされているのはせいぜいジキル博士という人物が存在するということだけであり、その人物がある職業に就いているとか、別のある人物と同一人物であるといったことはこれらの文の主張の一部である。

- (73) a. ジキル博士は医者だ。  
 前提:  $j$   
 主張:  $j$  is a doctor (  $j$  = ジキル博士)
- b. ジキル博士はハイド氏だ。  
 前提:  $j$   
 主張:  $F(j, h)$  (  $j$  = ジキル博士,  $h$  = ハイド氏,  $F$  = 同一関係)

一方、選択的焦点とは  $a$  に対応する  $x$  が存在することを前提として、その  $x$  が  $b$  であることを述べるような焦点である。(72c) では、この事件の犯人であるような誰かが存在することを前提として、その人物がハイド氏であることが述べられている。この事件の犯人という役割  $r$  が値  $x$  を持つことは前提に含まれていることによって、その  $x$  がハイド氏  $h$  であることだけが文の主張によって付け加えられ、情報の焦点となっている。

- (74) この事件の犯人はハイド氏だ。  
 前提:  $F(r, x)$   
 主張:  $F(r, h)$  (  $r$  = 犯人,  $h$  = ハイド氏,  $F$  = 役割-値関係)

このように通常の焦点を含む文では対象が属性を持つことや別の対象と関係を持つこと自体が文の主張に含まれるが、選択的焦点を含む文では対象が別の対象と関係を持つ (対象  $r$  と関係  $F$  にあるような別の対象  $x$  が存在する) こと自体は文の前提に含まれ、別の対象が何であるかが文の主要な主張となるという点で違いがある。

文がどのような情報を前提としているのかを調べる標準的な方法は、その文を否定文にしてみるというものである。文を否定文にしても否定されないような情報が、その文の前提であると言われる。次の文は措定文型の名詞述語文を否定文にしたものだが、これらの文はジキル博士が医者以外の何らかの職業に就いているとか、ハイド氏以外の誰かと同一人物であるといったことを基本的には含意していない。ジキル博士は引退して何の職業にも就いていないかも知れないし、ハイド氏以外の誰とも同一人物ではないかも知れない。

(75) a. ジキル博士は医者ではない。

前提:  $j$

主張:  $\neg(j \text{ is a doctor})$

( $\neg$  は否定辞)

b. ジキル博士はハイド氏ではない。

前提:  $j$

主張:  $\neg F(j, h)$

一方、倒置指定文型の名詞述語文の場合は、基本的に主語名詞句が表す事物に対応する何かが存在することが前提とされている。従って、倒置指定文型の名詞述語文を否定文にした場合、該当する要素がどれであるかという情報は否定されるが、該当する要素が存在するのだという情報自体は否定されない。次の文では、事件の犯人がハイド氏だということは否定されているが、犯人が他にいるはずだということは依然として含意されている。

(76) この事件の犯人はハイド氏ではない。

前提:  $F(r, x)$

主張:  $\neg F(r, h)$

別の言い方をすると、この文は事件の犯人であるような誰かが存在することを前提として、それがハイド氏ではないことを主張する文になっている。このように通常の焦点と選択的焦点では前提とされている事柄や否定文において否定される事柄について違いが観察される。

### 5.3.2 否定の作用域と解釈の曖昧性

「A は B だ」構文の述語名詞句が通常の焦点になる場合と選択的焦点になる場合があるのに対して、「A が B だ」構文の主語名詞句は選択的焦点になることはあっても通常の焦点になることはない。同定文や中立叙述文としての読みを別にとすると、次の文はいずれも指定文型の機能論的構造を持ち、主語名詞句が選択的焦点になる。

(77) a. ピーターがウサギだ。

(帰属関係)

選択的焦点

b. ピーターがベンジャミンだ。

(同一関係)

選択的焦点

c. ピーターのいとこがベンジャミンだ。

(役割-値関係)

選択的焦点

(77a) の文は、ウサギであるような何かが存在することを前提として、それがピーターであることを述べるような場合に用いられる。(77b) はベンジャミンと同一人物であるような誰かが存在することを前提として、それがピーターであることを述べている。(77c) はベンジャミンが何らかの役割を持っていることを前提として、その役割がピーターのいところであることを述べている<sup>9)</sup>。

指定文型の名詞述語文を否定文にした場合、否定辞が文全体を否定するか述語部分だけを否定するかによって二通りの解釈が生じる。次の文は、文否定の読みでは「ピーターが

<sup>9)</sup> (77c) のような例では、しばしば主語名詞句の全体ではなく一部のみに焦点となる。例えば誰のいところあるかとか、ピーターとどのような関係にあるかという点のみに焦点となり得る。ここでは問題を単純化するために、そのような焦点の局所性は特に問題としないことにする。

ウサギなのではない (他のいずれかがウサギだ)」という解釈になり、述語否定の読みでは「ウサギでないのはピーターだ」という解釈になる。

- (78) a. ピーターがウサギですよ？  
 b. いや、ピーターがウサギではない。 (文否定)
- (79) a. 次の中にウサギでないものはありますか？  
 b. ピーターがウサギではない。 (述語否定)

以下は、『新潮文庫の100冊CD-ROM版』から収集した文否定の指定文の事例である。

- (80) 銀一匁で三合半の米しか手に入らないという物価騰貴ばかりが原因ではない。  
 有吉佐和子『華岡青洲の妻』
- (81) 投げるとか倒すとかが問題ではない。 北杜夫『楡家の人びと』
- (82) 綱引きや相撲が効を奏したこともあるが、肉体に訴えるばかりが手段ではない。  
 開高健『パニック・裸の王様』
- (83) 温泉につかって休養するのが目的ではない。 星新一『人民は弱し官吏は強し』

述語否定の例は文否定より少ないが、次のような例がこれにあたりと考えられる。

- (84) このなかで少年院を監督する矯正局長だけが検事ではない。 立原白秋『冬の旅』

文否定と述語否定の違いは、否定辞が文全体を作用域にするか、述語部分だけを作用域にするかの違いである。「ピーターがウサギだ」という文は、ウサギであるような  $x$  が存在することを前提として、その  $x$  がピーターであることを述べる。

- (85) ピーターがウサギだ。  
 前提:  $x$  is a rabbit  
 主張:  $p$  is a rabbit

文のどの部分が否定されているかを明示するために [neg] という括弧を用いることにする\*10。(85)の文全体が否定される場合、ピーターがウサギであるという文の主張は否定されるが、何かウサギであるという文の前提は否定されない。結果として、ピーターはウサギではないが、他にウサギであるような  $x$  が存在するのだということが含意される。

- (86) ピーターがウサギではない。 (文否定)  
 前提:  $x$  is a rabbit  
 主張: [neg  $p$  is a rabbit] (...  $x \neq p$ )

一方、この文の述語部分のみが否定される読みでは、否定辞は文の主張というよりも前提に含まれる。この読みでは、ウサギでないような  $x$  が存在することを前提として、その  $x$  がピーターであることが述べられる。

\*10 このような特別な記法を用いるのは、否定辞  $\neg$  は一般的には命題を項に取る関数であり、述語を項に取って  $\neg(\text{is a rabbit})$  のような書き方をするのはあまり一般的ではないためである。ここでは記述の簡略化と直観的な分かり易さのために [neg] という書き方をしたが、これは実質的には命題も述語も項に取れる否定辞に相当する。

- (87) ピーターがウサギではない。 (述語否定)  
 前提:  $x$  [<sub>neg</sub> is a rabbit]  
 主張:  $p$  [<sub>neg</sub> is a rabbit] (...  $x = p$ )

このような解釈の違いは、文の焦点が否定辞の作用域に含まれるか否かによって生み出される。指定文型の名詞述語文においては、文の前提は文の焦点を含む命題の焦点部分を変項  $x$  に置き換えたものに相当する。(86) では焦点を含む命題とは否定辞の作用域の内側の部分 ( $=p$  is a rabbit) であり、否定辞自体は前提 ( $=x$  is a rabbit) に含まれない。一方、(87) では焦点を含む命題は否定辞も含んでおり、( $=p$  [<sub>neg</sub> is a rabbit])、前提 ( $=x$  [<sub>neg</sub> is a rabbit]) も否定辞を含む。以上のように、指定文型の名詞述語文においては、否定辞の作用域の曖昧性によって解釈の曖昧性が生じる。

指定文型の名詞述語文が主語名詞句を焦点とするのに対して、主題-題述構造を持つ名詞述語文 (措定文型や倒置指定文型) や中立叙述型の名詞述語文は主語名詞句を焦点としない。そのため、文否定か述語否定かによって焦点が否定辞の作用域の内側になったり外側になったりすることがなく、指定文型のような解釈の曖昧性が生じない。

- (88) a. ピーターはウサギではない。 (措定文型)  
 b. あっ、屋根がドーム型じゃない! (中立叙述文型)

これらの事例においては焦点を利用して否定辞の作用域の曖昧性を観察することはできない。しかし別の方法を用いると、(88) のような事例にも否定辞の作用域の曖昧性が存在することを観察することができる。次の例では主語名詞句が全称限量詞「全て」( $=\forall$ ) を伴っており、否定辞が全称限量詞を含む文全体を作用域とするか、全称限量詞を含まない述語部分のみを作用域とするかによって解釈の曖昧性が生じている。

- (89) 全てのウサギは草食動物ではない。  
 a. 全てのウサギが草食動物というわけではない。 (文否定)  
 $= [\text{neg} \forall x [\text{rabbit}'(x) \rightarrow \text{herbivore}'(x)]]$   
 b. 全てのウサギが非草食動物である。 (述語否定)  
 $= \forall x [\text{rabbit}'(x) \rightarrow [\text{neg} \text{herbivore}'(x)]]$
- (90) あっ、全ての屋根がドーム型じゃない!  
 a. 全ての屋根がドーム型というわけではない。 (文否定)  
 $= [\text{neg} \forall x [\text{roof}'(x) \rightarrow \text{dome}'(x)]]$   
 b. 全ての屋根が非ドーム型である。 (述語否定)  
 $= \forall x [\text{roof}'(x) \rightarrow [\text{neg} \text{dome}'(x)]]$

((90a,b) の *dome'* は場面レベル述語とする)

(89) の自然な読みは述語否定 (=89b) の読みで、草食動物であるようなウサギは一匹もいないということを意味する。(89) は文否定 (=91a) の読みも可能であり、全てのウサギが草食動物だというわけではない (何匹かは草食動物ではない) という意味になるが、この場合には「は」はいわゆる主題の「は」ではなく対比の「は」になる。(90) は文否定の読みも述語否定の読みも可能である。文否定 (=90a) の読みでは全ての屋根がドーム型であるというわけではない (いくつかはドーム型ではない) という意味になり、述語否定 (=90b) の読みではドーム型の屋根は一つも無いという意味になる。

### 5.3.3 同定文、提示文と述語否定

同定文型の名詞述語文も指定文型の名詞述語文と同じように主題-題述構造を持たず、主語名詞句が焦点となっている。しかし指定文型の名詞述語文と違って、同定文型の名詞述語文を否定文にしたものは文否定の解釈しか持たず、述語否定の解釈を持たない。次の事例は山田さんは本質的に何でも反対するような人だというわけではないという意味であり、山田さんではない誰かが何でも反対する人だと言っているわけではない。

- (91) 何でも反対するのが山田さんではない。  
 a. [何でも反対するのが山田さんだ]というわけではない。 (文否定)  
 b. ??何でも反対するのが、[山田さんではない(誰かだ)]。 (述語否定)

以下は同定文型の名詞述語文の否定文の事例である。いずれも否定辞は文否定の意味で用いられている。

- (92) 吟子にとっては師範の卒業が学業の終りではない。 渡部淳一『花埋み』  
 (93) とおくの戦場に出かけることだけが忠義ではない。 三浦哲郎『忍ぶ川』  
 (94) 工場や物品に対するだけが投資ではない。 星新一『人民は弱し官吏は強し』  
 (95) 地球の中心というもののように単に一あって二ないものが個性ではない。  
 三木清『人生論ノート』

このような否定辞の作用域の解釈の非曖昧性は、同定文型の名詞述語文の意味論的、機能論的な特異性を示している。指定文型の「AがBだ」文は、ある属性 $P(=「Bだ」)$ を持つような $x$ が存在することを前提として、その $x$ が $a(=「A」)$ であることを述べる。属性 $P$ には範疇への帰属、別の事物との同一関係、ある要素を値として持つことなど様々な種類のものがあり、またそれらの否定(ある範疇に帰属しないこと、ある事物と同一でないこと、ある要素を値として持たないことなど)であってもよい。そのため、指定文型の名詞述語文においては述語否定の解釈が成立する。

これに対して同定文型の名詞述語文は、述語名詞句が表している事物や概念がどのようなものであるかを主語名詞句によって特徴付ける文である。このような叙述は、主語名詞句によって特徴付けられるような事物や概念が存在することを前提として、はじめて成立する。述語「Bだ」の部分否定して「Bではない」としてしまうと、主語名詞句が何を同定したり特徴付けたりしようとしているのかが分からなくなる。このため、同定文型の名詞述語文においては述語否定の解釈が成立しない。同定文型の名詞述語文において述語否定の解釈が成立しないのは、このタイプの文が述語名詞句が表す事物や概念の存在を前提とするためである。

5.2.2節では、提示文は同定文の周辺の事例であると述べた。提示文には更に特別な性質がある。提示文は同定文と同じように述語否定の解釈を持たないが、それに加えて文否定の解釈をすることもできない。従って、提示文は基本的に否定文にすることができない。

- (96) \*特におすすめなのはこれではない。



提示文において述語否定が不可能である理由は、同定文の場合に準じて説明することができる。提示文「AがBだ」には機能論的に独特の特徴がいくつもあるが、Bが表す事物や概念がどのようなものであるかをAが説明しているという叙述の構造については、同定文の場合と同様である。提示文は同定文と同じように叙述名詞句が表す事物や概念の存在を前提としており、それが進行中の談話とどのように関係するかを述べる構文である。そのため、述語部分を否定することができない。指定文型や中立叙述文型の名詞述語文が述語否定の解釈を持つのにに対して同定文型や提示文型の名詞述語文が述語否定の解釈を持たないことは、提示文型の名詞述語文が指定文型や中立叙述文型の名詞述語文よりも同定文型の名詞述語文に類似した名詞述語文であることを示す根拠の一つである。

### 5.3.4 肯定的状況の予測

提示文において文否定が不可能である理由については、どのように理解すればいいだろうか。この問題に説明を与えるために、否定文の使用を動機付ける肯定的状況の予測という概念に言及したいと思う。否定文は肯定文と比べて、その使用できる文脈が限定されていると言われる。具体的には、ある肯定的な事態が予測されるような文脈において、それを否定するために否定文を用いるというのが、否定文が使用されるごく一般的な状況である。例えば「鯨は魚類ではない」という文は、鯨が魚類であるという予測が与えられている文脈(あるいは少なくとも、鯨が魚類かどうかが問題となっているような文脈)で、それを否定するために用いられる。

肯定的状況の予測は、文否定と述語否定のどちらが行われる場合にも、それらが行われる動機として作用している。指定文型の「鯨が魚類ではない」という文について考えてみることにしよう。この文は否定辞の作用域の解釈について曖昧性を持ち、文否定の読みと述語否定の読みを持つ。

(97) 鯨が魚類ではない。

a. [鯨が魚類だ]というわけではない。 (文否定)

b. 鯨が [魚類ではない]。 (述語否定)

複数の水棲動物の中に一種類だけ魚類であるものが混じっているということが分かっているとすると、(97)の文否定の読みは、その魚類であるものとは鯨のことらしいという予測が立てられているときに、そうではないのだと否定するために用いられる。別の状況として、基本的には魚類であると予測されるような複数の水棲動物の中に一種類だけ魚類ではないものが混じっているということが分かっているとすると、(97)の述語否定の読みは、その魚類ではないものがどれであるかを述べるために用いられる。

同定文型の名詞述語文は指定文型の名詞述語文と違って文否定の解釈しか持たないが、この場合も否定の成立には肯定的な予測が関与している。例えば「苦いだけがコーヒーではない」という文は、「苦いということが、コーヒーのアイデンティティの最も重要な部分なのだ」という予測が与えられているときに、それを否定するために用いられる。

しかし提示文が発話されるような文脈では、基本的には肯定的状況があらかじめ予測されているということがない。提示文は、述語名詞句によって表される事物や概念を談話に新たに導入したり、前景化したりする。従って提示文の述語名詞句は、基本的には談話にまだ導入されていなかったり、既に導入されていたが背景化されているような事物や概念

を表す。このようなまだ意識に上がってすらいない事物や概念に関して、「それはそもそもこういうものである」とか「それはこの話にこのように関わる」というような予測をすることはおそらく不可能である。要するに、何かを否定するために提示文を用いるという状況は考えにくい。同定文型の名詞述語文において文否定が成立し得るのに対して、特に提示文の場合に限っては文否定の事例を観察することができないのは、提示文の述語名詞句が表す事物や概念があらかじめ意識の中で前景化されているような事物や概念ではないために、それに関して何らかの肯定的状況が予測されていたり、そのような状況を否定するという動機付けが与えられたりすることがないためである。

## 5.4 まとめ

この章では、名詞述語文の機能論的構造について論じた。名詞述語文の類型的特徴のある部分は、文の意味論的構造とは独立に存在する文の機能論的構造の問題として論じる必要がある。本研究では、名詞述語文の機能論的構造を主題と題述、前提と焦点という二つの独立した機能論的機構を組み合わせることによって記述した。特に焦点という概念については、文のどの部分が焦点になっているか、どのような性質を持った焦点であるかといった基本的な要素に分解することによって、従来の前項焦点、後項焦点、全体焦点といった類型よりも詳細な記述を与えることができることを示した。

主題と題述、前提と焦点という二つの独立した機構が組み合わさることによって、名詞述語文の豊かな機能論的構造が構築される。「AはBだ」型の名詞述語文は主題と題述によって構成されており、述語が焦点になっているが、焦点は通常の焦点である場合と選択的焦点である場合がある。ごく標準的な文脈では帰属関係や同一関係を表す文の述語は通常の焦点になり、役割-値関係を表す文の述語は選択的焦点になるが、文脈によっては帰属関係や同一関係を表す文の述語が選択的焦点になることもあり得る。「AがBだ」型の名詞述語文は主題と題述という構造を持たないが、焦点に関していうといくつかの異なる構成を持ち得る。主語が選択的焦点になる指定文型と主語が焦点にならない中立叙述文型は「AがBだ」構文の焦点構造の代表的な構成であり、帰属関係、同一関係、役割-値関係のいずれを表す名詞述語文も指定文型、中立叙述文型の機能論的構成にすることができる。「AがBだ」型の別の機能論的構成は同定文型であり、主語が焦点になっているが選択的焦点ではない。ここではこの焦点に同定的焦点という名前を設定したが、この焦点を理論的にどのように特徴付けるかは今後の課題である。

通常の焦点と選択的焦点は前提としている事柄に違いがある。否定文は、文がどのような情報を前提としているのかを調べるために役立つ。否定文の別の興味深い特徴は否定辞の作用域に関して曖昧性を持つ(文否定と述語否定の読みがある)という点であり、特に主語名詞句が選択的焦点である場合には焦点が否定辞の作用域に含まれるか否かによって文の意味解釈に曖昧性が生じる。どのような機能論的構造を持った名詞述語文についても、原理的には文否定の読みと述語否定の読みの区別を想定することができるが、主語が焦点ではない名詞述語文の場合は焦点が否定辞の作用域の内側になったり外側になったりすることがないので直観的に区別可能な解釈の曖昧性は生じない。また、同定文や提示文の場合はそれぞれ個別的理由で文否定の解釈のみが可能であったり文否定も述語否定も不可能であったりする。文の意味論的構造とは独立の機能論的構造の存在を仮定することによって、意味論的観点からの分析だけでは説明できないような名詞述語文の様々な類型

的特徴に対して体系的な説明を与えることが可能になる。

## 第6章

# 言語構造と談話構造の相関関係

### 6.1 はじめに

名詞述語文の諸特徴を説明するために、いくつかの理論上の部門が必要となる。必要となる部門には、名詞句の意味の理論、文の意味論的構造の理論、文の機能論的構造の理論といったものがある。これらの部門を、互いにどのように関係付けばよいだろうか。何人かの研究者が、名詞述語文の意味論的特徴と機能論的特徴を区別し、それらを包括的に記述できるようなフレームワークの構築を試みている。その一つは山口(1975)によるもので、名詞述語文を二種類の意味論的構造と二種類の機能論的構造を組み合わせることに よって、四種類の類型に分類している。井島(1998b)は、より豊かな記述力を持った枠組みを提案している。この枠組みでは、名詞述語文は事態構造、格構造、談話構造といういくつかの構造的レベルを経て派生される。

本研究では、名詞述語文の意味論的構造と機能論的構造の関係を並列的に扱うモデルを用いて、理論の各部門を結び付けたいと思う。この考え方の源泉の一つは Jackendoff (2002) のフレームワークである。Jackendoff (2002) は、文の音韻構造、統語構造、意味/概念構造を並列的に捉え、また意味論的構造を指示層、記述層、情報構造といういくつかの層に分解する。本研究が名詞句の意味の理論、文の意味論的構造の理論、文の機能論的構造の理論として分析してきた構造は、それぞれ Jackendoff (2002) の指示層、記述層、情報構造におおよそ対応する。これらの独立した構造が組み合わせり、また統語/音韻論的な構成要素と対応付けられることによって、文の意味/機能論的構造の全体が構成される。

文の意味論的構造や機能論的構造が結び付けられるべき、もう一つ別の構造がある。我々が談話の間保持し、談話の進行に沿って変化させていくような構造的知識である。Fauconnier (1985) のメンタル・スペースや Kamp and Reyle (1993) の談話表示構造は、そのような談話論的知識を記述するために役立つ。言語表現の意味に関する問題のある側面は、言語構造の背後にそのような構造的知識があることを想定しなければうまく説明することができない。文の意味論的、機能論的構造はそのような構造的知識を参照しながら構築され、文が使用されることによって構造は新しい状態へと更新される。

この章では、二つのことを論じる。第一に、ここまで独立の部門として論じてきた意味論的、機能論的な各部門を結び付け、名詞述語文の意味論的、機能論的特徴を記述するためのフレームワークの全体を構築する。第二に、名詞述語文の言語的構造と、文が参照し、文によって構築されるような構造的知識を結び付ける。

## 6.2 言語の並列的機構

### 6.2.1 並列的機構

Jackendoff (2002) は、音韻構造、統語構造、意味/概念構造を並列に並べる機構を提案している (図 6.1)。また、音韻構造がいくつかの独立した構造によって構成されているのと同じように、意味/概念構造もいくつかの独立した層によって構成されているのだとしている。意味/概念構造を構成する層には、少なくとも指示層、記述層、情報構造といった層があるのだとされる。おおよそ、指示層は量化のない述語論理から量化を含む論理に移行する際に追加されるような意味の側面に対応し、記述層は述語論理で表されるような情報に対応し、情報構造は文の内容を前景と背景 (主題/焦点と前提) に分けるものであるとされる。各構造、および各層の対応する要素は、同一の指標を与えることによって結び付けられる。

(1) 統語論/音韻論: [S BILL<sub>1</sub> [VP took<sub>2</sub> SALLY<sub>3</sub> [to<sub>4</sub> school<sub>5</sub>]<sub>6</sub>]]<sub>7</sub>

指示層:

記述層:  $\left[ \begin{array}{c} \text{TAKE}_2 \left( \left[ \text{Object BILL} \right]_1, \left[ \text{Object SALLY} \right]_3 \right) \\ \text{Event} \left[ \text{Path TO}_4 \left( \left[ \text{Object SCHOOL} \right]_5 \right) \right]_6 \end{array} \right]_7$

情報構造: Common Ground<sub>7</sub> First Focus<sub>1</sub> Focus<sub>3</sub>

cf. Jackendoff (2002, p.415)

本研究で設定した理論上の部門は、まったく同じというわけではないが、Jackendoff (2002) と同じような並列構造によって結び付けることができる。おおよそ、名詞句の意味の理論が指示層に、文の意味論的構造の理論が記述層に、文の機能論的構造の理論が情報構造に対応する。

### 6.2.2 意味論的構造

ごく簡単ないくつかの事例について考えてみることにしよう。

- (2) a. ウサギは草食動物だ。  
 b. 明けの明星は宵の明星だ。  
 c. この部屋の温度は 19 度だ。  
 d. 僕はウナギだ。

一般に、「X は Y だ」という構文を持つ名詞述語文は BE(x, y) という意味論的構造を持つ。Jackendoff (2002) の考えでは、名詞句は指示層において対応物を持つ場合と持たない場合があるとされる。叙述的 NP と呼ばれる名詞句は、指示層に対応物を持たない。次の例で、Eva は指示層に対応物 4 を持つが、a doctor は対応物を持たない。

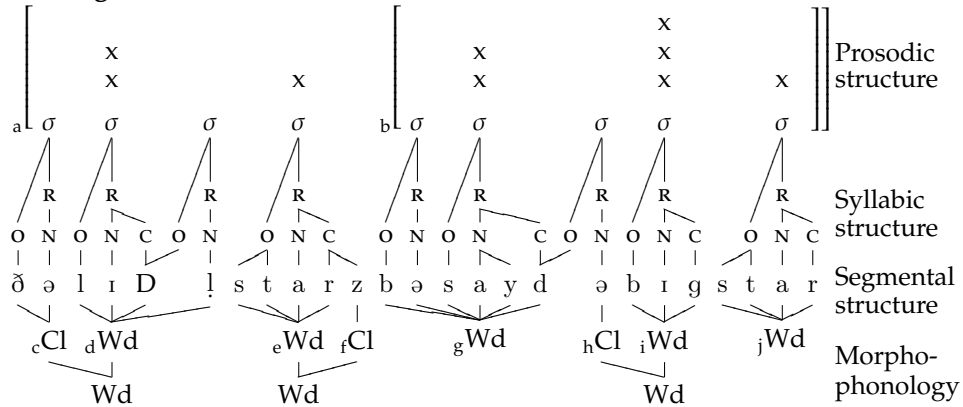
(3) Syntax/phonology: [S [NP Eva]<sub>4</sub> [VP become [NP a doctor]<sub>5</sub>]]<sub>6</sub>

Descriptive tier: [Event INCH([State BE([Object EVA]<sub>4</sub>, [Object DOCTOR]<sub>5</sub>))]<sub>6</sub>

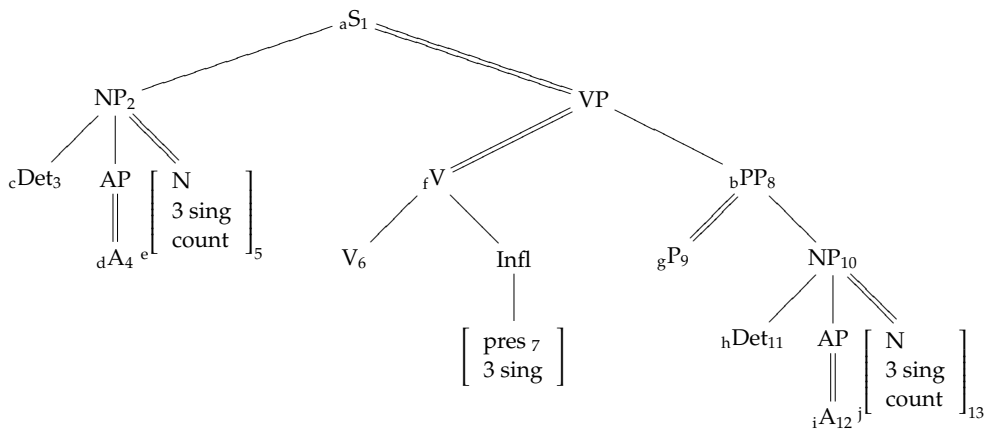
Referential tier: 4 6

Jackendoff (2002, p.396)

Phonological structure



Syntactic structure



Semantic/conceptual structure



図 6.1 Structure of *The little star's beside a big star* (Jackendoff, 2002, p.6)

これは本研究の考え方と基本的に一致する。本研究では、「ウサギ」のような名詞句は、主語として用いられる場合には種 (kind) というタイプの存在物を表すが、述語として用いられる場合には特に対象を表すのではないと見なした (第2章)。従って次の (4a=2a) では「ウサギ」は指示層に対応物を持つが、(4b) では「ウサギ」は指示層に対応物を持たない。

- (4) a. S/P: [s [NP ウサギ]<sub>1</sub> は [VP [NP 草食動物]<sub>2</sub> だ]]<sub>3</sub>  
 DT: [BE(RABBIT<sub>1</sub>, HERBIVORE<sub>2</sub>)]<sub>3</sub>  
 RT:           1           3
- b. S/P: [s [NP ピーター]<sub>1</sub> は [VP [NP ウサギ]<sub>2</sub> だ]]<sub>3</sub>  
 DT: [BE(PETER<sub>1</sub>, RABBIT<sub>2</sub>)]<sub>3</sub>  
 RT:           1           3

他の (2b-c) では、二つの名詞句はいずれも指示層に対応物を持つ。

- (5) S/P: [s [NP 明けの明星]<sub>1</sub> は [VP [NP 宵の明星]<sub>2</sub> だ]]<sub>3</sub>  
 DT: [BE(PHOSPHORUS<sub>1</sub>, HESPERUS<sub>2</sub>)]<sub>3</sub>  
 RT:           1           2 3
- (6) S/P: [s [NP この部屋の温度]<sub>1</sub> は [VP [NP 19 度]<sub>2</sub> だ]]<sub>3</sub>  
 DT: [BE(TEMPERATURE<sub>1</sub>, NINETEEN<sub>2</sub>)]<sub>3</sub>  
 RT:           1           2 3
- (7) S/P: [s [NP 僕]<sub>1</sub> は [VP [NP ウナギ]<sub>2</sub> だ]]<sub>3</sub>  
 DT: [BE(ME<sub>1</sub>, BROILED-EELS<sub>2</sub>)]<sub>3</sub>  
 RT:           1           2 3

これらの記述は Jackendoff (2002) のモデルに基づいているが、Jackendoff (2002) では特に言及されていないような考え方も取り込んである。その一つは、指示層に記載される要素として、個体だけではなく種 (kind) や役割 (role) といったタイプの存在物も想定しているという点である。「ウサギ」や「この部屋の温度」は主語として用いられる場合には指示層に対応物を持つが、この対応物は個体ではなく、種や役割というような抽象的な存在物である。Jackendoff (2002) は、指示層は量化によって追加されるような意味の側面に対応するのだとしているが、本研究の考え方では、種や役割という存在物はまさに量化によって導入されるような対象に相当する (第2章参照)。Fauconnier (1985) の理論との関係でいうと、本研究は Fauconnier (1985) のスペースの構成物となるような要素と、Jackendoff (2002) の指示層に記載されるような要素は、おおよそ対応すると考える。種や役割はスペースの要素となり得るので、指示層にも要素として設定する。

BE(x, y) という記述は、二つの事物や概念の間に何らかの関係があるのだということを表す。二つの要素がどのような関係にあるのかについて、もっと具体的に記述したいと思うかも知れない。その方法として、述語 BE にいくつかの下位述語を仮定するという方法を考えることができる。BE<sub>PROP</sub> とか BE<sub>IDENT</sub> のような述語を区別することによって、帰属関係や同一関係といった異なる種類の関係を区別するのである。しかし本研究では、名詞述語文がいくつかの決まったパターンの関係しか表すことができないのだとは考えていない (第4章参照)。いくつかの関係は典型的であり、いくつかの関係は非典型的かも知れないが、名詞述語文は文脈に応じてかなり多様な関係を表すことができる。それらの多様な


関係を表すために、どれくらいの種類の下位述語を用意すればいいだろうか。ここでは、意味論的構造としては単に  $BE(x, y)$  という形で一般化するだけにし、関係が具体的にどのようなものであるかは言語とは独立の解釈の問題と見なすことにする。

### 6.2.3 機能論的構造

機能論的構造について言うと、Jackendoff (2002) は情報構造を構成する要素として、焦点 (focus)、主題 (topic)、共通基盤 (common ground)、第1焦点 (first focus) といった要素を想定している<sup>\*1</sup>。焦点 (義務的)、主題 (随意的)、第1焦点 (随意的) は記述層のいずれかの構成素と対応し、共通基盤は必ずしも構成素をなすわけではないが文の残りの部分と対応する。Jackendoff (2002) の想定する情報構造は、次のようになる。

(8) (Topic) (Common Ground) (First Focus) Focus Jackendoff (2002, p.414)

Jackendoff (2002) の考えと本研究の考えをどのように統合するかは興味深い問題だが、ここでは第5章で論じた機能論的構造の構成に基づいて考えたいと思う。第5章では、主題と焦点という二つの概念が、名詞述語文の機能論的構造を構成する上で主要な役割を果たすのだと述べた。名詞述語文には、主題と題述という二つの部分によって構成されるものとそうでないものがある。ここでは、文中の要素が文頭に移動して主題になるのだと考えておくことにする。

(9) [TopP ウサギは] [S t 草食動物だ]  


(2) の文では、いずれも主語が主題になっており、文の残りの部分が題述になっている。主題は、一方では  $BE(x, y)$  構造中の  $x$  項と結び付けられ、他方では統語構造中の主題句と結び付けられる。

(10) S/P: [TopP [NP ウサギ]<sub>1</sub> は] [S t<sub>1</sub> [VP [NP 草食動物]<sub>2</sub> だ]]<sub>3</sub>  
 DT: [BE(RABBIT<sub>1</sub>, HERBIVORE<sub>2</sub>)]<sub>3</sub>  
 IS: Topic<sub>1</sub> Comment<sub>3</sub>

主題を持つか否かに関わらず、どのような文も新しい情報を伝達する要素、すなわち焦点を持つ。(2) の文では、いずれも述語が焦点になっている。焦点にはいくつかの種類のものがある。帰属関係や同一関係を表す文の焦点は通常の焦点になるが、役割-値関係を表す文の焦点は選択的焦点になる。第5章では、通常の焦点と選択的焦点は前提となっていることが異なるのだと述べた。次の (11a, b) の文はジキル博士が何らかの職業についているとか、誰か別の人物と同一人物であるはずだということを前提として、その職業が何であるかとかその人物が誰であることを述べるような文ではない。一方、(11c) の文はカルー卿の殺害者であるような誰かが存在することを前提として、その人物が誰であることを述べる文になっている。

\*1 第1焦点とは、"Who danced with whom at the party last night? — Well, FRAN danced with DAVID, ELI danced with FANIA, and ELIZABETH danced with BARBARA" のような文で対になる二つの焦点のうち、一番目のもののことを言う。共通基盤とは、主題や焦点以外の文の残りの部分のことを言う。



- (11) a. ジキル博士は医者だ。 (帰属関係)  
 b. ジキル博士はハイド氏だ。 (同一関係)  
 c. カルー卿を殺した犯人はハイド氏だ。 (役割-値関係)

第5章では、通常の焦点と選択的焦点について、焦点の(統語上の)位置は同じだが性質が異なるのだと考えていた。ここでは焦点の性質という概念を、意味論的構造のどの部分と対応するかという観点から再分析する方法について考えてみることにしよう。選択的焦点においては、役割が値を持つということを前提として、その値が何であるかが焦点となっている。従って焦点は述語名詞句の意味論的対応物の部分のみであり、文のそれ以外の部分は前提に含まれる。

- (12) カルー卿を殺した犯人はハイド氏だ。  
 前提: [BE(MURDERER<sub>1</sub>, X<sub>2</sub>)]<sub>3</sub>  
 焦点: HYDE<sub>2</sub>

一方、通常の焦点においては、そもそもジキル博士が何らかの職業についているとか、他の誰かと同一人物であるということが前提とされていない。従ってこれらの文で前提に含まれているのはせいぜい主語名詞句の意味論的対応物(ジキル博士)だけであり、文の残りの部分がすべて焦点になっているのだと考えられる。

- (13) ジキル博士は医者だ。  
 前提: JEKYLL<sub>1</sub>  
 焦点: [BE(X<sub>1</sub>, DOCTOR<sub>2</sub>)]<sub>3</sub>

(12)と(13)はいずれも、統語構造上は述語名詞句が焦点となっているように見えるが、意味構造上は(12)では述語名詞句と対応する要素HYDEが焦点になっているのに対して、(13)ではそれを含むもっと広い部分BE(x, DOCTOR)が焦点になっている。Jackendoff (2002)は焦点は記述層の構成素と同一の指標で結び付けることができると考えているが、(13)の焦点は記述層のまとまった構成素と結び付けることはできない。以下では便宜的にFocusを意味構造の全体と同じ指標で結び付けておくと、実際には焦点は意味論的構造の全体からJEKYLLの部分を除いたものである。Jackendoff (2002)は主題でも焦点でもない部分(共通基盤; common ground)に関して必ずしも統一した構成素をなさないと考えているが、本研究では焦点についてもそのような場合があるのだと考える。

- (14) S/P: [TopP [NP ジキル博士]<sub>1</sub> は] [S t<sub>1</sub> [NP 医者]<sub>2</sub> だ]<sub>3</sub>  
 DT: [BE(JEKYLL<sub>1</sub>, DOCTOR<sub>2</sub>)]<sub>3</sub>  
 IS: Topic<sub>1</sub> Focus<sub>3</sub>

主題を持たない文についても考えておくことにしよう。(11)の文がいずれも主題を持つ文であるのに対して、(15)の文はいずれも主題を持たない。

- (15) a. ジキル博士が医者だ。  
 b. ジキル博士がハイド氏だ。  
 c. カルー卿を殺した犯人がハイド氏だ。

主題を持つ文では主題以外のどこかが焦点になるが、主題を持たない文では文のどこかが焦点となる。(16)の文の可能な読みの一つは主語が焦点になっている読みである。特に

(15a, b) は誰かが医者であるとか、誰かがハイド氏と同一人物であるということを前提として、それが誰であるかを述べる文であり、主語が選択的焦点になっている。

- (16) S/P: [S [NP ジキル博士]<sub>1</sub> が [NP 医者]<sub>2</sub> だ]<sub>3</sub>  
 DT: [BE(JEKYLL<sub>1</sub>, DOCTOR<sub>2</sub>)]<sub>3</sub>  
 IS: FOCUS<sub>1</sub> (前提: [BE(x<sub>1</sub>, DOCTOR<sub>2</sub>)]<sub>3</sub> 焦点: JEKYL<sub>1</sub>)

(15c) の焦点は、選択的焦点として解釈することもできるが、西山 (2003b) の言う同定文の一種として解釈することもできる。同定文の焦点を意味論的構造のどの部分と対応付けるべきだろうか。ここでは、選択的焦点の場合と同じく主語名詞句の意味論的対応物と結び付けるという考え方を取っておくことにする。

- (17) S/P: [S [NP カルー卿を殺した犯人]<sub>1</sub> が [NP ハイド氏]<sub>2</sub> だ]<sub>3</sub>  
 DT: [BE(MURDERER<sub>1</sub>, HYDE<sub>2</sub>)]<sub>3</sub>  
 IS: FOCUS<sub>1</sub> (前提: [BE(x<sub>1</sub>, HYDE<sub>2</sub>)]<sub>3</sub> 焦点: MURDERER<sub>1</sub>)

(17) の文は、ハイド氏が当該の談話と何らかの関わりを持つのだということを前提として、その関わりとはカルー卿の殺害者であるということなのだ述べている。「カルー卿を殺した犯人がハイド氏(なの)ではない」のような否定文は、ハイド氏がカルー卿の殺害者であることは否定しているが、談話と何らかの関わりを持つことは否定していない。そのため、(17) では MURDERER の部分だけを焦点と見なしている。(17) は焦点の位置という観点から見ると (16) と同じく主語の意味論的対応物が焦点になっているが、焦点の性質という観点から見るといろいろと異なるところがある。(16) の焦点はいくつかの候補の中から選択するようなやり方で与えられるが、(17) の焦点はあらかじめ用意されたいくつかの役割から選択されるわけではない。上では焦点の性質の一部(通常の焦点と選択的焦点の違い)を意味構造中の対応する部分の違いに還元する考え方を示したが、(17) のような事例は焦点の性質についての全ての問題に対応する意味構造中の位置の問題に還元できるわけではないことを示している。

## 6.3 言語構造と談話構造

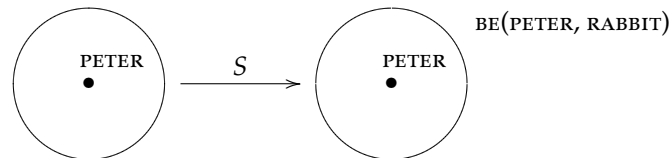
### 6.3.1 談話状態の更新

我々は誰かと会話をするとき、その会話に関係する様々な事物や概念を頭の中に保持し、それらの要素に属性を与えたり、互いに関係付けたり、新しい要素を加えたりしながら会話を進めていく。話し手は自分の心の中の状態を参照しながら文を構築し、聞き手は話し手の発話を受けて自分の心の中の状態を新しい状態へと更新する。いくつかの意味の理論が、発話は談話状態ないし心的状態と呼ばれるものを書き替える働きがあるのだという見方をしている。そのような考え方を取る理論にはメンタル・スペース理論 (Fauconnier, 1985)、談話表示理論 (Kamp & Reyle, 1993)、動的意味論 (Groenendijk, Stokhof, & Veltman, 1996) などが含まれる。

措定 (predication)、指定 (specification)、同定 (identification) というような、名詞述語文を特徴付け、類型化するために用いられてきた概念のある側面は、文が談話状態をどのように変化させるのかという観点から捉えなおすことができる。これらの概念は、談話状態に対して行われる操作として理解することができる。

「指定する」とは、談話中の要素に新たな属性を付加することを意味する。典型的には、属性を付加される対象は談話に導入済みの事物であり、付加される属性は談話に新たに導入される要素である。次の事例では、ピーターという対象にウサギであるという属性が与えられている。

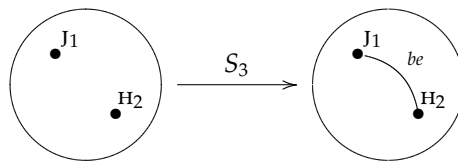
(18) ピーターはウサギだ。(= S)



一般的に言うと、動詞、形容詞、名詞で表されるような様々な属性が、同じようなやり方で対象に対して与えられる<sup>2</sup>。与えられる属性には、「跳ねる」とか「賢い」とか「ベンジャミンのいとかだ」とか「レタスを食べている」といったものが含まれる。属性を構成する要素の一部は、既に談話に導入済みであってもよい。次の事例は二つの事物が同一であることを述べるものだが、談話に新たに導入されるのは要素ではなく、要素間の関係である。

(19) S/P: [[ジキル博士]<sub>1</sub> は [ハイド氏]<sub>2</sub> だ]<sub>3</sub>

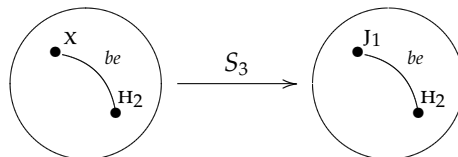
DT: [BE(JEKYLL<sub>1</sub>,HYDE<sub>2</sub>)]<sub>3</sub>



「指定する」という操作が対象に属性や関係を新たに与えるのに対して、「指定する」という操作では属性や関係はあらかじめ与えられている。次の事例では、ハイド氏と同一人物であるような誰か (= x) が存在することを前提として、その x が誰であるかが指定されている。

(20) S/P: [[ジキル博士]<sub>1</sub> が [ハイド氏]<sub>2</sub> だ]<sub>3</sub>

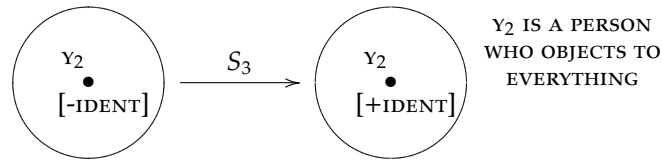
DT: [BE(JEKYLL<sub>1</sub>,HYDE<sub>2</sub>)]<sub>3</sub>



「同定する」という操作でどのようなことが行われているのかを分析するのは、同定文の機能論的構造をどのように記述すべきかという問題と同様に困難な問題である。ごく簡単な考え方としては、スペース中の要素に「同定済み」とか「未同定」というような属性を与えておくという考え方ができる。この考え方では、同定文はまだ同定されていない要素を他の事物や概念と関係付けることによって同定済みの状態に変える。

<sup>2</sup> 新屋 (1994) は、指定、指定といった概念を名詞述語文に限らず日本語の文一般に敷衍される概念として捉えている。

(21) S/P: [[何でも反対するの]<sub>1</sub> が [山田さん]<sub>2</sub> だ]<sub>3</sub>



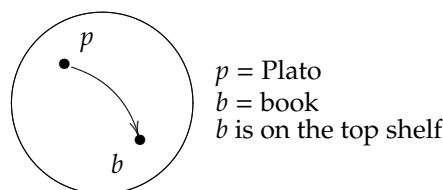
このような考え方は間違いではないかも知れないが、結局のところ、対象についてどのような情報を持っていればその対象を同定できるということになるのかがはっきりしない。「何でも反対するのが山田さんだ」という文は同定文のごく代表的な事例だが、この文が発話される時、話し手や聞き手は「山田さん」を同定できていないのだろうか。第3章では、固有名は話し手と聞き手が共通して知っているような事物に言及するときのみ用いられるのだと述べた。(21)では $Y$ は「山田さん」という固有名によって言及されており、ごく常識的な意味においては、話し手と聞き手は「山田さん」の指示対象が誰であるかを承知した上で(21)のようなやり取りをしている。

ここでは文の意味論的、機能論的構造と談話論的知識をどのように結び付けるかが関心の中心であるので、同定するとはどのようなことかという哲学的問題については、これ以上は立ち入らないことにする。物事についてのフレーム的知識(例えば、会議という状況で参加者が典型的に取る行動)や、Pustejovsky (1995)のクオリア構造における目的クオリアという概念(Jackendoff (2002, §11.9)は、目的クオリアは事物の持つ本来の機能(proper function)に関わるとしている)が、同定文を特徴付けるために役に立つかも知れない。ここでは同定文の機能論的特徴について、解決すべきいくつかの問題を設定しておきたいと思う。同定文についての理論は、同定という概念を理解するための理論的モデルを備えている必要がある。また、そのモデルは同定文の機能論的構造や、同定文を使用することで生じる談話状態の変化を記述し、他の種類の名詞述語文と区別するために役立つものでなければならない。

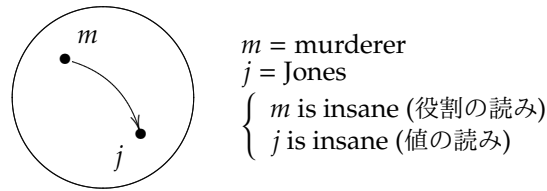
### 6.3.2 談話状態の参照

文の意味論的、機能論的構造は非常に多くの面において、言語とは独立の構造的知識の構成に依存している。そのような依存の一つは名詞句の意味解釈である。メトニミーや定記述句解釈(役割の読みと値の読みの区別)の問題は、要素間の語用論的關係によって解決される。

(22) プラトンは一番上の棚だ。

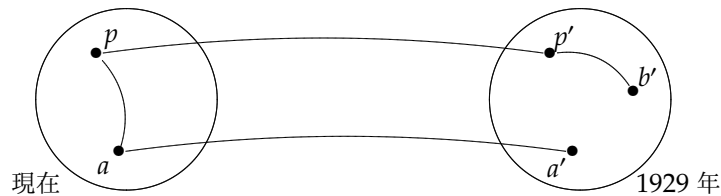


(23) スミスを殺した犯人は正気じゃない。



名詞句の解釈を複雑にする別の要因はスペースの複合的な構成である。特に定記述句を含む文は、記述句が役割を表すか値を表すか、役割と値の関係がどのスペースで解決されるかによって多様な解釈を生み出す。

(24) 1929年には、大統領は赤ん坊だった。



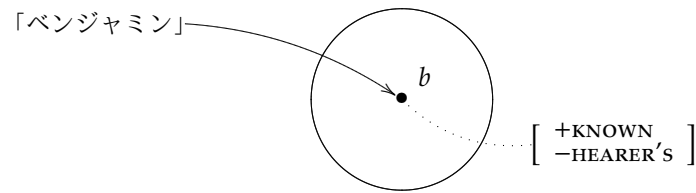
- a.  $p'$  is a baby. ( $p'$  は 1929 年における大統領 (役割))
- b.  $a'$  is a baby. ( $a'$  は現在の大統領の値の 1945 年の対応物)
- c.  $b'$  is a baby. ( $b'$  は 1929 年における大統領の値)

スペース中の要素は、述語によって叙述されるような諸属性の他に、話し手がその事物についてどの程度の知識を持っているのかとか、話し手の心の中でどのような認知的状態にあるのかといったことに関する属性を有する。第3章では、対象に言及するためのどのような言語表現を用いるかの選択に、少なくとも三つの原則が関与しているのだと述べた。

- (25)
- a. 話し手の知識の原理
  - b. 情報の帰属の原理
  - c. 聞き手に対する配慮の原理

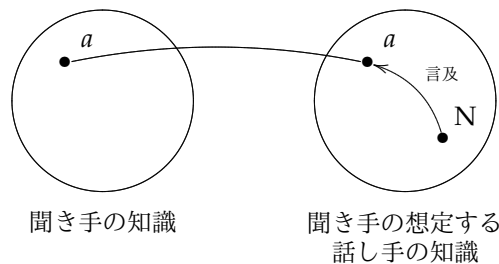
第一の原理は対象に固有名で言及することができるか「という人」のような表現で言及しなければならないかという問題と関わる。原則として、話し手が固有名で言及することができるのは、話し手がある程度よく知っている対象であり、あまりよく知らないような対象に言及するときには「という人」のような表現を用いなければならない。第二の原理は対象に言及するための表現に「その」のような指示形容詞を付ける必要があるか否かに関わる。話し手は自分の側に属する情報に言及する際には裸の固有名を用いることができるが、聞き手の側に属する情報に言及する際には「その」のような表現を用いる必要がある。これらの原則は、対象に認知的な属性を割り当てることで記述することができる。話し手が裸の固有名で言及する対象は、話し手が十分に知っていて ([+KNOWN])、かつ聞き手側の情報ではない ([−HEARER'S]) 必要がある。

(26) 昨日、ベンジャミンに会ったよ。



第三の原理はより複雑であり、複数のスペースを用いなければうまく説明することができない。聞き手の知識の状態を推定するために、話し手の想定する聞き手の知識とか、話し手の想定する聞き手の想定する話し手の知識といったスペースを設定する必要がある。第3章では、話し手が固有名で何に言及しているのか聞き手が容易に同定できると期待できるような場合でなければ、話し手は固有名を使用すべきではないと述べた。聞き手が話し手が固有名 N で言及する対象  $a$  を同定できるためには、少なくとも次のような条件が満たされる必要がある。

- (27) a. 聞き手は  $a$  を知っている。  
 b. 聞き手は話し手が  $a$  を知っていることを知っている。  
 c. 聞き手は話し手が  $a$  を N と呼ぶことを知っている。



話し手が固有名 N で対象  $a$  に言及するためには、話し手は聞き手の知識状態が (27) のような構成になっているのだと期待できなければならない。すなわち、話し手の知識状態は (27) の構成を含む。話し手が固有名 N を使用するならば、聞き手は話し手が聞き手の知識状態に関して (27) のような構成を想定しているのだと知ることができる。話し手の想定する聞き手知識の構成が、実際の聞き手知識の構成と異なるならば、様々なエラーが生じる。

- 聞き手が  $a$  を知らない場合、聞き手は話し手が N で何に言及しようとしているのか同定できない。
- 聞き手が  $a$  を知っても、話し手は  $a$  を知らないだろうと思っている場合、聞き手は話し手が N で  $a$  に言及しようとしていると気付かない可能性がある。あるいは、話し手は N で  $a$  に言及しているようだと解釈するが、なぜ話し手は  $a$  のことを知っているのだろうかと疑問に思う。
- 聞き手が  $a$  を知っており、話し手も  $a$  を知っていることを知っているが、話し手が  $a$  を N と呼ぶことを知らない場合、聞き手は話し手が N で  $a$  に言及しようとしていると気付かない可能性がある。

あるいは、話し手が聞き手の知識状態に関して (27) のような構成を想定しているはずがないと聞き手が思っている場合にもエラーが生じる。

- 聞き手が  $a$  を知っていることを話し手が知るはずがない場合、聞き手はなぜ話し手は聞き手が  $a$  を知っていると思うのだろうと疑問に思う。
- 話し手が  $a$  を知っていることを聞き手が知っていることを話し手が知るはずがない場合、聞き手はなぜ話し手は聞き手が話し手が  $a$  を知っていることを知っていると思うのだろうと疑問に思う。
- もっと複雑な様々な推論。

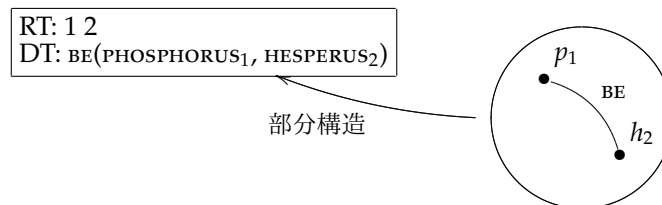
実際には、固有名が使用されるたびにこのような複雑な推論が行われているのだと考える必要はない。認知的なプロセスを効率化するための合理的なやり方の一つは、明らかに話し手と聞き手の間で共有できていると思われる情報には「共有済み」([+SHARED]) というような属性を割り当ててしまうというものである。そのような属性が割り当てられた対象については、次からはいちいち複雑な推論を経て情報が共有されているかどうかを確認する必要はない。複雑な推論は、必要な時にだけ行われればよい。

### 6.3.3 言語構造と談話構造

文は談話の状態を参照しながら構築され、文が発話されることによって談話は新しい状態へと更新される。このような動的な観点から文の働きを見ることは、文の意味論的、機能論的構造とは何であるのかという問題をより深く理解するために役立つ。文は談話論的構造の知識の部分構造と、状態の推移の仕方をコード化している。

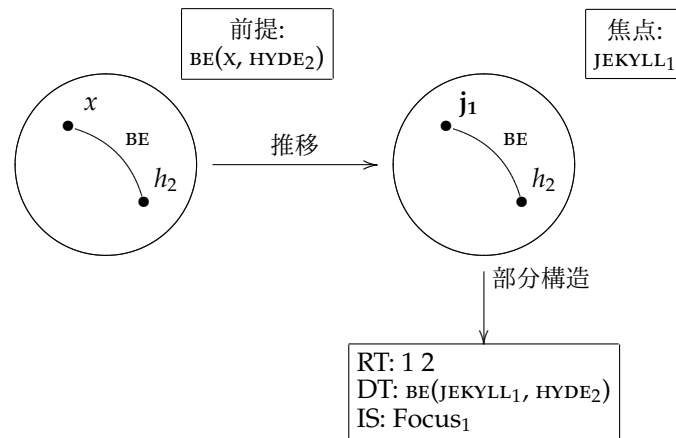
文の意味論的構造は、談話論的構造の一部をコード化したものである。指示層の情報はスペース内の要素の構成の一部であり、記述層の情報はスペースの構造の一部である。話し手はスペースの構成を参照しながら文の意味論的構造を構築し、聞き手は与えられた文の意味論的構造を読み取って同じ構造を自分の心の中のスペースに書き込む。

(28) 明けの明星は宵の明星だ。



文の機能論的構造は、談話状態の推移の仕方をコード化する。主題は、話し手の心的領域の中でどの要素が前景化されているかや、話し手がどの要素に対して新しい情報を付け加えようとしているのかを聞き手が理解するための手掛かりを与える。前提と焦点は、より直接的に談話状態の推移のプロセスを反映している。前提は状態が推移する前の状態の部分構造であり、焦点は発話によって談話の状態が推移する前の状態と後の状態の差分を強調する。

(29) ジキル博士がハイド氏だ。



文が事物、概念、事態、状態やそれらの関係を静的にコード化しているだけでなく、状態の推移の仕方もコード化しているという点は興味深い点である。文のこのような側面は、記述的には、主題と題述、前提と焦点といった概念を用いて研究されてきた。言語は世界の状態（あるいは心の状態）を表示するという静的な意味論のモデルでは、こうした機能論的な概念をどのように取り扱うかについて、あまり明確な説明を与えることができない。静的な意味論の中心的研究対象は指示層や記述層で扱われるような問題であり、主題や焦点といった概念を位置付ける場所がない。これらの概念を取り扱うためには指示層や記述層とは独立のもう一つの層（情報構造層）が必要である。発話が知識の状態を更新するという動的な意味論のモデルは、この層を構成する主題や焦点といった機能論的な概念に意味論的な基礎付けを与えるために役立つ。

## 6.4 まとめ

本章では、文の意味論的構造と機能論的構造をどのように結び付け、また文の言語学的構造をその背後にある談話論的構造と結び付けて、統合された理論の全体を構築するのかについて論じた。文の意味論的構造と機能論的構造を統合するために、Jackendoff (2002) の並列モデルを参考にすることができる。Jackendoff (2002) は文の意味/概念構造を指示層、記述層、情報構造という三つの層に分解しているが、本研究が名詞句の意味の理論、文の意味論的構造の理論、文の機能論的構造の理論として扱ってきた三つの部門は、それぞれ Jackendoff (2002) の三つの層におおよそ対応付けることができる。これらの層はいずれも独立した構造を持ち、構造を構成する要素はそれぞれ、別の構造を構成する要素と結び付けられている。

文の意味論的、機能論的構造は、非常に多くの面で言語とは独立の談話論的な知識に依存している。我々は言語の語彙の意味や語用論的知識を駆使して談話を構成する諸要素に言及し、言語を使用することによって談話を新しい状態へと更新していく。談話論的知識との関係という観点から見ると、文の意味論的、機能論的構造は談話状態の構成や推移のプロセスをコード化しているのだという見方をすることができる。文の意味論的構造は談話状態の一部が構造化されたものであり、文の機能論的構造は談話を構成する諸要素のどの部分が前景化されていて、どの部分が更新されるのかを表示する働きがある。

文の意味論的、機能論的構造に関する問題のある部分は、言語構造とは独立に存在する



談話論的な知識との関係についての議論を避けて通ることはできない。言語と談話を結び付けるために、Fauconnier (1985) や Kamp and Reyle (1993) の意味論のモデルを参照することができるが、日本語の名詞述語文に関する類型論的な研究においては、このような視点はまだあまり取り入れられていないように思われる<sup>\*3</sup>。6.3 節では談話に基礎付けられた意味論と機能論のごく基本的なモデルを提示し、研究の方向性を示した。この理論をどのように拡充し、体系的な意味と機能の理論を構築するかは今後の課題である。

---

<sup>\*3</sup> ただし、まったく無いというわけでは無い。東郷 (2005) は、談話モデル理論というメンタル・スペース理論に似た理論を用いて日本語の名詞述語文の意味と機能を分析している。

## 第7章

# 結論

### 7.1 問題の切り分け方

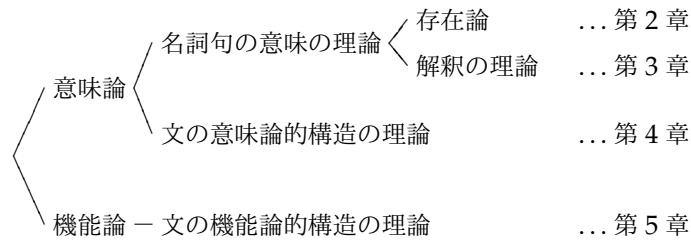
本研究は、名詞述語文の意味の側面をどのように特徴付けるかについて論じた。過去多くの研究が、名詞述語文を特徴づけ、いくつかの類型に分類する試みを続けてきた。それらの研究の中には、名詞句の指示の問題をはじめとする意味論的観点から行われたものや、主題や焦点の問題をはじめとする機能論的観点から行われたものなどが含まれる。本研究の最初の基本的な仮定は、名詞述語文は意味論的特徴と機能論的特徴を併せ持っているというものである。名詞述語文が持つ様々な特徴の全てを意味論と機能論のどちらかだけで説明することはできない。名詞述語文のどの特徴を意味論的に説明し、どの特徴を機能論的に説明すべきかについて、注意深く判断する必要がある。

本研究では、名詞述語文の様々な特徴を包括的に記述するために、理論をいくつかの部門に分けることにした。本研究の理論は、名詞述語文の意味論的側面を記述する理論と、機能論的側面を記述する理論に分かれている。このうち意味論の部門は、さらに下位の部門へと分かれる。名詞句の意味の理論と文の意味論的構造の理論である。このような区別は、名詞句が何を表しているのかという問題と、二つの名詞句が表す事物や概念が互いにどのような関係にあるのかという問題は、基本的に区別すべき問題であるという仮定に基づく。この区別は、特にウナギ文のような事例をどのように扱うべきかという問題に答えを与えるために設定した。ごく簡単な事例の場合、名詞述語文の主語が対象を表し、述語が属性的概念を表すならば、必然的に主語と述語は対象と属性の関係にある。しかしウナギ文のような事例においては、二つの名詞句がそれぞれ何を表しているのかということと、二つの要素が互いにどのような関係にあるのかということの間にはほとんど関連性がない。要素間の関係を扱うために独立した部門が必要である。

名詞句の意味の理論で扱うべき問題は、さらに二つの主要なトピックに分けて考えることができる。存在論と解釈の理論である。存在論は名詞句の表す事物や概念が論理的、認知的にどのようなタイプの存在物なのかという問題を扱う理論である。この理論は、Carlson (1977) の種 (kind) や Fauconnier (1985) の役割 (role) といった概念を本研究の理論に取り入れ、意味論的な基礎付けを与えるために設定した。解釈の理論は、言語表現と事物や概念との間の関係を扱う理論である。この理論を名詞句の意味の理論の下位部門として独立させたのは、語と意味の間関係が当初想定していたものよりかなり複雑なものだったからである。この理論で扱う中心的な問題はメトニミーをはじめとする語の解釈の多様性を説明することだが、この理論で扱う問題にはさらに対象についての話し手や

聞き手の知識、情報の帰属といった認知的な諸属性が、その対象に言及するための言語形式の選択に影響を及ぼすといった問題が含まれる。とりわけ、固有名で直接言及できないような対象に言及するために、固有名のメタ言語としての用法が主要な役割を果たす。

まとめると、本研究は名詞述語文の諸特徴を次のようないくつかの部門に分けて分析した。本論文の第2章から第5章までは、これらの各部門の構成を詳しく論じるために書かれている。



最後の第6章では、これらの各部門を互いにどのように結び付け、統合的な理論の全体を構築すればよいのかという問題について論じた。中心的な役割を果たしたのは Jackendoff (2002) の並立モデルである。このモデルでは、文の意味/概念構造は指示層、記述層、情報構造というようにいくつかの独立した層によって構成されており、各層を構成する要素（および統語構造/音韻構造を構成する要素）が互いに結び付けられている。本研究が設定した名詞句の意味の理論、文の意味論的構造の理論、文の機能論的構造の理論という三つの部門は、それぞれ Jackendoff (2002) の指示層、記述層、情報構造と対応付けて考えることができる。

S/P: [s [NP 明けの明星]<sub>1</sub> は [VP [NP 宵の明星]<sub>2</sub> だ]]<sub>3</sub>  
 DT: [BE(PHOSPHORUS<sub>1</sub>, HESPERUS<sub>2</sub>)]<sub>3</sub>  
 RT:                    1                    2 3  
 IS: Topic<sub>1</sub> Focus<sub>2</sub>

第6章ではさらに、文と談話の関係について述べた。メンタル・スペース理論 (Fauconnier, 1985)、談話表示理論 (Kamp & Reyle, 1993)、動的意味論 (Groenendijk et al., 1996) のような動的な意味論では、文は談話状態を新しい状態へと更新する働きがあり、文の意味論的問題のある部分は、談話論的な知識の構成を考慮しなければ解決することができないと考えられている。談話論的な知識との関係という観点から文の意味論的、機能論的構造の位置付けを考えると、これらの構造は談話論的な知識の部分構造なのだと考えることができる。特に文の機能論的構造は、談話論的構造の変化のプロセスをコード化する働きがある。主題や焦点という要素は、談話論的知識のどの部分が変化するかを聞き手に知らせる働きがある。

## 7.2 名詞句の意味の理論

本論文の第2章と第3章では、名詞句の意味の理論について論じた。名詞句は名詞述語文以外の様々な文で用いられる。従って名詞句の意味の理論は、本来的には名詞述語文の意味の理論とは独立のものである。この理論の主要な役割は、名詞述語文の意味のどの部分を名詞述語文とは独立の名詞句一般の意味の理論に割り当てるべきかということにあ

る。これまでいくつかの研究が、名詞述語文の類型的特点を名詞句の意味の観点から分析してきた。代表的研究の一つは西山 (2003b) によるもので、指示的名詞句、叙述名詞句、変項名詞句といった概念を用いて名詞述語文の類型を特徴付けている。これらの概念は基本的には名詞述語文の研究のためだけに設定されたものではなく、より一般的な名詞句の意味の理論の一部である。例えば、変項名詞句という概念は名詞述語文以外にも、「変わる」や「分かる」といった述語を持つ文の分析においても中心的な役割を果たす。しかし一方では、これらの概念には独立した理論的基盤の不明瞭な部分や、概念の定義が構文中での用いられ方に依存しているように見える部分があり、そのまま用いるには問題のある部分が多く残されていた。理論上の位置付けを明確にする必要があった問題には、名詞句がどのような事物や概念を表していれば指示的であるということになるのか (例えば、事物の種を表すような名詞句について、なぜ指定文の主語として用いられる場合には指示的であり、述語として用いられる場合には非指示的であるということになるのか)、変項名詞句、役割名詞句、および属性的用法の指示的名詞句といった概念を名詞句の意味の理論において区別する必要があるのか、同定文における特徴記述を満たすものを指示する名詞句とは結局のところ何を指示しているのか、第二タイプの指定文における指示的であるが変項名詞句として機能する名詞句という概念をどのように理解すればいいのかといった問題が含まれる。

名詞述語文を名詞句の意味論的性質の観点から分析した別の研究は坂原 (1990c) によるもので、Fauconnier (1985) のメンタル・スペース理論を基礎としている。この研究では特に役割 (role) という概念が重要な役割を果たしているが、この概念も名詞述語文以外の様々な文の意味解釈の問題を分析するために用いられる。この概念はまた Carlson (1977) の種 (kind) の概念に通ずるような性質があり、西山 (2003b) の変項名詞句よりも意味論的基盤の独立性が明確であるように思われた。すなわち文中での用いられ方とは独立に、抽象的個体概念という考え方をを用いて種や役割といった概念を取り扱うことができるように思われたのである。そこで本研究の意味論に Carlson (1977) の種や Fauconnier (1985) の役割の概念を取り入れたいと考えたが、この役割という概念は研究者によって様々な理解される側面があり、この概念の理論上の取り扱いを明確にする必要があった。基本的な考え方はすぐ上で述べたように役割を (種と同じように) 抽象的個体概念として扱うというものだが、特に重要だと考えたのは、役割 (および種) とは内包的な概念であるという点である。役割と値は同一のスペースに同時に存在し、互いに異なる属性を持ち得るような、別々の存在物である。これは役割という概念が、強い内包性を持った存在物であるということの意味する。いくつかの考え方が、本研究における内包的存在物の取り扱いの源泉となった。一つは野矢 (2002) の個体を四次元連続体として捉える考え方であり、もう一つは Carlson (1977) の個体の抽象性 (時間的に束縛されない) の延長線上に種の抽象性 (時間的にも空間的にも束縛されない) を位置付けるという考え方である。別の源泉は Thomason (1980) の T-内包という考え方で、Montague (1973) の内包論理では可能世界の集合として定義される命題という概念が、T-内包論理ではプリミティブなタイプの要素として扱われる。同じように、役割という概念についても Fauconnier (1985) のように文脈パラメータから外延 (値) への関数ではなく、プリミティブな要素として扱うという考え方を取った方が、役割を内包的な概念として取り扱う上で適切であるように思われた。結論として、本研究では名詞句が表す事物や概念には個体、種、役割といったタイプの存在物があり、これらの要素を抽象的個体概念として一般化するという考え方を採用する。

この考え方は、上記のような哲学的、論理的な考え方の総合に基礎付けられている。

個体、種、役割といった概念を理論に取り入れる上でもう一つ考えなければならなかったことは、結局のところ、これらの存在物は一体何であるのかというものである。指示についての古典的な考え方は、語は世界に存在する事物を指示するというものである。しかし個体はともかく、種や役割というような抽象的な存在物が世界に存在する事物であるとは考えにくい。また個体という概念についても、四次元連続体というようなある種の抽象性を持ち、しばしば個体の同一性が不明瞭になるような哲学的問題が発生するなど、客観的実在性の不確かな部分がある。要するに我々が言語によって言及している対象物とは世界の中の何かというより我々の認識によって対象化されている何かなのであり、認識の問題を切り離してしまうと世界の中のどの部分を一個の対象として認めていいのかが不明瞭になるのである。そこで本研究では、名詞句によって表される個体、種、役割といった概念は、世界の中に存在する事物ではなく心の中の概念であるという心理主義的な考え方を取ることにした。これは認識する者がいなければ世界は存在しないというような極端な唯識論的立場ではなく、世界は存在するが、そのどの部分が対象として切り出されるかは本質的に認識の問題であるという立場である。心の中の概念とは結局のところどのようなものであるのかとか、心の中の概念と心の外の世界とはどのように関係付けられるのかといった問題が未解決のまま(文法理論の研究ではほとんど取り扱うことのできない問題として)残されるが、我々が我々の認識を通してしか世界と接点を持つことができないこと、言語の使用自体も我々の認知的活動の一部であることを考えると、我々が言語によって表しているものは我々の心の中の概念であるという結論は避けがたい帰結である。

### 7.3 意味論的構造の理論

名詞句の意味の理論が基本的に名詞述語文とは独立の名詞句一般の意味の理論であるのに対して、意味論的構造の理論は名詞述語文に固有の意味の問題を扱う。構造の理論と言っても、本研究では構造に関しては最小の構成しか仮定していない。名詞述語文は一般に  $be(x, y)$  という意味論的構造を持つ。この理論の主要な役割は、構造それ自体よりも、構造中の諸要素が互いにどのような関係にあるのか、名詞述語文はどのような関係を表すことができるのかを論じることにある。

名詞述語文はどのような二つの事物の関係も自由に表すことができるわけではない。そこでごく常識的な考え方として、名詞述語文によって表される関係にはいくつかの決まったパターンがあるのだという考え方ができる。帰属関係や同一関係といった類型は、そのようなパターンについての類型の古典的なものである。しかし少なくとも日本語に関して考える限り、名詞述語文は状況に応じて非常に多様な関係を表すことができる。ウナギ文はその代表的な事例であり、客と料理を結び付けるために用いられる。このような事例の解釈の問題をどのように取り扱うかについて、本研究は二つの一般的な考え方を示した。一つは、名詞述語文は基本的にはいくつかの決まったパターンの関係しか表せないのであって、それ以外の関係を表しているように見える事例も実際には統語論的ないし意味論的な変換によって基本的なパターンのいずれかに還元されて解釈されているのだというものである。本研究ではこの考え方は取らない。第一に、「僕」と「ウナギ」が客と料理の関係にあるのだということを理解するために、わざわざ「僕の注文」と「ウナギ」というような別の関係に置き換える必要があるのだとは思えない。第二に、そのような考え方を

取ったところで、結局のところどのような二つの事物の関係であれば、そのような還元と解釈が可能になるのかという問題を回避することができない。 $a$ (=僕)と $b$ (=ウナギ)の間に $F$ (=客と注文)という関係があるのだという代わりに、 $a$ と $F$ の関係にある $r$ (=僕の注文)と $b$ の間に $G$ (=役割と値)という関係があるのだというような説明を与えることは可能であるが、理論的には冗長なことをしているように見える。

もう一つの考え方は、名詞述語文は状況に応じてかなり多様な関係を表すことが可能であり、ごく少数の決まったパターンの関係に還元して解釈されると考える必要は無いというものである。すなわち、我々は「僕はウナギだ」という文について、わざわざ「僕の注文はウナギだ」のような文への還元を行うことなく、「僕」と「ウナギ」が客と注文の関係にあることを直接解釈することができるという考え方である。本研究はこの考え方を取る。これは名詞述語文はどのような二つの事物の関係も自由に表すことができるのだということを主張するものではない。また、名詞述語文が表す関係に中心的な事例と周辺的な事例があることを否定するものでもない。本研究では名詞述語文が表す事物や概念の間の関係を、便宜的に帰属関係、同一関係、役割-値関係、隣接関係という四つの類型に整理した。この分類は基本的には帰属関係、同一関係、役割-値関係が名詞述語文によって表される関係の中心的事例であり、隣接関係は周辺的事例であることを意図して設定したものである。名詞述語文によって表される関係にどのようなものがあるか、中心的な事例と周辺的な事例の違いは何か、「僕」と「ウナギ」が客と注文の関係にあることはどのような認知的なプロセスによって解釈されるかといった問題は、依然として考える必要のある問題として残されている。本研究はこれらの問題をどのように説明すべきかについて具体的な言及を行っていないが、統語論や意味論の別の部門(例えば名詞句の解釈の理論)に追いやるのではなく、文の意味論的構造の部門で扱うという方向性を示した。文の意味論的構造の理論の主要な役割の一つは、これらの問題を扱うための理論上の部門を提供することにある。

## 7.4 機能論的構造の理論

文の機能論的構造の理論を独立の部門として設定することは、名詞述語文の意味論的特徴と機能論的特徴を明示的に区別して記述するために役立つ。このような区別を設定することで、名詞述語文 A が意味論的には名詞述語文 B に類似しているが、機能論的には名詞述語文 C に類似しているというような事例に簡潔な説明を与えることができるようになる。例えば、同一関係を表す文は通常は指定文型の機能論的構造を持ち、役割-値文は通常は倒置指定文型の機能論的構造を持つが、意味論的には同一関係を表し機能論的には倒置指定型であるような名詞述語文も存在し得るのだということを説明することができる。このような区別を明確にしておかないと、文 A は機能論的に文 C と類似しているので、意味論的にも文 B と類似しているはずだというような過剰な一般化に基づいて、A と B の意味論的構造を統一するために不必要に複雑な分析を与える原因になる。

本研究では、文の機能論的構造を記述するために主題と題述、前提と焦点という二つの対立する概念を組み合わせて用いる方法を採用した。これらの概念は天野(1998)、砂川(2005)など名詞述語文の機能論的構造に関する過去の研究でも用いられてきたものであるが、これらの概念をどのように理解するか、概念を互いにどのように関係付けるかについては、研究者によってそれぞれ考え方がある。本研究の基本的な考え方は、主題と題

述、前提と焦点は互いに独立した機能論的機構であり、これらが組み合わさることによって豊かな機能論的構造が生み出されるというものである。

主題-題述構造については、本研究では主題と題述という二つの部分から構成される文、すなわち主題が「は」で明示的に表示されるような文のみを有題文と見なす考え方を取った。これ以外にも、述語名詞句が実質的な主題になっている文(転位陰題文)や、文中に示されていない背景の状況が実質的な主題になっている文(状況陰題文)を認める考え方もあるが、そのような事例については本研究では主題-題述構造を持つ文としては扱わないことにした。主題-題述構造に関してそのような類型を想定しなかったのは、主題が「は」で明示されるような文以外について、どのような条件が満たされればその文が主題(陰題)を持っていると言えるのか、そのような抽象的な意味における主題を「は」で明示されるような主題と同等に考えてよいのかについて、明確な基準を設定することができなかったからである。そのため、本研究では主題-題述構造については、主題-題述構造を持つものと持たないものという二つの類型のみを設定している。従来の研究で陰題や無題と呼ばれていた類型は一括して無題文という類型に含められているが、必ずしも従来の研究より説明できる事柄が少なくなったわけではない。文の機能論的構造を記述するために、焦点という別の機構を組み合わせて用いることができるからである。

主題と題述という概念が文の統語構造中に対応する構成素(主題句と題述句)を持つものに対して、前提と焦点という概念は統語構造中の特定の構成素に対応する概念ではない。正確には、焦点は統語構造中の特定の構成素(焦点句)と対応するが、前提は基本的には文の外側にあるものである。本研究における前提-焦点構造の基本的な考え方は、文の前提と主張という二つの構造の差分に相当する情報が文の焦点であるというものである。

- (1) ピーターがウサギだ。
- a. 前提:  $x$  がウサギだ。
- b. 主張: ピーター がウサギだ。  
                    焦点

焦点という概念を特徴付けるために、本研究ではこの概念を位置と性質という二つの要素に分解して記述する方法を取った。名詞述語文の焦点の位置については、前項焦点、後項焦点、全体焦点という類型が既に提案されているが(天野, 1998; 砂川, 2005)、より一般的には主語名詞句や述語名詞句よりも局所的な構成素(例えば、これらの名詞句の主名詞や修飾語句の部分のみ)が焦点になることもあり得る。焦点の性質については、いくつかの異なる種類の焦点を仮定した。必要な区別の一つは通常の焦点と選択的焦点というもので、帰属関係や同一関係を表す文の焦点と役割-値関係を表す文の焦点の違いを説明するために必要になる。概ね、帰属関係や同一関係を表す文の述語名詞句は通常の焦点に、役割-値関係を表す文の述語名詞句は選択的焦点になるのが普通である。実際には文の意味論的構造と機能論的構造は独立したものであるため、帰属関係や同一関係を表す文の述語名詞句が選択的焦点になる場合もある。また、これらのいずれの関係を表す文についても主語名詞句を焦点にすることが可能であり、その場合は選択的焦点になる。本研究では通常の焦点と選択的焦点の違いについて、前提とされている事柄の違いに基づいて説明を与えた。選択的焦点は、ある対象  $a$  とある関係  $F$  にあるような別の対象  $x$  が存在することを前提として、その  $x$  が何であるかが問題とされているような場合に成立する。本研究ではまた、通常の焦点、選択的焦点とは別の性質を持つ焦点として、同定的焦点という種類の

焦点を仮定した。この焦点については理論的な特徴付けがまだ十分ではないが、記述的には同定文や提示文の焦点を特徴付け、他の焦点と区別するために必要である。

主題と題述、前提と焦点といった概念の理論的基盤を整理することは、文の機能論的構造を詳細に記述するために役立つとともに、これまで名詞述語文の機能論的研究ではあまり言及されて来なかったような様々な問題を浮き彫りにする。その一つは名詞述語文の主語名詞句が焦点になる場合と述語名詞句が焦点になる場合では、可能な焦点の種類や性質に違いが観察されるというものである。これは従来、言い換えが可能であるとされてきた「AはBだ」文と「BがAだ」文について、機能論的に見ると単純な交換関係が成立するわけではないということの意味する。例えば、「ジキル博士はハイド氏だ」という文では述語名詞句は通常の焦点である場合も選択的焦点である場合もあるが、「ハイド氏がジキル博士だ」という文では主語名詞句は必ず選択的焦点になる。焦点に関する別の興味深い現象は、焦点の位置が否定文の解釈の曖昧性を生み出す要因になるというものである。否定辞は文のどの部分を否定するかに関して曖昧性を持ち、文全体を否定する場合と述語部分だけを否定する場合がある。特に文中に別の作用域を持つような成分(例えば全称限量詞)がある場合には、そのような成分と否定辞のどちらが広い作用域を持つかによって直観的に観察可能な解釈の曖昧性が生じる。焦点にも同じような性質があり、名詞述語文の主語が焦点になっている場合には、否定辞が文全体を否定する(否定辞の作用域に焦点が含まれる)か、述語部分のみを否定する(焦点が否定辞の作用域の外側にある)かによって、解釈の曖昧性が生じる。文の機能論的構造の理論は、意味論的構造とは独立の要因によって生じるような様々な現象の分析を可能にする。

## 7.5 課題と展望

本研究では、名詞述語文に観察される類型的諸特徴を、意味論的、機能論的ないくつかの部門に分けて記述することの重要性を主張してきた。一方で、それぞれの部門の具体的な構成の詳細や、各部門間の関係については、未解決の問題が多く残されている。最後に、残された問題と研究の今後の展望について述べておきたいと思う。

未解決の問題の一つは、言語表現と意味の間関係と解釈の原理に関する詳細である。これは名詞句とそれが表す事物や概念との間関係や、名詞述語文とそれが表す関係との間関係についての問題を含む。名詞句と事物や概念の間関係は、非常に多くの知識や原理によって成立している。語の意味に関する語彙的な知識は最も基本的な要素の一つであり、どのような事物が「ウサギ」という範疇に属するのかといった判断に関わる。別の要素は語の換喩的解釈を可能にする語用論的原則であり、これは本論文の第3章における中心的なテーマの一つである。本研究は語の換喩的解釈を成立させるメカニズムを説明するために Fauconnier (1985) の言う語用論的関数  $F$  という概念を用いたが、どのような関係  $F$  についてメトニミーが成立するのかについては具体的な言及を行っていない。例えば、ピーターとベンジャミンはいとこの関係にあるが、一般には「ピーター」という固有名を用いてベンジャミンに言及するというようなメトニミーは成立しない。Lakoff and Johnson (1980, p.37) は “Like metaphors, metonymies are not random or arbitrary occurrences, to be treated as isolated instances. Metonymic concepts are also systematic, as can be seen in the following representative examples that exists in our culture” と述べ、メトニミーは無秩序に発生するのではなく体系性があるのだと



している。換喩を成立させる関係にどのような種類のものがあり、それらをどのように体系化すべきかという問題は、本研究の研究範囲に含まれるものではないが、名詞句の意味の理論が扱うべき問題の一部として研究の必要性がある。

名詞句の場合と同じように、文についても形式と意味の間関係について説明すべき問題が残されている。名詞述語文は様々な事物や概念の間関係を表すが、具体的にどのような関係を表すことができるのかという問題は未解決のままである。本研究は便宜的に名詞述語文が表す意味論的關係を帰属関係、同一関係、役割-値関係、隣接関係の四つに分類し、また隣接関係についてはいくつかの個別的事例を示したが、これは理論に基づいて十分に体系化されたものではない。いくつかの非常に異なる種類の要因が、名詞述語文における形式と意味の間関係の成立に関与している可能性がある。関係のある部分は、個別言語に依存しない一般的な認知的原則に基づいて説明される可能性がある。例えば、多くの言語で「赤」「青」「白」「黒」などの語が色に関する基本語彙の中に含まれるのと同じように、多くの言語で名詞述語文は帰属関係、同一関係、役割-値関係といった関係を表すことができるようになってきているのだとしよう。これは個別言語的な要因とは独立に、人間の言語および認知の普遍的な特性として、これらの関係が他の多くの関係よりも特別な地位を与えられているということの意味する。しかし仮にそのような認知的原則が存在したとしても、ではなぜそれらの関係が他の関係とは異なる特別な地位を与えられているのかという問題は残される。例えば、存在物と存在場所の関係は我々が日常的に認識している事物間関係のごく代表的なものであるが、多くの言語において事物と場所の関係は名詞述語文が表す関係の中心的な事例とは見なされない(日本語では「ピーターは裏庭だ」のような文はしばしばウナギ文の一種として扱われるし、英語でも“Peter is in the garden”のように場所は名詞句ではなく前置詞句で表される)。なぜ、帰属関係や同一関係だけが名詞述語文の成立に関して認知的に特別なのかに関して、何らかの説明を与えなければならない。

別の問題として、どのような言語にも観察されるような中心的な関係以外の周辺的な関係について、なぜ個別言語的な違いが生じるのかという問題を説明する必要がある。澤田(2003)は日本語の名詞述語文には部類、側面、部分を表すものなどがあり、特に側面や部分を表すものは英語や中国語にも一般に見られるものではないということを指摘している。このような個別言語的な違いは個々の言語における慣習的な取り決めとして決まっているものかも知れないし、もう少し一般的な原則が背後に隠されているのかも知れない。しかし特に日本語に関して言えば、名詞述語文はほとんど類型化することができないような様々な事物の関係を表すことができる。例えば日本語の名詞述語文は文脈に応じて客と注文を結び付けたり(「僕はウナギだ」)、誰と誰がどこかを述べたり(「ピーターはベンジャミンだ」)することができる。こうした事例については、機能論的には一定の制約が課せられるようだが(例えば料理を注文する際には「僕がウナギだ」という言い方はできないが、料理が給仕される際には「僕がウナギだ」ということができる、など)、意味論的にはほとんど無制約にどのような関係も表され得る。今のところ、日本語の名詞述語文が表すことのできる関係をどのように整理し、体系化すべきかについて明確な理論的基準は無く、さしあたっては記述的研究の蓄積から、一般化、理論化へと研究を進めていく必要がある。またどのような文脈でどのような関係を表すことができるのかといった条件や、関係はどのように解釈されるのかといったメカニズムも十分に分かっているわけではない。名詞述語文が表す意味論的關係の類型化と理論的体系化、および解釈の原則の解明

は、今後の名詞述語文の意味論的研究における中心的な課題の一つである。

機能論的研究にも多くの課題が残されている。文の統語論的構造や意味論的構造の研究と比べると、機能論的構造をどのように記述すべきかについては十分な形式化が進んでいない。構成素構造のような、統語論的構造や意味論的構造の研究ではごく一般に受け入れられているような共通の理論的基盤も、機能論的構造の研究では確立されていないように見える。比較的広く受け入れられている考え方の一つは、主題と題述、前提と焦点といった概念が文の機能論的構造を記述するために役立つだろうということであり、天野(1998)や砂川(2005)の名詞述語文研究で用いられている他、Jackendoff(2002)における文の機能論的構造(情報構造)の記述でも中心的な役割を果たしている。本研究もこれらの概念を文の機能論的構造を記述するための中心的機構の位置に据えたが、これらの概念をどのように定義し、特徴付け、音韻・統語構造や意味・概念構造と結び付けるかについては、多くの課題が残されている。例えば焦点という概念について、本研究は基本的に文は必ず焦点を持つという仮定に基づいてこの概念を記述している。これは少なくとも過去のいくつかの研究に見られる考え方を踏襲したもののだが(例えばJackendoff(2002, §12.5)は、文の情報構造は義務的な焦点(focus)と随意的な主題(topic)、第一焦点(first focus)、およびそれ以外の部分(共通基盤; common ground)によって形成されるとしている)、理論的に必然性のある考え方というわけではない。文は必ず焦点を持つのだという考え方は、焦点とは文中で新情報を担う要素のことであり、文は必ず新情報を含むのだという仮定に基づいているが、人によっては特にWH-疑問詞に対応するのだとか、韻律的強勢を持つのだというようなことがなければ、その要素をわざわざ焦点と呼ぶ必要はないと考えるかも知れない。例えば、「犯人はピーターだ」とか「ピーターが犯人だ」のような文は文中の特定の要素が焦点になっているが、「ピーターはウサギだ」とか「あっ、屋根がドーム型だ」のような文は文中の特定の要素が焦点になっているわけではないのだという記述の仕方でもできる。また文が必ず焦点を持っているのだとすれば、「象は鼻が長い」のような文について「鼻が長い」が焦点になっているのか「長い」だけが焦点になっているのかといった問題にも説明を与えなければならない。どのような考え方を取れば、多くの研究者が共通の基盤として用いることができるような標準化された理論を構築することができるか。理論を多くの研究者が利用できるような標準化されたものにするために、概念の理論的基盤をより明確なものにしないといけない。

より個別のないいくつかの問題に言及しておく、考えるべき問題の一つは本研究が同定的焦点と呼んだ種類の焦点をどのように特徴付けるかというものである。この焦点は同定文や提示文の機能論的構造を記述するために設定したもののだが、この焦点にどのような理論上の位置付けを与えるべきかについてはほとんど分かっていない。通常の焦点や選択的焦点については前提とされている事柄の違いによって一定の形式的説明を与えることができるが、同定的焦点は同じような方法では十分な形式的説明を与えることができそうにない。この焦点について分かっていることの一つは、他の焦点と比べて文の意味論的構造に大きく依存しているということである。例えば選択的焦点の場合は、文がどのような意味論的関係(帰属関係、同一関係、役割-値関係など)を表しているかに関わらず、文の主語名詞句を選択的焦点にするということが可能であるが、同定的焦点は述語名詞句が表す事物や概念を主語名詞句によって特徴付けるような文の主語の位置にしか観察されない。対象についてどのような情報が分かっておらず、またどのような情報が与えられれば対象が同定されたとか特徴付けられたということになるのか。またそのような操作を、前提と焦

点の対立という構図の中にどのように組み込めばいいのか。結局のところ本研究は同定的焦点という種類の焦点を設定することによって、未解決の問題にラベルをつけ、解決すべき問題として設定したに過ぎないのである。同定文や提示文の機能論的構造をどのように特徴付けるかという問題は、名詞述語文に関する過去の機能論的研究においても理論的説明の難しい問題であったが、依然として未解決の重要課題として残されている。

名詞述語文の機能論的構造に関する別の未解決問題は、主語名詞句が焦点になる場合と述語名詞句が焦点になる場合でどのような違いが生じるかというものである。従来、名詞述語文のある種のもは「AはBだ」と「BがAだ」というような言い換えが可能であると考えられてきたが、本研究はそのような言い換えが可能であるように見える事例も、機能論的に見ると単純な交換関係が成立しているわけではないのだということを示した。例えば「ジキル博士はハイド氏だ」という文では述語名詞句は通常の焦点にも選択的焦点にもなることができるが、「ハイド氏がジキル博士だ」という文では主語名詞句は選択的焦点にしかならない。同じ選択的焦点でも「私の血液型はB型だ」は言えるが「B型が私の血液型だ」は不自然であるというように言い換えが不可能である場合がある。ウナギ文についても、似たような現象が観察される。日本語では、料理を注文したり、誰がどの料理を注文したかを確認する際に「僕はウナギだ」という言い方を用いることができるが、主語を焦点化して「僕がウナギだ」とすると料理を注文する際には用いることができなくなり、どの料理を誰が注文したかを確認する場合にしか用いることができなくなる。また語順を変えて「ウナギは僕だ」あるいは「ウナギが僕だ」とした場合も、料理の注文のためには用いることができなくなる。別の言語で似たような現象があるかは定かではないが、英語の場合には料理を注文するためにウナギ文のような構文を用いることはできないが、注文した料理が配られるときに“I am the hamburger”のような言い方ができることが知られている(奥津, 1988; 久野・高見, 2004)。別の関与的な現象としては、カキ料理構文を挙げることができる。筆者の内省では「カキ料理の本場は広島だ」という言い方のほうが「広島がカキ料理の本場だ」という言い方よりも自然であるように思われるが、対応する「AはBがCだ」構文を考えると「カキ料理は本場が広島だ」よりも「カキ料理は広島が本場だ」の方が自然になる。こうした焦点の位置と性質、および文の許容度の相関は興味深い問題であるが、本研究では十分な分析と一般化は与えられていない。この問題も、名詞述語文の機能論的構造の研究における興味深い研究課題の一つである。

最後に、名詞述語文の意味論的、機能論的構造について、談話論的観点から研究を展開することの重要性について言及しておきたいと思う。文の意味論的、機能論的構造の構成は、非常に多くの点において、文とは独立の談話論的知識の構成に依存している。名詞句は談話中の諸要素に言及したり、談話に新しい要素を導入するために用いられる。名詞句の解釈に関する問題のある部分は、談話を構成する諸要素間の関係(Fauconnier (1985) がコネクター、あるいは語用論的関数と呼んだもの)によって解決される。意味論に関する伝統的な問題のいくつか(指示の不透明性や前提など)は、談話中にいくつかの下位領域を設定することによって解決される。メンタル・スペース理論や談話表示理論のような意味論にはそのような領域を取り扱うための機構が備わっており、Jackendoff (2002) の指示層にも似たような仕組みがある。語彙の意味や構成的意味演算だけでは解決できないような様々な意味論上の問題を解決するための糸口が、単文を越えて存在する談話論的知識の構成の中に含まれていることは、もはや疑い難いことであるように思われる。加えて、談話を構成する諸要素は様々な認知的属性を持つ。意識の中で前景化されているかと

か、その対象について十分に同定できているかとか、話し手と聞き手のどちらの側に属するような情報であるかといった属性である。こうした認知的諸属性は、しばしば言語形式の選択や運用に影響を及ぼす。第3章では、固有名やメタ言語の運用に、対象についての話し手の知識、情報の帰属、聞き手の知識に対する配慮(聞き手の知識状態についての推論を含む)といった認知的諸要因が関与しているのだと述べた。本研究では言及しなかったが、文の機能論的構造に関する問題の中にも、談話を構成する諸要素の認知的状態と結び付けて論じられる部分があり得る(例えば、主題の選択や展開に関わる問題など)。第6章では文の意味論的、機能論的構造と談話論的な知識との間の関係についてごく簡単なモデルを示したが、十分に議論を尽くしたとは言えない。談話論的な知識の状態を記述するための理論の構築は、文の意味論的、機能論的構造を記述するための理論を構築する上でも、今後一層重要な役割を果たすことになるものと予想される。

## 7.6 結び

本研究は、名詞述語文の意味論的、機能論的な諸特徴を、どのように切り分けて記述すればよいのかという問題について論じた。問題をいくつかの部分に分けて分析し、然る後にそれらを統合するという研究の手続きは、基本的にはデカルト以来の伝統的な方法論に則っている。このような研究の手続きは、名詞述語文に限らずどのような種類の言語事例を研究する上でも常に意識する必要のあるものであるが、とりわけ名詞述語文の研究においては、先行する意味論的、機能論的な諸研究の成果を継承し、かつまた多くの研究者が共有することのできるような、十分に標準化、一般化された統合的なフレームワークの構築が不可欠である。この目的のために、記述的、理論的両面から研究を推し進めていく必要がある。

# 用例出典

## 新聞

『CD-毎日新聞'95 データ集』, 毎日新聞社

## 小説・童話・エッセイ

『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』 新潮社, 1995 年

『一瞬の夏』 沢木耕太郎 新潮社 1984 年

『忍ぶ川』 三浦哲郎 新潮社 1965 年

『人生論ノート』 三木清 新潮社 1954 年

『人民は弱し官吏は強し』 星新一 新潮社 1978 年

『世界の終りとハードボイルドワンダーランド』 村上春樹 新潮社 1988 年

『楡家の人びと』 北杜夫 新潮社 1964 年

『花埋み』 渡部淳一 新潮社 1975 年

『華岡青洲の妻』 有吉佐和子 新潮社 1970 年

『パニック・裸の王様』 開高健 新潮社 1960 年

『檸檬』 梶井基次郎 新潮社 1977 年

青空文庫 <http://www.aozora.gr.jp/>

「季節の味」『釣随筆』 佐藤垢石 河出書房 1951 年

「劇団の新機運」『飛雲抄』 蒲原有明 書物展望社 1938 年

「研究的態度の養成」『寺田寅彦全集 第五卷』 寺田寅彦 岩波書店 1997 年

「坂口流の将棋観」『教祖の文学』 坂口安吾 草野書房 1948 年

「里の春、山の春」『校定新美南吉全集 第四卷』 新美南吉 大日本図書 1980 年

『大菩薩峠 六』 中里介山 筑摩書房 1976 年

「能の彫刻美」『高村光太郎全集 第五卷』 高村光太郎 筑摩書房 1957 年

「水〔扉の言葉〕」『山頭火随筆集』 種田山頭火 講談社 2002 年

## 文献

- 天野みどり (1995a). 「「が」による倒置指定文:「特におすすめなのがこれです」という文について」. 『人文科学研究』, **88**, 1-21. 新潟大学人文学部.
- 天野みどり (1995b). 「後項焦点の「A が B だ」文」. 『人文科学研究』, **89**, 1-24. 新潟大学人文学部.
- 天野みどり (1996). 「後項焦点の名詞述語文:「は」と「が」の考察の基点」. 『和光大学人文学部紀要』, **31**, 1-10.
- 天野みどり (1998). 「「前提・焦点」構造からみた「は」と「が」の機能」. 『日本語科学』, **3**, 67-85. 国立国語研究所.
- 天野みどり (2000). 「焦点と主格補語の関係:談話資料による補語顕現率・焦点句形式調査から」. 『日本語と日本文学』, **30**, 1-12. 筑波大学国語国文学会.
- 天野みどり (2001). 「格助詞:主格表示と焦点表示」. 『国文学:解釈と教材の研究』, **46** (12), 24-29.
- 天野みどり (2006). 「文内情報完結度の多様性:「A が B だ」文と「X は Y が Z だ」文の差異」. 矢澤真人・橋本修(編), 『現代日本語文法現象と理論のインタラクション』, pp. 3-22. ひつじ書房.
- 有田節子・田窪行則 (1995). 「日本語の提題形式の機能について」. 『人間科学』, **1**, 43-63. 九州大学文学部人間科学科.
- 備前徹 (1983). 「名詞述語文の補文の構造」. 『日本語教育』, **51**, 107-117.
- 備前徹 (1989). 「「～ことだ」の名詞述語文に関する一考察」. 『滋賀大学教育学部紀要』, **39**, 1-12.
- Carlson, G. N. (1977). A unified analysis of the English bare plural. *Linguistics and Philosophy*, **1** (3), 413-457.
- Carlson, G. N. & Pelletier, F. J. (Eds.) (1995). *The Generic Book*. The University of Chicago Press.
- Davidson, D. (1980). *Essays on Actions and Events*. Oxford University Press. 服部裕幸・柴田正良訳 (1990) 『行為と出来事』 勁草書房.
- 伝康晴 (1994). 「西山佑司氏の「メンタルスペース理論におけるコピュラの分析はどこまで妥当か」へのコメント」. 『認知科学』, **1** (2), 83-85.
- 伝康晴・長尾真 (1990). 「談話管理理論を用いた対話処理:名詞句の解析と生成について」. 『人工知能学会誌』, **6** (6), 872-880.
- Donnellan, K. (1966). Reference and Definite Descriptions. *Philosophical Review*, **75**, 281-304.
- Fauconnier, G. (1985). *Mental Spaces: Aspects of Meaning Construction in Natural*

*Language*. MIT Press.

- Fauconnier, G. (1991). Roles and values: the case of French copula constructions. In Georgopoulos, C. & Ishihara, R. (Eds.), *Interdisciplinary Approaches to Language: Essays in honor of S.-Y. Kuroda*, pp. 181–206. Kluwer Academic Publisher, Dordrecht.
- Frege, G. (1892). Über Sinn und Bedeutung. *Zeitschrift für Philosophie und philosophische Kritik*, **100**, 25–50. 藤村龍雄訳 (1988) 「意義と意味について」『フレーゲ哲学論集』岩波書店.
- 藤村逸子 (1994). 「わからないコトバ, わからないモノ: 「って」の用法をめぐって」. 『言語文化論集』, **14** (2), 45–56.
- Groenendijk, J., Stokhof, M., & Veltman, F. (1996). Coreference and Modality. In *The Handbook of Contemporary Semantic Theory*. Blackwell.
- 服部匡 (1991). 「命題否定に関する覚書」. 『徳島大学教養学部紀要』, **26**, 109–118.
- 平塚徹 (1997). 「コピュラ文の二つの倒置」. 『フランス語学研究』, **31**, 27–33.
- 堀川昇 (1983). 「「僕はうなぎだ」型の文について: 言葉の省略」. 『実践国文学』, **24**, 57–71. 実践女子大学.
- 市川保子 (1990). 「名詞述語文「～は～です」の意味と機能に関する一考察」. 『文藝言語研究 言語篇』, **18**, 53–67. 筑波大学文芸・言語学系.
- 井島正博 (1991). 「否定文の多層的分析」. 『成蹊国文』, **24**, 1–73.
- 井島正博 (1998a). 「指示の理論としてのメンタル・スペース理論」. 『成蹊人文研究』, **6**, 1–26.
- 井島正博 (1998b). 「名詞述語文の多層的分析」. 『成蹊大学文学部紀要』, **33**, 1–53.
- 池上嘉彦 (1981). 『「する」と「なる」の言語学』. 大修館書店.
- 今田水穂 (2003). 「日本語存在文の意味分析: その類型と一般化について」. 修士論文, 筑波大学大学院人文社会科学部研究科.
- 今田水穂 (2004). 「語の多義性とアスペクト」. 『筑波応用言語学研究』, **11**, 59–72. 筑波大学.
- 今田水穂 (2005a). 「「まで」「までに」の機能」. 杉本武 (編), 『日本語複合助詞の研究』, pp. 159–191. 筑波大学.
- 今田水穂 (2005b). 「日本語存在文の記述の二面性」. 『日本語文法』, **5** (1), 55–69.
- 今田水穂 (2006a). 「日本語同定文の主語名詞句の意味論上の取り扱いについて」. 『筑波応用言語学研究』, **13**, 71–84. 筑波大学.
- 今田水穂 (2006b). 「役割・値文としての「とは」コピュラ文: メタ言語と記述句の理論の観点から」. 杉本武 (編), 『日本語複合助詞の研究 2』, pp. 1–25. 筑波大学.
- 今田水穂 (2007a). 「コピュラ文の情報構造, 談話機能と否定: 提示文はなぜ否定文にならないか」. 『日本語文法学会第 8 回大会発表予稿集』, pp. 154–161.
- 今田水穂 (2007b). 「タグ付きコーパスを使用した言語研究: XML コーパスの利用のための技術と実例」. 『筑波応用言語学研究』, **14**, 15–29. 筑波大学.
- 井元秀剛 (1989). 「le N と ce N による忠実照応」. 『フランス語学研究』, **23**, 25–39.
- 井元秀剛 (1995). 「役割・値概念による名詞句の統一的解釈の試み」. 『言語文化研究』, **21**, 97–116. 大阪大学大学院言語文化研究科.
- 井元秀剛 (2001). 「メンタルスペース理論における定名詞句の指示について」. 『言語文

- 化共同研究プロジェクト 2000：言語における指示をめぐって』, pp. 21–36. 大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科.
- 井元秀剛 (2004). 「スペースと名詞句解釈」. 『言語文化共同研究プロジェクト 2003：言語における時空をめぐって 2』, pp. 1–12. 大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科.
- 井元秀剛 (2006). 「コンピュータ文をめぐる名詞句の意味論と語用論」. 高岡幸一教授退官記念論文集刊行会 (編), 『高岡幸一教授退官記念論文集』. 朝日出版社.
- 井上優・金河守 (1999). 「名詞述語の動詞性・形容詞性に関する覚え書: 日本語と韓国語の場合」. 筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究 (編), 『筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究 研究報告書 II』, pp. 455–470. 筑波大学.
- 伊藤徳文 (2006). 「指定文・分裂文の意味論・語用論的研究」. 『徳島文理大学文学論叢』, **22**, 1–31.
- Jackendoff, R. (1979). How to Keep Ninety from Rising. *Linguistic Inquiry*, **10** (1), 172–177.
- Jackendoff, R. (1983). *Semantics and Cognition*. MIT Press.
- Jackendoff, R. (1990). *Semantic Structures*. MIT Press.
- Jackendoff, R. (1992). *Languages of the Mind*. MIT Press.
- Jackendoff, R. (2002). *Foundations of Language: Brain, Meaning, Grammar, Evolution*. Oxford University Press.
- Kamp, H. & Reyle, U. (1993). *From Discourse to Logic*. Kluwer.
- 上林洋二 (1984). 「措定と指定: ハとガの一面」. 修士論文, 筑波大学.
- 上林洋二 (1988). 「措定文と指定文: ハとガの一面」. 『文藝言語研究 言語篇』, **14**, 57–74. 筑波大学.
- 加藤泰彦 (2000). 「否定の意味とシンタクス: 生成文法の試み」. 『月刊言語』, **29** (11), 77–84.
- 川本茂雄 (1976). 「日本語文法の特徴: 視点の模索」. 『日本語講座 1 日本語の姿』. 大修館書店.
- 河西良治 (2000). 「「\*少ししか食べるわけではない」: 記述否定とメタ言語的否定」. 『日本語学』, **29** (11), 59–64.
- 川添愛・戸次大介 (2006). 「「同じ」についての諸考察」. 『T-SAC ジャーナル』, **1**, 25–36. 帝京大学帝京スタディーアブロードセンター.
- 菊地康人 (1997). 「「が」の用法の概観」. 川端善明・仁田義雄 (編), 『日本語文法: 体系と方法』, pp. 101–123. ひつじ書房.
- 金水敏 (1990). 「「役割」についての覚え書」. 筧壽雄教授還暦記念論集編集委員会 (編), 『ことばの饗宴: 筧壽雄教授還暦記念論集』, pp. 351–361. くろしお出版.
- 金水敏・田窪行則 (1990). 「談話管理理論からみた日本語の指示詞」. 日本認知科学会 (編), 『認知科学の発展』, 3 巻, pp. 85–116. 講談社.
- 北原保雄 (1981). 『日本語の文法』. 中央公論社.
- 郡史郎 (1997). 「日本語のイントネーション: 型と機能」. 杉藤美代子, 国広哲也, 廣瀬肇, 河野守夫 (編), 『日本語音声 2 アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』, pp. 169–202. 三省堂.



- 小屋逸樹 (1995). 「コピュラ文の意味構造: 「指定」と「指定」の概念をめぐって」. 『教養論叢』, **99**, 23–54. 慶應義塾大学法学研究会.
- 小屋逸樹 (2003). 「もう一つのコピュラ文: 状態指定文とウナギ文の分析」. 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』, **35**, 43–67.
- Krifka, M., Pelletier, F. J., Carlson, G. N., ter Meulen, A., Link, G., & Chierchia, G. (1995). Genericity; An Introduction. In *The Generic Book*. The University of Chicago Press.
- Kripke, S. (1977). Speaker's Reference and Semantic Reference. In *Contemporary Perspective in the Philosophy of Language*. 黒川英徳訳 (1995) 「話し手の指示と意味論的指示」『現代思想』 23:4.
- 工藤真由美 (2000). 「「彼は風邪くらいでは休まないよ」: 否定のスコープと焦点」.. **29** (11), 38–44.
- 熊本千明 (1989a). 「指定と同定: 「…… のが…… だ」の解釈をめぐって」. 大江三郎先生追悼論文集編集委員会 (編), 『英語学の視点』, pp. 307–318. 九州大学出版会.
- 熊本千明 (1989b). 「日・英語の分裂文について」. 『佐賀大学英文学研究』, **17**, 11–34.
- 熊本千明 (1992). 「日・英語のコピュラ文に関する一考察」. 『佐賀大学英文学研究』, **20**, 49–67.
- 熊本千明 (1995). 「同定文の諸特徴」. 『佐賀大学教養部研究紀要』, **27**, 147–164.
- 熊本千明 (1998). 「コピュラ文の語順と解釈: 名詞句の意味特性に注目して」. 『佐賀大学文化教育学部研究論文集』, **3** (1), 9–25.
- 熊本千明 (2000). 「指定文と提示文: 日・英語の観察から」. 『佐賀大学文化教育学部研究論文集』, **5** (1), 81–107.
- 熊本千明 (2004). 「分裂文の焦点名詞句の解釈をめぐって」. 『佐賀大学文化教育学部研究論文集』, **9** (1), 97–106.
- 熊本千明 (2005). 「コピュラ文における名詞句の意味機能について」. 『佐賀大学文化教育学部研究論文集』, **9** (2), 135–145.
- 熊本千明 (2006). 「指定文と提示文の特徴について」. 『佐賀大学文化教育学部研究論文集』, **10** (2), 117–129.
- 久野暉 (1973). 『日本文法研究』. 大修館書店.
- Kuno, S. (1976). Subject, Theme, and the Speaker's Empathy: A Reexamination of Relativization Phenomena. In Li, C. N. (Ed.), *Subject and Topic*, pp. 417–444. Academic Press.
- 久野暉 (1978). 『談話の文法』. 大修館書店.
- Kuno, S. (1982). The Focus of the Question and the Focus of the Answer. In Schneider, R., Tuite, K., & Chametzky, R. (Eds.), *Papers from the Parasession on Nondeclaratives: Chicago Linguistic Society*, pp. 134–157. Chicago Linguistics Society.
- 久野暉 (1983). 『新日本文法研究』. 大修館書店.
- 久野暉・高見健一 (2004). 『謎解きの英文法: 冠詞と名詞』. くろしお出版.
- Lakoff, G. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: University of Chicago Press. 池上嘉彦, 河上誓作他訳 (1993) 『認知意味論—言語から見た人間の心』 紀伊国屋書店.
- Lakoff, G. & Johnson, M. (1980). *Metaphors We Live By*. The University of Chicago. 渡

- 部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳 (1986) 『レトリックと人生』大修館書店。
- Leibniz, G. W. (1966). *Nouveaux essais sur l'entendement humain*. Garnier-Flammarion, Paris. 米山優訳 (1987) 『人間知性新論』みすず書房。
- 丸山岳彦・谷口未希 (2002). 「文の焦点構造と局所的卓立」. *KLS*, **22**, 18–28.
- 三上章 (1953). 『現代語法序説: シンタクスの試み』. 刀江書院。
- 三田薫 (1995). 「「メンタルスペース理論におけるコピュラの分析はどこまで妥当か」についての誌上討論へのコメント」. 『認知科学』, **2** (4), 108–111.
- 三田薫 (1997). 「「メンタルスペース理論におけるコピュラの分析はどこまで妥当か」についての誌上討論へのコメント PART 2: 情報理論から見たコピュラ」. 『認知科学』, **4** (3), 131–135.
- 三田薫 (1999). 「情報伝達理論によるコピュラ分析: 歴史的研究成果と情報伝達理論の関係を明らかにする」. 『実践女子大学文学部紀要』, **41**, 73–88.
- 三藤博 (1989). 「フランス語における *c'est/il est, ce N/le N* の対比について (情報の帰属領域の理論に向けて)」. 『フランス語学研究』, **23**, 60–66.
- 三藤博 (1994). 「メンタルスペース理論におけるコピュラ文の分析の妥当性について: 西山佑司氏の批判に対してメンタルスペース理論を擁護する」. 『認知科学』, **1** (2), 86–89.
- Montague, R. (1973). The Proper Treatment of Quantification in Ordinary English. In J. Hintikka, J. Moravcsik, P. S. (Ed.), *Approachs to Naural Language*, pp. 221–242. Reidel.
- 奈良原富子 (2007). 「日本語コピュラ形「だ」の形態分析」. 久野暁, 牧野成一, スーザン・G・ストラウス (編), 『言語学の諸相: 赤塚紀子教授記念論文集』, pp. 189–198. くろしお出版。
- 西山佑司 (1974). 「変形生成文法理論と哲学的意味論: 内包主義の擁護」. 『科学基礎論研究』, **11** (4), 133–140.
- 西山佑司 (1976). 「「言語的意味とは何か」をめぐって」. 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』, **8**, 139–166.
- 西山佑司 (1979). 「新情報・旧情報という概念について」. 井上和子 (編), 『科学研究費研究報告: 日本語の基本構造に関する理論的・実証的研究』, pp. 127–151. (研究代表者: 井上和子).
- 西山佑司 (1985). 「措定文, 指定文, 同定文の区別をめぐって」. 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』, **17**, 135–165.
- 西山佑司 (1988). 「指示的名詞句と非指示的名詞句」. 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』, **20**, 113–134.
- 西山佑司 (1990a). 「「カキ料理は広島が本場だ」構文について: 飽和名詞句と非飽和名詞句」. 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』, **22**, 169–188.
- 西山佑司 (1990b). 「コピュラ文における名詞句の解釈をめぐって」. 国広哲弥教授還暦退官記念論文集編集委員会 (編), 『文法と意味の間: 国広哲弥教授還暦退官記念論文集』, pp. 133–148. くろしお出版。
- 西山佑司 (1991). 「「NP<sub>1</sub> の NP<sub>2</sub>」の曖昧性について」. 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』, **23**, 61–82.
- 西山佑司 (1992). 「役割と変項名詞句: コピュラ文の分析をめぐって」. 『慶應義塾大学言

- 語文化研究所紀要』, **24**, 193–216.
- 西山佑司 (1993). 「コンピュータの用法とメンタルスペース理論」. 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』, **25**, 49–82.
- 西山佑司 (1994a). 「メンタルスペース理論におけるコンピュータの分析はどこまで妥当か」. 『認知科学』, **1** (1), 135–140.
- 西山佑司 (1994b). 「伝 康晴・三藤 博両氏のコメントに答える」. 『認知科学』, **1** (2), 90–94.
- 西山佑司 (1994c). 「日本語の存在文と変項名詞句」. 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』, **26**, 115–148.
- 西山佑司 (1999). 「言語的意味と表意の接点: 「伊丹十三監督の映画がだんだん面白くなってきた」の曖昧性をめぐって」. 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』, **31**, 185–207.
- 西山佑司 (2000). 「二つのタイプの指定文」. 山田進, 菊地康人, 靱山洋介 (編), 『日本語意味と文法の風景: 国広哲弥教授古稀記念論文集』, pp. 31–46. ひつじ書房.
- 西山佑司 (2001). 「ウナギ文と措定文」. 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』, **33**, 109–146.
- 西山佑司 (2003a). 「措定文読みとウナギ文読みの曖昧性をめぐって」. 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』, **35**, 195–214.
- 西山佑司 (2003b). 『日本語名詞句の意味論と語用論: 指示的名詞句と非指示的名詞句』. ひつじ書房.
- 西山佑司 (2005). 「コンピュータ文の分析に集合概念は有効であるか」. 『日本語文法』, **5** (2), 74–91.
- 西山佑司 (2006). 「コンピュータ文の分析に「役割-値」概念は有効であるか」. 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』, **37**, 45–88.
- 西山佑司 (2007). 「名詞句の意味機能について」. 『日本語文法』, **7** (2), 3–19.
- 西山佑司・上林洋二 (1985). 「談話文法は可能か」. 井上和子 (編), 『科学研究費研究報告: 明確で論理的な日本語の表現』, pp. 29–52. (研究代表者: 井上和子).
- 仁田義雄 (1980). 『語彙論的統語論』. 明治書院.
- 丹羽哲也 (1994). 「主題提示の「って」と引用」. 『人文研究』, **46** (2), 79–109.
- 丹羽哲也 (2002). 「XはYがZ構文の意味構造について」. 『人文研究』, **54** (4), 57–75. 大阪市立大学文学部紀要.
- 丹羽哲也 (2004). 「コンピュータ文の分類と名詞句の性格」. 『日本語文法』, **4** (2), 136–152.
- 丹羽哲也 (2005). 「名詞述語文, 形容詞述語文, ウナギ文」. 『日本語科学』, **18**, 5–24.
- 野田尚史 (1981). 「「カキ料理は広島が本場だ」構文について」. 『待兼山論叢 日本語学篇』, **16**, 45–66. 大阪大学文学部.
- 野田尚史 (1996). 『「は」と「が」』. くろしお出版.
- 野田尚史 (2001). 「うなぎ文という幻想: 省略と「だ」の新しい研究を目指して」. 『国文学』, **46** (2), 51–57.
- 野田時寛 (1985). 「名詞文の意味と構造」. 『日本語学校論集』, **12**, pp. 65–84. 東京外国語大学.
- 野矢茂樹 (2002). 『同一性・変化・時間』. 哲学書房.
- 沼田善子 (2000). 「「塩も入れないと、美味しくならない」: とりたて詞と否定」. 『日本語学』, **29** (11), 46–50.
- Nunberg, G. (1979). The Non-Uniqueness of Semantic Solutions: Polysemy. *Linguistics*

- tics and Philosophy*, 3 (2), 143–184.
- 小田涼 (1999). 「代名詞 CE と IL の指示対象のとらえ方について」. 『フランス語学研究』, 33, 52–57.
- 奥津敬一郎 (1975). 「『ぼくはうなぎだ』: いわゆる指定の助動詞」. 大久保忠利・奥津敬一郎 (編), 『文法の見えてくる本』, 『新・日本語講座』, 2 巻. 汐文社.
- 奥津敬一郎 (1978). 「『ボクハウナギダ』の文法: ダとノ」. くろしお出版.
- 奥津敬一郎 (1981). 「ウナギ文はどこから来たか」. 『国語と国文学』, 58 (53), 76–88.
- 奥津敬一郎 (1988). 「うなぎ文の世界」. 『月刊日本語』, 7, 8. (再録: 奥津敬一郎 (1993). 『ボクハウナギダ』の文法』 (増補版). pp. 235–260. くろしお出版.).
- 奥津敬一郎 (2001). 「ウナギ文という幻想」の幻想: 野田尚史氏への反論」. 『国文学』, 46 (7), 122–128.
- 尾上圭介 (1981). 「象は鼻が長い」と「ぼくはウナギだ」. 『言語文化研究』, 10 (2), 10–15.
- Pustejovsky, J. (1995). *The Generic Lexicon*. MIT Press.
- Quine, W. V. O. (1960). *Word and Object*. MIT Press.
- Russell, B. (1905). On Denoting. *Mind*, 14, 479–493. 清水義夫訳 (1986) 「指示について」坂本百大・他編『現代哲学基本論文集 I』 勁草書房.
- Russell, B. (1956). The philosophy of logical atomism. In Marsh, R. C. (Ed.), *Logic and knowledge: essays 1901-1950*. George Allen & Unwin.
- 定延利之, 熊谷吉治, 苅田修司 (1999). 「<用語解説>旧情報と新情報」. 音声文法研究会 (編), 『文法と音声 II』, 8 章, pp. 127–148. くろしお出版.
- 佐治圭三 (1973). 「題述文と存現文: 主語・主格・主題・叙述 (部) などに関して」. 『大阪外国語大学学報』, 29, 111–121.
- 佐治圭三 (1993). 「「ガ」の総記・中立叙述の説について」. 『京都外国語大学研究論叢』, 41, 389–396.
- 佐治圭三 (1996). 「助詞「が」と「は」: <新 (単なる) 事態・旧事態>説について」. 『無差』, 3, 9–24. 京都外国語大学日本語学科研究会.
- 坂原茂 (1990a). 「コピュラ文と値変化の役割解釈」. *Études françaises*, 25, 1–32. 大阪外国語大学.
- 坂原茂 (1990b). 「同定文・記述文とフランス語のコピュラ文」. 『フランス語学研究』, 24, 1–13.
- 坂原茂 (1990c). 「役割, ガ・ハ, ウナギ文」. 日本認知科学会 (編), 『認知科学の発展』, 3 巻, pp. 29–66. 講談社.
- 坂原茂 (1996a). 「英語と日本語の名詞句限定表現の対応関係」. 『認知科学』, 3 (3), 38–58.
- 坂原茂 (1996b). 「変化と同一性」. 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』, 28, 147–179.
- 坂原茂 (1997). 「名詞句解釈の多様性と変化述語」. 『英語青年』, 142 (12), 667–669.
- 澤田浩子 (2003). 「属性叙述における名詞述語文」. 『日本語教育』, 116, 39–48.
- 瀬戸賢一 (1984). 「『僕はウナギだ』のレトリック: ウナギ文はどこへ行くのか」. 『大阪経大論集』, 159–161, 1029–1063.
- 新屋映子 (1989). 「“文末名詞” について」. 『国語学』, 159, 1–14.
- 新屋映子 (1994). 「意味構造から見た平叙文分類の試み」. 『日本語学科年報』, 15, 1–15. 東京外国語大学.

- 新屋映子 (2006). 「形容詞派生の名詞「～さ」を述語とする文の性質」. 『日本語の研究』, **2** (4), 33-45.
- 塩入すみ (1994). 「「トハ」文の主節の述語について」. 『現代日本語研究』, **1**, 75-84. 大阪大学文学部日本学科現代日本語学講座.
- 白井賢一郎 (1985). 『形式意味論入門: 言語・論理・認知の世界』. 産業図書.
- 白井賢一郎 (1991). 『自然言語の意味論: モンタギューから「状況」への展開』. 産業図書.
- Strawson, P. F. (1950). On Referring. *Mind*, **59**, 320-344. 藤村龍雄訳 (1987) 「指示について」坂本百大・他編『現代哲学基本論文集 II』勁草書房.
- 杉藤美代子 (1985). 「日本語と英語における「新情報」の発話の音響的特徴」. 日本音声学会 (編), 『音声の研究 第 21 集』, pp. 335-348. 日本音声学会.
- 砂川有里子 (1995a). 「談話主題の導入形式に関する研究ノート: 存在文とコピュラ文の特立提示機能について」. 『文藝言語研究 言語篇』, **28**, 41-51. 筑波大学文芸・言語学系.
- 砂川有里子 (1995b). 「日本語における分裂文の機能と語順の原理」. 仁田義雄 (編), 『複文の研究 (下)』, pp. 353-388. くろしお出版.
- 砂川有里子 (1996a). 「日本語コピュラ文の談話機能と語順の原理: 「A が B だ」と「A のが B だ」構文をめぐって」. 『文藝言語研究 言語篇』, **30**, 53-71. 筑波大学文芸・言語学系.
- 砂川有里子 (1996b). 「日本語コピュラ文の類型と機能: 記述文と同定文」. 上田功, 高見健一, 蓮沼昭子, 砂川有里子, 野田尚史 (編), 『言語探求の領域』, pp. 261-273. 大学書林.
- 砂川有里子 (2000a). 「談話主題の階層性と表現形式」. 『文藝言語研究 言語篇』, **38**, 117-137. 筑波大学文芸・言語学系.
- 砂川有里子 (2000b). 「文の構造と談話機能: 日本語のコピュラ文分析」. 矢澤真人 (編), 『東アジア言語文化の総合的研究』, pp. 38-74. 筑波大学. 筑波大学学内プロジェクト (A) 研究報告書.
- 砂川有里子 (2002). 「日本語コピュラ文の構造と談話機能」. 上田博人 (編), 『シリーズ言語科学 5 日本語学と言語教育』, pp. 39-70. 東京大学出版会.
- 砂川有里子 (2005). 『文法と談話の接点: 日本語の談話における主題展開機能の研究』. くろしお出版.
- 砂川有里子 (2007). 「分裂文の文法と機能」. 『日本語文法』, **7** (2), 20-36.
- 高橋太郎 (1984). 「名詞述語文における主語と述語の意味的な関係」. 『日本語学』, **3** (12), 18-39.
- 益岡隆志・田窪行則 (1989). 『基礎日本語文法: 日本語文法序説』. くろしお出版.
- 田窪行則 (1984). 「知っていることと知りたいこと: 対照語用論の試み」. 『日本認知科学会第一回大会発表論文集』, pp. 58-59. 日本認知科学会.
- 田窪行則 (1989a). 「文脈理解: 文脈のための言語理論」. 『情報処理』, **30** (10), 1191-1198.
- 田窪行則 (1989b). 「名詞句のモダリティ」. 仁田義雄・益岡隆志 (編), 『日本語のモダリティ』, pp. 211-233. くろしお出版.
- 田窪行則 (1992). 「談話管理の標識について」. 文化言語学編集委員会 (編), 『文化言語学: その提言と建設』, pp. 1110-1097. 三省堂.
- 田窪行則・金水敏 (1996). 「複数の心的領域による談話管理」. 『認知科学』, **3** (3), 59-74.

- 田中茂範 (2000). 「「A は B である」をめぐって: 記述文・定義文・隠喩文の基本形式」. 山田進, 菊地康人, 靱山洋介 (編), 『日本語 意味と文法の風景: 国広哲弥教授古稀記念論文集』, 『ひつじ研究叢書 (言語編)』, 21 巻, pp. 15–30. ひつじ書房.
- 田中茂範・深谷昌弘 (1998). 『〈意味づけ論〉の展開』. 紀伊國屋書店.
- 谷口未希・丸山岳彦 (2001). 「焦点構造と助詞の卓立」. *KLS*, 21, 56–66.
- Thomason, R. H. (1980). A model theory for propositional attitudes. *Linguistics and Philosophy*, 4 (1), 47–70.
- 東郷雄二 (1988). 「«Mon frère, il est linguiste et le coupable, c'est lui.»: 代名詞 IL と CE の用法について」. 『フランス語フランス文学研究』, 53, 102–111.
- 東郷雄二 (1994). 「メタ形式としての「～とは」とフランス語の属詞を問う疑問文」. <http://lapin.ic.h.kyoto-u.ac.jp/metaform.html>.
- 東郷雄二 (1996). 「[文献案内] コピュラ文の主語代名詞 IL/CE」. 『フランス語学研究』, 30, 81–88.
- 東郷雄二 (2005). 「名詞句の指示とコピュラ文の意味機能」. 『指示と照応に関する語用論的研究』, pp. 1–59. 科学研究費補助金研究成果報告書.
- 角田太作 (1996). 「体言締め文」. 鈴木泰・角田太作 (編), 『日本語文法の諸問題: 高橋太郎先生古希記念論文集』, pp. 139–161. ひつじ書房.
- 和気圭子 (2001). 「名詞述語文「A のが B だ」における焦点句の位置」. 『筑波大学留学生センター日本語教育論集』, 16, 21–30.
- 藁谷敏晴 (1994). 「コピュラ文の論理構造について」. 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』, 26, 211–225.
- Wittgenstein, L. (1922). *Tractatus logico-philosophicus*. Routledge & Kegan Paul. Translated by C.K. Ogden.
- Wittgenstein, L. (1953). *Philosophical Investigations*. Macmillan. Translated by G.E.M. Anscombe.
- 山口光 (1975). 「二体言文の論理的意味」. 『国語研究』, 38, 9–24.
- 山本幸一 (2006). 「「ウナギ文」の分析: 連結メトニミーとして」. 『言葉と文化』, 7 巻, pp. 121–140. 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻.
- 山梨正明 (1995). 『認知文法論』. ひつじ書房.
- 山梨正明 (2000). 『認知言語学原理』. くろしお出版.
- 山崎誠 (1990). 「否定の焦点について」. 『日本語学』, 9 (12), 10–17.

# 既発表論文および口頭発表との関係

## 第1章 序論

新規執筆

## 第2章 名詞句の意味論

今田水穂 (2005). 「日本語存在文の記述の二面性」. 『日本語文法』, 5 (1), 55–69.

今田水穂 (2006). 「日本語同定文の主語名詞句の意味論上の取り扱いについて」.  
『筑波応用言語学研究』, 13, 71–84.

## 第3章 名詞句の解釈の理論

今田水穂 (2006). 「役割・値文としての「とは」コピュラ文: メタ言語と記述句の理論の観点から」. 杉本武 (編), 『日本語複合助詞の研究2』, 1–25. 筑波大学.

## 第4章 名詞述語文の意味論的構造

今田水穂 (2005). 「措定文と指定文の意味の取り扱いについて: 述語論理と名詞句の指示理論を用いた一般化」. 筑波大学国語国文学会第29回大会.

## 第5章 名詞述語文の機能論的構造

今田水穂 (2005). 「中立叙述の名詞述語文」. 第4回筑波大学応用言語学研究会.

## 第6章 言語構造と談話構造の相関関係

今田水穂 (2007). 「コピュラ文の情報構造, 談話機能と否定: 提示文はなぜ否定文にならないか」. 『日本語文法学会第8回大会発表予稿集』, 154–161.

## 第7章 結論

新規執筆